

はこがしふるいちまえ
箱田古市前Ⅰ・Ⅱ遺跡

一級河川滝川河川改修に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はこ だ ふる いち まえ
箱田古市前 I・II 遺跡

一級河川滝川河川改修に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

一級河川滝川は、前橋市総社町山王の八幡川合流点より佐波郡玉村町川手で烏川に合流するまでの間、前橋市、高崎市、玉村町地域を流れる河川です。

河川といってもこの滝川は、慶長15年（1610）から元和元年（1615）にかけて代官伊奈備前守忠次が玉村町地域を開田するために、総社城主秋元長朝が開削した天狗岩用水から烏川までの間延長した工事を行った人工河川です。

この滝川は、前橋市箱田町の箱田橋の南の一部を残し上、下流の地は、河川改修が終了しています。未改修の部分は平成4年度、5年度に改修工事が行われることとなり、当該地域に埋蔵文化財が確認されたため当事業団が発掘調査を行い、奈良・平安時代の竪穴住居跡、古墳時代後期の水田跡等を調査しました。

これら調査した資料は、調査報告書刊行のための整理作業を今年度に行い、それが完了しましたので、ここに「箱田古市前遺跡」の発掘調査報告書を上梓することにしました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、群馬県土木部河川課、同前橋土木事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等には種々ご指導、ご協力を賜りました。これら関係者の皆様に衷心より感謝を申し上げ、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明するために、大いに活用されることを願い序とします。

平成7年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

報 告 書 抄 録

フリガナ	ハコダフルイチマエイセキ
書名	箱田古市前Ⅰ・Ⅱ遺跡
副書名	一級河川滝川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第191集
編著者名	桜岡正信 石守 晃 大江正行
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年	西暦 1995年3月27日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ハコダフル イチマエ 箱田古市前	マエバシシ ハコダマチ オオアザ フルイチマエ 前橋市箱田町 大字古市前	10201	I 遺跡 362	36°22'02"	139°3'12"	I 遺跡 19921001～ 19921225	I 遺跡 2,500	河川改修
			II 遺跡 422			II 遺跡 19940404～ 19940628	II 遺跡 800	河川改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
箱田古市前 Ⅰ遺跡	居住	近世・近代	遺路	2	国産陶磁器		
			井戸	2			
			土坑	6			
	生産	近世・近代	溝	9	国産陶磁器 石		
			排水遺構	1	木製枕		
	居住	古代	竪穴住居	5	土師器 須恵器 灰軸陶器		
			生産	古代	竪		1
	溝	1					
	箱田古市前 Ⅱ遺跡	生産	古墳時代	水田 Hr-FA 下	1		
				水田 As-C 混土	1		
竪				1			
生産		弥生時代?	溝	1			
			溝	2			
居住		近世～現代	用水路	2	国産陶磁器		
			溝	51以上	国産陶磁器		
			築堤	1			
居住	奈良・平安時代	竪穴住居	24	土師器 須恵器			
		奈良・平安時代か	掘立柱建物	2			
			穴跡	35以上			

例 言

1. 本書は一般河川福川河川改修工事に伴い、記録保存のために事前調査された「箱田古市前遺跡」の遺産文化財発掘調査報告書である。
2. 箱田古市前遺跡は、群馬県前橋市箱田町字古市前に所在し、遺跡名は町名と字名を遺跡名に採用している。
3. 委 託 者 群馬県（土木部河川課）
4. 発掘調査主体 財団法人 群馬県遺産文化財調査事業団
5. 調 査 期 間 I 遺跡 平成4年10月1日～平成4年12月25日
II 遺跡 平成6年4月4日～平成6年6月28日
6. 発掘担当者 I 遺跡 板岡正信・石守 晃（主任調査研究員）・斎藤英敏（調査研究員）
II 遺跡 大江正行（主幹兼専門員）・金井 武（主任調査研究員）・山本光明・諸田康成（調査研究員）
7. 事務担当者 I 遺跡 遠見長雄（常務理事）・近藤 功（事務局長）・佐藤 勉（管理部長）・神保信史（調査研究部長）・斎藤 俊一（庶務課長）・市 隆之（調査研究第3課長）・固定 均（主任）・笠原秀樹（主任）・横田朋子（主任）
II 遺跡 中村英一・近藤 功・神保信史・峰須 実・市 隆之（当報告の渉外主請、調査研究第3課長）斎藤俊一・固定 均・笠原秀樹・横田朋子・吉田有光・梅岡良空・高橋定義
8. 整 理 期 間 I 遺跡 平成4年12月1日～平成5年3月31日
II 遺跡 平成6年4月1日～平成7年3月31日
9. 整理担当者 I 遺跡 板岡正信（主任調査研究員）
II 遺跡 大江正行（専門員兼主幹）
10. 遺跡補助員 I 遺跡 山崎由紀枝・藤原富子・今井サチ子・矢島三枝子・西宮富子・矢野純子・大崎 緑を中心として、以下の方々の協力を得た。吉田恵子・吉田英子・小野幸仁子・狩野君江・光安文子・武永いち・横田恵子（普及資料課）、今井もと子・角田みづほ・松井美智代・塩浦ひろみ（庶務課）、並木敏子（調査研究部）
II 遺跡 上原博美・大友幸江・金子恵子・高橋美穂子・峰須純子・吉沢照恵・六反田道子と整理を行い狩野フミ子・西村美保子・横坂英美の援助を受けた。
11. 写 真 撮 影 遺構 発掘調査担当者
遺物 佐藤元彦
12. 本書の編集は、整理担当者が行い、本文執筆の文責は目次に記載した。
13. 遺物観察のうち、I 遺跡陶磁器は大西直広（主任調査研究員）、石器は岡口博幸（調査研究員）が行い、これ以外の遺物については整理担当者板岡正信が行った。II 遺跡遺物の観察は大江正行が行い、石材鑑定は飯島静雄（群馬地質協会）によった。
14. 発掘調査及び本書を作成するにあたっては、群馬県教育委員会・前橋市教育委員会・J A 前橋東文所・天狗岩郷土改良区事務所及び以下の方々の御指導御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
井口 崇・昆 彰生・佐々木幹雄・田代 孝・光江 章・梁木 誠・橋本澄朗・玉口時盛・堤 隆・柳沼賢治・渡辺一弘・長井作太郎・石原喜好
15. 発掘調査及び整理事業にかかわる業務委託は以下のとおりである。
遺構実測（一部） 技研測量設計株式会社
遺構トレース（一部） 技研測量設計株式会社・遺物トレース（一部） 東京総合測量株式会社
自然科学分析 古環境研究所
16. 本遺跡の遺構・遺物図面、写真、遺物は、群馬県遺産文化財調査センターに保管してある。
17. 発掘調査において、以下の方々の御協力を頂いた。
I 遺跡 横沢早苗・阿部俊次・阿部イチエ・田島晴美・湯浅作次郎・阿部ノリ子・高橋マサミ・中村スミ江・原沢正江・阿部きよ・湯浅京子・湯浅ヤス子・斎藤文子・岡田いそ江・岡田登志子・反町ハナ・深沢日出次・深沢ハルミ・矢島キク江・松本功子・岡根美江・石原ヒサ子・原田朋子・小川美佐子・鈴木日出子・萩野 穂・石田和恵・泰山梅子・小川フル・小林千代子・斎藤敏子・桑原静代・鈴木俊子・大堀さみ子・柳井 肇・梅原昭子・福高ひで子・池田聡子・中曾根ゆづり・杉浦茂枝・中島幸枝・岡上義夫・坂本太良・四日市 恵・湯浅紀子・石山日出男・石山千恵子・浜名敏子・中田美知子
II 遺跡 浅野増男・板橋真実子・石岡さみ江・石岡静江・大沢一江・大沢スミ・佐野 穂・鹿沼豊子・木村つや子・栗原朝子・桑原静代・倉賀野美智子・喜楽久子・工藤幸幸・小沼幸子・高坂ゆき・高橋さし子・内藤美代子・中島幸枝・奈良勇士・峰須實もとめ・原田朋子・福高ひで子・星野ウメ・堀口みくの・松永シマ子・三川朋子・山口きく・湯浅紀子・山田由美子・四日市 恵・吉田タケノ

凡 例

1. 本書中に使用した地形図は、国土地理院、1:50,000、前橋市都市計画図、1:2,500、一般河川浅田中小河川改修工事平面図、1:1,000、を縮小し使用した。また、地形分類図は、『群馬県史』通史編1付図を元に作成した。
2. 本書中の方位記号は、公共座標第Ⅱ系の座標北を示す。
3. 本書中に掲載した遺構実測図は以下に示す縮尺を基本とし、それぞれの図中に記載した。
 聖穴住居跡 1:30 1:60 ビット・小穴 1:20 土坑・穴跡 1:60 サク状遺構・竈跡 1:120
 井戸跡 1:60 遺状遺構 1:120 溝状遺構 1:40 1:60 1:120 1:200
 排水遺構 1:40 1:80 水田跡 1:120 1:240
4. 遺構図中の等高線は、海抜標高で表示した。また、断面基準線の標高は、図中に「L-〇〇m」もしくは、水準基準線に示した。
5. I遺跡土層断面中のI-Iは基本層序のI-Iを示し、これ以外の層序については、それぞれI-nと表示した。また、各層の色調名及び記号は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修1976年9月発行の『標準土色帖』を使用し記載した。
6. 本書中のI遺跡分については火山灰を以下のように略記した。
 浅間山C軽石→As-C 浅間山B軽石→As-B 榛名山二ツ番火山灰→Hr-FA
 榛名山二ツ番軽石→Hr-FP
7. I遺跡の遺構図中に使用した遺物の記号は以下のとおりである。
 ● 土器（須臾器・土師器・灰輪陶器等） ▲ 石器（石斧・スクレイパー・磨石等）
8. 遺構図中に記載した遺物番号は、出土遺物実測図中の番号と一致している。
9. I遺跡として掲載した遺物実測図の縮尺は、種別・器種の別なく、すべて1/3である。II遺跡資料は何を基本とし、小数の例外もある。
10. I遺跡資料中の遺構図・遺物実測図で使用したスクリーンパターンは以下のものである。II遺跡資料について図中に添記してある。

遺構図



遺物実測図



11. 遺物観察表に表示した計測値の中で、〔 〕内に提示した数値は、完形品や直接計測可能な遺物以外の推定値または複元値であり、重さでは残存重量を計測した。
12. 遺物観察表中の「色調」は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修1976年9月発行の『標準土色帖』を使用し記載した。
13. 遺物の各計測位置は、遺物観察表の「部」に示した。
14. 本書中I遺跡資料で使用した土器の種別については、原則として輪轆を使用して整形し、還元焙焼成したものを「須臾器」、輪轆を使わず整形し酸化焙焼成したものを「土師器」として扱ったが、すべてがこの限りではない。
15. 土器の器種は、原則として高台を付したものを「甕」、付さないものを「坏」、口径に比較して器高の著しく低いものを「皿」とし、その他にも「甍」「壺」等の器種名を使用した。が、文献史料等にあらったり、概念規定を明らかにした上で使用したものでなく、あくまでも整理上便宜的に使用した器種名称である。
16. 遺物写真の見出しは、I遺跡資料について遺構名称と標図番号を併記した。標図番号における〇-〇は、初めが標図番号を示し、後が遺物番号を示す。
 II遺跡資料は太字が図版別を示し、遺構名称と遺物番号は、挿入図内容と一致する。
17. I遺跡資料中の遺物写真の見出しは、遺構名称を以下のように略記した。
 聖穴住居跡→住 溝状遺構→溝

目 次

箱田古市前 I 遺跡

第 1 章 調査経過

第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査経過	2

第 2 章 グリッドと基本層序

第 1 節 基本杭とグリッド	3
第 2 節 基本層序	4

第 3 章 遺跡の立地と周辺遺跡

第 1 節 遺跡位置と立地環境	5～7
第 2 節 周辺遺跡	8～10

第 4 章 検出された遺構・遺物

第 1 節 調査の概要	11・12
第 2 節 I 面の調査	

1. 堅穴住居跡

1号住居跡 (第9・10図 写真図版4・28)	13・14
2号住居跡 (第11～14図 写真図版5・6・28・29)	14～16
3号住居跡 (第15～17図 写真図版7・29)	16・17
4号住居跡 (第18図 写真図版8・30)	17・18
5号住居跡 (第19～21図 写真図版9・30)	18～20

2. 土 坑

1号ピット (第22・23図 写真図版10・30)	20・21
2号土坑 (第22図)	20・21
3号土坑 (第22図)	20・21
4号土坑 (第22図 写真図版10)	20・21

3. サク状遺構

1号サク状遺構 (第24図 写真図版10)	21・22
-----------------------------	-------

4. 井戸跡

1号井戸跡 (第25図 写真図版11)	22
2号井戸跡 (第25図 写真図版11)	22

5. 道状遺構

1号道状遺構 (第26図 写真図版12)	23
2号道状遺構 (第27図 写真図版12)	23・24

6. 溝状遺構

1号溝状遺構	(第28-31図 付図2)	
	(写真図版13・14・30・31)	24-26
2号溝状遺構	(第32-35図 付図2)	
	(写真図版14・15・31・32)	26-29
3号溝状遺構	(第27図 写真図版16)	24・29
4号溝状遺構	(第27・36図 写真図版16・17・32)	24・29
5号溝状遺構	(第27図 写真図版16・17)	24・29
6号溝状遺構	(第37図 付図2 写真図版17・33)	30
7号溝状遺構	(付図2 写真図版17)	30
8号溝状遺構	(第39図 写真図版17・18)	30・31
9号溝状遺構	(第38・39図 写真図版18・32)	30・31
10号溝状遺構	(第39図 写真図版18)	30・31
12号溝状遺構	(第40図)	32
18号溝状遺構	(第41・42図 写真図版19・32)	32
19号溝状遺構	(第42図 写真図版19)	32・33
7. 排水遺構	(第43-45図 写真図版19-21・32・33)	33-35
8. I面遺構外	(第46図 写真図版32・33)	35

第3節 II面の調査

1. サク状遺構

2号サク状遺構	(第47図 写真図版21)	36
2. 水田跡	(第48図 写真図版21・22)	36-38

第4節 III面の調査

1. 水田跡

(第49図 付図1 写真図版23・24)	39
----------------------	----

2. 溝状遺構

20号溝状遺構	(第49図 付図1 写真図版24)	40
21号溝状遺構	(第50図 付図1 写真図版25)	40
22号溝状遺構	(第50図 付図1 写真図版25)	40
23号溝状遺構	(第50図 付図1 写真図版25)	40

第5節 IV面の調査

1. 溝状遺構

24号溝状遺構	(第51図 写真図版26)	40・41
---------	---------------	-------

2. 倒木痕

(第51図 写真図版27)	41・42
---------------	-------

3. 自然流路

(第52-54図 写真図版27・33)	42
---------------------	----

第6節 その他

1. As-B下耕作面(第55・56図 写真図版27)

	43
--	----

2. 試掘調査

(第57・58図)	44
-----------	----

第5章 自然科学分析

箱田市前遺跡のプラント・オパール分析(第59・60図)	45-51
-----------------------------	-------

第6章 遺物観察	52-57
----------------	-------

第7章 箱田古市前Ⅰ遺跡のまとめ	57
------------------------	----

箱田古市前Ⅱ遺跡

第8章 箱田古市前Ⅱ遺跡の経緯と経過	59
--------------------------	----

第1節 調査に至る経緯と経過	59
----------------------	----

第9章 発掘された遺構と遺物	59
----------------------	----

第1節 調査概要	59
----------------	----

第2節 住居跡	64
---------------	----

住居跡1・2・22 (第66-68図 写真図版36・43)	64-66
住居跡3・23 (第69-71図 写真図版36・43)	66-68
住居跡4 (第72・73図 写真図版36・43)	68・69
住居跡5・6・19・24 (第74-79図 写真図版36・43)	69-71
住居跡7 (第80図 写真図版36)	71・72
住居跡8 (第81・82図 写真図版37)	71-73
住居跡9 (第83-85図 写真図版37・43)	72・74・75
住居跡10-11 (第86-88図 写真図版37・44)	72-74・76・77
住居跡12・13・18 (第89-94図 写真図版37・38・44)	77-80
住居跡14・15・16・25 (第95-102図 写真図版38・44・45)	80-85
住居跡17 (第103-105図 写真図版38・45)	85・86
住居跡20 (第106-108図 写真図版38・45)	86-88
住居跡21 (第109・110図 写真図版38・45)	88・89

第3節 掘立柱建物跡 (第111-113図)	89
------------------------------	----

掘立柱建物跡1 (第111図 写真図版39)	89-92
掘立柱建物跡2 (第112図 写真図版39)	91・92・94
柱穴列(土壇25ほか) (第113図 写真図版39)	92・94

第4節 溝跡	94
--------------	----

溝1・2 (第61・62・114 写真図版34・35・46)	93-95
溝3 (第115・116 写真図版46)	94・97
溝4 (第117・118図 写真図版46)	95・97
溝5-10 (第119図)	95・97
溝18 (第120・121図 写真図版39・46)	96-99
溝21 (第122・123図 写真図版46)	97・99
溝47 (第124・125図 写真図版40・47)	98・99

溝52・53	(第126・127図 写真図版40・47)	99・100
溝56	(第62・128～130図 写真図版41・47)	99・101～103
溝57	(第128図 写真図版40)	101・103
その他の溝跡	(第62・131図 写真図版47)	103・104
第5節 穴 跡	(第132～134図 写真図版39・47)	103・104
第6節 築堤跡・土塁跡など	(第135・136図 写真図版42)	105・106
第7節 旧東村農協の堰門跡	(第137図 写真図版42)	106・107
第8節 石坂家堰門と製粉関連について	(第138～146図 写真図版41)	108・109～115
第9節 遺物類の補足	(第147図 写真図版47)	116
第10節 遺物観察		117～122
第10章 箱田古市前遺跡出土の牛歯・牛骨について	(附図1～3)	123～130
第11章 箱田古市前Ⅱ遺跡のまとめ		131～134

挿 図 目 次

第1図 調査工程	2	第28図 1号溝状遺構セクション	25
第2図 グリッド設定図	3	第29図 1号溝状遺構出土遺物(1)	25
第3図 基本土層	4	第30図 1号溝状遺構	25
第4図 遺跡位置(1)	5	第31図 1号溝状遺構出土遺物(2)	26
第5図 遺跡位置(2)	6	第32図 2号溝状遺構	27
第6図 地形分類図	7	第33図 2号溝状遺構セクション	27
第7図 周辺遺跡	10	第34図 2号溝状遺構出土遺物(1)	28
第8図 遺構全体図	12	第35図 2号溝状遺構出土遺物(2)	29
第9図 1号住居跡	13	第36図 4号溝状遺構出土遺物	29
第10図 1号住居跡出土遺物	14	第37図 6号溝状遺構出土遺物	30
第11図 2号住居跡(1)	14	第38図 9号溝状遺構出土遺物	30
第12図 2号住居跡(2)	15	第39図 8・9・10号溝状遺構	31
第13図 2号住居跡出土遺物(1)	15	第40図 12号溝状遺構	32
第14図 2号住居跡出土遺物(2)	16	第41図 18号溝状遺構出土遺物	32
第15図 3号住居跡	16	第42図 18・19号溝状遺構	32
第16図 3号住居跡カマド	17	第43図 排水遺構(1)	33
第17図 3号住居跡出土遺物	17	第44図 排水遺構(2)	33
第18図 4号住居跡・出土遺物	18	第45図 排水遺構出土遺物	34
第19図 5号住居跡	19	第46図 1面遺構外出土遺物	35
第20図 5号住居跡出土遺物(1)	19	第47図 2号サケ状遺構	36
第21図 5号住居跡出土遺物(2)	20	第48図 Ⅱ面水田跡(Hr-FA F)	37・38
第22図 1号ピット、2・3・4号土坑	20	第49図 Ⅲ面水田跡跡部部分	39
第23図 1号ピット出土遺物	21	第50図 21・22・23号溝状遺構	40
第24図 1号サケ状遺構	22	第51図 24号溝状遺構・側木痕	41
第25図 1・2号井戸跡	22	第52図 自然流路	42
第26図 1号溝状遺構、13・14・15・16号溝状遺構	23	第53図 自然流路セクション	42
第27図 2号溝状遺構、3・4・5号溝状遺構	24	第54図 自然流路出土遺物	42

第55図	As-BP 下耕作部調査位置	43
第56図	As-BP 下耕作部	43
第57図	南形満川権以北試験調査位置	44
第58図	試験調査時検出遺構	44
第59図	イネのプラント・オパールの出土状況	47
第60図	おもな植物の推定生産量と変遷	48
第61図	流路の状況	60
第62図	遺跡全図と遺構番号図	61, 62
第63図	トレンチ調査遺物図	63
第64図	X-1 トレンチ遺構図	64
第65図	X-1 トレンチ遺物図	64
第66図	住居跡1・2・22遺構図	65
第67図	住居跡1・2遺物図	65
第68図	住居跡22遺物図	66
第69図	住居跡3・23遺構図	67
第70図	住居跡3・23遺物図	67
第71図	住居跡3・23遺物図	68
第72図	住居跡4遺構図	68
第73図	住居跡4遺物図	68
第74図	住居跡5・6・19・24遺構図	69
第75図	住居跡5遺遺構図	70
第76図	住居跡5・6・19遺構部分図	70
第77図	住居跡5遺物図	70
第78図	住居跡6遺物図	71
第79図	住居跡9遺物図	71
第80図	住居跡7遺物図	72
第81図	住居跡8遺物図	73
第82図	住居跡8遺遺構図	73
第83図	住居跡9遺物図	74
第84図	住居跡9遺遺構図	74
第85図	住居跡9遺物図	75
第86図	住居跡10・11遺構図	76
第87図	住居跡10遺遺構図	76
第88図	住居跡10遺物図	77
第89図	住居跡11遺物図	77
第90図	住居跡12・13・18遺構図	78
第91図	住居跡12遺遺構図	78
第92図	住居跡12遺物図	79
第93図	住居跡13遺物図	79
第94図	住居跡18遺物図	79
第95図	住居跡14・15・16・25遺構図	81
第96図	住居跡14・15・16・25遺構全図	82
第97図	住居跡14遺遺構図	82
第98図	住居跡14遺物図	83
第99図	住居跡16遺遺構図	84
第100図	住居跡25遺遺構図	84
第101図	住居跡16遺物図	85

第102図	住居跡25遺物図	85
第103図	住居跡17遺構図	86
第104図	住居跡17遺物図	86
第105図	住居跡17遺物図	86
第106図	住居跡20遺構図	87
第107図	住居跡20遺物図	87
第108図	住居跡20遺物図	88
第109図	住居跡21遺物図	89
第110図	住居跡21遺物図	89
第111図	掘立建物跡1遺構図	90
第112図	掘立建物跡2遺構図	91
第113図	土塼2ほか遺構図	92
第114図	溝跡1遺物図	93
第115図	溝跡3遺物図	94
第116図	溝跡3遺物図	94
第117図	溝跡4遺物図	95
第118図	溝跡4遺物図	95
第119図	溝跡5～10遺構図	95
第120図	溝跡18遺物図	96
第121図	溝跡18遺物図	96
第122図	溝跡21遺物図	97
第123図	溝跡21遺物図	97
第124図	溝跡47遺物図	98
第125図	溝跡47と関連の遺物図	98
第126図	溝跡52・53遺物図	100
第127図	溝跡52・53遺物図	100
第128図	X-33灰青の拡張	101
第129図	X-36トレンチ遺構図	102
第130図	溝跡56遺物図	103
第131図	溝跡1土遺物図	103
第132図	土塼4遺物図	104
第133図	土塼出土遺物図	104
第134図	小穴出土遺物図	104
第135図	繩跡遺物図	105
第136図	土塼遺物図	106
第137図	旧栗村農産製粉用水カタン用構造物跡	107
第138図	溝跡1と石塚家竈門遺構図	108
第139図	石塚家竈門遺物図	108
第140図	石塚家石塼遺物図	109
第141図	石塚家石塼遺物図	110
第142図	石塚家石塼遺物図	111
第143図	石塚家石塼遺物図	112
第144図	石塚家石塼遺物図	113
第145図	石塚家石塼遺物図	114
第146図	石塚家石塼遺物図	115
第147図	補足遺物図	116
第148図	周辺遺跡・大溝遺構と周辺仮設遺跡	134

写真図版目次

写真図版1	遺跡全景
写真図版2	遺跡全景
写真図版3	上段 調査前 下段 調査前
写真図版4	上段 1号住居 中段左 同カマド 中段右 同カマド覆り方 下段左 同カマド検出状況 下段右 同貯蔵穴
写真図版5	上段 2号住居 下段 同掘り方
写真図版6	1段左 同カマド 1段右 同カマド覆り方 2段左 同カマド覆り方 2段右 同貯蔵穴 3段左 同遺物出土状況 3段右 同遺物出土状況 4段左 同遺物出土状況 4段右 同遺物出土状況
写真図版7	上段 3号住居 中段左 同掘り方 中段右 同カマド 下段左 同カマド覆り方

写真図版7	下段右 同カマド覆り方
写真図版8	上段 4号住居 中段左 同カマド 中段右 同カマド 下段左 同カマド 下段右 同カマドセクション
写真図版9	上段 5号住居 中段左 5号住居 中段右 同掘り出し部セクション 下段左 同カマド 下段右 同カマド
写真図版10	1段左 1号ピット 1段右 1号ピット 2段左 4号土坑 2段右 4号土坑セクション 3段左 1号ヤク状遺構検出状況 3段右 1号ヤク状遺構
写真図版11	上段 1号井戸 下段上 1号井戸覆り出土状況 下段下 2号井戸 下段右 2号井戸
写真図版12	上段 1号道

写真図版12	下段	2号道	写真図版27	下段右	As-BP下耕作面部分
写真図版13	上段	1号溝	写真図版28	1住・2住遺物	
	下段左	1号溝	写真図版29	2住・3住遺物	
	下段右	1号溝	写真図版30	4住・5住、1ピット、1溝遺物	
写真図版14	上段左	1号溝	写真図版31	1溝・2溝遺物	
	上段右	1号溝セクション	写真図版32	2溝・6溝・9溝・18溝、排水遺構、1面遺構外遺物	
	下段	2号溝	写真図版33	排水遺構、自然水路、1面遺構外遺物	
写真図版15	上段	2号溝	写真図版34	上段左 平成5年度調査トレンチ調査時遺景	
	中段左	2号溝部分		上段右 同年調査上面の調査遺景	
	中段右	2号溝部分		下段左 同上平面状況	
	下段左	同遺物出土状況		下段右 同上平面状況	
	下段右	同埋出土状況	写真図版35	上段上 X-24ライントレンチ	
写真図版16	上段	3・4・5号溝		上段下 同上と築地跡上面	
	下段左	3号溝		上段右 築地跡上面	
	下段右	4号溝		下段 X-25以前の調査状況	
写真図版17	1段	4号溝セクション	写真図版36	1段左 住居跡1近景	
	2段	4号溝遺出土状況		1段右 住居跡1・2・22掘方の状況	
	上段	5号溝		2段左 住居跡3・23掘面一掘方間の状況	
	3段左	6号溝		2段右 住居跡23掘方の状況	
	3段右	6号溝		3段左 住居跡3の調査状況	
	4段左	8号溝		3段右 住居跡4床面一掘方の状況	
	4段右	8号溝		4段左 住居跡5・6・19・24掘方の状況	
写真図版18	上段左	8号溝		4段右 住居跡7掘方の状況	
	上段右	8号溝セクション	写真図版37	1段左 住居跡8	
	中段左	9号溝		1段右 住居跡9床面一掘方間の状況	
	中段右	9号溝セクション		2段左 住居跡9掘方の状況	
	下段左	10号溝		2段右 同左電線跡上面	
	下段右	10号溝セクション		3段左 住居跡10・11掘面一掘方間の状況	
写真図版19	上段左	18号溝		3段右 住居跡10・11掘方	
	上段右	19号溝		4段左 同上電線跡の調査状況	
	中段	排水遺構	写真図版38	4段右 住居跡12・13・18掘面一掘方間の状況	
	下段左	排水遺構		1段左 住居跡12掘跡調査状況	
	下段右	排水遺構		1段右 住居跡14・15・16床面一掘方間の状況	
写真図版20	上段	排水遺構		2段左 住居跡15・16掘方	
	上段右	排水遺構		2段右 住居跡14掘跡調査状況	
	中段	排水遺構ピット列検出状況		3段左 住居跡17掘面一掘方間の状況	
	下段左	排水遺構ピット列		3段右 住居跡20掘面一掘方間の状況	
	下段右	排水遺構ピット列		4段左 住居跡20掘方	
写真図版21	上段左	排水遺構柱検出状況	写真図版39	4段右 住居跡21掘跡調査状況	
	上段右	排水遺構柱検出状況		1段左 堀立柱建物跡1	
	中段左	2号ヤケ状遺構		1段右 同左柱穴、土層16土層	
	中段右	2号ヤケ状遺構		2段左 堀立柱建物跡2	
	下段	II面水田跡		2段右 堀立柱建物跡2	
写真図版22	1段左	II面水田跡検出状況		3段左 柱穴、土層25土層	
	1段右	II面水田跡検出状況		3段右 土層41掘の出土状態	
	2段左	II面水田跡部分		4段左 溝跡18と住居跡7	
	2段右	II面水田跡部分		4段右 溝跡18と土層、B掘面	
	3段左	II面水田跡部分	写真図版40	1段左 X-40 Y 8 掘面区、溝跡57	
	3段右	II面水田跡部分		上段右 溝跡52近景	
	4段左	II面水田跡足跡		2段 溝跡53近景	
	4段右	II面水田跡		3段 溝跡47土層近景	
写真図版23	上段	II面水田跡		溝跡47近景	
	下段左	II面水田跡		4段左 X-40 Y 8 掘面区	
	下段右	II面水田跡	写真図版41	下段右 同左東壁土層	
写真図版24	上段	II面水田跡		上段 溝跡56調査状況	
	下段左	20号溝		中段左 溝跡56土層断面	
	下段右	20号溝		中段右 溝跡56東上上の状況	
写真図版25	上段	21・22・23号溝		下段左 くるま川からの分流状況	
	下段上	21号溝		下段右 石坂家堰門	
	下段下	22号溝	写真図版42	左 旧東村農協堰門施設	
	下段右	23号溝		1段右 同左正面	
写真図版26	上段左	24号溝		2段右 同左くるま川堰門	
	1段右	24号溝部分		3段左 石坂家前庭	
	2段右	24号溝部分		3段右 同家石臼群	
	3段左	24号溝部分		4段左 同家石臼群	
	3段右	24号溝部分		4段右 同家石臼群	
	4段左	24号溝	写真図版43	住居跡1・2・22、3・23、4・5・6・19、9遺物	
	4段右	24号溝セクション	写真図版44	住居跡10・11、12・13・18、14遺物	
写真図版27	上段左	側水取	写真図版45	住居跡16・25、17、20、21遺物	
	上段右	自然水路	写真図版46	溝跡1、3、4、18、21遺物	
	中段左	自然水路セクション	写真図版47	溝跡、小穴、土塊、土器、各トレンチ、補足遺物	
	中段右	As-BP下耕作面			
	下段左	As-BP下耕作面			

箱田古市前Ⅰ遺跡

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

前橋市西南部を南流する滝川は総社藩主秋元長朝の開削によって知られる天狗岩用水と、榛名山麓に源を発する八幡川が総社町字山王で合流する地点から玉村町川井地先で烏川に合流するまでの全長約21kmを測る一級河川である。滝川は天狗岩用水の一部でもあり、一般に認識される河川というよりは寧ろ用水路という性格が意識される河川である。

滝川に対する中小河川改修事業は既に実施されてきていたのであるが、未改修であった前橋南部環状線の南部滝川橋周辺地域の工事計画が、平成3年群馬県土木部河川課（以下「河川課」とする）から群馬県教育委員会文化財保護課（以下「保護課」とする）に提示された。計画では蛇行する滝川の流路中心を旧状よりやや東寄りに移し、直線的にして更に拡幅しようとするものであった。河川課と保護課はこの計画について協議した結果、平成3年10月、保護課による遺跡の有無の確認、及び遺跡が確定された際の範囲確定のための試掘調査が実施された。

試掘調査は平成3年10月7日から9日にかけて、保護課により降雨を押しして実施された。この調査は滝川左岸地域にトレンチを設定しているが、トレンチは南部滝川橋の上流部は橋脚より約5～32m・約36～73m・約110～180mの間、下流は約29～91mの間の滝川流路沿いと下流方向約72m地点の滝川べりの境部分に設定された。県保護課はこれらのトレンチの中で、特に箱田橋下流部の36m付近を第1地点、64m付近を第2地点、約90m付近を第3地点、滝川べりの72m地点に設定したトレンチを第4地点、上流部の26m付近を第5地点、180m付近を第6地点、としてその所見を以下のようにまとめている。

第1地点 旧河川の流路と考えられる攪乱土層。
遺物無し。

第2地点 旧河川の流路と考えられる攪乱土層。
遺物無し。

第3地点 地表から50cm程で、疑似ロームのな黄褐色土層を挟んでAs-B軽石の純堆積が認められ、その下に水田床土が検出された。

第4地点 第3地点とはほぼ同様な状況でAs-B軽石の堆積と、水田床土が検出された。

第5地点 地表下40cmでAs-B軽石が微量混入する黒色土が存在するが、水田・畑等の遺構の存在は確認できなかった。遺物無し。

第6地点 旧河川の流路と考えられる攪乱土層。
遺物無し。

尚、第7地点とした南部滝川橋の北側100m付近については拡張り、溝やピットなど幾つかの遺構を調査している。これについては「第5節 2. 試掘調査」（44頁）に於いて述べるが、この第7地点及び南部滝川橋以南の第3・第4地点以外の区域に遺構は確認されなかった。このため、保護課は調査の完了した第7地点を除く南部滝川橋以北の上流部を発掘調査対象外とし、遺構確認時の報告を条件として河川改修工事が着工となった。尚、この工事は本調査に入る前にすでに竣工している。

一方、浅間山噴出のテフラに覆われた水田跡が確認された箱田橋下流域に関する試掘調査結果が河川課に報告されたが、河川課では平成4年8月17日付けで保護課に対し埋蔵文化財包蔵地域となった当該地域（河川改修事業施行地）に対する発掘調査を依頼した。これを受けて群馬県教育委員会（保護課）は、この発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」とする）に委託することとし、同日付けで事業団理事長あて通知した。事業団は当該業務の受託を決め、ここに箱田古市前遺跡の発掘調査が当事業団をして実施されることになったのである。

第2節 調査経過

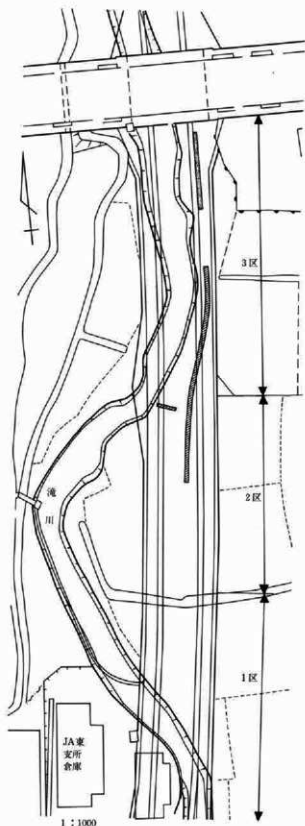
調査前、調査区北寄りには雑草が繁茂し、南半部は柳が栽培されて一部畑作が続けられていたため、事前作業として柳の栽培を平成4年9月段階に実施し、本調査開始後の10月5日～8日に雑草・立木の伐採と焼却処分を行った。尚、畑の上物は10月下旬の収穫後撤去された。

調査区は便宜上、南よりで調査区を横断する農道を境に南を1区、北を2区とし、北よりで調査区の幅が減ずる地点を境に以北を3区とした。

表土剥ぎは10月21日、1区(南側)より開始した。試掘調査対象外であった1区及び2区の過半の地域に対して、概況把握のため13日より試掘調査を実施した。また、この日13日確認した黄色土(Hr-FA)下の水田面の検出作業を26日から開始。27日からは1区で2号溝等沖積部の遺構掘削に入り、2区では1面の遺構調査に入った。

明けて11月は6日から1号溝の調査を開始。17日には全景写真の撮影を行って1面の調査を完了した。尚この日、古環境研究所による同定でテフラの誤認が判明。As-BとしていたものをAs-Cに変更し、黄色土もHr-FAと判明した。翌18日からは1区と2区の一部でAs-C水田の検出作業を開始。併行して2区東壁に僅かに残るAs-B下面の確認作業に入った。3区では19日から堅穴住居の調査に着手、24日からはHr-FA下面の調査に、27日には井戸の調査に入った。また、航空写真を30日に撮影。2区ではAs-Cの除去作業を開始した。

12月に入り、1区では6日～9日に排水施設の調査を実施。11日、前橋市鎌富山弘毅氏米跡。15日に2区で全景写真を撮影し、第2面の調査を完了。16日、堅穴住居跡の調査を終了。18日には写真撮影を行い、調査区全体で第2面までの調査を完了。21日からは次年度調査地域に対する試掘調査を開始。また、22日には調査区外に於けるため押しの掘削で24号溝を発見、調査に入った。12月25日、第3面の遺構調査を完了。試掘調査も終了して埋め戻しに入った。



第1図 調査工程

第2章 グリッドと基本層序

第1節 基本杭とグリッド

試掘調査の結果、一次調査区は滝川が大きく西側に屈曲する場所をバイパス的に改修する部分を中心とした範囲であり、箱田橋から農協倉庫までの南北170m、東西22mの範囲となった。

調査区のグリッド設定は、他遺跡との位置関係を明確にするため国家座標を基準として使用した。

使用した基準点の座標は、調査区南端から西に100m程に位置する区系 $X=41,000$ 、 $Y=-70,000$ である。この座標を $X=0$ 、 $Y=0$ として北及び東方向に展開するグリッドを設定した。

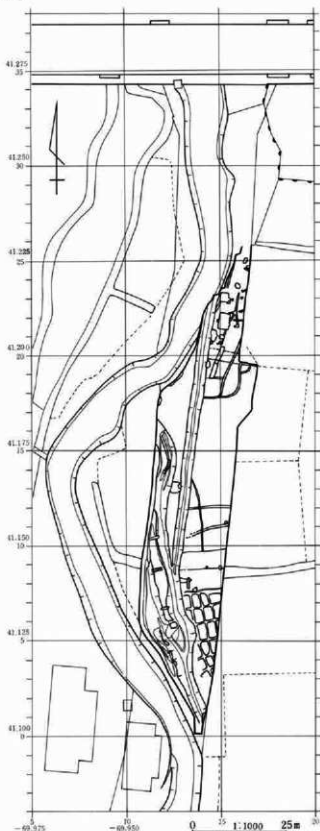
グリッドの規模は $5\text{m} \times 5\text{m}$ を最小単位とし、X軸上、及びY軸上に $0 \sim n$ の数字を付した。このグリッド設定の結果、基準点から北方向にX軸上を $0 \sim 35$ グリッド、東方向にY軸上を $0 \sim 20$ とすることで、ほぼ調査区全域にグリッド設定ができた。(実際の調査区は、 $X4 \sim 34 - Y10 \sim 18$ の中に収まっており、南北方向に5グリッド単位の大グリッドの設定を考えたが実施しなかった。)

グリッドの表示方法は、当該グリッドの南西コーナー部のX軸およびY軸の数字を組み合わせたものをグリッド名称とし、 $X_0 - Y_0$ と表示した。

また $5\text{m} \times 5\text{m}$ よりも狭い範囲または位置を表示するためには、X軸及びY軸のグリッド名称に示したい場所の距離を加算し $X_{0+0m} - Y_{0+0m}$ と表示した。

実際の調査区においては、 5m ごとにグリッド杭を打設すると調査に差し支えるため、 10m ごとに杭を打設し、必要に応じて増設した。

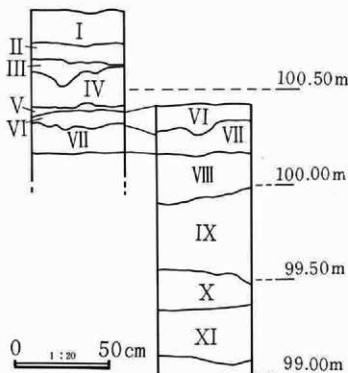
標高の基準 (BM) としたのは、調査区近くの2級水準点から調査区内に移動し、調査区が南北に距離があるため北寄り及び南寄りに2カ所設置した。また場など比高差のある遺構の場合には、掘削に合わせて移動・増設した。当初設置した2カ所の標高は北側が 100.60m 、南側が 100.40m である。



第2図 グリッド設定図

第2節 基本層序

当遺跡の基本土層は、調査区東壁際と溝状遺構の壁面の2カ所観察から復元したものであり、I～IIの11層に分けることができる。I・II層は、いわゆる耕作土層であり、I層が現代、II層はそれ以前のものであろう。III層も同様に耕作土と考えられるが、層中に占めるAs-Bの量が非常に多く中世以降のものであろう。IV層中の灰白色軽石は特定できなかったが、As-Bの含有が認められないことや、直下にHr-FA純層（V層）があることから、古墳時代後期以降平安時代までに形成された土層と考えられ、平安時代の住居跡などの遺構確認はこの層中で可能はずであるが、実際にはさらに下層で確認せざるを得なかった。VI層はAs-Cを多量に含む黒褐色土であり、攪拌された状況を呈しているものの軽石降下時期に近い時期のものと考えられる。VII・VIII層中には鍵となるテフラがなく時期は判然としない。IX層以下には鍵となるAs-YP・BPが認められる。



第3図 基本土層

- I層、褐色土(10YR4/4) 耕作土上層
 II層、にぶい黄褐色土(10YR5/3) 耕作土下層
 III層、褐灰色土(10YR4/1) As-Bを多量に含むが純堆積層ではなく、攪拌されている。
 IV層、にぶい黄褐色土(10YR5/4) 微量の灰白色軽石を含み、部分的に酸化鉄の凝縮のある固くしまりのある層。
 V層、明黄褐色土(10YR6/8) Hr-FA層。純堆積層と考えられるが、酸化鉄の影響を受け変色している。
 VI層、黒褐色土(10YR2/2) As-C層。純堆積層ではなく、攪拌されている。
 VII層、黒褐色土(10YR2/3) 粒径1¹、前後の白色褐色粒子をまばらに含む固くしまった層。(水田土壌?)
 VIII層、黒褐色土(2.5Y3/1) 粒径1~2¹の白色粒子をまばらに含む固くしまった層。
 IX層、浅黄色土(5Y7/3) 粒径が細かく、白っぽい層。As-YPを含む。
 X層、灰色土(5Y4/1) 黄白色の軽石を多量に含む層。
 XI層、灰白色土(10YR8/1) やや砂質な粘質土層。As-BPを含む。

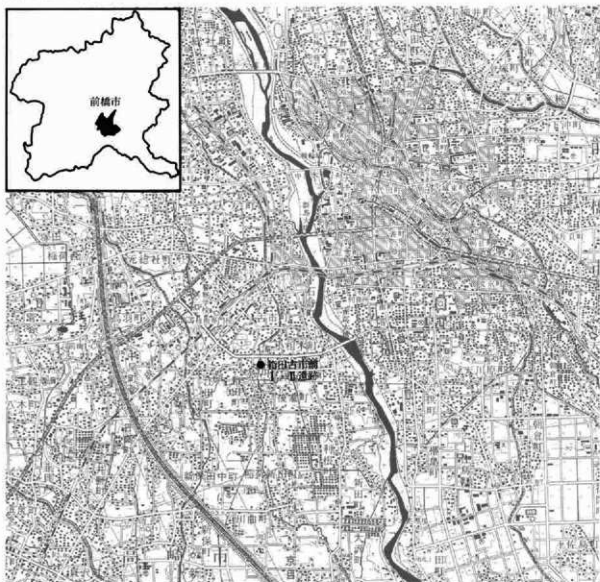
第3章 遺跡の立地と周辺遺跡

第1節 遺跡位置と立地環境

本遺跡はJR上越線新前橋駅の南々東約900m、群馬県庁・前橋市役所の南西約2,400mの前橋市箱田町の北端近くに位置する。周辺はほぼ平坦な地形で、滝川や殿田堰など天狗岩用水に拘わる小河川や堀が何本か南流している。調査区は前橋南部環状線道路の南側、滝川の左岸部に位置し、調査時点で周囲は市街化が進行しつつあったが、調査区には島が残り、滝川の川岸にはアカシアや鬼胡桃などの樹木

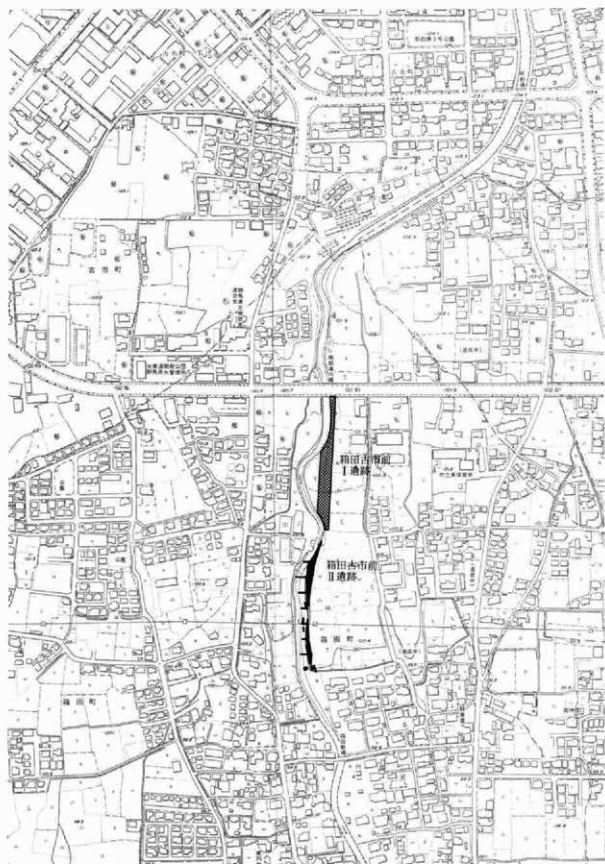
も多く見られ、水面には小魚の群れも映った。

地質的に見ると、本遺跡を含む周辺地域は広瀬川低地帯に対する前橋台地上に在るが、前橋台地の形成は2～2.4万年前に浅間山の大規模な山体崩壊に伴って発生した泥流が厚さ200m以上の前橋砂礫層の上に10～15m厚の前橋泥流堆積物を堆積させたことに遡る。この前橋泥流堆積物上には後背湿地の形成を示す1.3～1.4万年前頃の前橋泥炭層が堆積し、



第4図 遺跡位置(1)

1:50000



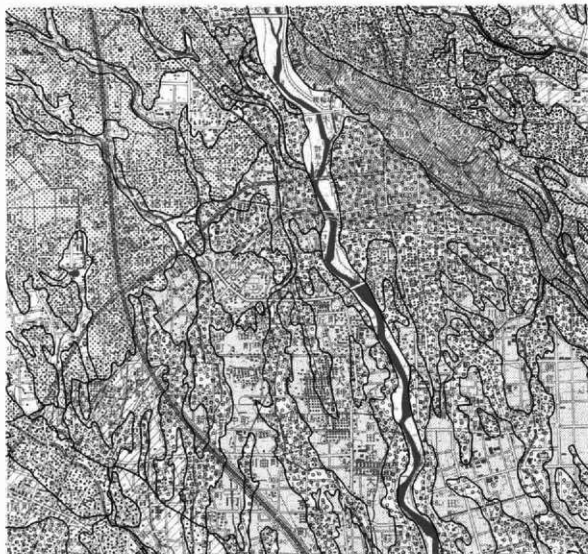
第5図 遺跡位置(2)

1:5000

更に、1万年程前と想定される総社軽石を挟む総社砂層が堆積していた。また縄文時代には榛名山を水源とする小河川沿いには、自然堤防を形成する洪水堆積物も形成されている。尚、第6図に示したように現在の台地上の地形は微高地と後背湿地に分かれ、これらは凡そ交互に南北に伸びている。

本遺跡付近では本遺跡の乗る滝川の両岸は自然堤防状の地形、即ち微高地をなし、その外側に後背湿地が広がっている。昭和4年測図の地形図を見ると

微高地には集落或いは畠が形成され、後背湿地には水田が営まれている。微高地に当たる本遺跡でも、調査前は野菜や柳等の樹木が栽培されていた。一方『(群馬郡)東村誌』(1959)に記された昭和29年度の、後背湿地に当たる本遺跡南約300mの箱田町字村前1441番地の地質調査に関連する所見として、「湧水面は一般に低く、概ね排水良好な二毛作田をなし、水稲の収量は一般に高い」ということが報告されている。



第6図 地形分類図

1 : 50,000

第2節 周辺遺跡

箱田市市前遺跡は、前橋市箱田町にあり、公共座標上は、第IX系X+40.900-41.225、Y-69.915-70.00にあり、標高は、約99-101mにある。地質・地形上は、榛名山扇状地形の末端にあり、洪積台地のローム層が推定上野国府跡周辺には認められ、当遺跡周辺から以南に至ると、泥流・火砕流による二次堆積ロームが台地の表土下50cm内外に存在する場合が多くなり、沖積地との間に網状化した低台地が形成されている。その状況に関しては第3章遺跡の立地と周辺遺跡 第1節遺跡位置と立地環境に詳しい。また4頁基本層序も併読された。

周辺遺跡を図示するために第7図を作成した。1は、当遺跡箱田市市前遺跡である。2は赤鳥遺跡^{あかとり}で前橋市古市町にあり、古墳時代集落の一部（『赤鳥遺跡』(前橋市教育委員会)1985)が発見されている。3は村前遺跡で前橋市箱田町にあり、古墳・平安時代水田関連遺構（『昭和60年度文化財調査報告書』(前橋市教育委員会)1986)が、隣接の4五反田遺跡においても同期の遺構の延長（出典同前）が見られた。5箱田境遺跡からも平安時代水田が発見（『群馬県前橋市箱田境遺跡発掘調査報告書』(前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団)1985)されている。6勝呂遺跡は前橋市江田町にあり、平安時代水田（『勝呂遺跡61A16』(前橋市教育委員会)1987)が、7日高遺跡は、高崎市日高町にあり、弥生・平安時代水田、弥生墓跡が発見（『日高遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)1982)された。日高遺跡は東方の現水田と現日高集落北方の畑地・水田域の調査が行われ、上野国府南面古遺は、平安時代に存在していたこと、平安時代末期水田の調査により、坪単位の区画範囲と規模が明らかに（『日高遺跡Ⅱ』・『日高遺跡Ⅳ』(高崎市教育委員会)1980-1982)された。8中尾遺跡は、高崎市中尾町にあり、奈良・平安時代の集落跡と中世中尾城跡の一端が調査（『中尾遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)1983)された。7・8・11は関越自動車

道新路線に伴い発掘がなされ各々広大な調査範囲であった。7と8の間には、県内最古級の14世紀前半を中心とした中尾村東館跡が存在している。9の菅谷遺跡は群馬町菅谷にあり、弥生・平安時代の包蔵地（『菅谷遺跡発掘調査報告書』(群馬町教育委員会)1960)があり、付近から鉄滓も採集されている。10早道遺跡A・Bは前橋市鳥羽町にあり、壺形土器（『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』(群馬県教育委員会)1971)の既出ありという。11は前橋市鳥羽町・元総社町、群馬郡群馬町稲荷台・塚田にある鳥羽遺跡である。上野国府に関連しての遺構も含まれているとされ、奈良・平安時代の住居跡を中心に、住居跡約800、小鍛冶遺構と長屋風堅穴遺構、中世館跡、中世墓など（主に『鳥羽遺跡G・H・I区』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)1986ほか)が発見されている。13は前橋市鳥羽町弥勒山にあり古墳時代包蔵地（『群馬県遺跡地図』(群馬県教育委員会)1973)という。14は前橋市元総社町の推定上野国府外縁付近で、平安時代の包蔵地であり、以東の桑園中に遺物の散布が（川原嘉久治「推定上野国府跡地覚え書き試みⅠ」『鳥羽遺跡月報16』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団鳥羽遺跡事務所)1981)ある。このほか、上野国府との関連は、第148図と133・134頁で説明したい。なお、以上の周辺遺跡の概要は、木津博明「周辺遺跡」『上野国分僧寺・尼寺中間地域』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)1987、相京建史「周辺の遺跡分布」『新保田中村前遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)1990)を参考にして作成した。

地史的沿革については、前橋市箱田町は、昭和28年町村合併促進法の施行により、昭和29年4月1日に群馬郡東村から前橋市に合併された。昭和44年、町名変更の動きに伴い一部が大利根町に変更されている。旧東村は、小相木・古市・江田・箱田・前箱田・川曲・上新田・下新田・稲荷新田・後家村となるが、以前の明治22年の第4大区中に編入されていた形を、区制の廃止に伴い、この10村をもって東村が成立することとなった。箱田は、江戸時代から明治22年までの村名であった。その間の領主の変遷

について「東村誌」(東村誌編纂委員会)1959に、天正年間、長野氏箕輪城落城の城修築に当たった井伊直政所領となり、同井伊氏は慶長3年高崎城を築城し、城下そのものも高崎に移す。慶長6年に、秋元長朝が総社城に入府後は総社領となり、慶長19年に箱田村を西・中・東に分かつ。元和年間には高崎城主となった松平康長領となり、高崎藩領の時代が永く続く。取巻村高は「角川日本地名大辞典10群馬県」1988によれば、「寛文郷帳」で593石余、そのうち田方466石余、畑方126石余、「元禄郷帳」も同高、「天保郷帳」524石余とある。箱田という地名は、「東村誌」は「上野国郡村誌」を引用し、永正年間すべて箱田と称すとあり、明瞭ではないらしい「上野国郡村誌」には箱田村として、「古時青木荘に属し、永正年間箱田村と称し(後略)」とあり、さらに前代は、上野国府に近接の地域に用いられた実態不明の青木荘という。箱田の地が上野国府至近の場所であることからすれば、鎌倉幕府成立過程で、奉行人から守護に戦されたのは、安達盛長であり、旧国衛領は、安達氏の守護領となっていたことが、中世の初期では考えられる。それ以前においては、吉田東伍「大日本地誌書坂東 第6巻」によれば、箱田項は存在するものの古代の内容は記述がない。古代の郡郷の位置は「和名類聚抄」高山寺本(『群馬県史資料編4』資料番号949、1985)によれば「群馬郡は、長野(奈加乃) 井出(爲出 小野 八木 上郊(加尤豆左乃) 畔切(安岐利) 嶋名(之末奈) 群馬」とある。また古活字本(同前、資料番号948)の群馬郡に長野(奈加乃) 井出 小野(乎乃) 八木 上郊(加無佐土) 畔切(安木利) 嶋名(之萬奈) 群馬 桃井(毛毛乃井) 有馬(安利萬) 利刈(止加利) 驛家 白衣とある。このうち古活本に見える驛家は、「和名類聚抄」高山寺本中の道路具第四百三(中略)東山驛(同前、資料番号950)中の上野駅として「坂下 野後 群馬 佐位 新田以上上野」とある郡(群)馬駅の場合であり、「群馬県史資料編4」1991中の「東山道の経路の推定」項があり204頁に「前略、前橋の古名「厩橋」とみ

られ、この「厩」という名は群馬^{群馬}馬^馬駅^駅に由来するものである可能性が指摘されている。そうすれば、群馬駅は現在の利根川のほとりにあったことになろう。」と説明し、さらにその位置を国府に隣接することが便利だとして駅^驛の位置を元総社町付近に求めている。既説においても、前橋城付近は驛^驛所に推定されており、箱田町付近がこの驛^驛所に属していた可能性はあると考える。

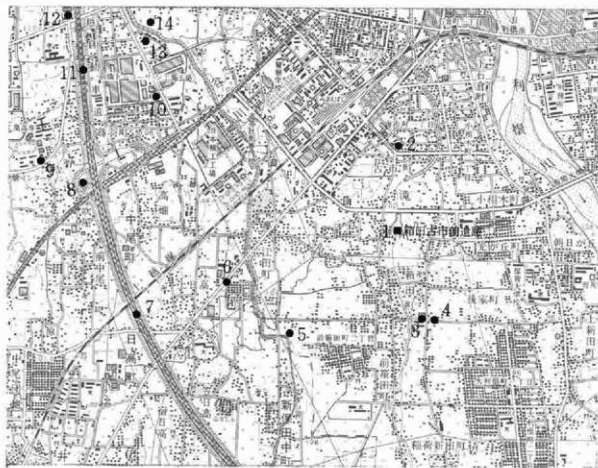
次に天狗岩用水、滝川用水については、都丸九九一「天狗岩堰開鑿史」1947の労著があり、今日となつては、氏が当時おいてまとめなければ不明となった点が多々であったと察せられる。さらに丸山清康「滝川開鑿の功労者 江原源左衛門重久伝」(プリント)1950、渡邊一弘「江戸時代の用水」『広桃用水史』1994など研究の足跡は大きい。

沿革については丸山清康監修「天狗岩用水」元総社町誌1995を要約したい。天狗岩用水は、開さく時点の経緯などによって滝川、越中壘、備前壘などとも呼ばれ、現在の坂東橋の東運から広瀬、桃木両用水と共に利根川の水を取り入れ、利根川の川底を通して両側に掛け、古巻、駒寄、総社をへて、旧東村、旧芝根村(現玉村町)をへて鳥川に放流されている。昭和21年3月で26,868石、約1,953町を灌溉し、かつては2万7,000石といわれたという。その開さくは、総社城主秋元長朝が慶長6年、関ヶ原の戦いにより、総社六千石の加増となり、諏訪氏の居城となっていた蒼海城に移った翌年の慶長7年に着工し、三年間の租税を免じて、莫大な費用が投じられた。工事は難行を極め、最も難事は取り入れ口付近で、元総社付近から以南は自然の河川を利用したと思われる箇所が多いという。天狗岩と称する難事となった岩盤は植野稲荷神社付近にあり、最初の取り入れ口が新井付近に想定されている。最初の堀割は、現在のようではなく、「上野故郷碑」によると「躬親督^一士民^一穿^一渠^一通^一溝^一、引^一利根川^一以^一溉^一之^一田^一、以^一横^一四尺^一、堅^一二尺五寸^一、定^一一萬石^一水口^一、而立^一小間^一小弁^一。」とあり、配水標準に小間小弁という方法がとられたようであるが、この用水を地表

第3章 遺跡の立地と周辺遺跡

面に出すためには容易でなく、さらに侵食を防ぎ、用水を低い川に放流しないためには様々な苦心が行われている。所々に大きな岩を用いて滝をつくり水流を緩和し、分水した水を十分に活用するためには水路を西に、東に方向を換え、網の目のように分流をつくっている。そのことは、天狗岩用水の全図として最も古い天保九年の「天狗岩用水行筋之図」が示している。用水掘さくの援助者と功績のあった人々に、滝川村の江原源左衛門や、元総社小野沢氏の存在があった。秋元氏の労徳はこの後、転封後も永く地元で称えられている。この用水の末尾部の完成者は玉村の代官伊奈備前守忠次である。伊奈備前守は、滝川の関さくに当り、滝川村江原源左衛門重久の助力があった。以下は丸山清康「滝川開鑿の功勞者 江原源左衛門重久」により略記したい。江原重久は武田の臣下で甲斐国巨摩郡江原村の出身であり、箕輪城落城後、武田信玄は上州守備のために内

藤修理昌豊を留め置き、江原重安もその下に加えられ滝川の誓をあげたと想像されている。江原重久は、重安の子であり、重安は天正10年(1582)に甲斐天目山の戦いで戦没し、子孫は滝村に帰農したらしい。荒野の多かったらしい滝村周辺であったところに、以南玉村の地の代官となった伊奈備前守の天狗岩用水からの引き入れ計画があり、それに参画し、荒野灌溉が実現することとなる。その頃の天狗岩用水は、高崎市西横手町付近で井野川に落水させていたらしいと都丸氏は推定する。計画は慶長10年頃から実施され、工事は慶長13年からである。伊奈氏の工事は従来の植野堰(編者補注、今は現在の天狗岩用水)に手を加えて取水入口を新設すること、天狗岩用水の流水路を拡張すること、横手村から南へ植野堰に接続して滝川・玉村を通る新水路を掘ることの三部分に分かれ、完成したのは慶長15年の年頭であった。



第7図 周辺遺跡

1 : 25000

第4章 検出された遺構・遺物

第1節 調査の概要

一次調査では、掘削機械を使用して表土の除去を行った後、調査補助員の手で遺構確認を実施した。掘削した排土については、調査区が狭く排土置き場の確保ができなかったために、箱田橋橋詰めに搬出路を確保して外部に搬出した。搬出口はこの場所しかなかったために、表土の掘削は南側から順次行った。

表土の捉え方については、文化財保護課の試掘調査結果を踏まえ、As-Bを多量に含んだ層(Ⅲ層)より上層と考え、当初灰白色軽石をわずかに含む層(Ⅳ層)上面での遺構確認を行った。しかし、南側部分においてはほとんどこの面での遺構確認ができなかったために、結果的にはHr-FA層(Ⅴ層)上面で最初の遺構確認を行い、この面をⅠ面の調査とした。

続いて、Hr-FA層が純堆積との仮定のもとに、この層で覆われた面を遺構面として捉えⅡ面の調査とした。ここでⅡ面として捉えた下層にはAs-Cを多量に含む黒褐色土の層(Ⅵ層)が面的に広がっており、この層直下の面が遺構面と考えられたことから、この面をⅢ面とした。

最後に、さらに下層中に遺構が存在するか否かを確認する意味も込めてⅢ面のベースとなっていたⅥ層土を除去し、Ⅳ層上面で確認を実施した結果遺構の存在が確認されたことによりⅣ面の調査とした。

Ⅰ面の調査で検出された遺構は、堅穴住居跡5軒、土塋4基、サク状遺構1カ所、井戸跡2本、道状遺構2本、溝状遺構13条、排水遺構1基である。

堅穴住居跡は、いずれもカマドを有する時期のものであり、住居跡の平面形状やカマド位置・形態及び出土物から古代(奈良・平安時代)の所産と見られるものである。これらの堅穴住居跡は、調査区全面に展開していたものではなく明らかに北寄りに偏在する傾向がある。出土遺物は、2号住居跡が比

較的まとまった出土が認められた他はごく少ない。

土塋は円形プランと長方形プランの2種が検出されている。遺物の出土が皆無であるため時期の特定は難しいが、充填土から判断して中世以降の所産のものと考えられる。

サク状遺構はごく狭い範囲の検出であり詳細は不明である。井戸跡2基の検出された位置は、堅穴住居跡が集中するエリアに当たる。遺物出土はまったくなく、充填土から判断して中世以降のものであり堅穴住居跡との直接の関係は考えにくい。

道状遺構は調査区中程とやや南寄りの2カ所で東西方向に検出されているが、現在の農道及び耕地の境界と重なっていることや、覆土の状況から近世以降または近代の可能性が高いものである。

溝状遺構は時期・規模・走向等バラエティーに富んでいるが、軽石や出土遺物から時期の特定可能なものは1・2号溝状遺構しかなく、他は充填土等から中世以降の所産としかわからない。

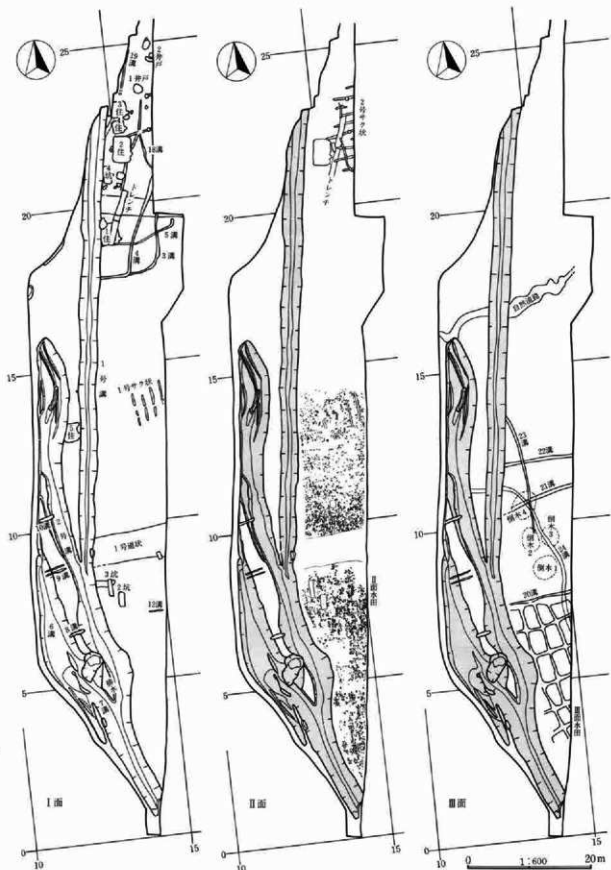
排水遺構としたのは、2号溝状遺構と旧流路とが接する部分に検出されたものであり、杭の残存が認められた。

Ⅱ面の調査で検出した遺構はサク状遺構1カ所、水田面1面である。どちらも基本的にはHr-FA層下なので、古墳時代後期初頭頃の所産と考えられるが、裏付けるような遺物の出土は見られなかった。

Ⅲ面の調査で検出したのは、19枚の水田区画と溝状遺構4条である。攪拌されたAs-C層下面であることから古墳時代前期頃の所産とみられるが、生産遺構であるため遺物出土がなく判然としない。

Ⅳ面の調査で検出した遺構は、溝状遺構1条だけであったが、付随して縄文時代まで遡ると考えられる自然流路1条と倒木痕4カ所の調査を実施した。

以上1次調査で検出した遺構は、古墳時代から中世・近世にまで及んでいる。

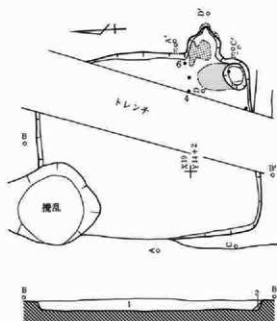


第8図 遺構全体図

第2節 I面の調査

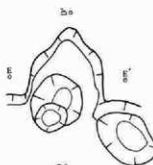
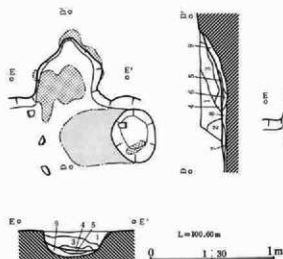
1. 竪穴住居跡

1号住居跡



1. 濃い黄褐色土(10YR4/3) 黒褐色土小ブロックとAs-C、褐色土粒を塊状に含み、粘性がやや強い。
2. 暗褐色土(10YR3/4) As-Cと褐色土粒を塊状に混入する他、焼土小ブロックを微量に含む。
3. 褐色土(10YR4/4) 1・2層と比較して、軽石の含有量は少なく、5-10¹、大の焼土粒を多く含む。
4. 褐色土(10YR4/4) 焼土粒と灰を少量含み固くしまっている。(掘り方覆土)
5. 黒色土(7.5YR1.7/1) 多量の灰と焼土粒をわずかに含み、粘性が弱い。
6. 黒褐色土(7.5YR3/2) 焼土粒と黒褐色土小ブロックを多量に含む層で、粘性が強い。

0 1:60 2m



1. 暗褐色土(10YR3/3) 黒褐色土小ブロック、焼土大粒の他、As-Cを含む。
2. 濃い黄褐色土(10YR4/3) 1層に類似するが、黒褐色土と焼土粒の含有量が少ない。
3. 濃い黄褐色土(10YR4/3) 2層に類似するが、焼土粒が細粒で、含有量がごく少ない。
4. 濃い黄褐色土(10YR4/3) 焼土ブロックを多量に含む。
5. 赤褐色土(2.5Y4/6) 燃焼部底面の焼土。非常に固い。
6. 暗褐色土(5YR3/6) 焼土粒と灰
7. 黒色土(2.5Y2/1) 灰層
8. 黒褐色土(7.5YR3/1) 焼土粒と灰をわずかに含む。
9. 黒色土(7.5Y2/1) マンガンと思われる粒子を多量に含む。地山土か?

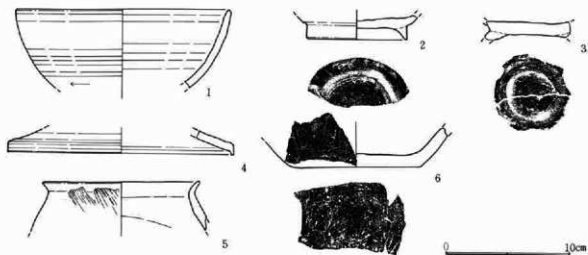
第9図 1号住居跡

当住居跡は、X18・19-Y14グリッド内に位置し、西壁の北側部分が1号溝状遺構との重複によって失われ、北西及び北東コーナー部はトレンチなどで攪乱されていた。遺構の確認面はV層上面であり、残存が不良だったこともあり、充填土はカマド付近を除いて分層することはできなかった。平面形は隅丸

の長方形で、平面規模は3.5m×3m、残存深度15cm、主軸方位はN-1°-Wである。

カマドは東壁の南東コーナー寄りに偏在し、平面形は凸字状を呈する。燃焼部底面及び運出し部の焼土が顕著である。袖の構築材は認められず、据え方の痕跡もとどめていない。燃焼部底面の焼土下から

第4章 検出された遺構・遺物



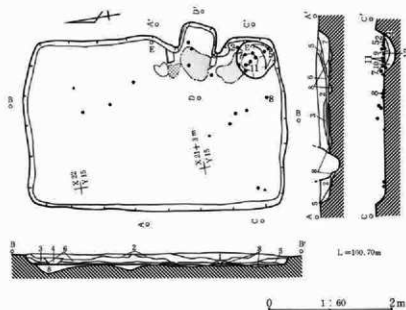
第10図 1号住居跡出土遺物

は円形の浅いピットが検出されており、支脚が据えられていた可能性が高い。主軸方位はE-4°-Sである。

貯蔵穴は南東コーナー部に検出され、0.4m×0.35m、深さ15cmの楕円形の浅い掘り込みである。

2号住居跡

遺物はカマド周辺の床面付近からわずかに出土しただけで、住居跡の時期の想定に有効なものは少ないが、須恵器碗や蓋の特徴から9世紀代のものと考えられる。



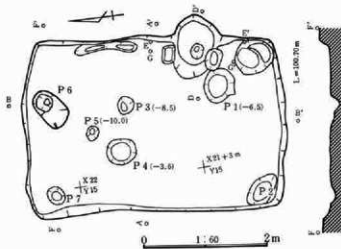
第11図 2号住居跡(1)

当住居跡はX21・22-Y14・15グリッドに位置しており、他の遺構による攪乱がほとんどなく、検出した住居跡の中では最も残存状態の良いものである。遺構の確認は、V層土の残存がわるかったためにVI層上面まで下げて行った。充填土は浅いにもか

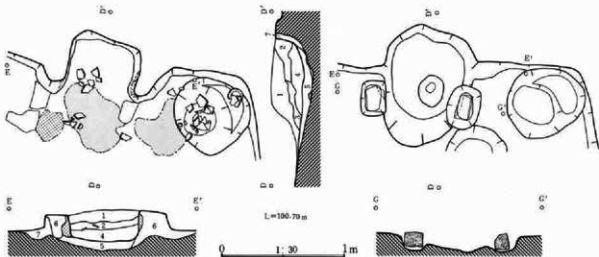
1. 灰褐色土(7.5YR4/2) 少量の焼土粒とAs-Cを含む。
2. 灰褐色土(7.5YR4/2) 1層よりもAs-Cは少なく、焼土大粒の含有量が多い。
3. 黒褐色土(7.5YR3/2) 多量の酸化鉄粒とAs-C細粒を微量に含み、やや粘性が強い。
4. 灰褐色土(7.5YR4/2) マンガンブロックを少量とAs-Cを微量に含む。
5. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-Cを含まず、珪・燐土ブロックを多量に含む。
6. 褐色土(10YR4/1) 多量の酸化鉄粒と少量のマンガン粒を含み、粘性が強い。
7. 黒褐色土(7.5YR3/2) 3層に類似するが、酸化鉄の含有量が多い。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土ブロックとAs-Cをブロック状に含み、しまりが強い。

かわらず複雑に分層が可能であった。特に床面からわずかの間層を置いてその上を覆っている褐灰色土は、河川等の氾濫起源の土層の可能性が高い。住居跡の平面形は隅丸長方形で、平面規模は4.2m×2.8m、残存深度は17cm、主軸方位はN-9°-Eで

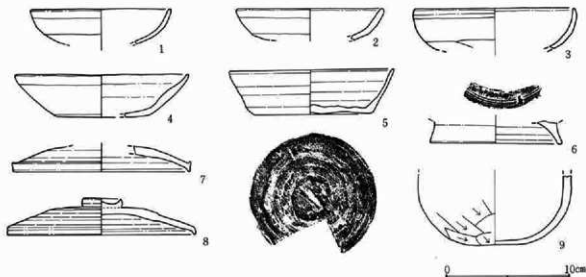
第2節 I面の調査



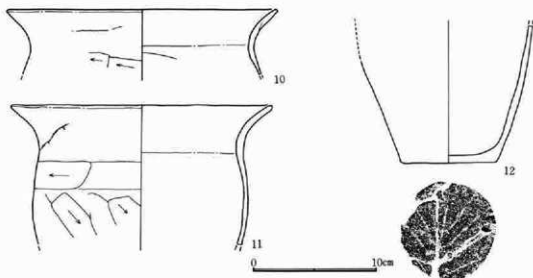
1. 褐灰色土(7.5YR4/1) 0.5'大の焼土細粒を多量に含む他、マンガン・酸化鉄粒を含み粘性が強い。
2. 灰褐色土(7.5YR4/2) 1層よりも焼土粒等の含有量が少なく、粘性・しまりに弱い。
3. 暗赤褐色土(5YR3/2) 焼土粒とブロックを多量に含み、粘性・しまりに弱い。
4. 暗灰色土(N3/0) 灰を主体とする層で、比較的多くの焼土粒と微量の炭化物を含む。
5. 褐灰色土(7.5YR4/1) 10'大の焼土粒と灰を多量に含む。
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼土粒とAs-Cを微量に含む。(稀)
7. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒褐色土ブロックとAs-C粒を少量含む。



第12図 2号住居跡(2)



第13図 2号住居跡出土遺物(1)



第14図 2号住居跡出土遺物(2)

ある。

掘り方の調査では、貯蔵穴やカマド付属のビット以外に7本のビットを検出したが、規則性は見られないことなどから柱穴とは考えにくい。

カマドは東壁の南寄りに位置しており、方形プランにみえるが、本来は東側に突出する煙出し部があったものと考えられる。袖には軟質の砂質土を角柱状に切り出した構架材を、やや屋内に張り出すように据えているのが特徴である。この両袖間のやや南寄りの位置から支脚の据え方と思われるビットが検出されている。残存するカマドの規模は、長さ0.7m、燃焼部幅0.65m、主軸方位はN-17°-Eである。

貯蔵穴は南東コーナー部に位置し、径0.6m、深さ20cmの円形で、出土遺物のほとんどがこの貯蔵穴及びカマドから出土したものである。

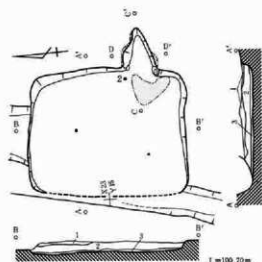
出土した遺物は、土師器杯・甕及び須恵器杯・蓋などの特徴から8世紀後半代のもと考えられる。

3号住居跡

当住居跡は、X22・23-Y14・15グリッド内に位置し、19号溝状遺構との重複によって西壁のほとんどが失われている。遺構の確認はⅥ層土上面で行ったが、地形によるものか、全体に西側の残存状態が良くない傾向がある。充填土は3層に分層でき、いずれも水平の堆積をしていることが特徴であるが、

地山土のブロック主体の3層土は貼床された土層である可能性が高い。平面形は1号住居跡と相似形の隅丸長方形である。平面規模は2.5m×2.05m、残存深度は15cmであり、主軸方位はN-3°-Eである。

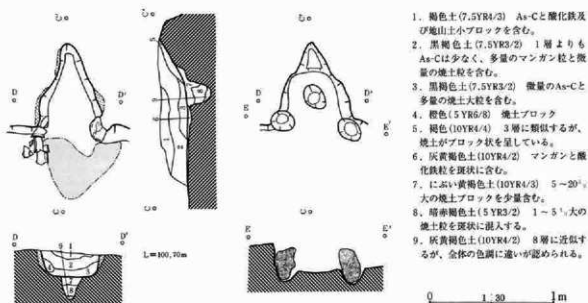
床面はほぼ平坦であるが、掘り方を含めてビット等の掘り込みは全く検出されなかった。



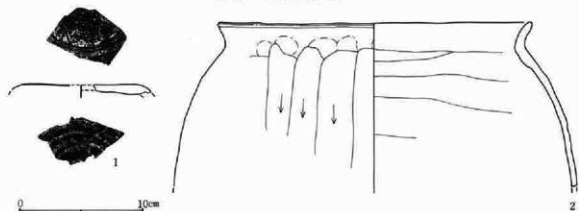
1. 褐色土(10YR4/4) As-Cと明黄褐色土ブロックを含み、粘性がやや弱い。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) As-Cと明黄褐色土小ブロックを含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山土のブロックで構成された層。

0 1:60 2m

第15図 3号住居跡



第16図 3号住居跡カマド



第17図 3号住居跡出土遺物

カマドは東壁の南寄りに偏在して設置されている。平面形は凸字状で、両肩にあたる部分から煙出し部にかけて顕著な焼土が形成されていた。両袖部には自然石をやや内傾させて据え付けている。この袖石の検出された位置は住居壁からカマドへの変換点に当たるので、このカマドは燃焼部を完全に壁外に設けたタイプである。支脚は残存していなかったが、掘り方の調査で燃焼部奥に明瞭な据え方が検出された。当初の調査では燃焼部から煙出し部まで緩やかに傾斜する構造と考えていたが、掘り方では燃焼部と煙出し部には明確な段が設けられている。残存するカマドの規模は、長さ0.75m、燃焼部幅0.52m、主軸方位はE-1°20'-Nである。

遺物は数点しか出土していないが、その中でカマ

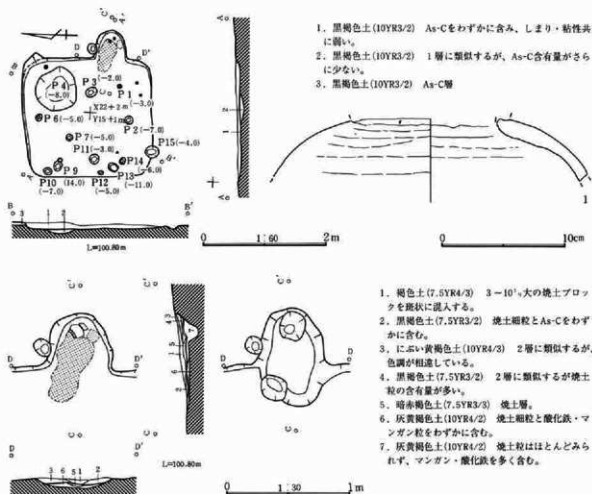
ド近くから出土した2の土釜が当住居跡の時期を示している可能性が高く、11世紀代が想定される。

4号住居跡

当住居跡は、X22-Y15グリッド内に位置しており、他の遺構との明瞭な重複は認められませんが残存状況が極めて不良である。VI層土面で遺構確認を行ったが、この時点で西壁・南壁の2辺はすでに不明瞭であった。床面とも掘り方とも判断しかねる面の調査で15本ほどの大小のピットを検出したが、P4が貯蔵穴の可能性があることを除いて用途を推定できるものはない。

住居跡の平面形は隅丸方形と考えられ、想定される平面規模は2.1m×1.9m、残存深度はわずかに5cmである。主軸方位最も条件の良い東壁を基準と

第4章 検出された遺構・遺物



第18図 4号住居跡・出土遺物

して計測するとE-4°30'-Nである。

カマドは東壁の南寄りに設置されていた。平面形は砲弾状を呈しており、3号住居跡のカマドのような凸字状の明確な平面形をもたない。袖は構造物・掘え方ともに検出されていないために全体構造がわかりにくい。焼土の広がりや燃焼部から屋内にまでおよんでいるので、袖が屋内まで若干伸びるタイプとも考えられる。残存しているカマドの規模は、長さ0.50m、燃焼部幅0.52m、主軸方位はE-1°-Nである。遺物で実測可能なものはカマドから出土した須恵器の壺だけであり、時期は判然としない。

5号住居跡

当住居跡はX12・13-Y12グリッド内に位置しており、西壁北半から北西コーナー部にかけては2号溝状遺構との重複によって、また、東面するカマドの先端付近は、1号溝状遺構との重複で失われてい

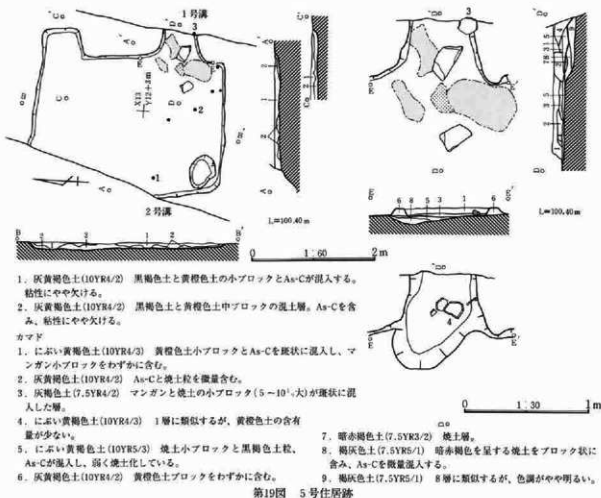
る。遺構の確認は、V層土の残存が全く認められなかったために、VI層土まで下げた段階で行った。

平面形は基本的には隅丸長方形であるが、北東コーナー部が東側に方形に張り出した特徴的な形をしている。当初は重複を想定したが、C-C'セクションを見れば明らかのように、住居跡充填は張り出し部から住居跡屋内まで一連の堆積をしているので、重複は考えられない。張り出し部の規模は、東西0.48m、南北0.65m、残存深度は10cmである。

住居跡の平面規模は、2.95m×2.3m、残存深度は10cmで、主軸方位はN-2°-Wである。

住居跡の充填土は、残存状態が悪いために最下層部分しか検出されていないが、2層のブロック状堆積は人為的な埋没を示唆している。

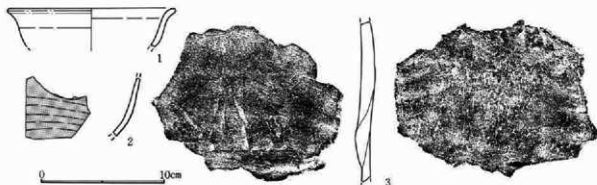
カマドは東壁の南東コーナー寄りに設置されている。平面形は砲弾状を呈するタイプと思われるが、

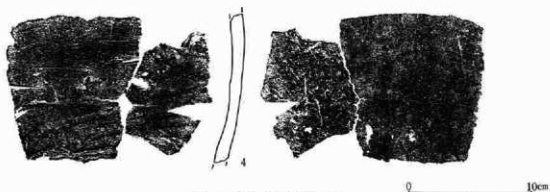


先端部が欠損しているため不明である。住居壁とカマドの接続部屋内側には灰の広がりが認められることから、袖が屋内まで伸びるタイプとは考えられない。掘り方の調査においては、燃焼部が全体に下がった他に袖・支脚の掘え方は検出されなかった。カマドの燃焼部幅は0.6m、主軸方位はE-3°20'-Sである。

貯蔵穴は、南西コーナー部に検出した不整楕円形の掘り込みである。規模は長軸0.55m、短軸0.42m、深さは12cm、遺物の出土はない。

遺物は床面に接してごくわずかしか出土していない。形の特定できるものは、1の須恵器碗と2の緑釉陶器碗で、10世紀後半のものであろうか。

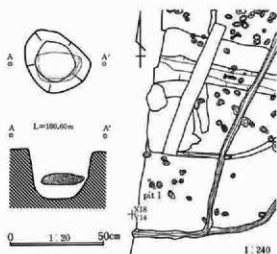




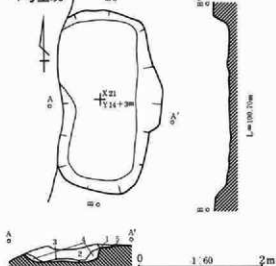
第21図 5号住居跡出土遺物(2)

2. 土 坑

1号ピット



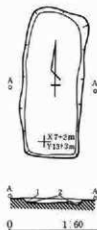
4号土坑



1号ピット

1号ピットは、X18-Y14グリッド内に位置しており、遺構の確認はⅧ層土上面で行った。平面形は

2号土坑



2号土坑

1. におい黄褐色土(10YR4/3) As-Cを多く含み、砂質でしまりが無い。
2. 黒褐色土(10YR3/1) 軽層土・褐色土・におい黄褐色土小ブロックの混土層。

3号土坑

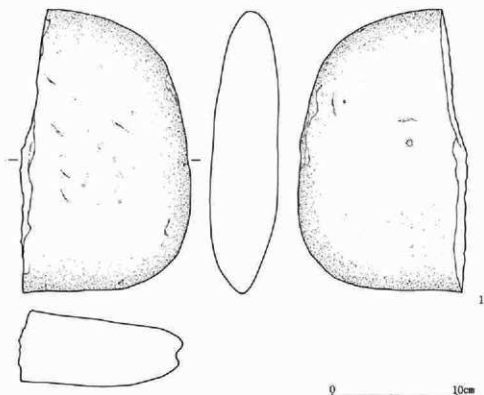
1. におい黄褐色土(10YR4/3) 褐色土と軽層土小ブロックを混状に含む。

4号土坑

1. におい黄褐色土(10YR5/3) As-Bをわずかに含む粘性の弱い層。(攪乱?)
2. 黒褐色土(7.5YR2/2) As-Cを多量に、黒褐色粘質土小ブロックを少量含む。
3. 黒褐色土(7.5YR2/2) 2層に類似するが、As-Cがさらに多く、小ブロックを含まない。
4. 黒褐色土(7.5YR3/2) 2層よりもAs-C含有量が少なく、小ブロックを含まない。
5. 黒褐色土(7.5YR3/2) Ⅷ層。(As-C層)

第22図 1号ピット、2・3・4号土坑

不整形円で、規模は径34cm 残存深度26cmである。セクションを図化することはできなかったが、充填土



第23図 1号ピット出土遺物

中にはAs-Bを均一に含んでいる。当ピットの特徴は、底面から、7.5cm程上の充填土中から半截された偏平な河原石が検出されたことである。石は平坦な面を水平の状態で見出されており、意識的に埋設されたものと考えられる。掘立柱建物の柱穴の根石の可能性が高いが、周辺で同じ特徴のピットの検出例がないため、建物規模等は不明である。

2号土坑

当土坑はX7-Y13グリッド内に位置している。遺構の確認はVI層土まで下げて行ったために、遺構の残存状態は良好でない。平面形は隅丸長方形で、長軸はほぼ南北を向いている。規模は2.35m×0.95m、残存深度は8cmである。充填土の主要部分にはAs-Bが均一に含まれていることから、中世以降の所産であろう。

3号土坑

当土坑はX8-Y13グリッド内に位置している。遺構の確認はVI層土上面で行った。平面形は隅丸長方形で、長軸はほぼ南北を向いている。規模は2.9m

×0.67m、残存深度は16cmである。充填土はAs-Bを均一に含むものであり、形状・長軸方位とともに2号土坑と共通している。2・3号土坑は同じ時期の所産と考えられる。

4号土坑

当土坑はX20・21-Y14グリッド内に位置している。西側で1号溝状遺構と重複しているが、新旧関係を遺構確認段階及び土層断面から捉えることはできなかった。平面形は隅丸長方形で、長軸はほぼ南北方向を向いている。平面規模は2.9m×1.6m、残存深度は26cmである。充填土中にはAs-Bをまったく含まず、As-Cを主体的に含んでいることから古代の所産と考えられる。

3. サク状遺構

1号サク状遺構

1号サク状遺構は第1面調査時に、調査区中位の東壁付近に於いて確認・調査された遺構である。遺構形態から近世以降の所産と判断される。

個々のサクは8本を数え、長さは42~138cm以上、

第4章 検出された遺構・遺物

幅は11~16cmを測る。しかし、これらのサクには同一ライン上に乗るものもあり、一部を除きその深さも5cm以下と浅いなど遺存状態も不良であるため、同一ライン上のもは従来1本のサクであったものと判断される。従って、本遺構は確認できた範囲では4本のサクで構成されていたものとして判断されるのである。

4本のサクのうち最も東のサクは調査区外に出ていて全長などは不明であるが、これを除く3本のサクの残存部分の端部と端部を測定した長さは、東から4.58m、4.1m、5.18mであった。このことから本サク状遺構については、幅30cm程の短冊形プランの土地区画による畝の耕作が想定されるのである。

4. 井戸跡

1号井戸跡

1号井戸跡は調査区北部の微高地の北寄りに位置する、しっかりした掘り方の井戸跡である。底面近くの中央付近には大きめの礫が幾つか投棄されており、湧水もあった。

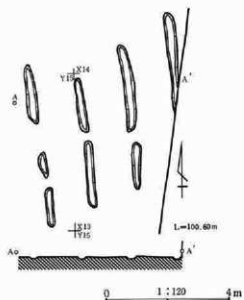
1号井戸跡は深さ2.36mを測り、地表下1.65m付近を境に上下の部分に区分される。上部は、確認面で1.64×1.25mの径を測る楕円形のプランを呈し、上方に徐々に広がっている。下部は高さ70cm程で円筒形を呈し、底面の規模は0.7×0.75mを測る。

また、確認面から1.4~1.5mのあたりには「あぐり」様の挟れを確認することができ、下部の形態と併せてこの付近の透水層を下部に溜めて使用したものと推定される。このあぐりの位置は現代の澗川の洪水期の水位よりは数十センチ高いが、天狗岩用水使用期には水面下になるものと思慮される。

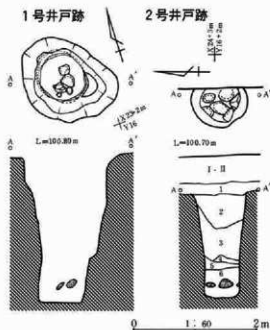
2号井戸跡

2号井戸跡は1号井戸跡の北東に所在し、一部が調査区外に出る。覆土上位にはAs-Bが混入し、床面近くからは礫が多く出土している。

本井戸跡は径0.9mを測る。1号井戸跡と同様、地表下1.2m付近を境として、以下の部分は円筒形、以上の部分はやや広がる傾向を示している。プランは上下部分共に円形を呈すると想定され、確認面で



第24図 1号サク状遺構



1. 灰黄褐色土(10YR4/2) 表土に近いが、As-Bを多量に含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 1層に近似し、しまりが弱い。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 1層よりも粘性・しまり共に強く、地山ブロックをわずかに含む。
4. 褐灰色土(10YR4/1) 地山の褐色土ブロックを多量に含む。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) 3層に類似するが全体にやや砂質。
6. 褐灰色土(10YR4/1) 砂質土と粘質土の混土層。

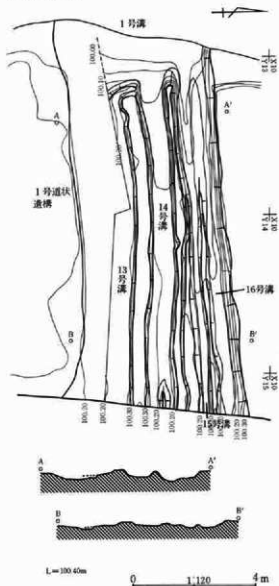
第25図 1・2号井戸跡

径0.9m、底面で径0.55mの大きさを測る。

「あぐり」は地表下100cm強の付近に可能性が検討されるが、明確な状況は確認できなかった。

5. 道状遺構

1号道状遺構



第26図 1号道状遺構、13・14・15・16号溝状遺構

1号道状遺構は調査区の南寄り、東半の微高地部分に位置する。本遺構は南から13・14・15・16号の4条の溝状遺構と、これらに挟まれた区画域から構成される。東は調査区外に延びており、西よりは確認できなかった。明確な硬化面等、道路に直接関連する遺構は特定できなかったが、第5図に見られる東から調査区にぶつかる農道の延長線上に当たる等の位置関係から本遺構は道路遺構であり、溝はどれもその側溝と考えられるのである。尚、13・14・15

号溝の覆土中にAs-Aが含まれているため、これらの溝は18世紀末葉以降の所産と判断される。

本遺跡は東壁から10.2mの範囲で調査された。その幅は両側をなす13号溝の南肩から16号溝の北肩までで凡そ4.9mを測る。13号溝の幅は約1.9m、14号溝は約0.9m、15号溝は約0.9m、16号溝は約0.9mで、深さは東壁面の観察から凡そ13号溝で18cm、14号溝で20cm、15号溝で24cm、16号溝で27cmである。また、15号溝は14号・16号溝より古く、14号溝は13号溝より古いという切り合い関係にある。溝の底面の東西のレベル差は13号溝では4cm、14号溝16cm、15号溝20cm、16号溝7cmと古いものほど高低差が大きく西に落ちているのが分かる。

道路幅については、溝底面の傾斜から同時期の可能性のある13号溝と16号溝を使用した場合、その幅は約4.6mになる。また、溝にAs-Aや酸化鉄分が入り、且つ現道面より溝の確認面が30cm余り下がることを勘案すると、比較的短い時間で付近が徐々に埋没していき、その都度遺構が行われたことが想定されるのである。

2号道状遺構

2号道状遺構は調査区の北寄り、第1面の微高地と低地を画する付近に所在する。走行は西を向き、東は路線外に潜り込んでいるが西側の範囲は特定できなかった。時期については特定することはできなかったが、覆土中にAs-Bを含むことから、中世初頭の所産である可能性を持っている。本遺構は幅広の極めて浅い溝状の形態を呈し、当初17号溝として処理していたが、西寄り南部付近の覆土の一部にやや堅く締まる部分を確認したこと等から道路遺構として扱うこととした。

遺構は、調査区の東壁から1号溝までの間、12.9mの長さを調査した。遺構の幅は2.8m程を測り、深さ11cmを測っている。本遺構の覆土は3層を除き全体としてAs-Bを多く含んでいるが、特に2層・3層では酸化鉄や酸化マンガンを多く含んでおり、2・3層がある種の不透層、即ち道路面に伴う堆積層であることを示している。



第27図 2号溝状遺構・3・4・5号溝状遺構

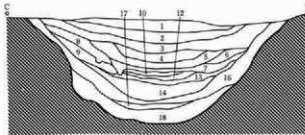
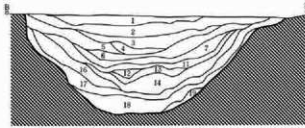
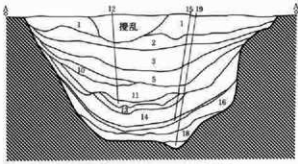
6. 溝状遺構

1号溝状遺構

当溝状遺構は、X 8-23-Y 12-14グリッド内に位置し、調査区台地部分を直線的に縦断するように検出されている。溝状遺構の南端は2号溝状遺構と重複し、北端は現滝川と重複している。遺構の確認はV層土上面で実施したが、この段階では溝状遺構東側のプランしか検出できなかった。西側にも台地部分が残存しているが、この部分には、V層土の残存はなかったため、当溝状遺構を境にして西側はわ

ずかに削平されているものと考えられる。

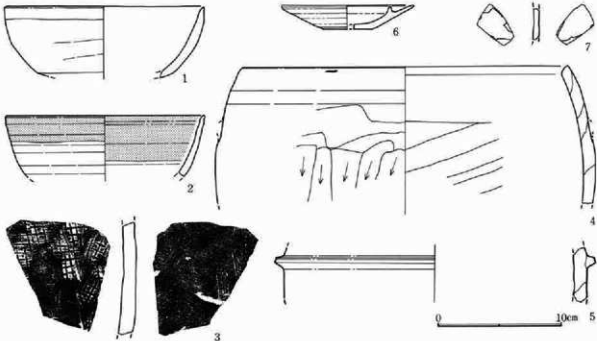
検出した部分の規模は、長さ77m、上幅2.5m～3.0m、下幅0.35m～1m、残存深度1.05m～1.32mである。北端の底面標高99.25m、南端の底面標高が99.16mであり、約9cmの比高差がある。走向方位は、N-9°-Eであるが、2号溝状遺構と交差しているX 7-Y 12の部分に、当溝状遺構の延長部と思われる痕跡が認められることから、この位置で南南東方向に走向方向を変え2号溝状遺構と完全に重なる位置関係になるものと考えられる。北側の滝



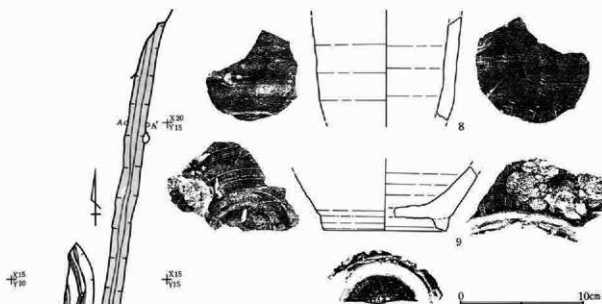
1. 黒褐色土(10YR3/1) As-Bを多量に含む。
2. 褐灰色土(10YR6/1) 粒径の細かな砂層。
3. 黒褐色土(5 YR3/1) As-Bと茶色の粒子を多量に含み、粘性・しまり共に弱い。
4. 褐灰色土(7.5YR4/1) 黒褐色土小ブロックと黄褐色土小ブロックの混土层で、黄褐色土粒を少量含む。
5. 黒褐色土(2.5Y3/1) As-Bを部分的に多く含む粘質土。
6. 黒色土(2.5Y2/1) 粘質土で良くしまった層。
7. 黄灰色土(2.5Y5/1) As-Bと灰黄色粘質土の混土层。
8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 粘性の弱い砂質土層。
9. 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘性の弱い砂質土層で、8層とは色調がわずかに違っている。
10. ぶい黄褐色土(10YR4/2) As-Bと灰白色粘質土、及び酸化鉄で構成された層。
11. オリーブ褐色土(2.5Y4/3) As-B主体で、灰白色粘質土を層状に、また、灰赤色の灰をブロック状に含む。
12. 灰赤色土(7.5R4/2) As-Bの灰赤色灰層。
13. 黒色土(2.5Y2/1) As-B。粒径が1'以下の細粒で、全体的に色調が黒い。
14. 黒褐色土(2.5Y3/2) As-B。粒径1~2'で、部分的に15層で主体となる青灰色を呈する灰をブロック状に含む。
15. 灰色土(7.5Y4/1) As-B。(As-B)主体となる粒子は13層と同様で、青灰色の灰を層状に含む。(15層直下に酸化鉄が層状に凝縮されている。)
16. 褐灰色土(10YR5/1) 白色細粒と炭化物粒をわずかに含む粘質土層。
17. 黄灰色土(2.5Y4/1) 砂質土層。
18. 褐灰色土(10YR6/1) 16層と比較してやや粒径が細く、酸化鉄を多量に含む。
19. 褐灰色土(10YR6/1) 16層よりも粒径がさらに粗い層。



第28図 1号溝状遺構セクション



第29図 1号溝状遺構出土遺物(1)



第31図 1号溝状遺構出土遺物(2)

川遺跡側崖面には、当溝状遺構の断面がはっきりと現れているが、対岸にはその痕跡が認められないことから、検出した部分の走向方向に延びることはない。したがって、現滝川との交差部分から走向を現滝川の流路方向に変わっているものと考えられる。しかし、調査区西側で検出されているように、現滝川の前身となる流れが古くからあったことは確かなので、検出部分のすぐ北の回りから当溝状遺構が取水していた

から、降下堆積しているものと考えられる。この軽石の下層は3～4層に分層が可能であるが、砂質土が主体であり通水されていたことは確実である。

以上の状況から当溝状遺構は、用水溝として機能していた可能性が高く、As-Bの堆積後改修された痕跡がないことから放棄されて現在に至ったものであろう。

出土した遺物は6・7を除いてAs-B下から出土したものである。

2号溝状遺構

2号溝状遺構は本遺跡に於いて特徴的な遺構の一つで、調査区西半の沖積地部分を概ね南北に縦断するように遺存していた大型の溝である。遺構は後述する排水遺構や7号溝状遺構などと併せて考えられるべきもので、排水遺構の存在、規模或いは形状の状況から、調査区から400m南の平成5年度の調査区を縦断し、現在も使用される用水路に接続していたものと考えられ、天狗岩用水に関連する遺構ではなかったかと考えられるのである。尚、覆土中より灯明皿等の陶器や軟質陶器鉢等の破片が出土している。

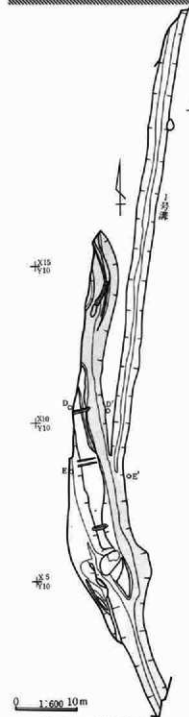
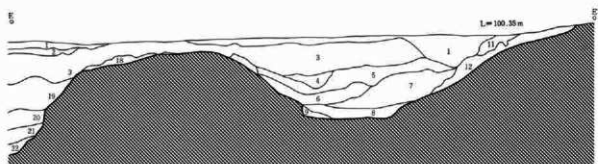
遺構は長さ80.8m程を調査したが、溝幅は上幅3.2～4.1m程、底幅1～1.9m程、深さ1.3～1.4m程を測る。箱型断面の断面形態をなすが、底面の高さ

0 1:900 10m

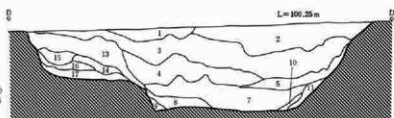
第30図 1号溝状遺構

可能性もある。

当溝状遺構の充填土の特徴はAs-Bの純堆積層が厚く堆積していることである。As-Bの堆積状態には部分によって若干の違いはあるものの、最大で26cmの堆積があり軽石と灰が互層になっていること



第32図 2号溝状遺構

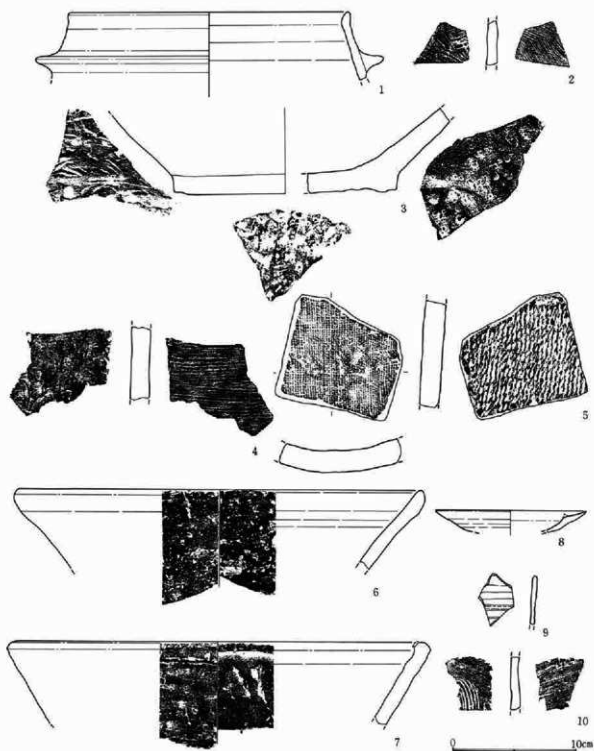


1. におい黄褐色土(10YR4/3) 粘性のほとんどない砂質土。
2. 暗褐色土(10YR3/4) 1層同様の砂質土層であるが、1層よりも粘性が高い。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土層。粘性は弱く、塊状にうすい褐色の酸化鉄を含む。
4. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 砂質土層。粘性は弱く、赤褐色の酸化鉄と粘質土小ブロックを含む。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土層。粘性は4層よりもやや強く、褐色の酸化鉄を小ブロック状に含む。
6. 黄灰色土(2.5Y5/1) 砂質土と粘質土が薄い層状に交互に重なっている。
7. 灰色土(5Y5/1) 6層に類似しているが、全体に色調が暗い。
8. 黄灰色土(2.5Y5/1) 6・7層に類似しているが、粘性がやや強く、上層と比較すると粘質土の割合が多い。
9. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘質土層。全体の粘性は強く、部分的に砂質土と黒褐色土ブロックを含む。
10. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘質土層。9層に類似しているが、黒褐色土ブロックを含まない。
11. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性共に強い層で、酸化鉄をブロック状に含む。
12. 褐色土(10YR4/6) 粒径1～5'の黄褐色土粒と灰褐色土粒を含み、砂質土に比較して、粘性・しまりに強い。
13. 暗褐色土(10YR3/4) 3層に類似しているが、砂質土の粒径がやや粗い。
14. におい黄褐色土(10YR4/3) 砂質土層。褐色土小ブロックを混入する。
15. におい黄褐色土(10YR4/3) 砂質土層。14層に類似しているが、褐色土小ブロックを含まない。
16. 暗褐色土(10YR3/4) 砂質土層。粘性がやや強く、黄褐色土小ブロックを少量含む。
17. 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土層。褐色の酸化鉄と粒径50'程度の浅黄褐色土をブロック状に含む。
18. 暗褐色土(10YR3/4) 砂質土層。3層と比較して粘性は強く、黒褐色土ブロックを含む。
19. 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土層。10～15'粒径の灰白色土ブロックを混入する。
20. におい黄褐色土(10YR4/3) 黄灰色土と砂質土との混土層。10～50'粒径の灰白色土ブロックを混入する。
21. 暗褐色土(10YR3/3) 20層に類似するが、灰白色土ブロックを含まない。
22. 黄灰色土(2.5Y4/1) 砂質土層。赤褐色の酸化鉄をブロック状に含む。

第33図 2号溝状遺構セクション

0 1:60 2m

は標高98.7m～98.8mで高低差はあまり無い。遺構は調査区の南端から入って北々西に17m程進み、7号溝と分岐する地点で流路を東へ2.6m程振って約40m北々西に流れ、調査区の西壁に達したところで東、次に西に蛇行し、調査区中央やや北寄りて調査

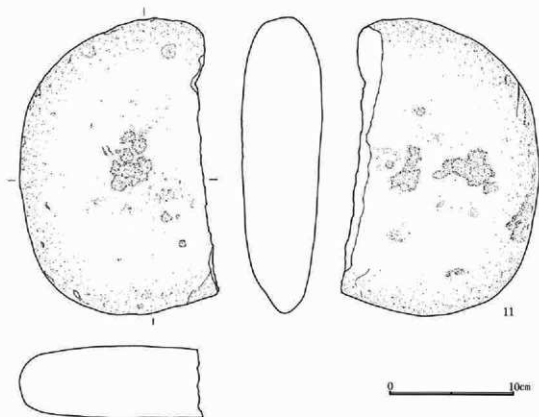


第34図 2号溝状遺構出土遺物(1)

区の西側に出ている。北端の蛇行部分には、或いは排水遺構のようなものも存在していた可能性も考えられる。

覆土は中・上部は砂質土で覆われ、下部は砂質土と粘質土が薄く重なり合っているといった堆積状況

を示している。前者については河川のオーバーフローに伴う、例えば洪水等による一過性の土壌堆積といった状況が想起される。また、後者の堆積状況は流水に伴う、在る種日常的な土壌の堆積状況によるものではないかと思われる。



第35図 2号溝状遺構出土遺物(2)

3号溝状遺構

2号遺状遺構が来る本遺構は、その南に位置する小型の溝で、北端付近の覆土は1号溝状遺構の第3層土に近似している。1号・4号溝状遺構との関係から古代以降の所産である可能性が考えられる。

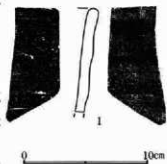
本遺構は幅39cm、深さ29cmを測り、断面形態は凡そ半円形を呈している。全体で17m程の長さを調査したが、プランは2号道路状遺構東部より南に走り、大きく弧を描き乍ら走行を西に変じて北側より入る4号溝状遺構と合流し、1号溝状遺構に落ちるものである。

4号溝状遺構

4号溝状遺構は3号溝状遺構の西側に近接し、南部においては3号溝状遺構と走行を共有する。3号溝状遺構に比し本遺構の方が深いが、新旧関係を特定することはできなかった。また、2号遺状遺構との新旧関係も確認できなかった。高、時期の特定は難しいが、覆土中より陶器片が出土しており、本遺構が中世遺構の所産である可能性が考えられる。

本遺構は調査区外

北部東壁より入り、概ね南々東に走行をもつて15m程走り、3号溝状遺構と合流する。合流地点で走行を西に変じ、4.5m程走って1号溝に落ち込むというプラン



第36図 4号溝状遺構出土遺物

を持つ。断面形態は葉研に近いが、底面は丸底を呈する。上幅は34cm程を測り、深さは24cm程である。覆土の一部には軽石(As-Bか)を含んでいる。

5号溝状遺構

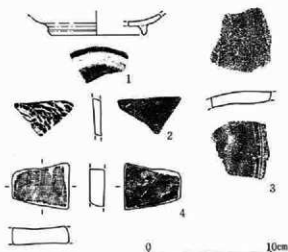
5号溝状遺構は調査区中部北寄りに所在し、遺存状況はかなり悪い。粘質土を覆土とする。3・4号溝状遺構との新旧関係は特定できなかった。

本遺構は2号遺状遺構の東端付近から南に入り、1m程で走行を西に変じて12m程で1号溝状遺構に達する。溝幅は28cm程を測り、深さ9cm以下と浅い。

6号溝状遺構 (付図2)

本遺構は調査区南西部に所在する。東は地山を隔てて2号溝状遺構に近接し、西は調査区外で直ぐに滝川の川岸に出る。南北37.2m東西6.8mの範囲で調査したが、壁面には溝状の落ち込みが数条見えるなど全体として不整形であるため、滝川の旧河道であろうと判断した。

須臾器・瓦片等が出土するが、寧ろ2号・7号溝状遺構と排水遺構との関連から当該期の遺構ではないかと判断されるのである。



第37図 6号溝状遺構出土遺物

7号溝状遺構 (付図2)

本遺構は調査区外南部に位置し、2号溝状遺構と6号溝状遺構(旧河道)とをつないでいる。排水遺構の西縁部を通り、その新しい段階の遺構の一部を構成していると判断される。2号・6号溝状遺構との接続点の高低差は30cm程あり、本遺構は南の2号溝状遺構から北の6号溝状遺構に放水するための水路でなかったかと考えられる。

本遺構の長さは12.7mで、溝幅は1.07~2.97m、深さ20~87cmを測る。断面形態は箱堀に近い。

8号溝状遺構

本遺構は排水施設の北、2号溝状遺構と6号溝状遺構(旧河道)の間の鞍状の地山に、東西方向に掘り込まれている堀切状遺構である。この地山層の上には2号溝状遺構に切られる砂質土層が乗るが、掘削段階でこれを除去していたため、どのレベルから

掘り込んだものかは特定できなかった。また遺構の延長は2号溝状遺構の東壁には達していないので、東側は2号溝状遺構の範囲内で立ち上がるものと思われる。尚、本遺構は位置や形状から9号・10号溝状遺構と対をなす可能性を持っている。

本遺構の残存長さは2.5m、幅45cm、残存深さ45cmであり、箱堀状の形態を呈する。底面は概ね平らで5cm程西に傾いている。

9号溝状遺構

本遺構は対になると考えられる平行する8号溝状遺構の北10.5m、10号溝状遺構の南8.1mに位置する。8号溝状遺構と同様、地山に堀切状に掘り込まれており、東は2号溝状遺構の中で止まっている。覆土等からも時期は特定できなかった。

本遺構の残存長さは

3m、幅0.7m、残存深さ24cmであり、8号溝状遺構

と同様の断面形態を示し、

掘り過ぎがあったため詳細

は不明だが底面も西側に

数cm低くなるようである。



第38図

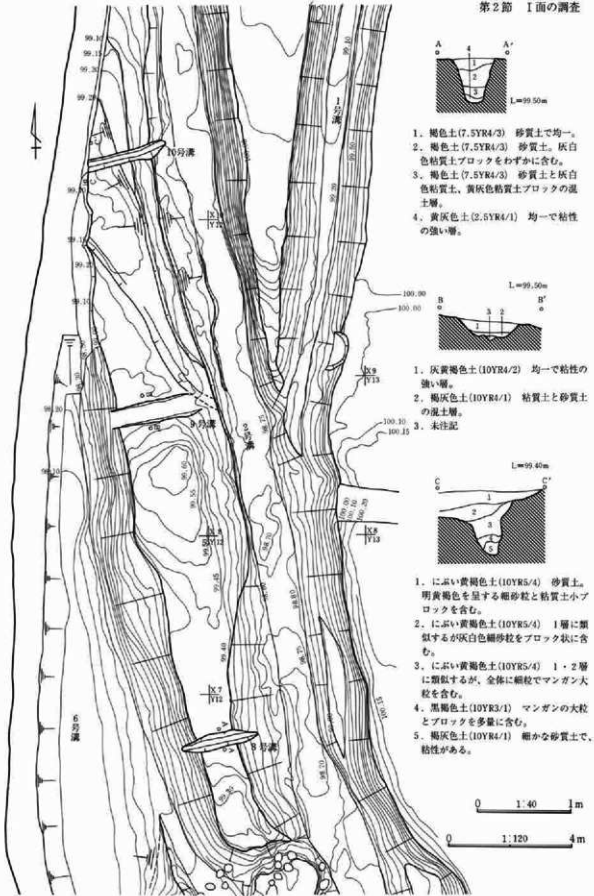
9号溝状遺構出土遺物

10号溝状遺構

本遺構は対になると考えられる8・9・10号溝状遺構群の最も北側に位置し、8・9号溝状遺構と同様に地山を東西に切る堀切状の掘り方を持つ。遺構の西側は調査区外に出るが、東はやはり2号溝状遺構の中で立ち上がると判断される。時期などは特定できなかったが、西壁セクションの観察所見によると本遺構の上面は旧河道(6号溝状遺構)に削られていた可能性が考慮される。東側が2号溝状遺構の中で立ち上がることを併せると、2号溝状遺構の廃絶後、比較的早い段階で掘削されたものと思われる。8号・9号溝状遺構と併せて、比較的規則性を以て掘削されているため、耕作または滝川の護岸に拘わる遺構と想定される。

確認出来たのは約2.7mの範囲であり、溝幅は31~48cm、深さ50cm程を測る。葉研堀状の形態を持ち底面は東西で5cmの比高差を示して西に下がる。

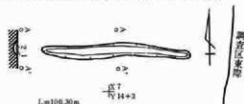
第2節 I面の調査



第39図 8・9・10号溝状遺構

12号溝状遺構

本遺構は、I面の南半、東壁に近接して発見され、方向性は、N90°Wで、東・西にある。溝の規模は、長さ2.4m、幅0.23mを測り、横断面形はU字状を呈する。時期は、溝を埋めている土壌が、標準土層IV層に類似のため、古代であろうか。



1. 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土と黒褐色土の粒子を含む。IV層に類似する層。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粒径3-5 μ の褐色粒を含む。

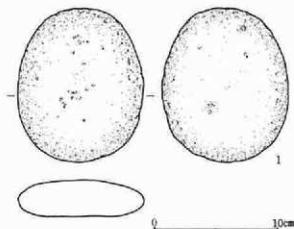


第40図 12号溝状遺構

18号溝状遺構

本遺構は調査区外の北部に位置し、1号井戸の北側から1号井戸、2号サク状遺構部分を通り乍ら調査区の東へ出ている溝状遺構である。断面観察によると本遺構の覆土はAs-Cを多く含み、本遺構の上にHr-FAが乗っていることから、本遺構は2号サク状遺構・1号井戸より古いものである。

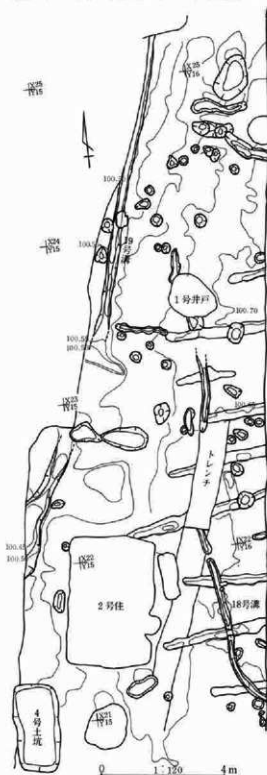
18号溝状遺構は南北方向を基本とする走行を呈し、南端近くで弧を描いて東よりに走行を変じており、全体で約14.5mに亘って調査を行った。溝幅は29cm、深さ14cmを測り、底面は丸底を呈する。



第41図 18号溝状遺構出土遺物

19号溝状遺構

本遺構は、調査区の北部に位置し、1号溝状遺構に並行し、末端は、1号溝状遺構と交わる。19号溝状遺構のある一角は、調査地中では、微地形上の高



第42図 18・19号溝状遺構

位を縦走しており、溝設置に意図的な計画性を感じる。方向はN16°Eを、規模は、長さ17.76+ α m、最大幅0.72mを測るが、上方は、現滝川の河川部分に削られ、下方は、1号溝と重なる。

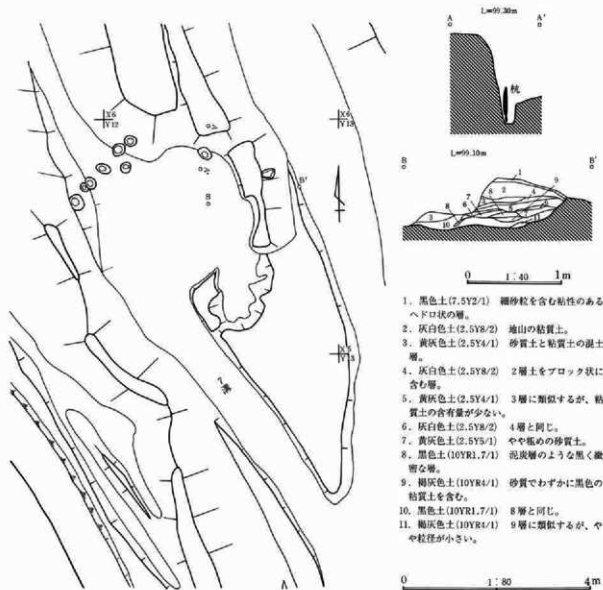
なお、東方には、本溝状遺構より小規模ながら、18号溝が、南北走してある。

7. 排水遺構

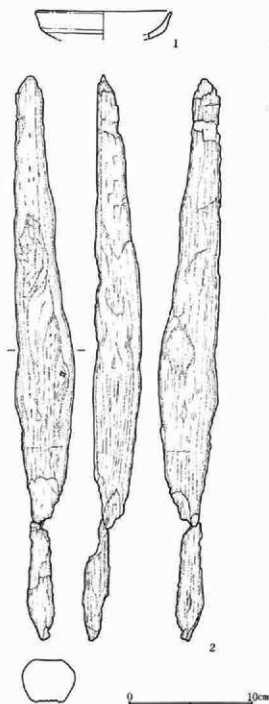
本遺構は調査外南部の2号溝状遺構と6号溝状遺構(旧河道)の間、2つの溝をつなぐ7号溝状遺構の中程に接してその東に位置する。本遺構は大きくは2つの時期に分けられ、遺構を構成する盛土状の

遺構と、少なくとも4本の杭列が発見されている。平成5年度の調査区、農業用水路と滝川の合流点から126m南の滝川と用水路が狭まった地点にあった、オーバーフローした水を滝川に流すための施設と考えられる。滝川の用水側に張り出した部分に用水に平行に3本の杭を打ち横木を渡して壁を造った構造物との類似点から本遺構を排水遺構とした。

43図に示した本遺構の上位、即ち新しい段階の遺構は2号及び6号溝状遺構を面する鞍状の土地を削り出して造られた、7号溝を西縁とする南北4.6m、東西4.4mの方形を基調としたプランを持つ区画で



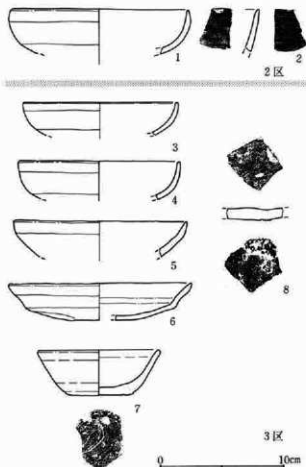
第43図 排水遺構(1)



第45図 排水遺構出土遺物

あったものと判断される。これらの杭列は2号及び6号溝状遺構を画する鞍状の地山部分が低くなった区域に在り、2号溝状遺構の流路が東にずれる部分に当たって杭列の方向はこれに合致する。杭列のある部分は付近に比べ低くなっていることから、古い段階の遺構は水流を制御するか、オーバーフローする水量を調節する目的があったものと考えられる。

8. I面遺構外



第46図 I面遺構外出土遺物

I面の調査では、遺構外とした遺物の出土は極めて少なかった。実測可能な遺物は第46図に示した8点だけである。出土地点は違いが1・3・4の土師器杯は、丸底で口縁部がわずかに内湾する器形であり、口縁部横撫でと底部寛削りの間に調整の不明瞭な部分が認められることなどから8世紀代前半の所産であろう。6の口縁部が外反する皿状の杯は、7世紀末から8世紀前半の短い時期に特徴的なものであり、口径の大きさから前記の土師器杯と同じ時期に属すると思われる。5の土師器杯は、平底で体部が直線的な器形であり、先の土師器杯よりは後出の要素である。7の須恵器杯は口径も小さく、作りの粗雑さから10世紀代でも後半以降のものであろう。

以上のように遺構外として捉えた遺物の時期は、ほぼ当遺跡で検出された遺構の時期とオーバーラップしている。

第3節 II面の調査

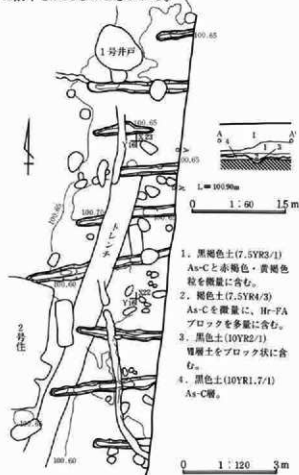
1. サク状遺構

2号サク状遺構

当サク状遺構は、X21-23-Y14・15グリッド内に位置している。確認はⅣ層土上面で行った結果、9条のサク条遺構を検出した。

サク状遺構の規模は、一条の幅が0.2m~0.5m、残存深度が10cm、サク状遺構間の幅が1.0m~2.0mである。走向方向は一定していないが、最も長く検出された部分で計測するとW-11°20'-Sである。

充填土は、調査区際土層断面観察によればブロック状のHr-FAが主体であった。このテフラは周辺で面的な堆積をしているが、この面が耕作されたとは考えにくい。したがって当遺構はHr-FA堆積以前の遺構であり、畝であったとするとウネ部分は削平されたものと思われる。



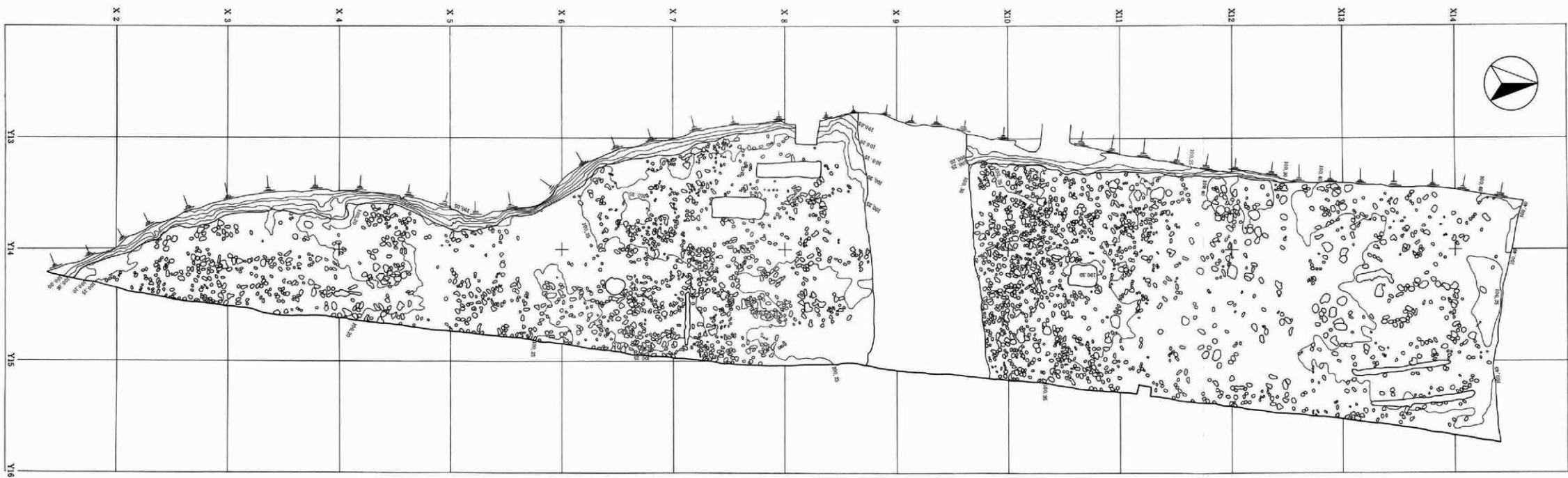
第47図 2号サク状遺構

2. 水田跡

当遺構は、X11-14-Y12-15グリッドの広範囲にわたって検出した。この範囲はちょうど1・2号溝状遺構で区切られた調査区内台地部分の南側半分に当たる。実際には調査区北側部分にもHr-FAの堆積は観察されていることから、遺構が連続していることは確実ではある。しかし、北側部分には奈良時代以降の住居跡や中世以降の井戸跡などの遺構の他、攪乱も多く面の残存が極めて稀薄であったために、ここでは状態の良い南側部分を主体的に扱っていくことにしたい。ここで水田跡として扱ったのは、Hr-FA (Ⅳ層土) 下の面である。Hr-FAはⅣ層土下にはほぼ全面にわたって5cm程度の厚さで堆積していたが、この上面はほぼ水平の堆積であり、人の手加わったような変化は認められなかった。したがって遺構の調査は、このHr-FAを除去することに終始し、Ⅵ層土(As-Cを含む)上面を露呈させ、この面を遺構面として捉えた。

検出した面の北側部分のX11・12-Y13・14グリッド辺りにわずかな窪地が認められる他は、ほぼ全体に平坦面であり、この平坦面に多数の小穴が検出された。小穴の規模は、径10-14cm、深さ1-5cmと一定していない。小穴内にはHr-FAが充填しており、Hr-FA堆積以前の段階にすでに検出した状況を示していたことがわかった。小穴の分布には特に一定の傾向を捉えられるような状況にはなかったが、2点ほど注目したことがある。第1点は、先述の窪地には周辺と比較して明らかに小穴が少なかったことであり、第2点は北側部分で小穴が直線的に連続する場所が数か所見られたことである。これらの小穴がどのような過程で形成されたものか判然としませんが、耕作物の引き抜き痕または耕作痕、いくつかの可能性が考えられる。

以上のようにHr-FA下の面(またはAs-C上面)を水田跡として捉えたものの、水田区画が検出されたわけではなく積極的根拠にかけている。しかし、プラント・オパール分析からは、この面で稲の栽培があった可能性は高いとの結果を得ている。



第48図 II 面水田跡 (Hr-FA 下)

第4節 Ⅲ面の調査

1. 水田跡 (附図3)

当水田跡は、Ⅱ面 (Hr-FA 下) の水田跡より下面の As-C を多量に含む層 (Ⅵ層土) を除去することによって確認したもので、Ⅶ層土中に畦の痕跡を残していた。水田の区画が検出されたのは X 2~7-Y 13~14 グリッドの範囲であり、検出した区画は全部で 18 区画で、形状・規模等のわかるものは半数の 9 区画である。区画の形状は、長方形・台形・不定形と 3 種に便宜的に分類したが、基本的には南北に長い長方形 (4 の区画は東西に長い) である。

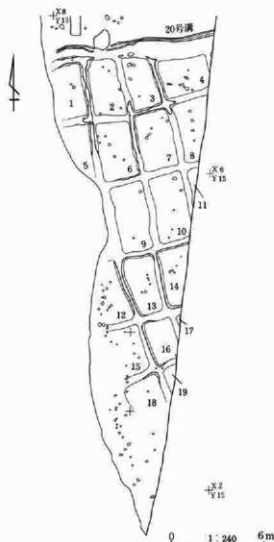
ほぼ全容を捉えられる区画の規模は、長辺が 2.70m~4.32m、短辺が 1.86m~2.46m、面積は 5.44m²~8.50m²で、平均、6.92m²である。

長辺の方位は、1~3・5~11の区画が N-11°30'-W、4 が N-13°-W、12~19 が N-21°-W で、北半の一群と南半とは若干の違いがある。

区画を構成する畦畔は、图中的等高線を見てわかるように残存状態がきわめて悪く、最も残りの良い場所でも水田耕作面との比高差は 40cm 程度である。調査の時点では斜方向からの観察によってかろうじて区画位置が判断できるような状態であり、水口は一カ所も捉えることはできなかった。畦の幅は 40~50cm 程度であり、20号溝状遺構と水田区画との間の畦は 1.3m と広く、大畦である可能性が高い。

水田の広がりには東側に延びていくのは区画の検出状況から確実である。また、西側は、1・5等の区画が 2号溝状遺構に削り取られたような状況が認められることから、本来は広がっていたと考えられる。しかし、1~4の区画以北については、水田区画はまったく検出できず、20号溝状遺構と並行するように検出した大畦を境南北に大きな違いがある。

水田面として捉えた土層のプラント・オパール分析によれば、Ⅶ層土中の残留量はきわめて少なく稲作の可能性が低いとの結果がでた。これに反して上層 (Ⅵ層土) の残留量はきわめて多いことからⅦ層土を耕作土とする水田の可能性も考えられる。



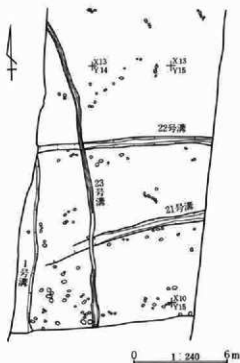
第49図 Ⅲ面水田跡畦畔部分

水田計測表

No.	区画		平面形	面積 (m ²)
	長辺 (m)	短辺 (m)		
1	3.30	—	不定形	—
2	3.72	2.04	台形	6.264
3	3.48	1.86	台形	5.436
4	3.12	2.46	台形	(6.352)
5	—	—	—	—
6	3.66	2.22	長方形	7.632
7	3.72	2.16	長方形	7.812
8	3.84	—	不定形	—
9	4.32	2.16	長方形	8.496
10	(4.20)	(2.22)	長方形	(9.144)
11	—	—	—	—
12	—	—	—	—
13	3.72	2.22	長方形	6.228
14	3.54	—	不定形	—
15	2.70	—	不定形	—
16	2.82	(2.28)	不定形	—
17	(2.28)	—	不定形	(7.25)
18	—	—	—	—

2. 溝状遺構

Ⅲ面（As-C下）の調査で検出した溝状遺構は20～23号までの4条である。As-Cは後世の遺構が比較的密に検出された調査区北側の部分を除いてはほぼ全域に残存していたが、溝状遺構の検出されたのは、調査区中央の限られた場所である。



第50図 21・22・23号溝状遺構

20号溝状遺構

当溝状遺構は、X7-Y13・14グリッド内に位置している。当遺構は大畦と考えられる高まりの北側に沿うように検出されており、これを境として南側に水田区画が展開し、北側には区画がまったく認められていない。Ⅵ層土を除去した段階で確認されており、遺構全体がAs-C層に覆われていたことになる。検出した規模は長さ10.5m、幅0.3m、深さ3cmであり、走向方位はE-9°-Nである。検出の状況からⅢ面の水田に係わる溝であろう。

21号溝状遺構

当溝状遺構は、X10-11-Y13～15グリッド内に位置している。当遺構は、全体にAs-C層（Ⅵ層土）によって覆われて確認された。遺構はⅦ層土を溝状に掘り込んだものではなく、踏み固められたような

状況があり、道の可能性が高い。検出した規模は、長さ8.8m、幅5.4m、深さ12cmほどで、走向方位はE-15°-Nである。

22号溝状遺構

当溝状遺構は、X11・12-Y13～15グリッド内に位置している。遺構の確認は、Ⅵ層土を除去することで行ったものであり、Ⅶ層土中の遺構検出状況は21号溝状遺構と類似している。遺構の上端は不明瞭で、溝として掘り込まれたとは考えにくい。検出した規模は、長さ11.2m、幅0.5m、深さ3cmであり、走向方位はE-10°20'-Nと20号溝状遺構と並行するような関係にある。

23号溝状遺構

当溝状遺構は、X9-13-Y13・14グリッド内に位置しており、21・22号溝状遺構とは直行する関係にある。遺構の確認はⅥ層土を除去して行ったものであり、21・22号溝状遺構と共通しており、時期的にもごく近い関係にあるものと思われる。遺構の検出状況から、21・22号溝状遺構と同様に、Ⅶ層土中に掘り込まれたというよりは踏み固められたものと判断した。検出された規模は、長さ19.0m、幅0.2m、深さ3cmであり、走向方位は湾曲しているために捉えにくい、ほぼN-9°-Wである。

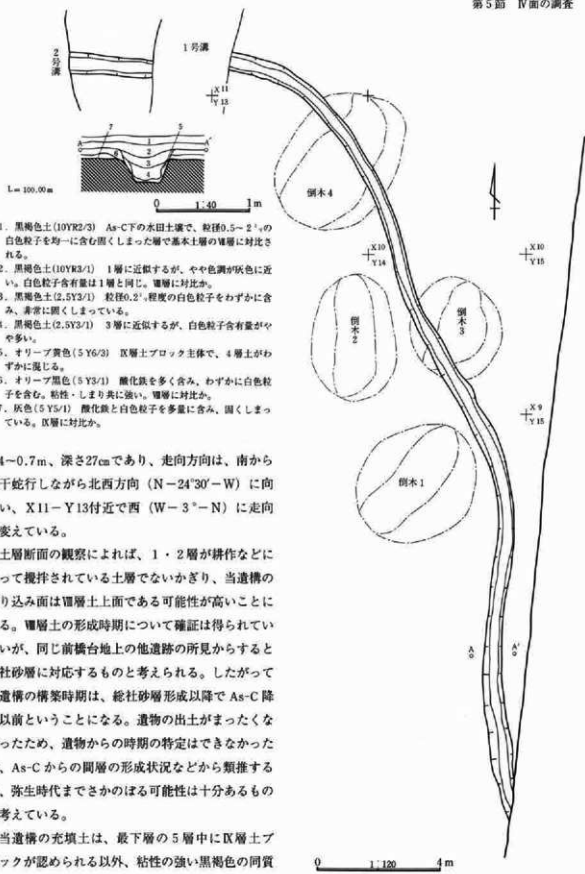
第5節 IV面の調査

1. 溝状遺構

24号溝状遺構

当溝状遺構は、X5-11-Y11～14グリッド内に位置している。Ⅲ面（As-C下）水田面の調査後、掘り込み遺構が稀薄で下面の残存状態の良い調査区南側を対象として、下層中の遺構確認を実施した。面的な掘り下げを実施した結果、基本土層のⅦ層土に対比される部分が上下2層に分層できることが判明したが、これらの層中においては何等遺構の存在は認められなかった。引き続き掘り下げを行いⅦ層土上面の段階で後述する倒木痕と共に当溝状遺構のプランが検出された。

検出した遺構の規模は、長さ直線で27.6m、幅



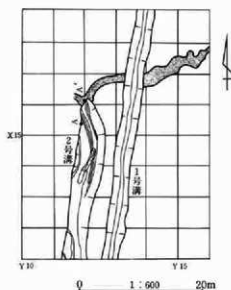
第51図 24号溝状遺構・倒木痕

2. 倒木痕

ここで倒木痕としたのは、X 8～10-Y 13・14グリッド内から隣接して検出された4カ所の楕円形プランの逆転層である。

倒木痕を確認した面は、24号溝状遺構同様にⅧ層土上面であり、掲載した平面図（第51図）に線で表示してあるように、楕円形プランの内側に三日月形の黒褐色土部分があるために明瞭に判断することができた。倒木3・4は24号溝状遺構と重複しており、検出状況から溝状遺構が新しいことは明らかであるが、このことによって倒木痕の形成された時期を特定することはできない。断面観察などの調査所見から、倒木1が南東、倒木2が西、倒木3が北西、倒木4が南東方向に倒れた可能性が高い。

3. 自然流路

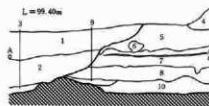


第52図 自然流路

自然流路として扱ったものは、2号溝状遺構の調査において壁面で観察された部分を拡張調査することによって検出したものであり、X15～17-Y11～15グリッド内に位置している。

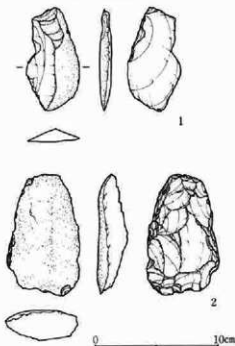
検出した長さは20mほどであり、幅も一定せず弱く蛇行している。走向方向は北西方向から南西方向に向かい、2号溝状遺構との接点で方向を北西方向に変えているようである。

充填土中位には総社軽石が薄く堆積しており、縄文時代前期頃にはすくなくとも流れがあったものと思われる。実測可能な出土遺物は2点の石器だけであるが、細片の土器片の出土もあり、先の軽石との矛盾はない。



1. 黒灰色土(7.5YR4/1) 砂質土。斑状に酸化鉄が凝縮する。
2. 黒灰色土(7.5YR4/1) 1層に類似するが、色調が明るい。
3. 黒灰色土(7.5YR4/1) 1・2層と比較して粒径が粗い。
4. 黒褐色土(2.5Y3/1) 白色細粒を上層に多く含み、粘性が強く固くしまっている。
5. 灰黄褐色土(10YR5/1) 細砂粒を含むが、全体に粘性がある。酸化鉄が斑状に凝縮している。
6. 黒褐色土(10YR3/1) 7層土のブロック。
7. 黒色土(10YR2/1) 粘性の強い非常に固くしまった層で、中層にAs-Faが層状に入る。
8. 灰色土(5Y5/1) 灰色粘質土小ブロックと白色粒を多量に含み、固くしまっている。
9. 灰色土(5Y4/1) 8層中に含まれている粘質土を主体とした層。
10. 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘質土と灰色-白色粒で構成された層。非常に固くしまっている。

第53図 自然流路セクション



第54図 自然流路出土遺物

第6節 その他

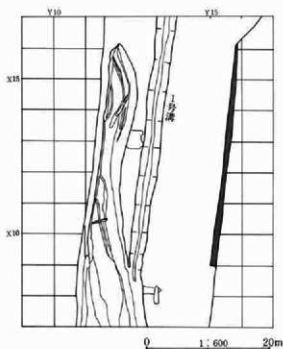
1. As-B 下耕作面

第1章第2節で既述したように、我々は経験上、小さく、寧ろ As-B に近似していたため As-B と誤認してしまっていた。鑑定所見によって純堆積に近い As-B 層（標準第Ⅲ層、第2章第2節参照）の遺存を知ったのであるが、既に確認可能区域のほとんどを Hr-FA 上面までは掘削してしまっていたため、調査できたのは耕作地との関係で多少掘り残しのあった調査区中部の東壁際の南北36.6cm、東西は北で9cm、南で41cmを測る細長い範囲のみであった。

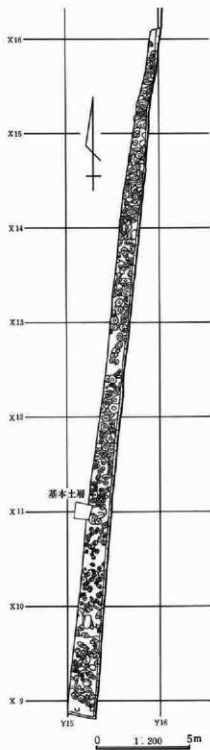
第Ⅲ層下面には、多くが径20~25cm、深さ5~6cm以下の小さく浅いピットが全体に密集して分布していた。しかし、その分布状況は南部がやや薄い傾向にあり、また調査範囲の中位には70cm程の幅で多少の空白があって南北両側の分布状況との比較からこの部分には通路の存在が想定されるのである。

第Ⅲ層については As-B 降下後の耕作による攪拌という考え方があり、一方でその下面に水田面を想定したが凹凸が激しいため水田面の可能性は無いも

のと判断され、第5章（45~51頁）に報告されるように第Ⅲ層そのものからのプラント・オバールの検出も無かった。面の状態からは寧ろ島と考えられる。尚、下位層の第Ⅳ層士からイネを中心にヨシやタケ亜科等のプラント・オバールが報告されている。



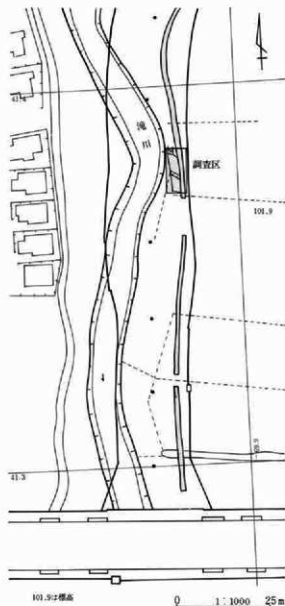
第55図 As-BP 下耕作面調査位置



第56図 As-BP 下耕作面

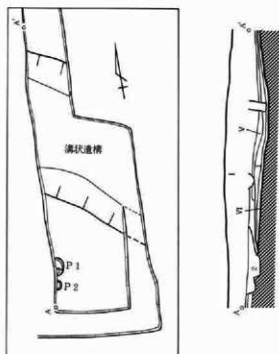
2. 試掘調査

一級河川滝川河川改修工事に伴う試掘調査は、平成3年10月以降数度にわたって群馬県教育委員会事務局文化財保護課によって実施された。試掘調査は掘削機械を使用して河川改修場所に南北に縦断するようなトレンチを設定し、底面及び断面の観察から遺構の有無を判断している。滝川の河川改修により掘削される範囲は、バイパス的な放線設定がされた部分は比較的広いが、大半の部分は現河川を拡幅する計画であるため台地を切り込む範囲は狭かった。このためにトレンチは河川左岸に1本設定することに



第57図 南部滝川橋以北試掘調査位置

どまっている。こうした試掘調査の結果、箱田橋より下流域が一次調査対象区域として範囲設定がなされた。その調査内容についてはこれまで詳述してきたとおりである。ここでは、箱田橋より上流部の試掘調査を実施した段階で検出され、この試掘調査部分を拡幅して記録保存を実施した遺構について簡単に報告しておきたい。検出した遺構は、溝状遺構1条とピット2基である。溝状遺構は幅4.2m、残存深度30cm、検出した長さ3.3mと断片的であるため、溝であるとの確証が得られたわけではない。土層断面で見ると、溝状遺構の掘り方は曖昧であり、V・VI層土の堆積が認められることから時期が古墳時代まで遡ることだけは確実である。ピットは上述の溝状遺構のすぐ南側に2基並んで検出されたものでP1が径60cm、残存深度24cmであり、P2が径30cm、残存深度10cmである。先の溝状遺構より新しい時期のものであることは確実であるが、時期の特定はできていない。



1. 黒色土 粘質土。
2. 暗褐色土 粒径 10^3 程度の炭化物粒を少量含む。

0 1:120 4m

第58図 試掘調査時検出遺構

第5章 自然科学分析

箱田古市前遺跡のプラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

箱田古市前遺跡では、発掘調査において様名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA) 直下層と浅間C軽石 (As-C) 直下層から畦畔状遺構が検出され、それぞれ当時の水田跡と見られていた。また、Hr-FA 直下層の一部と浅間Bテフラ (As-B) 直下からは畝状 (サク状) 遺構が検出されていた。

この章では、プラント・オパール分析を用いて、これらの遺構における稲作跡の検証を試みた結果について報告する。

2. 試料

1992年11月17日に現地調査を行った。調査地点は、2区東壁、2区Ⅱ面、1区Ⅱ面の3地点である。各地点のHr-FA直下層および2区東壁のAs-C直下層からは畦畔状遺構が検出され、それぞれⅡ面、第2面水田遺構とされていた。また、2区Ⅱ面のAs-B直下層およびHr-FA直下層の一部では畝状遺構が検出されていた。各地点の土層の詳細については、4頁を参照されたい。試料は、容量50cm³の採土管およびポリ袋等を用いて、各層ごとに採取した。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法 (藤原1976)」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾 (105℃・24時間) 仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加 (直径約40 μ m、約0.02g)

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- (5) 沈底法による微粒子 (20 μ m以下) 除去、乾燥
- (6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレパラ

ト作成

(7) 検鏡・計数

同定は機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール (以下、プラント・オパールと略す) をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10⁻⁴g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94 (種実重は1.03)、6.31、0.48である (杉山・藤原1987)。

4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1および図59、図60に示す。なお、稲作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族 (ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族 (ヒエなどが含まれる) の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基

準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

(1) 2区東壁地点

As-B直下層、Hr-FA直下層、As-C直下層について分析を行った。その結果、これらの各層からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、As-B直下層(試料B51)ではプラント・オパール密度が7,800個/gと高い値である。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。第Ⅱ面水田遺構(畦畔状遺構)が検出されたHr-FA直下層(試料B52)では、密度が4,500個/gと比較的高い値である。また、同層は直上をHr-FA層で覆われていることから、上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性は考えにくい。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。なお、第Ⅲ面水田遺構(畦畔状遺構)が検出されたAs-C直下層(試料B53)では、密度が700個/gと低い値である。

(2) 2区Ⅱ面地点

As-B直下層、Hr-FA直下層、As-C直下層について分析を行った。その結果、これらの各層からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、畝状遺構が検出されたAs-B直下層(試料B56)では密度が14,000個/gと非常に高い値である。したがって同層で稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。第Ⅱ面水田遺構(畦畔状遺構)が検出されたHr-FA直下層(試料B57)では密度が6,800個/gと高い値である。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。As-C直下層(試料B58)では密度が1,400個/gと低い値であることから、同層で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層などからの混入の危険性も否定できない。

なお、本地点ではHr-FA直下層の一部で畝状(サク状)遺構が検出されていた。同遺構から採取された試料B54とB55について分析を行った結果、イネのプラント・オパールが3,100個/g、7,900個/gと高い密度で検出された。したがって、同遺構で稲作

が行われていた可能性は高いと考えられる。

(3) 1区Ⅱ面地点

Hr-FA直下層、As-C直下層について分析を行った。その結果、第Ⅱ面水田遺構(畦畔状遺構)が検出されたHr-FA直下層(試料B59)からイネのプラント・オパールが検出された。密度は7,900個/gと高い値である。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。As-C直下層(試料B60)からはイネのプラント・オパールが検出されなかった。

6. まとめ

以上のように、第Ⅱ面水田遺構(畦畔状遺構)や畝状遺構が検出されたHr-FA直下層では、分析を行ったすべての試料からイネのプラント・オパールが高い密度で検出され、これらの遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、As-B直下層でもイネのプラント・オパールが多量に検出されたことから、同層においても稲作が行われていた可能性が推定される。

なお、第Ⅲ面水田遺構(畦畔状遺構)が検出されたAs-C直下層では、イネのプラント・オパールは検出されたものの、密度は低い値である。プラント・オパール密度が低い原因としては、1)稲作が行われていた期間が短かったこと、2)土層の堆積速度が速かったこと、3)採取地点が畦畔など耕作地以外であったこと、4)稲の生産性が低かったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志(1987)川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山一古墳遺構編一。川口市遺跡調査会報告、10: 281-298。
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究11-数種イネ科栽培植物の胚体標準本と定量分析法一。考古学と自然科学、9: 15-29。
- 藤原宏志(1979)プラント・オパール分析法の基礎的研究31-福岡・板付遺跡(夜白土)水田および群馬・日高遺跡(晩生時代)水田におけるイネ(Osativa L.)生産総量の推定一。考古学と自然科学、12: 29-41。
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究51-プラント・オパール分析による水田址の探索一。考古学と自然科学、17: 73-85。

2区東壁

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/区	(穂総量) t/10a	ヨシ属 個/区	タケ亜科 個/区	ウシクサ族 個/区	キビ族 個/区
B51	38	16	1.06	7,800	13.51	700	10,100	0	0
B52	57	8	0.99	4,500	3.63	11,700	4,500	900	0
B53	65	15	1.19	700	1.24	9,600	10,400	700	0

2区II面

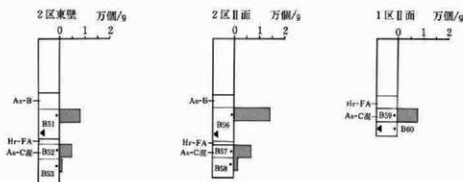
試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/区	(穂総量) t/10a	ヨシ属 個/区	タケ亜科 個/区	ウシクサ族 個/区	キビ族 個/区
B56	37	18	1.17	14,000	30.22	800	14,000	2,400	0
B57	57	7	1.00	6,800	4.83	1,700	6,800	800	0
B58	64	11	1.17	1,400	1.81	12,600	10,400	0	0

2区II面1号畝状遺構

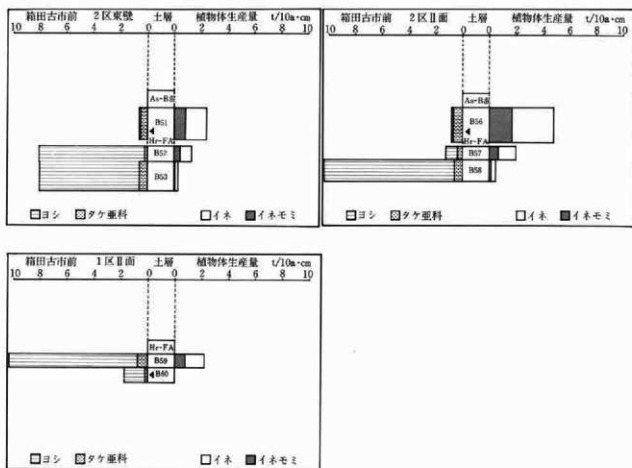
試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/区	(穂総量) t/10a	ヨシ属 個/区	タケ亜科 個/区	ウシクサ族 個/区	キビ族 個/区
B54	0	—	1.07	3,100	—	700	3,100	1,500	0
B55	0	—	0.98	7,900	—	7,100	7,100	700	0

1区II面

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/区	(穂総量) t/10a	ヨシ属 個/区	タケ亜科 個/区	ウシクサ族 個/区	キビ族 個/区
B59	38	7	0.94	7,900	5.34	15,600	17,100	0	0
B60	45	8	1.01	0	0.00	2,500	4,100	800	0

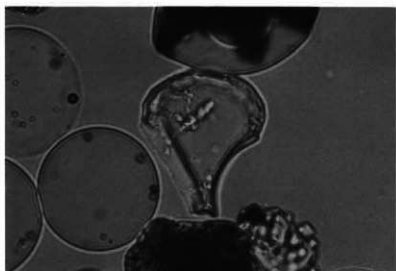


第59図 イネのプラント・オパールの検出状況

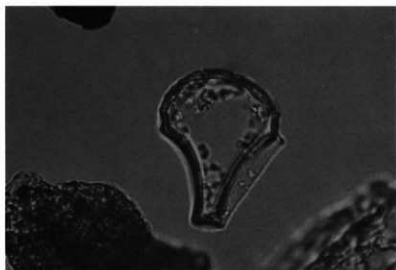


第60図 おもな植物の推定生産量と変遷

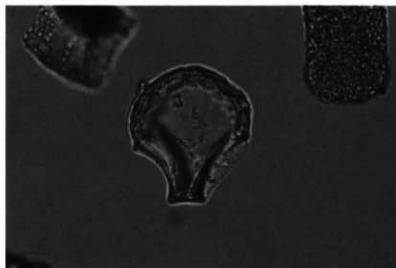
1. イネ
2区II面 B55

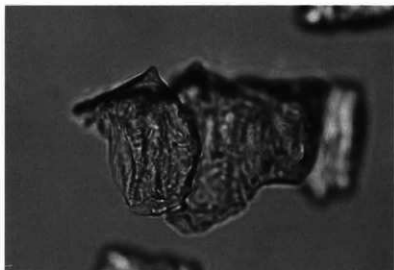


2. イネ
2区II面 B56

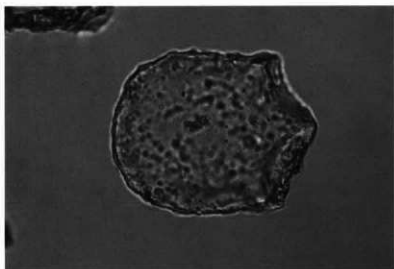


3. イネ
2区東壁 B51

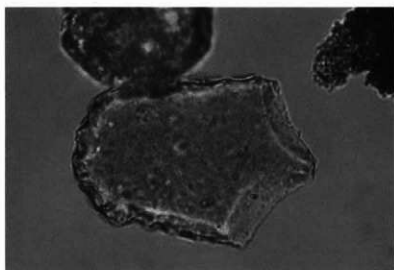




4. イネ輝石
2区東壁 B51

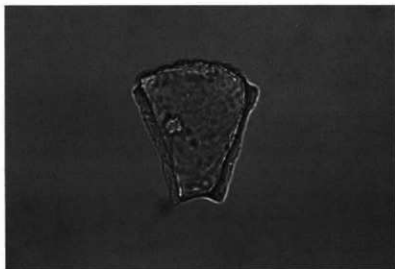


5. ヨシ属
2区Ⅱ面 B57

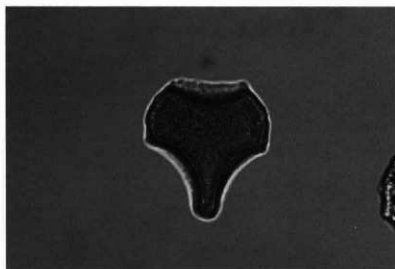


6. ヨシ属
2区Ⅱ面 B57

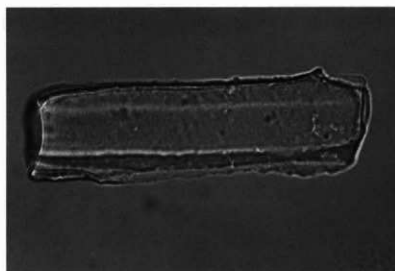
7. タケ亜科
2区II面 B55



8. シバ属
2区II面 B56



9. イネ科の基部起源
2区II面 B55



第6章 遺物観察

出土遺物について、土器類の多くは、スリー・スペース（電子実測装置）により図化し、その補足と破片の個体、石製遺物類を手実測として図化した。遺物トレースは、整理班によった。

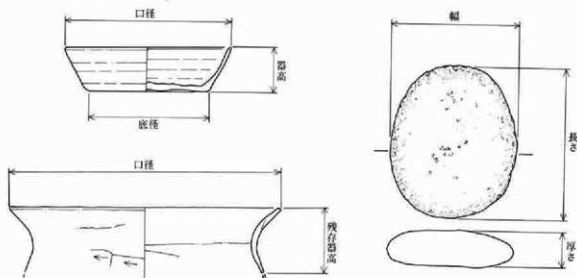
土器実測図の仕様は、次のとおりである。土器実測図は、四分割の方法をとり、右断面とした。外形線は、実線を用い、匱削りなど技法を示す線、形状の補助線などは細線を用いた。それらの内訳は、形状を示す線を細線で、その補足を1点鎖線状に、匱削り目を細線状に、轆轤目を破線状にして用いた。匱削りに関し、砂粒の移動を観察し、その移動方向と同じ方向で、実測図中に矢印を添記した。点描図は、主に石類に用い、多光源による陰影を意識して作成した。

遺物の縮率は、3分1を基本としている。

観察表は、次頁以降に示した。項目欄は、一部の説明を巻頭の凡例で示した。追加説明すれば、挿図・写真番号の項目では、例えば1号住居跡の第10図1は、写真28と表現したが、その際の写真28は、写真図版番号を示す。出土状態・残存状態の項欄の

遺構細部名称は、本文と照合のうえ利用されたい。計測値項は、下図に示した位置で測定した。胎土項は黒色鉱物について言えば、鉄分の多い胎土中の粘土粒が還元気味に焼成され、黒色化したと見える場合や、白色鉱物も鉱物と異なる白色の粒子なども含めて扱ったことを、ことわっておきたい。鉱物の大きさは、土器の製作にあたり主粘土材のほか造形上や機能を果たすために必要であったと考えられる添加材の火雑の礫の大きさを捉え、砂粒・細砂粒と表現し、その量を少・多で現した。焼成項は、観察上の主要観点として、焼成されたの器表面上を捉え、還元焰・酸化焰と表現した。中世焰気味の黄灰色の色調は酸化側に含めてある。軟・硬の別は、須恵器・土師器の種別単位で扱った。色調は、凡例のように、土色帳中の色表現を用いたが、日本工業規画表記とマンセル表記は略した。遺構の土層注記は使用している。器形・技法等の特徴は、備考要素を含めて添記してある。

遺物計測位置



遺物観察表

1号住居跡

挿画・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第10図1 写真28	須恵器 碗	カマド覆土 破片	口径(17.0) 底径 - 器高(6.2)	白色灰物粒微 細砂粒少	還元焰 硬質	灰白色	轆轤整形(右回転)。器面内外に鋭く轆轤整形 痕を残し、腹部外面に回転彫りを施す。
同図2 同上	須恵器 碗	覆土 破片	口径 - 底径(8.0) 器高(1.9)	黒色細粒多 白色細粒微 細砂粒少	還元焰 硬質	灰白色	轆轤整形(右回転)。底部回転余切り後の付高 台。底部と体部の境、及び高台基部の一部は 故意に打ち欠かれた状態を呈する。
同図3 同上	須恵器 碗	覆土 破片	口径 - 底径 - 器高(1.4)	黒色灰物粒少 白色灰物粒少 細砂粒多	酸化焰 やや軟質	にぶい 黄褐色	轆轤整形(回転方向不明)。付高台に伴う調整 により、底部切り難し技法は不明。高台の貼 付は比較的。
同図4 同上	須恵器 蓋	床直 破片	口径(18.0) 柄径 - 器高(1.8)	褐色細粒少 細砂粒少	還元焰 硬質	灰白色	轆轤整形(右回転?)。
同図5 同上	土師器 小型甕	覆土 破片	口径(12.6) 底径 - 器高(3.9)	白色灰物粒多 黒色灰物粒少 砂粒多	酸化焰 硬質	明褐色	胴部中に張り手を有し、口縁部が「C」字状 に外反する。口縁部横撫で後、胴部に斜位に 刷毛目を施す。
同図6 同上	須恵器 羽釜	カマド付近 破片	口径 - 底径(10.4) 器高(3.0)	白・黒色灰物粒 少、細砂粒多 褐色細粒多	酸化焰 硬質	にぶい 橙	底部内面に轆轤整形痕を残し、胴部下半に斜 位の彫りを施す。

2号住居跡

挿画・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第13図1 写真28	土師器 杯	覆土 破片	口径(12.0) 器高(2.4)	黒色灰物粒多 細砂粒少	酸化焰 硬質	橙色	底部は丸底で、口縁部は内湾さみに外傾する。 口縁部は横撫で、底部は彫削りで、胴に整形 の不明瞭な部分を残す。
同図2 同上	土師器 杯	貯蔵穴内 床直 破片	口径(11.2) 器高(2.8)	黒色灰物粒多 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐色	底部は丸底で、口縁部は内湾さみに外傾する。 口縁部は横撫で、底部は彫削りで、胴に整形 の不明瞭な部分を残す。
同図3 同上	土師器 杯	覆土 破片	口径(13.0) 器高(3.1)	黒色灰物粒少 白色灰物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	橙色	底部は丸底で、体部から口縁部は内湾する。 口縁部は横撫で、底部は彫削りで、胴に整形 が不明瞭な部分を残す。器面磨成。
同図4 同上	土師器 杯	カマド底面 破片	口径(14.0) 底径(7.4) 器高(3.3)	細砂粒少	酸化焰 軟質	橙色	底部は丸底さみの平底で、体部は直線的に外 傾し、口縁部はわずかに内湾する。口縁部横 撫で、体部と底部は彫削りを施していると思 われるが、器面が磨成し不明瞭。
同図5 写真29	須恵器 杯	貯蔵穴上面 3/4	口径 13.2 底径 9.5 器高 3.5	白色細粒多 黒色細粒少 細砂粒微	還元焰 硬質	灰色	轆轤整形(左回転)。体部はやや反りさみに外 傾する。底部は回転余切り後無調整で、見込 み部に轆轤整形痕を明瞭に残す。
同図6 写真28	須恵器 碗	覆土 破片	口径 - 底径(10.5) 器高(2.8)	白色細粒多 細砂粒微	還元焰 硬質	灰色	轆轤整形(回転方向不明)。高台部分のみ残存 する。底部との接合面に、底部回転余切りの反 転を残す。
同図7 同上	須恵器 蓋	覆土 破片	口径(14.0) 柄径 - 器高(2.0)	白色灰物粒微 白色細粒少	還元焰 硬質	灰色	轆轤整形(左回転?)。口縁部が上に出する。 内面に轆轤整形痕を明瞭に残し、天井部 外面に回転彫りを施す。
同図8 写真29	須恵器 蓋	南壁形床面 ほぼ完整	口径 15.0 柄径 3.2 器高 2.9	砂粒微 黒色細粒多	還元焰 硬質	灰白色	轆轤整形(右回転)。柄は環状撫で、天井部外 面に回転彫り後の貼付。彫削りは3段。
同図9 写真28	土師器 台付甕	カマド焚口 灰面上 破片	口径 - 底径 - 器高(5.5)	黒色灰物粒多 白色灰物粒少 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	橙色	胴部下半外面斜方向の彫削り、内面は横位撫 で。脚部は接合部から脱落。
第14図10 同上	土師器 甕	覆土 破片	口径(21.8) 底径 - 器高(5.1)	黒色灰物粒多 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 橙色	「く」字状に外反する口縁部で、中に接合 痕を残す。口縁部横撫で、胴部横位彫削り、 内面は横位撫でを施す。

第6章 遺物観察

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第14回11 写真29	土師器 甕	貯蔵穴上面 破片	口径(21.0) 底径— 器高(11.0)	黒色鉱物粒多 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐色	口縁部は「く」字状に外反し、胴部上半に強い張り有する。外面は口縁部横撫で後、肩部横位施削り、下半斜位施削りを施す。内面調整は器面摩滅のため不明。
同回12 同上	土師器 甕	貯蔵穴上面 破片	口径— 底径 7.7 器高(10.8)	白色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	灰褐色	内外面共に摩滅が激しく、器面調整は不明。底部に木炭灰を残す。

3号住居跡

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第17回1 写真29	須恵器 甕	覆土 破片	口径— 横径— 器高(3.8)	白・黒色鉱物粒微、細砂粒微 白色細粒少	還元焰 硬質	灰色	輪縁整形(左回転?)。天井部外面に3段の回転施削りを施す。
同回2 同上	須恵器? 土釜	カマド左輪 前床面 口縁部1/2	口径 25.0 底径— 器高(12.9)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	明褐色	胴部に張りを有し、口縁部は短く外反する。口縁部横撫で後、胴部外面縦位施削り、内面撫でを施す。胴部外面に指痕を残す。

4号住居跡

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第18回1 写真30	土師器 甕	カマド燃焼 部底面 破片	口径— 底径— 器高(5.0)	黒色鉱物粒少 細砂粒多 砂粒少	酸化焰 硬質	褐色	胴部の張りのある器形で、外面は横位の丁寧な撫で、内面は横位撫でを施す。胴部接合部で剥落。内面に有機物がわずかに付着。

5号住居跡

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第20回1 写真30	須恵器 埴	土壁近く 床面 破片	口径(13.4) 底径— 器高(3.2)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 黄褐色	輪縁整形(回転方向は不明)。体部中に張りを有し、口縁部は強く外反する。内外面共に器面調整は丁寧。
同回2 同上	灰胎陶器 埴	床面近く 掘り方 破片	口径— 底径— 器高(4.5)	白色細粒少 美濃系	還元焰 硬質	灰白色	輪縁整形(右回転?)。施削は内外面共に広範囲に及んでいる。破片のため施削技法は不明。
同回3 同上	土師器 甕	カマド燃焼 部底面 破片	口径— 底径— 器高(11.5)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	にぶい 黄褐色	胴部破片で、外面は斜位一縦位施削り、内面撫でを施す。下半内面に明瞭な接合痕を残す。
第21回4 同上	土師器 甕	カマド燃焼 部底面 破片	口径— 底径— 器高(11.7)	白色鉱物粒少 黒色鉱物粒少 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 赤褐色	胴部破片で、外面は斜位の施削り、内面は斜位の撫でを施す。

1号ピット

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 ([F・g])	石材	技法等の特徴
第23回1 写真30	石製品 不明	底面+7cm 1/2	長さ 22.4 幅 5.3 重さ 2900		扁平な河原石で半截されたような状態を呈する。縦線記や半截面に摩滅や加工痕等は見られない。厚さ5.3cm。

1号溝状遺構

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第29回1 写真30	土師器 杯	覆土 破片	口径(16.0) 底径(10.8) 器高(5.5)	白色鉱物粒少 細砂粒少	酸化焰 やや軟質	褐色	底部は丸底さみの平底で、体部から口縁部にかけてわずかに内湾する。口縁部横撫で、体部と底部に異削りを施す。
同回2 同上	灰胎陶器 深施	覆土 破片	口径(16.0) 底径— 器高(4.8)	白色細粒微 美濃系	還元焰 硬質	灰白色	輪縁整形(回転方向不明)。胴部に張りを有し、腰部外面に回転施削り、口縁部内面に沈線を施す。施削は浅く掛け。
同回3 同上	須恵器 甕	覆土 破片	口径— 底径— 器高(8.7)	白色鉱物粒微 白色細粒多 細砂粒少	還元焰 硬質	灰黄色	縦作り叩き整形。外面斜位帯子叩き、内面正格子当具痕を残す。

押図・写真番号	種別器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第29図4 写真31	須恵器 羽釜	Aa-BP下 壁面 破片	口径(26.0) 底径— 器高(10.8)	白色鉱物粒多 黒色鉱物粒少 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	にぶい 棕色	轆轤整形(右回転)。口縁部に轆轤整形痕を残し、肩部より下に縦に縦溝削りを施す。肩は削落している。
同図5 同上	須恵器 羽釜	覆土 破片	口径— 底径— 器高(4.0)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 やや硬質	にぶい橙 色	轆轤整形(回転方向不明)。肩部下に斜位の溝削りを施す。肩の貼付は比較的丁寧。
同図6 同上	陶器 灯明皿	覆土 破片	口径(10.7) 底径(4.0) 器高(1.9)	黒色細粒多	還元焰 硬質	灰白色	轆轤整形(右回転)。底部及び体部下端に回転溝削りを施す。内面から口縁部外面端部にかけて厚く施装されている。
同図7 同上	陶器 瓶?	覆土 破片	口径— 底径— 器高(2.3)	黒色細粒多	酸化焰 硬質	棕色	頸部破片と考えられ、下端に高台部への変換部が見られる。軸は透明釉で外面が厚く、内面は薄く白く曇色している。
第31図8 同上	須恵器 壺	覆土 破片	口径— 底径— 器高(8.1)	黒色細粒多 白色細粒微	還元焰 硬質	灰色	紐作り。内外面共に轆轤による横で整形を施しているが、全体に縦で粘土粒の痕跡が窺える。
同図9 同上	須恵器 瓶	覆土 破片	口径— 底径(9.8) 器高(5.0)	白色粒多 褐色粒少	還元焰 硬質	灰色	内面に轆轤整形痕を明確に残し、外面側下部に縦位置溝を施す。内外面共にはせが認められる。

2号溝状遺構

押図・写真番号	種別器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第34図1 写真31	須恵器 羽釜	覆土 破片	口径(22.3) 底径— 器高(5.3)	細砂粒多 黒色鉱物粒少 褐色細粒多	酸化焰 硬質	にぶい 棕色	轆轤整形(回転方向不明)。内面と口縁部外面に轆轤整形痕を残す。肩の貼付は丁寧で、肩部より下に下の外面に彫削りを施す。
同図2 同上	須恵器 壺	覆土 破片	口径— 底径— 器高(3.5)	黒色細粒多 白色細粒微	還元焰 硬質	灰色	紐作り叩き整形。外面平行叩き、内面に当具痕を残す。
同図3 同上	須恵器 壺	底面付近 破片	口径— 口径(17.8) 器高(6.4)	白色細粒微 黒色細粒微	還元焰 硬質	灰白色	紐作り叩き整形。外面に平行叩き痕を残す。内面及び底部に軸が掛かり、さらに底面に胴体が付着。器面全体が平滑。
同図4 同上	須恵器 壺	覆土 破片	口径— 底径— 器高(5.6)	白色鉱物粒少 黒色細粒少	還元焰 硬質	灰色	紐作り叩き整形。外面平行叩き、内面青海波文。外面には薄く自然釉が掛かっている。器面の平滑は認められない。
同図5 同上	瓦 女瓦	覆土 破片	厚さ 1.7	黒色細粒多 白色細粒少	還元焰 硬質	褐灰色	一枚作り。四面布目、凸面縄叩き。両面共に薄く釉が掛かっている。断面も含め器面全体が平滑している。
同図6 同上	軟質陶器 鉢	覆土 破片	口径(32.0) 底径— 器高(6.3)	白色鉱物粒微 黒色細粒微 細砂粒少	還元焰 やや硬質	灰色	轆轤整形(回転方向不明)。口縁部及び内面に轆轤整形痕を残す。外面は塗金で整形。内面の細かなはせが微しい。
同図7 写真32	軟質陶器 鉢	覆土 破片	口径(32.4) 底径— 器高(6.5)	白色鉱物粒多 細砂粒多	還元焰 硬質	灰色	轆轤整形(右回転)。口縁部が内面肥厚する。口縁部及び内面に轆轤整形痕を残す。外面には指先の細な横での痕跡が見られる。
同図8 同上	陶器 灯明皿	覆土 破片	口径(12.0) 底径— 器高(1.7)	黒色細粒微	還元焰 硬質	灰褐色	轆轤整形(回転方向不明)。外面下部に回転溝削りを施す。内外面共に薄い鉄釉が掛けられている。
同図9 同上	陶器 漆呑み?	覆土 破片	口径— 底径— 器高(3.8)	黒色細粒微	還元焰 硬質	黄灰色	轆轤整形(回転方向不明)。直立するような1条の沈線を書き入れる。口縁部外面及び内面は鉄釉?。外面下平は鉄釉を施す。
同図10 同上	陶器 摺鉢	覆土 破片	口径— 底径— 器高—	黒色細粒微	還元焰 硬質	褐灰色	轆轤整形(回転方向不明)。握り面の溝の断面は左側の傾斜の強いV字状で、比較的シャープな状態である。内外面に鉄釉。

押図・写真番号	種別器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸・g)	石 材	技 法 等 の 特 徴
第35図11 写真32	石製品 不明	底面直上 2/3	長さ 23.5 幅 15.6 重さ 3800		約1/3を欠損している。欠損部の厚さはほとんど認められない。縁辺にも使用痕は見られず、部分的にカーボンの付着がある。厚さ5.8mm。

第6章 遺物観察

4号溝状遺構

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第30図1 写真32	陶器 鉢? 常滑?	底面+3寸 破片	口径— 底径— 器高—	白色鉱物粒多 黒色細粒少	還元焰 硬質	赤褐色	輪轆整形(回転方向不明)。内外面共に薄く釉が掛かっている。

6号溝状遺構(旧河川)

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第30図1 写真32	灰胎陶器 碗	覆土 破片	口径— 底径(7.2) 器高(1.6)	白色細粒微 尖稜系	還元焰 硬質	灰白色	輪轆整形(右回転)。高台は三日月高台で、底部調整後の付高台。見込み部に重ね焼きの痕跡を残す。施釉技法は不明。
同図2 同上	須恵器 甕	覆土 破片	口径— 底径— 器高(2.8)	黒色細粒少	還元焰 やや硬質	灰白色	叩き整形。外面無文、内面に青波文を残し、器面は断面も含めて、流れによるローリングを受け磨滅している。
同図3 同上	須恵器 壺	覆土 破片	口径— 底径— 器高(1.3)	白色細粒多 黒色細粒少 細砂粒多	還元焰 硬質	灰白色	輪轆整形(右回転)。底部と腰部に回転彫削りを施し、内面に流線が見られる。器面は内外面・断面共に磨滅している。
同図4 同上	瓦 女瓦	覆土 破片	厚さ 1.3	白色鉱物粒微 黒色細粒多 白色細粒少	還元焰 硬質	灰色	一枚作り?。西面布目、凸面撫で。器面は全体に磨滅している。

9号溝状遺構

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第30図1 写真32	須恵器 羽釜	覆土 破片	口径— 底径— 器高(2.7)	黒色鉱物粒多 白色鉱物粒微 細砂粒多	還元焰 硬質	棕色	輪轆整形(回転方向不明)。やや外反する口径部は平直でわずかに窪む。

18号溝状遺構

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸・g)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第41図1 写真32	石製品 磨石	底面付近 完形	長さ 12.0 幅 10.1 重さ 550				平田部は両面共にやや磨滅し、縁辺部に磨行痕が認められることから、磨石、磨石両方に使用されていたものと考えられる。厚さ2.8cm。

排水遺構

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第45図1 写真32	土師器 坏	覆土 破片	口径(11.0) 底径— 器高(2.2)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微 細砂粒少	還元焰 硬質	にぶい 橙色	底部は丸底で、口径部はわずかに外反する。口径部は横撫で、底部は彫削りで、間に整形の不明瞭な部分を残す。
同図2 写真33	木製品 杖	ピット内に 直立 1/2?	長さ(44.6) 幅(4.1)				上端は欠損し、全長を知ることはできない。下端は腐食しているが突っ込んだ可能性がある。表面に加工痕は認められない。

上面(As-BP下)遺構外

採掘・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第46図1 写真32	土師器 坏	2区遺構外 破片	口径(14.0) 底径— 器高(3.5)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒少 細砂粒多	還元焰 やや硬質	橙色	底部は丸底で、口径部は内湾する。口径部は横撫で、底部彫削りで、間に整形不明瞭な部分を残す。
同図2 同上	須恵器 坏	2区遺構外 破片	口径— 底径— 器高(3.3)	黒色細粒少 白色細粒少	還元焰 硬質	灰白色	輪轆整形(右回転)。
同図3 同上	土師器 坏	3区遺構外 破片	口径(12.2) 底径— 器高(2.6)	黒色鉱物粒少 白色鉱物粒微 細砂粒少	還元焰 硬質	にぶい 橙色	底部は丸底で、口径部は内湾ぎみに立ち上がる。口径部横撫で、底部彫削りで、間に整形不明瞭な部分を残す。

挿図・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸)	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴
第46図4 写真33	土師器 坏	3区遺構外 破片	口径(12.2) 底径 — 器高(2.6)	黒色鉱物粒少 細砂粒少	酸化焰 やや硬質	にぶい 褐色	底部は丸底で、口縁部は内湾きみに立ち上がる。口縁部横溝で、底部は丸削りと思われるが、表面が摩滅しているため不明瞭。
同図5 同上	土師器 坏	3区遺構外 破片	口径(13.8) 底径 — 器高(2.8)	黒色鉱物粒微 白色鉱物粒微 細砂粒少	酸化焰 硬質	にぶい 褐色	底部は丸底で、口縁部は短く直立する。口縁部は横溝で、底部は丸削りで、面に狭い範囲の整形不明瞭な部分が見られる。
同図6 同上	土師器 皿	3区遺構外 1/4	口径(14.5) 底径 — 器高 2.8	黒色鉱物粒少 細砂粒少	酸化焰 硬質	褐色	底部は扁平な丸底で、口縁部は反りきみに外傾する。口縁部横溝で、底部丸削りで、面に狭い範囲の整形不明瞭な部分を残す。
同図7 同上	須恵器 坏	3区遺構外 1/5	口径(9.8) 底径(5.1) 器高 3.6	黒色鉱物粒微 細砂粒多	酸化焰 硬質	にぶい 小褐色	輪帯整形(石回転)。底部は回転糸切り後無調整。見込み部に轆轤回転の痕跡を明瞭に残す。
同図8 同上	須恵器 壺	3区遺構外 破片	口径 — 底径 — 器高 —	白色鉱物粒微 白色細粒多	還元焰 硬質	灰褐色	叩き整形。内外面共に工具痕は不明瞭。外面に融着物あり。

自然水路

挿図・写真番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (寸・g)	石材	技法等の特徴
第54図1 写真33	石製品 打製石斧	1号水路 完形	長さ 9.3 幅 2.4 重さ 13.47	黒色頁岩	厚手の縦長削片を素材とする。調整加工は主要制縁面にのみ施される。厚さ5.5cm。
同図2 同上	石製品 スクレイパー	2号水路 完形	長さ 7.9 幅 4.3 重さ 28.5	黒色頁岩	横長削片を素材とする。打点付近に微細な調整加工によって刃部が作出される。厚さ0.9cm。

第7章 箱田古市前I遺跡のまとめ

調査成果について、以下にまとめる。

1. 近世以降の遺構は、調査初面がやや深めであったためか希薄であったが、浅間山噴出のAs-A(天明3年)を含む土壌に覆われた近世後期以降の所産の1号遺状遺構と、天狗岩用水を利用した関連遺構と推定される2・6・7号溝及び排水遺構を調査した。

このうち1号遺状遺構は現道(農道)の直下に在り、現道に比べ滝川方向への傾斜は強い。尚、近代に於ける滝川に掛かる橋脚に続く道は調査2区と3区の境付近にあったという地元の方の話から、1号遺状遺構は滝川の渡河を目的として造られた道路ではなかったものと推察される。

後者の溝群のうち2号溝はプランが多少蛇行するものの壁面・底面形態は人為的であり、これに対し6号溝は非人為的であったため、6号溝は滝川の旧河道、2号溝は用水堀(滝川用水か天狗岩用水を利用した大形水路)と判断した。また7号溝は2号溝から6号溝(旧滝川、現滝川の直前までを指す)への放水を、これに接する桁形の掘り込みと横列状の小ピットからなる(「排水遺構」とした)遺構群は、下流域に見られる現代の構造物との比較から水量調節等を意図する施設と想定したのである。尚、地元の方の話からこれらの遺構は少なくとも明治期迄には埋没してしまっている。

2. 中世の遺構としたものには2号井戸跡、短冊形のプランを想定した1号サク状遺構、2号遺状遺構、2～4号土坑などがあり、テフラや量産的な18世紀後半以降の陶磁器を伴わないことから中世から18世紀前半の所産と判断される。

このうち1号井戸跡は、直井筒の状態を取り、15ライン以北のやや高まった位置にあるため生活に関連した機能を考えられるが、周囲に建物跡等の遺構は確認されなかった。

また前述のようにテフラの誤認からAs-B（浅間山、天仁元年）直下面の調査はごく一部でしか行い得なかったが、耕作痕らしき凹凸は見られたものの明瞭な畝・水田等の遺構は確認できなかった。

3. 古代の遺構はI～Ⅲの各面で発見され、I面目は主として奈良・平安時代の堅穴住居5軒。II面目はHr-FA（榛名山、6世紀初頭）層下の面で、II面水田とした水田疑似の遺構と畝跡である2号サク状遺構が確認・調査された。III面目はAs-C（浅間山、4世紀初頭）を主体とする土層下に確認されたIII面水田があり、更に下面から21～24号溝、倒木1～4などを調査した。

このうちII面下の遺構は、5世紀末～6世紀初頭の所産と判断される。

III面水田はAs-Cの純層に覆われた遺構ではないためAs-C降下後の所産と判断されるが、これを覆う層はAs-Cを純層に近い状態で包含していることからAs-C降下後あまり時間の経過しない時点で被覆された、つまり使用されていた耕作によるものと想定される。

4. 次に古代の溝である1号溝について述べる。1号溝は北を滝川、南を前述の2号溝に切られているが、そのプランは直線的であり、且つ掘り方もしっかりした特筆すべき水路である。1号溝の覆土中に見られるAs-Bは水に晒された形跡があり、As-B降下頃まで機能していたと推定される。As-B下の覆土は流水に伴う砂質土・粘質土である。仮に8世紀後半の2号住居跡での砂質の氾濫

層とこれらの覆土が直結すれば、1号溝は8世紀代に存在していたことになる。また、本遺跡は上野國府に近く、國府を中心とした計画的な土地区画に基づいて施工されたことも想起し得よう。

5. 最後に農耕遺構の土壌に対するプラント・オパールの検出状況を述べることにする。まず、中世を示すAs-Bを包含する層の下でのプラント・オパール値は稲作を推定させるものであった。一方、Hr-FA下の古墳時代後期頃の水田様の遺構面についてはプラント・オパール値は高いもののヨシ属の生育も多く、稲作の行われたか否かは特定できなかった。また、As-C混じりの土壌に覆われた古墳時代前期頃の所産と考えられる水田跡についてはプラント・オパール値から稲作が想定される。

箱田古市前Ⅱ遺跡

第8章 箱田古市前Ⅱ遺跡の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

前出1頁に箱田古市前Ⅰ遺跡の調査経緯があるの
で参照されたい。平成3年度以降、一級河川滝川河
川改修工事の南部滝川橋周辺地域の工事地域は、群
馬県教育委員会文化財保護課の試掘により調査範囲
は既決しており、さらに平成4年度の箱田古市前Ⅰ
遺跡調査の際に、敷化および用地取得関連などのた
め試掘不能状態に置かれていた東西X0ライン以南
の地に試掘が行われ、箱田古市前Ⅱ遺跡の地に、河
川流出のない古代遺構の連続面を認め、既決範囲を
表付ける結果が導かれた。その際、試掘は、当団が
実施した箱田古市前Ⅰ遺跡調査の延長として終了直
前の平成4年12月21～25日までの間に実施された。

試掘結果は、X-40ラインまでの間に5個所の小
試掘溝が設けられ、流出していない古代遺構の連続
面のほか、度々なる滝川支流の一端が示された内容
であった。しかし、古代遺構の連続面が存在する個
所(X-5～-25ライン間)は、竹、シノなどによ
る敷化が顕著で、試掘による情報量は薄く、本調査
時に再確認が必要な個所とされた。

箱田古市前Ⅱ遺跡の調査経過は、次のとおりであ
る。平成6年4月1～8日までの間に、プレハブ設
営地交渉、従業員手配、諸手續などを行い、13日現
地にて、前橋土木・群馬県文化財保護課と事前の打
合せを行う。プレハブ用地については、JA前橋東
支所の倉庫用地を借用した。

調査着手は、4月14日の伐採から始めた。対象地
となった滝川両岸沿い800㎡は、深い藪に覆われて
いた。20日まで、5日間を要し終了した。

実質上の着手は、4月20日から開始され、まず不

足の事態が予測されるX-5～-25ライン間を意図
して7本の試掘トレンチを設けた。その結果、X-
5～-25間には、堅穴住居跡を含む古代遺構の存在
を認め、以南は、滝川の旧河道を中心とした近世以
降の遺構を中心とすることが明らかとなった。その
ため調査計画上の2ヶ月間という調査期間では、期
間不足が予測された。

続いて、面的な調査は、5月9日から始められ、
重機を用いての表土の排除である。この場合、表土
とは言っても、根深い藪の根の除去に近い作業で
あった。この表土層は、上層で浅く止めることは困
難で、時にX-5～-25間では、直接、古代遺構を
発見しうる面にまで達してしまった。以南は、近・
現代の面で、部分的に、古代の遺構を発見しうる面
でもあり、第62図調査遺構状況図がそれに相当する
調査面で、調査の結果、堅穴住居跡約20が発見され、
調査期間延長を、さらに1ヶ月見込む必要があると
判断された。5月11日のことである。調査延長は、
受け入れられたが、天狗岩用水・滝川の利用上、6
月15日頃に農業用水通水の予定があり、調査地の一
部に水没の可能性が生じた。そのため、その管理を
行っている天狗岩埋土改良区事務所、その影響の
ある地元地区、JA前橋東支所などに、調査終了予
定の20日までの5日間について通水猶予を出願し
た。ここに天狗岩埋土改良区事務所とJA前橋東
支所、地区長はじめ多くの皆様の協力があつた。

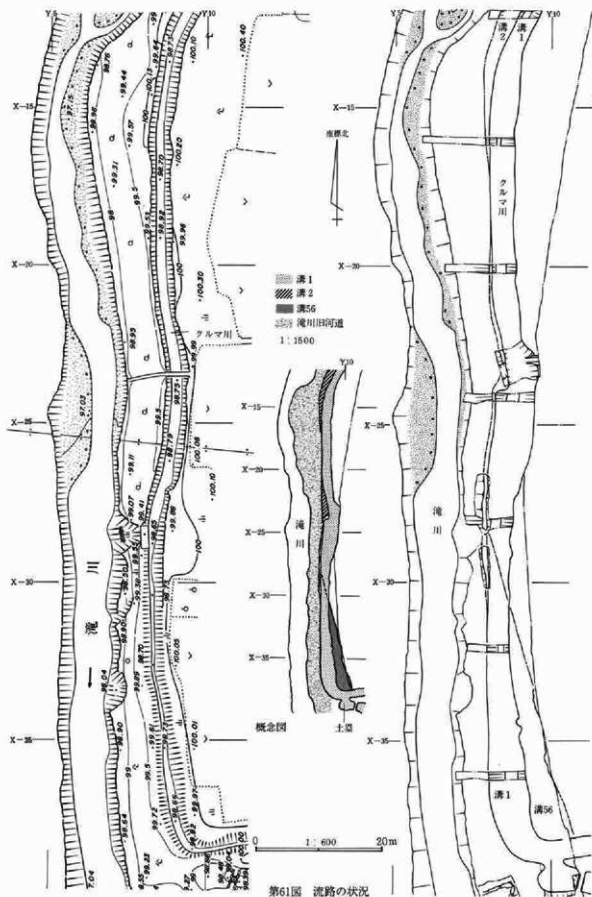
発掘作業上の図面等の作業は、6月21日には終了
し、既に部分的に始められていた埋もどし、旧状復
帰も24日に終了、実質的な作業は終了した。

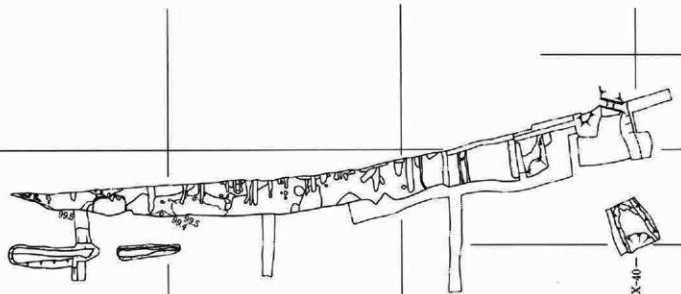
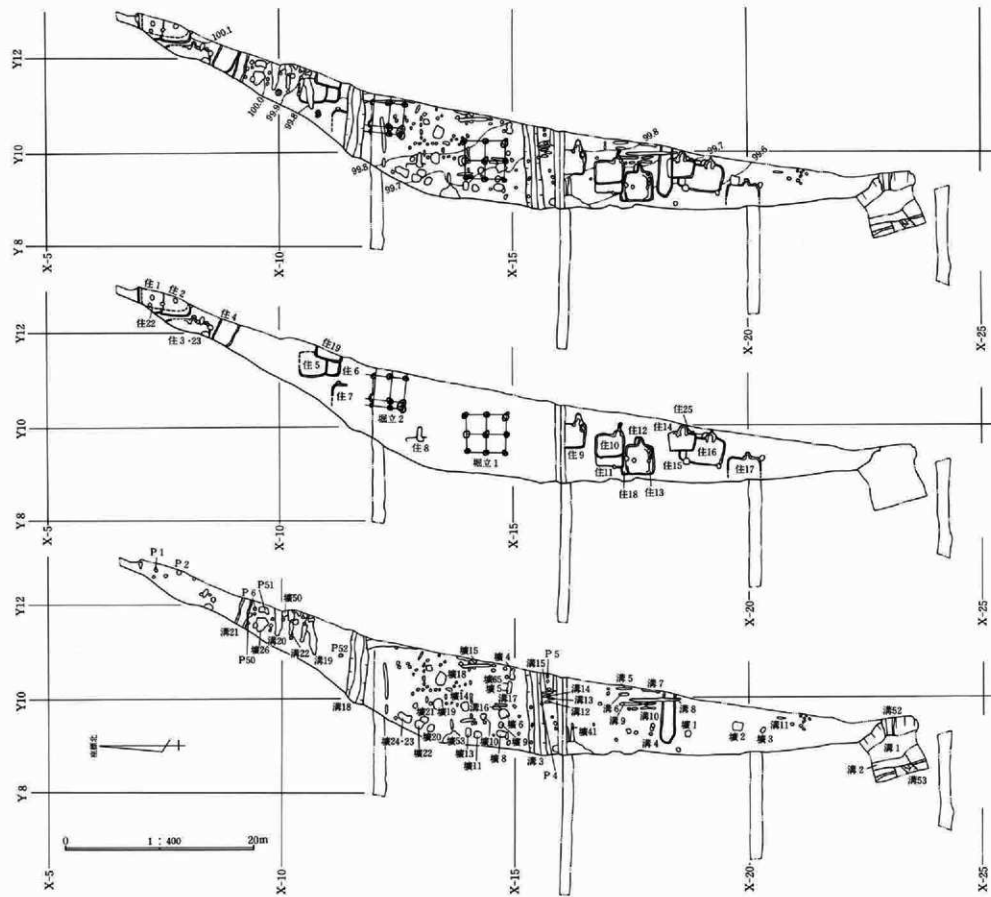
第9章 発掘された遺構と遺物

第1節 調査概要

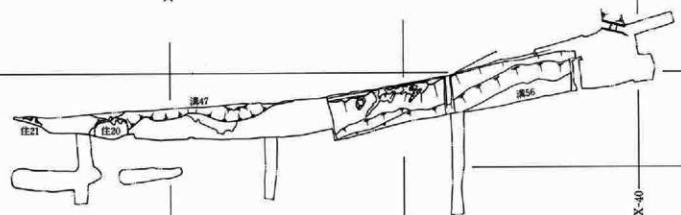
調査方法は、トレンチ拡張式を基本的には、踏襲

し、初期に試掘トレンチを、続いて調査範囲を決定

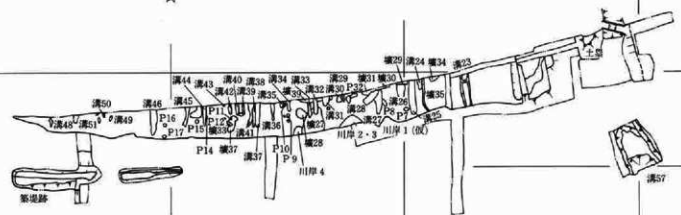




調査遺構状況図



古代遺構全図



中・近世遺構全図

第62図 遺跡全図と遺構番号図

して調査を実施した。調査は、遺構発見面をできるだけ高所に求め、遺構発見面と遺構構築上面とが親しい関係で得られるよう努めたつもりである。遺構発見面・遺構構築の最上面は、ともに遺構の設けられた時期と関連するのである。

調査は、表土層を除去した段階で一面目を設けた。この面は、X-5～25ライン間では、古代遺構を直接認めうる面であり、それは南側では、X-35付近まで達し、以南は、近世以降の旧滝川（この場合、現滝川を遡る以前の滝川を指す）関連の砂質土であった。この作業は、当初の試掘トレンチ、X-27トレンチで発見された小築堤跡や、X-40での溝57の調査区、X-23の溝1拡張区なども含めて行った。その状況は、第62図最上段に掲げた調査遺構状況図のとおりである。同図中、中・近世遺構全図は、中世以降の遺構を抜けて作成したが、その大多数は、この面での発見であった。遺構名称中、川岸とは、現滝川と並走して、クルマ川があり、その川岸の一端を指して呼称した。箱田古市前Ⅰ遺跡との関連からは、As-C（浅間山C軽石）を含む層を除去した箱田古市前Ⅰ遺跡Ⅲ面に相当する面は、As-Cを含む黒色土をX-10ライン以北で認めたものの、古代以降の遺構密度は高く、面的な調査は行えなかったが、その南限がX-10ラインに達していた点は確かである。

2面目の調査は、部分的であり、かつ確認的であった。掘り下げは、X-35付近以南において地山層で

あるローム層をまじえた標名山火砕流堆積物層が1面目のX-35付近以南において、滝川を起因とする砂質土に覆われていた。それを除去して二面目を求めた。またX-5～15にかけての個所は、As-C混じりの黒色土がX-10以北に、以南は、地山上層面の黒色土化が認められたため、その黒色土の除去を行った。それが2面目と言えば2面目なのであるが、念押しの確認作業であった。その結果、X-33以南においては、9世紀後半頃に埋没したと考えられる大溝、溝56が発見され、第62図中段の古代遺構全図にその一部が表現されている。また、この作業過程で上面で見落しした遺構も発見されている。

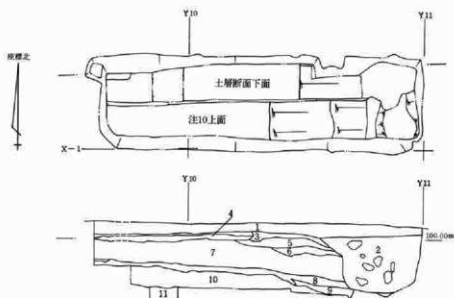
遺構発見の直接の方法は、担当自らの表面削りによって捉えた遺構の輪郭線引に基づき、各遺構の重複関係も同様である。そのため箱田古市前Ⅱ遺跡の遺構図は、調査担当として、ある程度、推奨しうる状態を表現したつもりである。

このようにして、調査は行われ、調査対象面積は3,700㎡、発掘面積800㎡。遺構量は、竪穴住居跡25、掘立柱建物跡2、溝跡約57、穴跡約40であった。

住居跡は、7世紀代の竪穴住居跡1、奈良時代もしくは推定の同時代竪穴住居跡4があり、時期不明を除き、他は平安時代前・中期である。大溝の溝56は9世紀に埋没している。中世は、溝18の埋土中に15世紀頃の遺構と考えられた。溝・穴跡の多くは、近世以降であった。



第63図 トレンチ調査遺構図

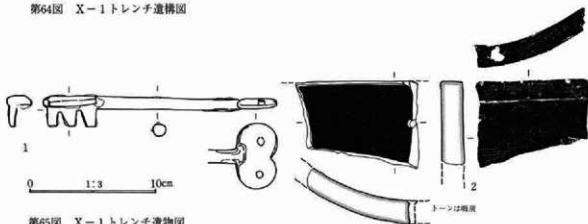


1. 砕石及び現地表面。
2. $\phi 20\sim 30$ mmの石、コンクリート等廃材を主とする埋土。
3. 黒褐色。ゴミを燃やした灰等がまざる土。ビニール入り。
4. コンクリート。
5. 暗褐色土層。あまり、ゴミ、灰等が混じらない土。
6. 黒褐色土層。注3層に似る。ゴミ、灰がいっぱい。
7. ゴミ、廃材のもえかすと思われる顆粒層。よくしまっていてかたい。
8. 暗灰褐色土層。粒子の細かい砂層。しまりはあまりない。土層より、大正～昭和期の遺物が検出される。金属（酸化鉄？）と思われる褐色ブロックが多くみられる。

9. 暗灰褐色土層。注8層より粒子が細かく、粘性を帯びる。砂質の層。褐色の塊があまり含まれない。
10. 暗灰褐色土層。注8層に比して、粗粒の砂層。褐色塊は、みられるが、注8層より少ない。比較的善しそう（昭和期）な木くず（長さ1～2cm）がみられる。
11. 暗灰青色。10の還元化。粘性。

0 1:80 3m

第64図 X-1トレンチ遺構図



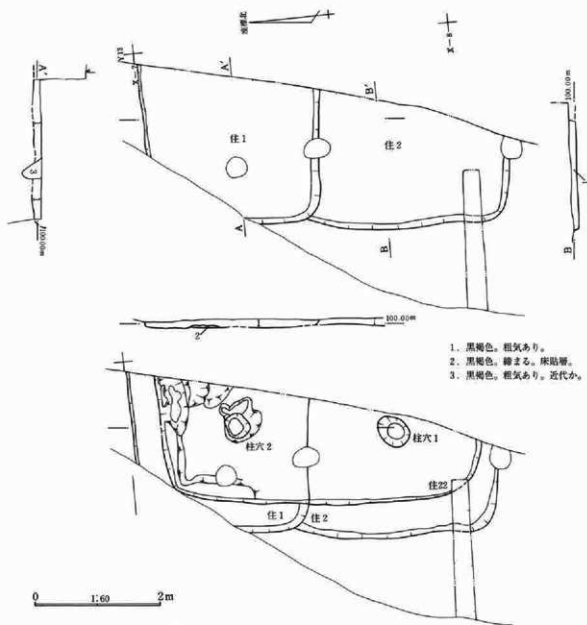
第65図 X-1トレンチ遺物図

第2節 住居跡

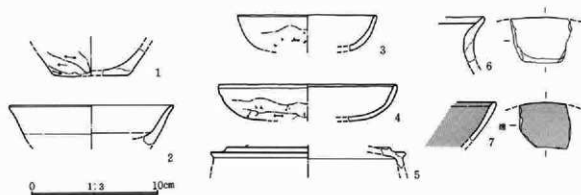
住居跡1 (第66・67図 写真図版36)

位置はX-7 Y12にあり、重複は住居跡2・22と重なり、両住居跡より住居跡1が新しい。近世以降の小穴が重複してある。形状は、南西隅部の形状からすれば、立上りの一辺が鈍角に開く隅九方形気味の形態で、長軸方向は、未調査地を含み不明である。

規模は長辺で、 $2.6 + a$ m、短辺で最大、2.85mを測る。掘込みの深さは、調査面から掘方まで、約10～15cmを残すのみで、調査上面は既に床面下であった。竈は未調査地内と考えられ、東壁南寄りに位置していると周辺側から想像されるが、掘方の埋土、もしくは貼床層中の木炭・焼土粒は多くはなかった。遺物は、当初、住居跡1・2が一棟の住居跡のように見えたため、一纏めに扱った場面もあったが、



第66図 住居跡1・2・22遺構図



第67図 住居跡1・2遺物図

掘り下げの過程においては分離して扱っている。第67図1・2が床下、もしくは貼床層中の個体である。2は8世紀後半から9世紀初頭頃の須恵器坏に見える。このほか、纏まった形で遺物の出土はない。

住居跡2 (第66・67図 写真図版36)

位置はX-7・8 Y12にあり、重複は住居跡1・22と重なり、住居跡1より古く、同22より新しい。近世以降の小穴が重複してある。形状は、南西隅部の形状からすれば、隅丸方形気味と考えられるが、全体が正方形・長方形なのか分からない。規模は西壁下で $3.2 + \alpha$ m、南壁下で $1.3 + \alpha$ mを測る。掘込みの深さは、調査面から掘り方で約10~15cmを残すのみで、調査上面は既に床面下であった。竈は未調査地内と考えられ、東壁南寄りであると周辺例から想像されるが、掘方の埋土、もしくは貼床層中の木炭粒・焼土粒は多くなかった。遺物は第67図6・7が床下、もしくは貼床層の個体で、全体的に薄弱であった。6は8世紀後半から9世紀初頭頃の土師器坏片である。7は9世紀代の燻のかかった須恵器坏片と考えられる。

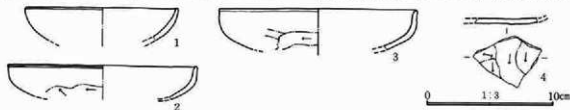
住居跡22 (第66・68図 写真図版36)

位置はX-7・8 Y12にあり、重複は、住居跡1・2と重なり、住居跡22が古い。発見は住居跡1・2の掘方調査時である。第66図下段は掘方状態を含む。床面状態は、認定時点から掘方まで硬く締まっていた。そのため、発見面である住居跡1・2の掘方面は既に住居跡22の床面下に達していた可能性がある。形状は、ごく限られた中での観察であるが、胴張りを呈する西壁と隅丸形状を認める。さらに柱穴

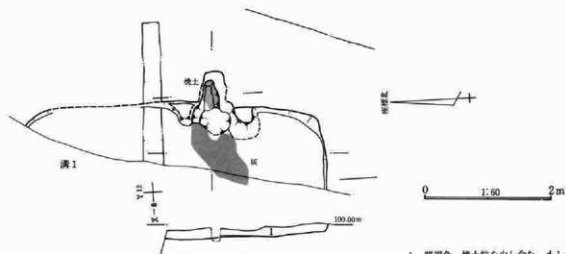
2穴が取り付く。掘方形状は南壁、西壁直下においては、ゆるやかに住居内側に落ち込むが、北壁下から西壁北端端にあつては中段、一部では周溝状の凹みとなって認められた。掘方底面は、全体的に凹凸が顕著であった。規模は、西壁下で5.1mの長さを測る。柱穴1は掘方において、長さ0.48m、深さ0.28m、柱穴2外周で径0.6m、内周で径0.4m、深さ0.22mであった。方位は西壁でN4~6°Eである。竈は未調査地側と考えられる。遺物は第68図に示した。土師器坏に、口径の大きな坏2・3、底部の丸底が、やや尖る1など、8世紀代の特徴を認める。なお県中央部における8世紀代の竪穴住居跡は、既に柱穴を設けない様式の段階に入っているので、1辺約5mで柱穴を有する住居規模は小屋組構造を考える上で重要である。

住居跡3・23 (第69~71図 写真図版36)

位置はX-7・8 Y11・12にある。重複は住居跡23との関係がある。発掘当初の平面確認の際、輪郭として竈部と北半立上までは確認されたが、竈右袖以南は不明瞭であった。北半の調査後、竈部の調査に入り、その時点で、ようやく南壁を把握した。しかし南壁を求めるまでには、平・断面に数本の輪郭疑似が認められ、さらに東壁北半部には段状の立上が存在しているので、直ちに全体を同一の住居跡と認定する訳には、ゆかなかった。そのため、2棟重複の場合には、竈右袖部および貯蔵穴以南を住居跡23として捉える必要性が生じる。床面状態は掘方上に注記番号7・8の貼床層があり、その上面は硬かった。貯蔵穴は床面上では明確でなく、掘方を露呈させた時点で存在が知れた。おそらく居住廃棄直前には埋没していたのだろう。形態は住居跡3・22

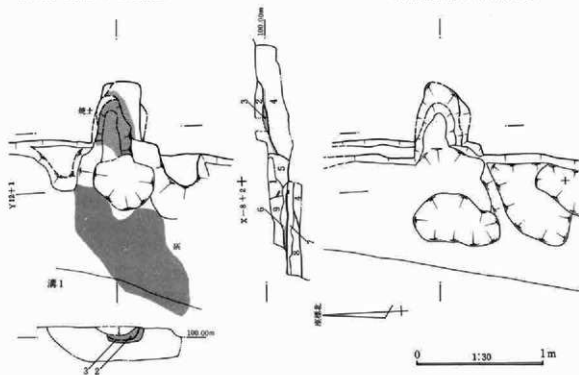


第68図 住居跡22遺物図



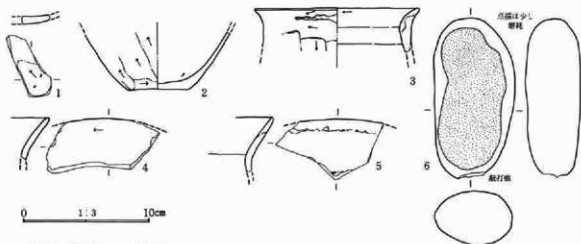
1. 暗褐色。焼土粒を少し含む。φ1-3mmほどの白色粒を少し含む。
2. 赤褐色。ほとんど焼土。
3. 灰褐色。焼土境を多く含む。周囲の土より灰色がかかる。締まりあり。粘性あり。
4. 黒褐色。地山。ロームブロックを少し含む。締まりあり。粘性なく、乾くとφ2-3cmのブロック状を呈し、ボロボロ。
5. 赤褐色。注3に似るが、赤味が強い。締まりあり。粘性ややあり。
6. 黒褐色。焼土粒を主体のカマド。崩落もしくはカマド破壊の期かもしれない焼土を主体とする。
7. 黒褐色。灰を含む繊維状の壁が時々入る。貼床。地山および黄灰色ブロックを含む。
8. 黒褐色。地山に近似。締まりあり。焼土ブロック少ない。
9. 黒褐色。焼土・木炭粒少ない。

第69図 住居跡3・23遺構図

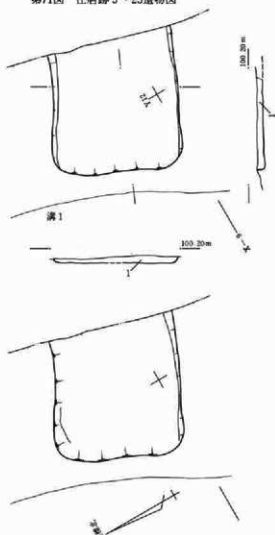


第70図 住居跡3・23遺構図

第9章 発掘された遺構と遺物

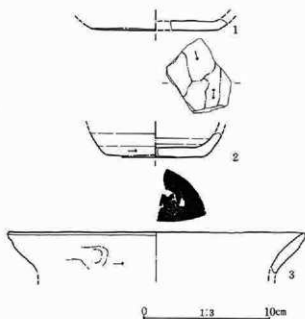


第71図 住居跡3・23遺物図



1. 黒褐色。煙気のため古代・中世が判別できず。層としての絡まりはある。

第72図 住居跡4遺構図



第73図 住居跡4遺物図

とが別々であっても、東壁に竈を設け、隅丸方形を呈する。規模は東壁沿いの住居跡3・22が同一であったとすると、東壁下の一边長は約4.7mを測る。壁高は東壁下で約0.18mである。方位は、東壁北半を基とすると、N1°E前後である。竈跡は、今回の発掘中、遺存の良い方であった。第70図のとおり、ケイ酸の灰層が、竈前から燃焼部の奥側まで存在し、その中途を、小穴が埋土上方から、それを抜いていた。そこは支脚推定位置でもある。袖部は黒褐色土で、焼土粒が認められた。遺物は第71図のように9世紀前半頃の土器を主とする。

1. 黒褐色。粗気あり。近世。
2. 黒褐色。粗気あり。黄色土のブロックを含む。住居跡埋土で粗気気味。
3. 黒褐色。締まる。
4. 黒褐色。締まる。住居跡5床下。
5. 黒褐色。締まる。住居跡6床下。

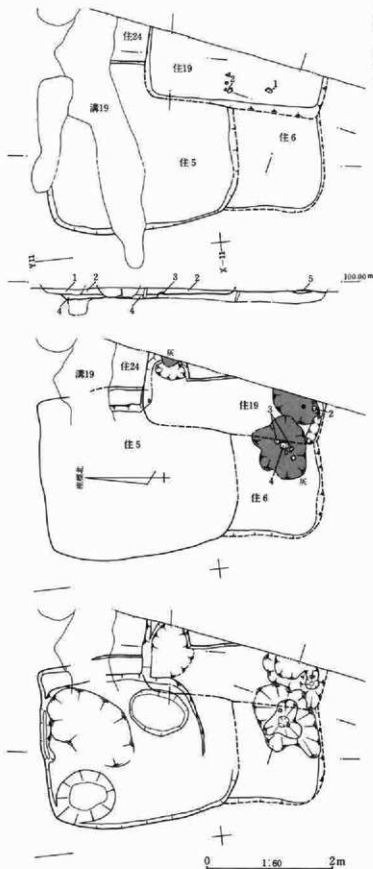
住居跡4

(第72・73図 写真図版36)

位置はX-8・9 Y 11・12にある。重複は15・16世紀頃以降と考えられる溝21が近接して存在し、東接の未調査地内では、住居跡4の竈跡とその周辺を破壊していると考えられた。住居跡の調査は、平面確認の時点で既に床面はなく、掘方埋土もしくは貼床層は、上方の粗質土層土と大差なく、古代としての質感を欠いていた。規模は長辺約2.3+ α m、短辺2.0m、方位は西壁でN25°Eを測る。遺物は第73図のように8世紀代の個体があり、第123図の溝21出土の土師器と時間差は少ない。

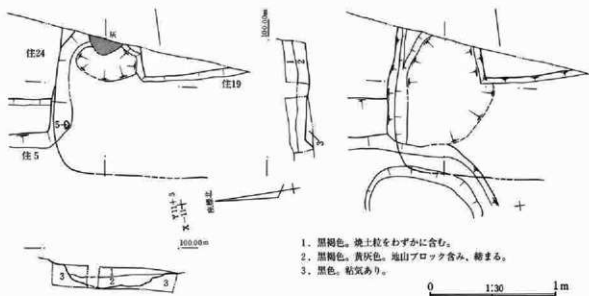
住居跡5・6・19・24

位置はX-10・11 Y 10・11にある。重複は、耕作土を除去した段階の平面確認と、発掘調査をへて確認された間の新・古の関係に変化はない。つまり第74図の最上段平面の状態である。住居跡24は同5・19より古く、同5は同19より古く、同6は同5・19より古い。さらに新しい段階に溝19ほか小溝跡、小穴跡が後出して重なる。形状は各々の残存隅部が隅丸を呈することから隅九方形と考えられる。規模と方位は、住居跡5の南北側で3.05m、東西側で2.7m、住居跡6の南北側で1.35+ α m、東西側で2.52m、住居跡19の南北側で2.94m、東西側で1.08+

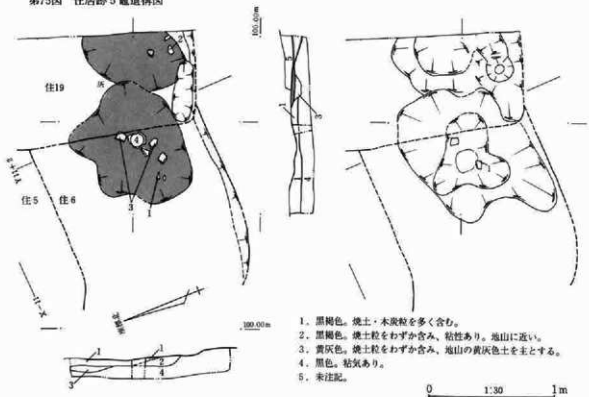


第74図 住居跡5・6・19・24遺構図

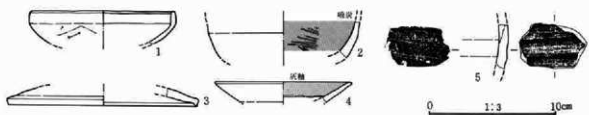
第9章 発掘された遺構と遺物



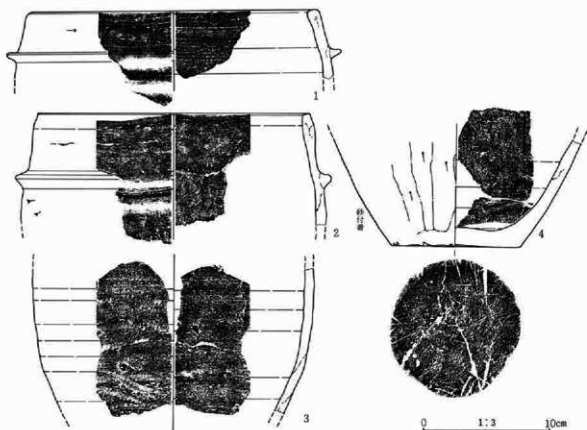
第75図 住居跡5 竈遺構図



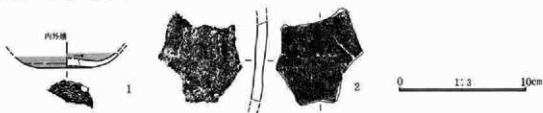
第76図 住居跡5・6・19遺構部分図



第77図 住居跡5 遺物図



第78図 住居跡6遺物図



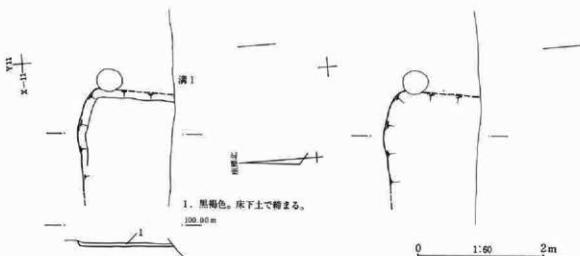
第79図 住居跡19遺物図

α mを測る。方位は住居跡5の西壁で $N 6^{\circ} W$ 、住居跡6の西壁で $N 5^{\circ} E$ 、住居跡19の西壁で $N 14^{\circ} E$ を測る。床面の硬さは、住居跡24の掘方上面、住居跡6の東半部において、それを認めた。竈跡は住居跡5のそれを調査区東壁下で、住居跡6のそれを、調査区東壁下で至近の状況を確認した。住居跡6の床面は住居跡19の掘方下に灰層を伴って残存し、その灰層の状況は竈近接を思わせた。灰は禾本科のケイ酸らしくざらつきを感じた。その灰の分布や遺物の出土状態は第76図に、遺物図は第78図に示した。各住居跡の時期は、住居跡24は皆無、不明であるほか、住居跡5・6から羽釜片が出土し、およそ10世紀頃

と考えられる。

住居跡7 (第80図 写真図版36)

位置はX-11 Y 10にある。重複は溝1によって南半を失う。さらに小穴が切る。発見時点、既に床面は削平され、掘方の一部をとどめるのみであった。形状は北東隅部の状態から隅丸方形と考えられる。規模は、北壁で $1.86 + \alpha$ m、東壁で $1.5 + \alpha$ m、方位は、東壁で $N 8^{\circ} E$ を測る。竈は既に溝1に削られたらしく、確認されていない。遺物は認められなかった。



第80図 住居跡7遺構図

住居跡8 (第81・82図 写真図版37)

位置はX-12・13Y 9・10にあり、重複は、耕作など後世の攪乱により、大半が失われていた。形状は、東壁北端が、あたかも住居跡隅部を思わせる状態にあったが、掘方の立上は浅く判然としなかった。規模は東壁下で1.8+αmであった。方位は東壁からすればN 3°30'Eを測る。竈は床面状に硬化・焼土化した燃焼部床をわずかに認めたが、大半は失われていた。遺物は認められなかった。

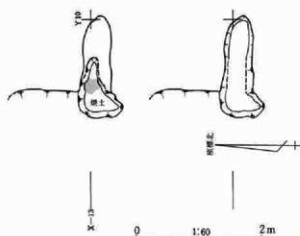
住居跡9 (第83~85図 写真図版37)

位置はX-16Y 9・10にある。重複は、調査初期の20m毎東西トレンチにより、北端部を断ち切ってしまったこと、耕作や後世の攪乱によって削平されていたことなどから、床面の大半は失われ、掘方および貼床層を残すのみであった。形状は、南半部からすれば隅丸長方形を呈する。竈は東壁南端に付設され、貯蔵穴が南東隅に取り付く。貯蔵穴は調査上面において床面が残存しており、住居廃棄時には埋没していたと考えられた。貯蔵穴内には第85図5に示した大石が納置されていた。南壁の西寄りにわずかではあったが、浅い周溝状の凹みを認めた。その凹みの発見は掘方上であり、最終廃棄時には機能していない。床面の大半は既に失われたうえに、一部は発掘調査時に削り取ってしまっている。規模は東西2.58m、南北2.34+αmで、方向は東壁でN 3°

°30'Wを測る。竈跡は、東壁の南側に位置している。燃焼部床面は焼土化し、両袖がわずかながら残されていた。右袖には芯材の小石が存在していた。原位置であるか否かは不明である。煙道側は、住居跡廃棄頃の小穴により、焼成部の焼土面を含めて切られていた。遺物は、第85図1が床面より、約1cm程浮いて発見されたが、完器のため、当住居跡と直結の遺物である。貯蔵穴より出土した5は、表・裏面が少し摩耗し、旧時における磨き行為が考えられる。しかし、平らに摩耗せず、石の凹凸に則して摩耗しているため金属などを主体にしたものではなく、もっと軟質の研磨主体が想起される。その表面の汚れは、竈架材で生じた吸炭か、床面に納置し、その際に生じた汚れかは判然としない。材質は被熱を受けた様子はないが、耐火性に優れる安山岩でもある。

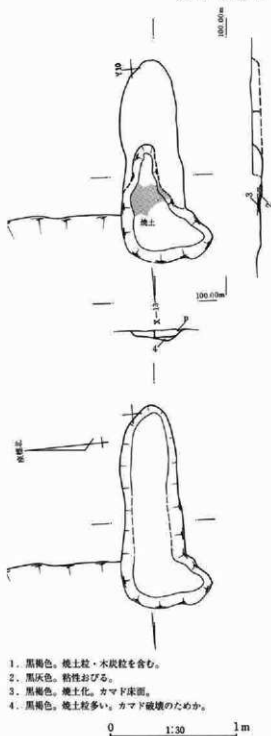
住居跡10・11 (第86~89図 写真図版37)

位置はX-16・17Y 9・10にある。重複は近・現代の溝9が部分的に、後出の小穴が重なる。住居跡10・11・15は重なり、同10が新しく、同11がそれに続き、同15が最も古い。その状況は平面確認時点でも同様のため、新・古の関係の信頼度は高い。また上方からは、浅間山A軽石を含んだ黒褐色土が床面相当位置に食い込むため、耕作化や攪乱による上面の削平化は、あったと考えられた。形状は、住居跡10は、全体形状を知ることのできる数少ない住居跡



第81図 住居跡8 遺構図

である。床面は住居跡11が高く、後出の住居跡10が5～6cm低く、住居跡11の床面の多くは失われている。掘方は、住居跡の残存の少ない住居跡11は、ほんのわずかに掘り下げただけで掘方底面に達してしまった。同11の底面に極端な凹凸は少なかった。それに対し、住居跡10の掘方は、第86図平面図右側のように、全体的な凹凸があり、この時点で貯蔵穴が確認されている。形態は住居跡10は、西壁の一边が長く、それに加えた隅丸方形の形態を呈する。住居跡11は、同10に東半を切られ、不明瞭であるが、西半部は隅丸方形となっている。規模は住居跡10は、西壁側に近い南北で、3.05m、北壁側の最大幅で2.46mを測り、方位は東壁側の一边で、N1°Wを示す。住居跡11は、西壁側で、南北長2.88m、南壁側で、1.2+a mを測る。このaの値について、住居跡10の東北隅の掘方に、住居跡11の北東隅部痕のように見える凹みを認め、それを旧状跡と考えた際、住居跡11の東西長は、2.82m前後を測ることができ、その際は正方形に近い隅丸方形の形状となる。方位は西壁側でN5°Eを示す。竈跡は住居跡11竈位置相当の箇所を住居跡10掘方上に見ることはできず、規模、構造は不明である。後出の住居跡10は東壁の南側に位置する。住居跡の残存は、近世以降の擾乱が深く達していた。よって、竈の残存は、床もしくは底面際に限られていた。竈の残存は、袖部については、左袖に、洪積層中の未固結凝灰岩（軟質砂岩状）



1. 黒褐色。礎土粒・木炭粒を含む。
2. 黒灰色。粘性おびる。
3. 黒褐色。礎土化。カマド床面。
4. 黒褐色。礎土粒多い。カマド破壊のためか。

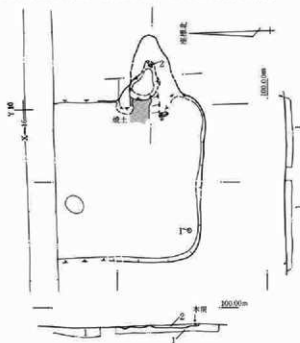
第82図 住居跡8 遺構図

を用いた袖用材が石と別にして袖の黒褐色土中に細片が混じり合って認められ、右袖には、未固結凝灰岩片は見えなかった。そのため、左袖中の未固結凝灰岩は袖構築時に混入させたものではなく、廃棄時点で細片になったものかもしれない。竈前には灰層があり、構築当初の貯蔵穴様の小穴上に達していた。

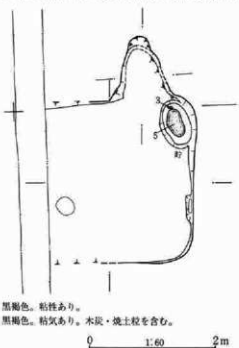
第9章 発掘された遺構と遺物

貯蔵穴様の凹みは、最終時点で機能はしていない。竈の焼土化は、燃焼部の周囲のみが焼け、焚口中央と燃焼部底面部を欠いていた。それは上方からの小穴もしくは土層断面注10の下面が、抜いていたことによる。煙道部の状況は掘方のみであったため、推定であるが、掘方からすれば60～90cmの長さを有し

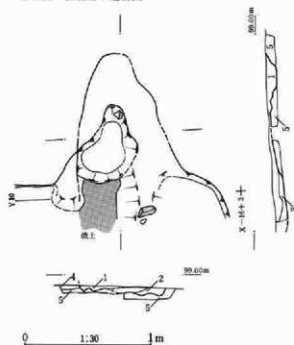
ていたと考えられる。遺物は、第88・89図に示したように、わずかであった。1～3は、住居跡10の掘方と床面間の出土であり、10世紀後半頃の酸化気味の強い須恵器である。第89図は、住居跡11の年代示唆に余りにも不足であるか、酸化気味の須恵器、羽釜もしくは釜片である。10世紀後半頃の遺物である。



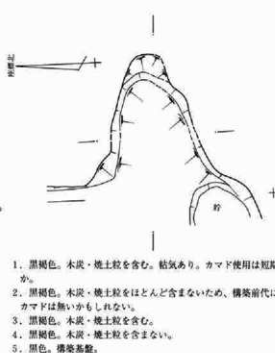
第83図 住居跡9 遺構図



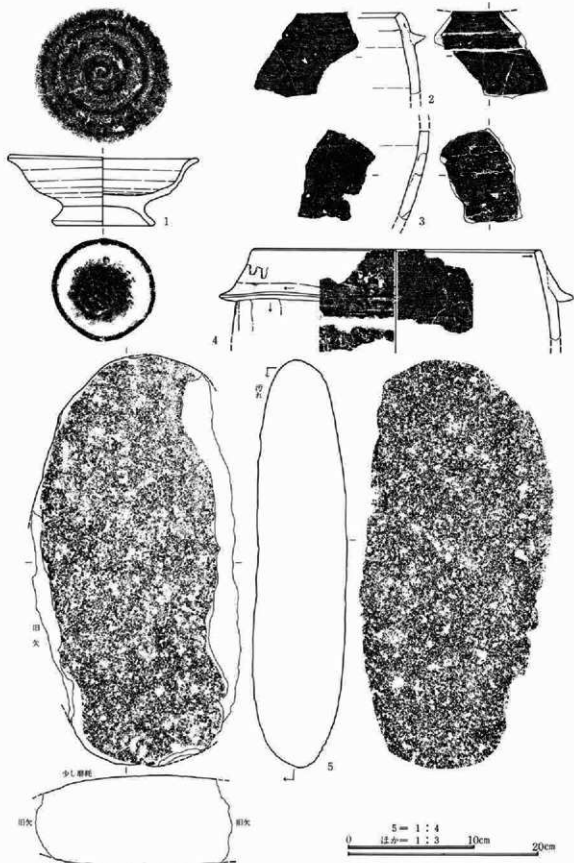
1. 黒褐色。粘性あり。
2. 黒褐色。粘気あり。木炭・焼土粒を含む。



第84図 住居跡9 竈遺構図

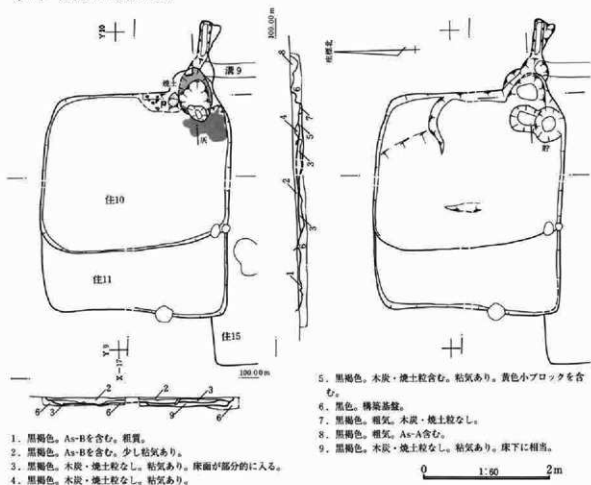


1. 黒褐色。木炭・焼土粒を含む。粘気あり。カマド使用は短期か。
2. 黒褐色。木炭・焼土粒をほとんど含まないため、構築前にカマドは無いかもしれない。
3. 黒褐色。木炭・焼土粒を含む。
4. 黒褐色。木炭・焼土粒を含まない。
5. 黒色。磚築基礎。

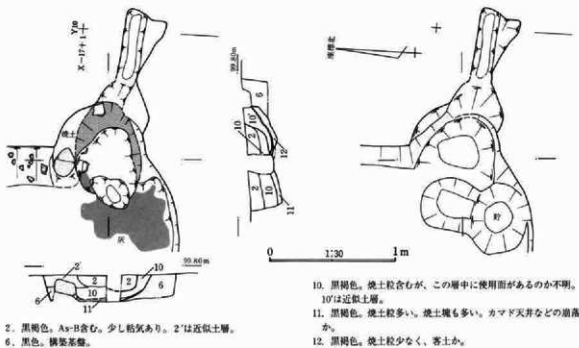


第85図 住居跡9遺物図

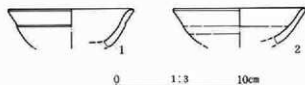
第9章 発掘された遺構と遺物



第86図 住居跡10・11遺構図



第87図 住居跡10竈遺構図



第88図 住居跡10遺物図



第89図 住居跡11遺物図

住居跡12・13・18

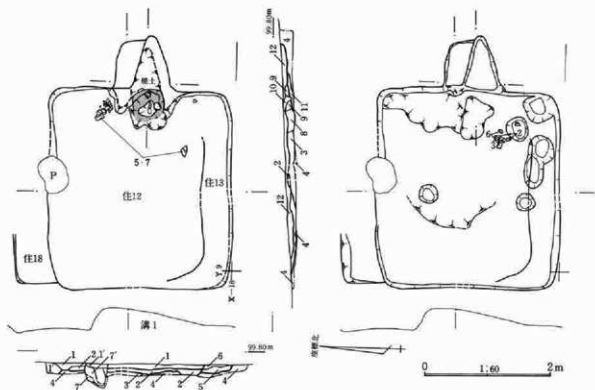
(第90～94図 写真図版37・38)

位置はX-17・18Y 8・9にある。重複は、住居跡12・13・18とが重なりあう。新・古の関係は住居跡12が最も新しく、住居跡13、住居跡18がそれに先行してある。調査当初の平面確認の段階と、発掘調査における平面確認の所見とでは、違いがある。当初の確認では、第90図に示したように住居跡12電前のあたりから南壁の北側、約50cm離れた場所を、南壁の立上に、沿うようにして、住居跡輪郭に見える線が得られた。発掘時に、その輪郭線が住居跡12の周壁になりうるか意識した結果、部分的に住居跡12の周壁と考えられたが、貯蔵穴付近は、当初輪郭と重複してしまい、推奨しうる状態ではなかった。したがってその輪郭の西半に住居跡の南壁と認めたい。その輪郭外から南壁までの間に住居跡13とした。住居跡13と同18の重複関係は明確でないが、住居跡13と同18の掘方底面の深さは、同18の方が一段低いので、各々別住居跡と考えられた。上面からの影響は、平面確認時に中世以降の土壌が床面直上もしくは、貼床層中まで及び、良好な状態にはなかった。住居跡18では既に掘方付近に達し、住居跡13は床面の前後、住居跡12の床面は残存していた。形状は住居跡12は、平面、隅丸方形を呈している。住居跡13についても、南壁の形から隅丸方形を呈していたと考えられる。住居跡18についても、北西隅のわずかな遺存状況は、隅丸気味を示している。附属施設としては住居跡12の竈跡、同貯蔵穴、住居跡13の貯



蔵穴とみられる小穴が南東隅部に存在し、住居跡18の竈掘方に思える掘込が、住居跡12竈跡左側に存在していた。住居跡13の竈跡は住居跡12の竈位置に重複していたようである。規模と方位は、住居跡12について、平面確認時に存在した貯蔵穴際の輪郭を南壁とした場合、東西側の最大長3.18m、南北側の最大長2.4m、方位は西壁でN1°Wを測る。住居跡13は、南壁際で3.12m、南北側は0.48+αm、西壁を基にするとN1°Eを測る。住居跡18は西壁側で0.66+αm、北壁側で0.78+αm、方位は西壁を基にするとN1°Wを測る。竈および貯蔵穴については、東壁中央部に位置した住居跡12の竈跡は、上方の大半を失った状態で平面確認され、数cmを掘り下げただけで、灰層面・焼土化面に達してしまった。したがって旧状はわずかししか知れない。両軸は黒褐色～黒色土であった。竈を埋める土層注記番号15は、焼土塊を多く含み、崩落天井材を思わせる感があった。灰と焼土との関係は、焼土面が下方で、灰層が上方であった。焼土面を掘り抜く小穴は、崩落天井材などを含むと思える土層注記15を掘り抜く。その埋土には近似の土層注記15が入る。その個所は、燃焼部中央にあり、支脚置き取り穴とも思える。発掘方中の土層番号13などは焼土粒が入り、調査された竈の前身か、もしくは以前の周辺に竈の存在が考えられる。その竈は、前代の住居跡13・18の可能性もある。住居跡12の貯蔵穴は発見時では、ほとんど埋没しており、小穴としての機能は最終的には薄かったと思える。しかし貯蔵穴内の遺物番号2と数枚あったと思える下方床面上にあった遺物番号3・6などにまじる2とが接合関係にあるため、生活当初から中項までの段階には機能していた可能性が高い。住居跡13の竈については、住居跡13の竈跡が重複していたのではないかということに関し、前述したが、規模形態について細述しうるのははっきりし

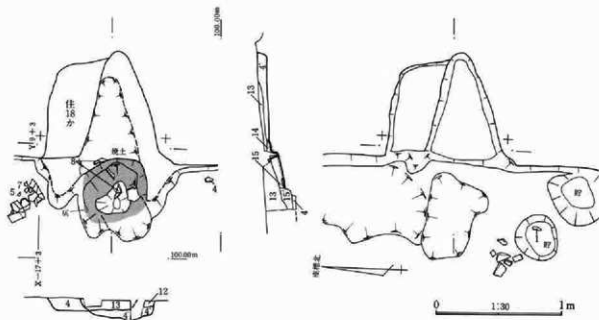
第9章 発掘された遺構と遺物



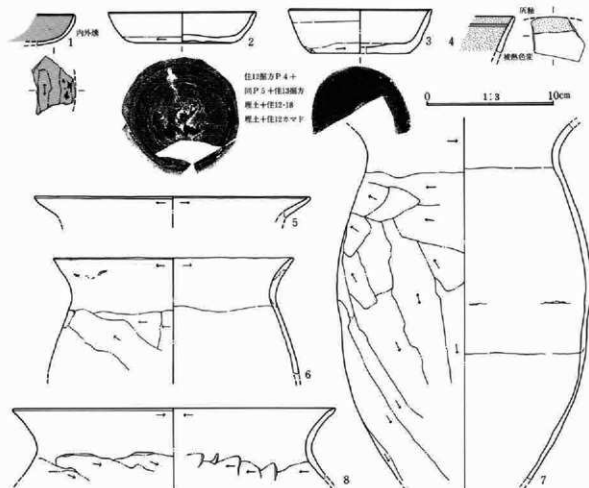
1. 黒褐色。粗質。1'は変なし。1'は近似土層。
2. 黒褐色。黄色土ブロック・黒色土ブロックまじえ、層中に2面以上の床面あり。締まる。
3. 黒色。粘気あり。床下。
4. 黒色。構築基礎。4'は近似土層。
5. 黄灰色。密土層か。
6. 黒褐色。粘気あり。締まる。

第90図 住居跡12・13・18遺構図

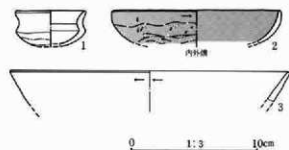
7. 黒褐色。粗質。7'は近似土層。
8. 黒褐色。粘気強く、締まる。黒色味強い。
9. 黒褐色。粘気強い。焼土粒はまじえない。
10. 黒褐色。焼土粒多く含むため、カマド破壊の際に生じた土塊か。
11. 黒褐色。粘気強い。
12. 黒褐色。粗質。As-Bを含む。
13. 黒褐色。焼土粒含むが、実率は少ない。
14. 灰色。粘性土でカマド粘土材か。
15. 黒褐色。焼土塊を多く含み、それは崩落天井材などか。



第91図 住居跡12竈遺構図



第92図 住居跡12遺物図



第93図 住居跡13遺物図



第94図 住居跡18遺物図

なかった。ただ住居跡12の竈跡の掘方幅が第91図のように幅広のため、第91図の住居跡12掘方右側は住居跡13の竈掘方を含んでいた可能性もある。貯蔵穴は周壁南東隅部に考えられた。住居跡18の竈跡は

前述のように、第91図の住居跡12竈跡左側に別掘方があり、それを住居跡18の竈掘方として考えた。貯蔵穴に関しては、住居跡12の床面と同掘方とが低いため、結局は発見されなかった。出土遺物は住居跡

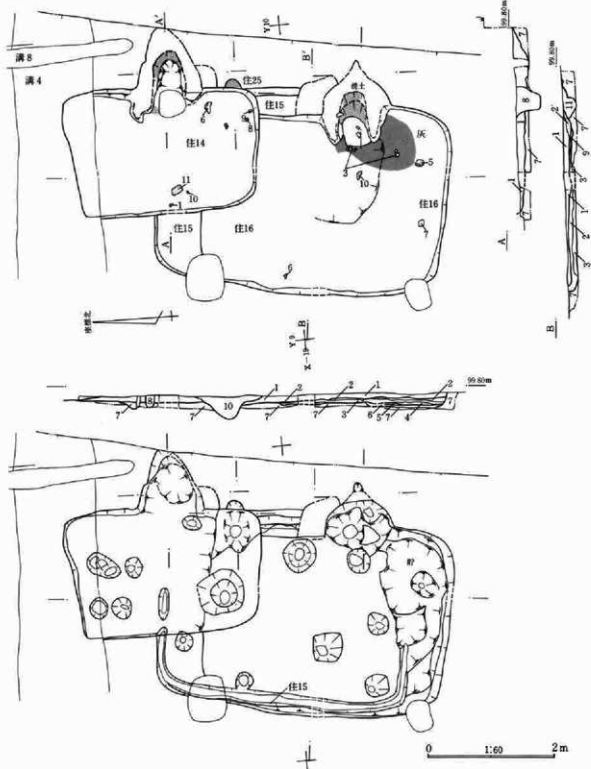
12について言えば、第92図のように8世紀後半の須恵器、器内の削り方が極めて薄くなった段階の土師器甕、小甕（遺物番号6・7・8）があるので住居の機能をその頃と考えたい。住居跡13と同18とは様相が複雑である。その理由は、住居跡18の遺物量が少ないことに加え、住居跡13の第93図の主体が8～9世紀前半にある中で、同図1の7世紀代の小形短頸甕の土師器が含まれることである。そのため、第93図1の小形短頸甕は、3棟重複の、最も古い住居跡18の機能に関連しての可能性を考えたい。また住居跡13の機能は、第93図1を除く、2～4の8世紀から9世紀前半までの幅の中で、重複の新しい住居跡12が8世紀代と考えられたので、それに先行する住居跡13は、8世紀代の機能時期と考えたい。

住居跡14・15・16・25

（第95～102図 写真図版38）

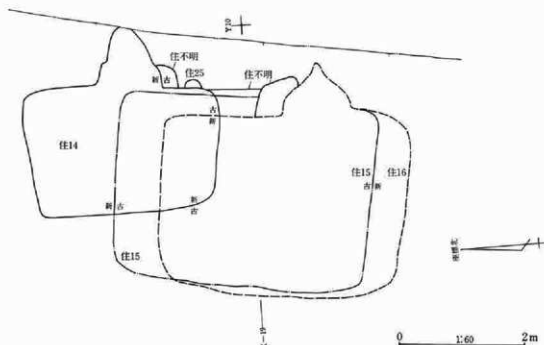
位置はX-19Y9・10にあり、地勾配は西下りのようである。重複は、住居跡14・15・16・25、住居跡の関連不明の遺構2箇所が存在する。住居跡の関連不明2箇所を除き、当初の平面確認時の、新・古の関係は、調査をへても変わらない。関連不明の2箇所は調査中の追加である。重複の関係は第95図上平面図の状態であり、第96図の概念図中にも、新・古を記入した。文字で表現すれば、住居跡14・15・16・25と住居跡関連不明2箇所との相互の関係は、住居跡14と溝4は、溝4が新しく、住居跡中、住居跡14が最も新しい。住居跡15は住居跡14・16より古い。住居跡16は、住居跡15より新しい。このほか小穴が住居跡14～16と重なるが、いずれも小穴が新しい。各住居跡の遺存状況は、住居跡14は床面を既に失い、住居跡15も床面を失い、この重複した一群の中では唯一、住居跡16の床面のみが残存していた。形状と規模・方位は、住居跡14について、同14は東壁・北壁が対壁よりも長く歪んだ隅丸方形を呈している。北壁掘下方において1.95m、東壁下で3.1m、同壁はN3°30'Eを指す。住居跡15は、東壁の残部、北壁および周溝をもつ掘方から見れば、隅丸方形を

呈していたと考えられ、残存状態を最大限に捉えて測ると、東・西長2.88m、もしくは3.24m、南北長3.96mを得ることができる。この際、住居跡15を測る場合に問題が一つある。それは、異なる二つの輪郭が東壁に認められ、そのうち、どちらを住居跡15の輪郭として認めるかである。第95図の上方面図の住15と記入したのは、その外方にある2本の輪郭線のうち、内側を指しているのであるが、この後、掘方調査を行い、周壁溝を各所で確認し、東壁については、外側の輪郭に沿って発見された。当初、認定した周壁位置を越えてしまったのである。その外側の輪郭を住居跡15の東壁とした場合、竈指方と推定される、南側に隣接の小穴が、住居跡内側に大きく食い込んでしまい、形態上疑問視される。そのため、どちらの立上りが住居跡15に伴うか明確にはできなかった。方位は、掘方西壁でN12°Eを測る。住居跡16は、隅丸方形を呈するが、東壁の竈位置を挟む左右において、周壁の張り出し長が異なっている。そのため、西壁下の長さを求めれば、3.84m、短辺長を、南壁下で求めれば、3.06mを測り、方位は西壁でN8°Eを指す。住居跡25、竈部の残存がわずかで、住居跡形態、規模の判定・測定はできない。竈跡・貯蔵穴は、住居跡14の竈跡は、東壁のおよそ中央にあり、掘方を含むと、住居跡規模よりも、大規模に見える平面観にある。しかし、残存は第97図に示したように、上半部は削平されていた。ただ今回の調査例中、残存の程度は良い方であった。竈跡の上層を占めていたのは、粗質の黒褐色であったが、後出時期に小穴が及び、焼成部・支脚部などが破壊されていた。袖部は右袖やや短く、左袖がやや長い傾向にあったが、基部に近い存在のため、そう明瞭な形ではなかった。竈の焼土化は、燃焼部の奥壁側で焼土化が残され、左袖側にもわずかに認められた。しかし灰の面的な広がりは認められなかった。貯蔵穴は、当初の段階、掘方調査においても明確にできなかった。特に、貯蔵穴の相当位置に、住居跡25の竈燃焼部が存在しており、そのことも調査上、不明確となった一因がある。住居跡16の竈位置は、東壁

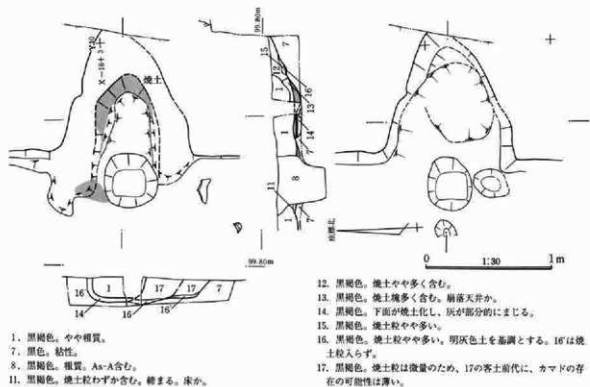


- | | |
|--------------------------------|-------------------|
| 1. 黒褐色。やや粗質。 | 7. 黒色。粘性あり。 |
| 2. 黒褐色。黒色土ブロック、焼土粒を含む。床土。粘気あり。 | 7: は近似土層。 |
| 2: は近似土層。 | 8. 黒褐色。粗質。A-A含む。 |
| 3. 黒褐色。黒色土ブロック、焼土粒を含む。床土。粘気あり。 | 9. 黒褐色。焼土粒入る。 |
| 4. 黒褐色。灰色粘気土・黒色土ブロック含む。床土。 | 10. 黒褐色。粘気あり。柱穴か。 |
| 5. 黒色。黄色土層が塊状に入る。床土。粘気あり。 | 11. 未注記。 |
| 6. 黒色。黄色土層が塊状に入る。床土。土器入る。粘気あり。 | |

第95図 住居跡14・15・16・25遺構図



第96図 住居跡14・15・16・25範囲概念図



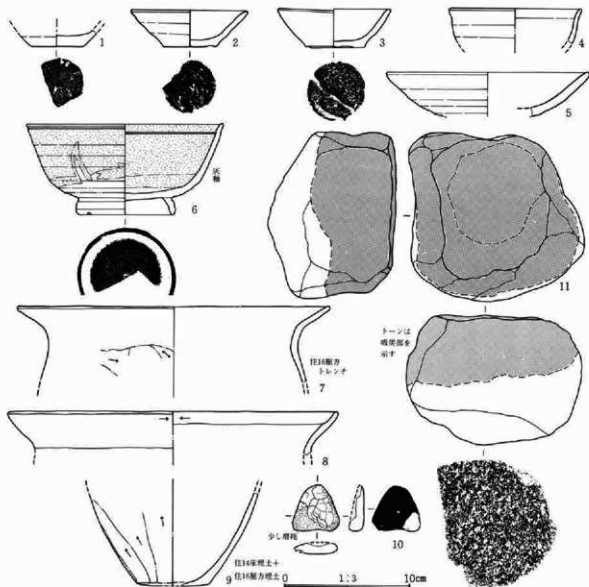
1. 黒褐色。やや粗質。
7. 黒色。粘性。
8. 黒褐色。粗質。As-A含む。
11. 黒褐色。焼土粒わずか含む。轉まる。床か。

12. 黒褐色。焼土やや多く含む。
13. 黒褐色。焼土塊多く含む。崩落天井か。
14. 黒褐色。下面が焼土化し、灰が部分的にまじる。
15. 黒褐色。焼土粒やや多い。
16. 黒褐色。焼土粒やや多い。明灰色土を基調とする。16'は焼土粒入らず。
17. 黒褐色。焼土粒は微量のため、17の客土前代に、カマドの存在の可能性は薄い。

第97図 住居跡14竈遺構図

のやや南寄りに設けられ、第99図のとおりである。遺存状態は、調査上面から、10cm内・外で焼土面まで達し、上方の大半は失われた状態にあった。さらに土層注記番号1・2を埋土とする小穴が、燃焼部

の中央および支脚部を破壊してあり、焼土化面・灰層面が、その箇所には認められなかった。袖部の残存も、極めて低かった。焼土化は、小穴を除く燃焼部の大半にあり、灰層面は燃焼部の西半から南西方



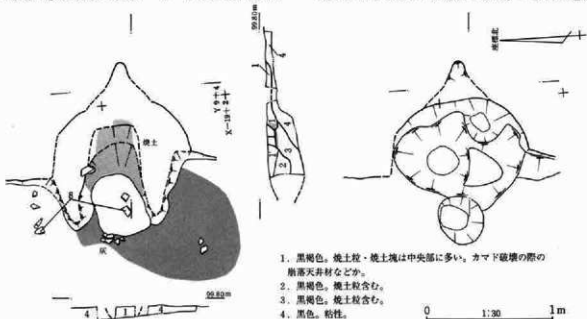
第98図 住居跡14遺物図

向にかけ、70～80cmの広がりが認められた。貯蔵穴は、調査した住居跡床の延長上では、わずかな凹みであり、前出灰層の一部がおよんでいた。その位置が明確になったのは掘方調査の時点で、住居跡南東隅部に1.1mを越える浅い凹みとなって現れた。その埋土は数枚の床層があり、序々に埋まったと考えられた。竈の掘方の埋土中には、焼土粒が認められ、調査された竈の前代にも前身の竈が存在したか、あるいは付近に竈が設けられたことの証左となろう。住居跡25の竈跡は、住居跡14に切られて発見されたが、住居跡14・15の住居跡外西方に関連の床面・掘

方を見なかったので、本来の床面は浅い位置に存在した可能性がある。竈跡の調査結果は、第100図に示したとおりである。図中の不明住居跡は、住居跡25の竈跡と東壁の一部を切るように描いてあるが、その住居跡は、確かに住居跡25の掘方を切っていたが、その他でその住居跡の関連は得られなかった。住居跡25の竈の焼土化、灰層は、図中のトーンのとおりである。遺物について、住居跡14は第98図に示した。10世紀後半頃の第98図1～3が床面、住居裁割トレンチなどから出土している。しかし、同図7～9のとおり、前代の土師器も認められ、重複住居

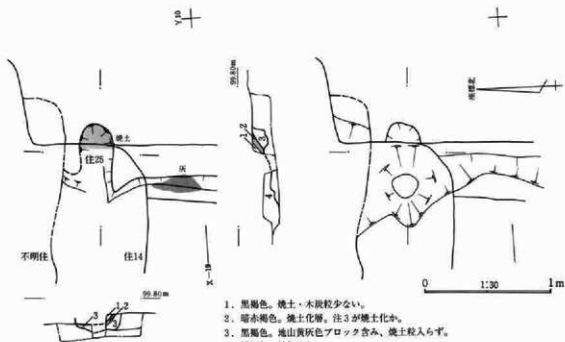
からおよんだ可能性もある。特殊な遺物として、同図11がある。吸炭が部分的に認められ、竈用材かもしれない。住居跡16の遺物は第101図に示した。そのうち床面に伴って出土した完器は同図5のみで、床面に伴う同図3には小破があり、同図10は石であった。土師器は全体的に8世紀中頃でも前半に近い時期と考えられ、同図1・4・5などの坏は、寛

削位置が型膚帯にまでおよぶ。また口反りのある同図6・7などの皿・坏の形態は、西毛地域多用の一端が示される。同図8は、器内薄作りの段階に入っていることを伺わせる。同図9は底部片を欠くが、口径が大きく、頸部のくびれが浅いため飯かもしれない。11は、わずかながら摩耗を受けていると見られる石であり、川原石である。こうした遺物の



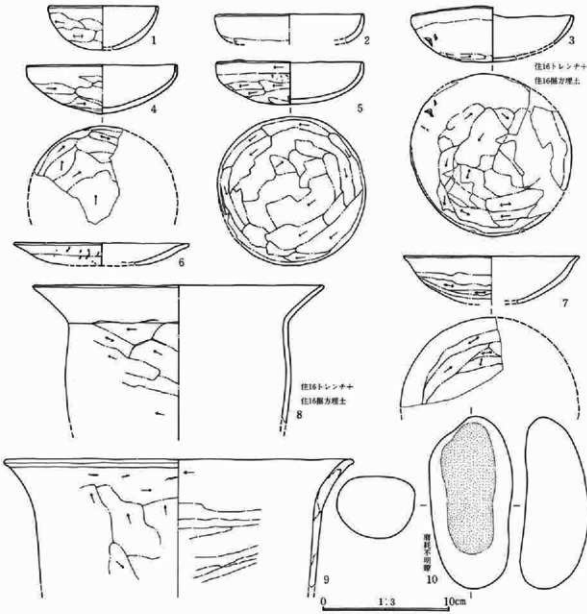
1. 黒褐色。焼土粒・焼土塊は中央部に多い。コマダ破壊の際の崩落天井材などか。
2. 黒褐色。焼土粒含む。
3. 黒褐色。焼土粒含む。
4. 黒色。粘性。

第99図 住居跡16竈遺構図

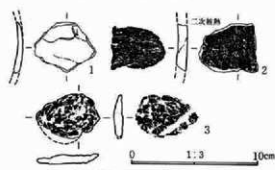


1. 黒褐色。焼土・木炭粒少ない。
2. 暗赤褐色。焼土化層。注3が焼土化か。
3. 黒褐色。地山黄灰色ブロック含む、焼土粒入らず。
4. 黒灰色。粘気あり。

第100図 住居跡25竈遺構図



第101図 住居跡16遺物図



第102図 住居跡25遺物図

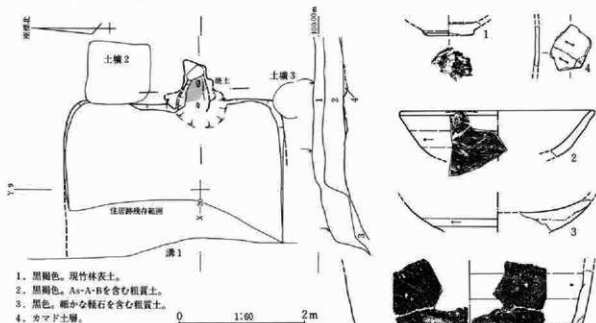
中で、形態上、全体的な時期と不一致は同図2で、8世紀末から9世紀前半頃の坏形態にある。住居跡25について遺物は、第102図に示したが、いずれも

小片で器形状を伺うことはむずかしいのと、10世紀以降の製品と考えられる同図2が入っている。

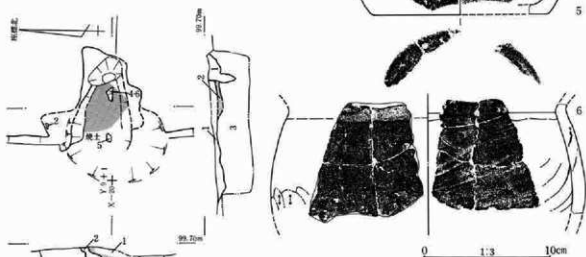
住居跡17 (第103-105図 写真図版38)

位置は、X-19・20Y 8・9にある。重複は土壁2・3、西半を溝1によって削平される。住居跡の大半は、上方からの耕作と攪乱によって失い、かろうじて掘方が残る。形態と規模・方位について、形態は、東壁の状壁から、隅丸方形を呈する。規模は、東壁下で3.48m、南壁下で2.22+a m、方位は東壁で、N1°30'Wを測る。竈跡・貯蔵穴について、竈

第9章 発掘された遺構と遺物



第103図 住居跡17遺構図



1. 暗褐色。堆土塊を多く含む。φ1mm以下の白色粒(軽石)が多く含まれる。粘性あまりなし。締まりあり。土器片が含まれる。
2. 赤褐色。ほとんど焼土。粘性あまりなし。締まりあり。φ1mm以下の白色粒子が少しみられる。
3. 黒褐色。少し灰色がかる。粘質土で締まり強くあり。地山か。φ1mm程の白色粒子が多く含まれる。この下部には、ロームと思われる黄褐色ブロックが少し混入した層あり。

第104図 住居跡17竈遺構図

跡は、焼土部奥側の焼土化を認めるほか、旧状の遺存は少なく、部分的には掘方埋土に達した状態で発見された。貯藏穴は、明瞭でなく、存在していた場合は貼床中にあったであろう。調査面は、既に掘方

第105図 住居跡17遺物図

に近い。出土遺物は、第105図のとおりである。竈内から出土した、同図5の小片は、酸化焙焼成の終末期の須恵器釜で、10世紀末頃の製品である。

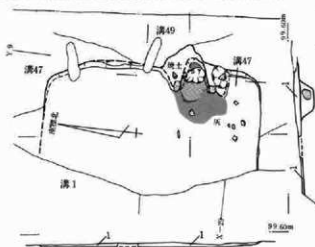
住居跡18・19 (前出)

住居跡20 (第106~108図 写真図版38)

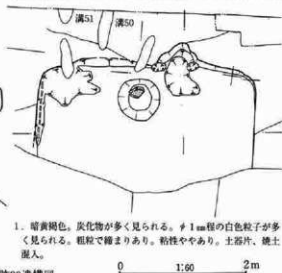
位置は、X-28・29Y 8・9に位置している。重複は、後世の溝跡50・51などの小溝と、前代の溝跡47と重なる。溝跡47と住居跡20とは、住居跡20が

新しい。このほか竈前左側の小穴は住居跡に伴うものである。状態は、後出の溝跡1によって西半が失われていた。上面は、近代までの耕作や攪乱が床面近くまで達していた。しかし、床面の硬化状態は認め得た。形態は、西壁を除く、各壁面の状態から隅丸方形気味に見えた。規模と方位は、東壁際で、3.4m、中央の東・西で $1.98 \pm \alpha$ m、方位は東壁で $N 1^{\circ} 30' W$ を測る。竈・貯蔵穴について、竈跡は、東壁のやや南寄りに設けられていた。遺存は、焼土面まで10cm以上の土壌を残した状態から掘り進むこ

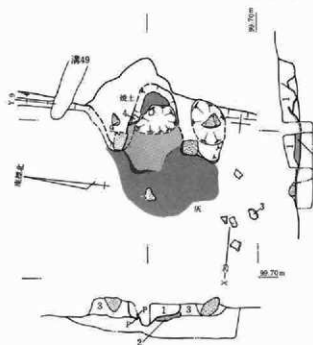
とができ、条件は他の住居跡よりも恵まれていた。燃烧室奥側に、竈廃棄後に設けられた小穴により、焼土化の個所が削られ、同様の小穴は右袖側にもあり、袖部の一部が削られ、竈用材の一石が出土している。袖部は、黒褐色土で、袖部の先端には、未固結凝灰岩（洪積）による方形の袖石が設けられ、左袖芯にも、石材は認められた。左袖石材は第108図9に掲げたとおり、被熱の状況が伺えた。その掘方埋土には焼土・木炭粒が入り、調査された竈の前代の竈もしくはそれに類した遺構がこの周辺に存在し



第106図 住居跡20遺構図



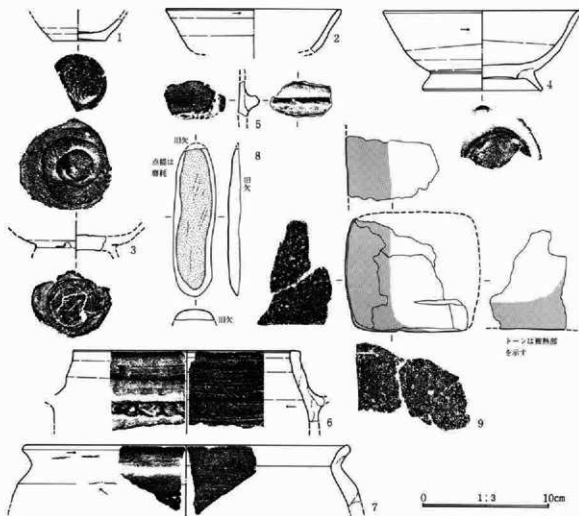
1. 暗黄褐色。灰化物が多く見られる。 $\phi 1$ mm程の白色粒子が多く見られる。粗粒で雜りあり。粘性ややあり。土器片、焼土混入。



1. 黒褐色。焼土・木炭粒含む。
2. 黒褐色。地山の焼土化。
3. 黒褐色。袖材。砂質土と粘性土の両方入る。

0 1:30 1m

第107図 住居跡20竈遺構図



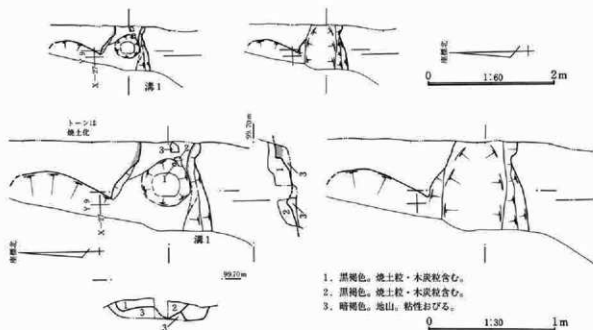
第108図 住居跡20遺物図

ていたと思われる。焼土化は焚口・竈前にもおよんでいた。さらにその上面の一部と竈前にかけて灰の広がりが見られた。貯蔵穴は、右袖側、および住居跡南東壁際には認められず、掘方調査の際、左袖側に小穴が発見されている。この小穴は、上面を硬化床面が被っていたのか、いないのか未確認であったため、住居廃棄時に存在していたのかいないのか不明である。そのため貯蔵穴の可能性もありうる。出土遺物は第108図に示した。床面に伴うのは、同図3、竈跡の壁際に沿って同図4が出土している。同図1は底面の切り離し不明瞭で、口縁部も欠くが、10世紀後半から末期までの須恵器環に見える。同図2・4もその頃の製品であろう。床面から出土した同図3も、内面に特徴的な工具の水挽道具条痕が入り、その頃の製品である。同図6は、口径と口縁部立上

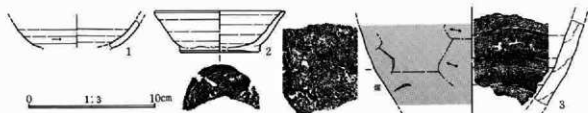
角度がやや内傾気味で、口縁端部でやや外反気味の形状をとるため、やや遅る時期と考えられるが、10世紀代の製品に変わりはない。同図7の釜も、10世紀末頃の製品に見える。

住居跡21 (第109・110図 写真図版38)

位置はX-26・27Y 8・9にある。重複は、溝跡1によって住居跡の大半が失われていた。床面は既になく、掘方の残存もわずかであった。形態は北東隅部が、隅丸を呈することから、隅丸方形気味の住居であろうと思われる。規模は、東壁側で1.62+ α m、北側の東西で0.27+ α m、方位は、東壁側でN28°Eを測り、他の住居跡とやや方向性を異にする。竈・貯蔵穴について、貯蔵穴は、溝跡1によって大半が削平されているため、発見されなかった。



第109図 住居跡21遺構図



第110図 住居跡21遺物図

竈跡については、東壁側に設けられていた。残存状況は、第109図のとおりである。廃棄時の中央の小穴は、土層断面注記1を埋土としているが、同層は焼土化面を切って存在している。そのため廃棄時より後出の行為としよう。袖部は、右袖側に溝跡1に削平されていたが、左側についても、残存が浅く不明であった。焼土化は、平面図の燃焼部奥側、左・右壁、および、底面に認められた。底面の焼土化の範囲の記入がないのは記録漏れである。竈調査の初期に見えられた小穴は、小穴の掘られた、住居廃棄直後の時点と思えば、支脚採取穴と推定される。出土遺物は第110図に示した。同図1～3まで竈跡埋土の出土である。同図1・2は、10世紀後半頃の須恵器終末の頃の製品とみられる。

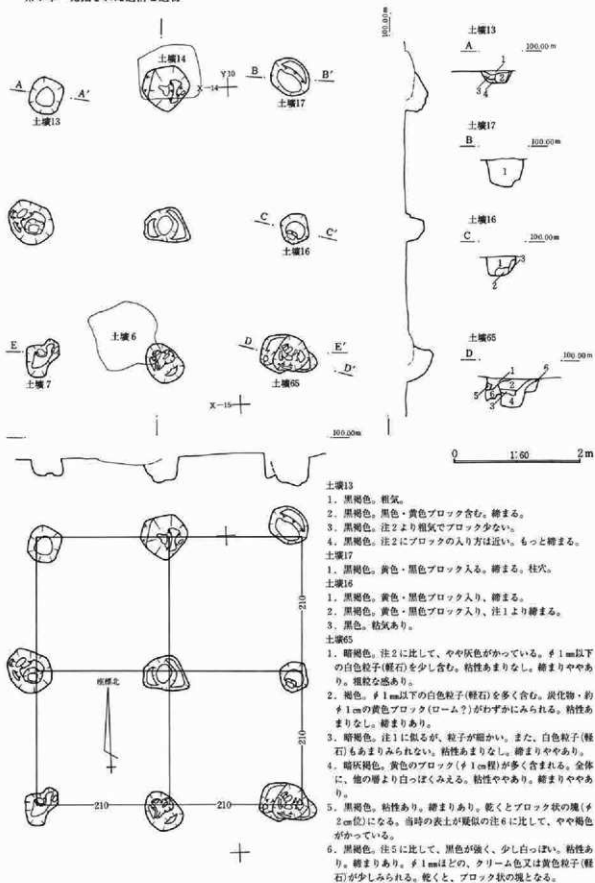
第3節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は2個所で発見され、そのほか構築

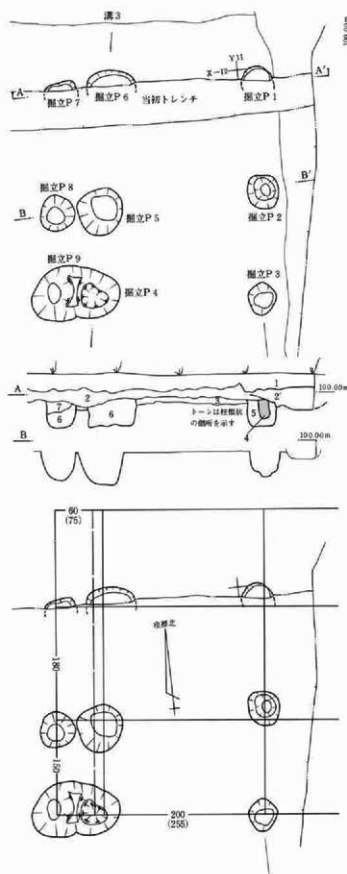
らしき1個所がある。この3個所は埋土の質感は共通しており、時期的に近似の時代と考えられた。調査時は、上面を近・現代の耕作・攪乱がおよんでいたため、まずは掘立柱建物の存在よりも、近・現代の小穴が目立っていた。そのため、柱穴番号は設けずに土壌番号を付して扱ったので、本書も変更せず、調査時の土壌番号を、そのまま用いた。また第111・112図中の柱間算出値は、調査作業中に、鉛筆淨書、柱間方眼図の作成を行い確認した値である。

掘立柱建物跡1 (第111図 写真図版39)

位置は、X-14・15Y10・11にある。重複は、近・現代の小穴が重なる。そのため、土壌番号を付した土壌をいくつか掘った結果、掘立柱建物跡の認定を行ったので、認定が遅れ、通しの土層断面を作成することができなかった。形態は、東・西2間、南北2間、9穴からなる総柱建物である。掘方形状は土



第111図 掘立柱建物跡1遺構図



第112図 掘立柱建物跡2遺構図

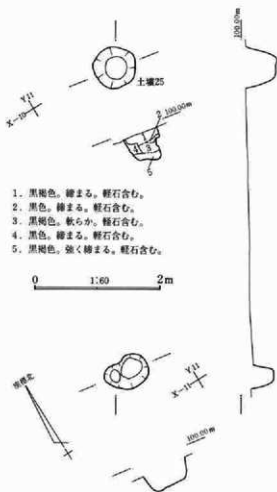
1. 黒褐色。現竹林表土。
2. 黒褐色。As-Bを含む粗質土である。
3. は腐乱土層。
4. 黒褐色。軽石を含む。やや締まりはあるが、柱痕か。
5. 黒褐色。軽石・Faの小ブロックを含む。黒色粘性土ブロックを含む。締まりあり。
6. 黒褐色。軽石含む。注3のブロック・FAブロック含む。
7. 黒褐色。軽石。注6より注3のブロック量が多い。

0 1:50 2m

面規模・形態ともに各様の感はあるが、土壌65は上方の中段部を除くと、他の柱穴に似る。土壌7が変形しているように見えるのは、上面の遺構調査時に、削ったためによる。中央柱穴に中段があり、少し異形なのは発見時からである。第111図に示した成り断面図は現場作成である。そのうち南北成り断面のうち土壌65の北壁直下が、尖り気味なのは、掘り過ぎがあるのかもしれない。それを除く、成断面形状、土層断面掘方形状は、ある範囲内で共通する。ある範囲とは掘方底面において角張りのとれた横断形状などを指す。土層断面所見は、第111図右上ばかりでなく、土壌6・14なども土層図を記録している。土層観察の結果、土壌65の断面のように建て替え、掘り直しに見える土層状態は少なく、土壌17ほか、中段や、少し張り出す輪郭などは、掘立柱建物構築所作の結果生じたと解釈される。そのことは他の柱穴に、同様の所作痕が共通してある訳ではなく、部分的に掘り直しが生ずる理由は、柱筋などをそろえるためと想像される。柱穴埋土は、全体的に締まっており、根がための状況がしのげられる。柱痕は、鮮明な輪郭や、直径が知れるような横断面はなく、柱抜き取りと推定された。埋土の質感は、浅間山B軽石 (As-B) を含むか否か区別できず、古代か中世

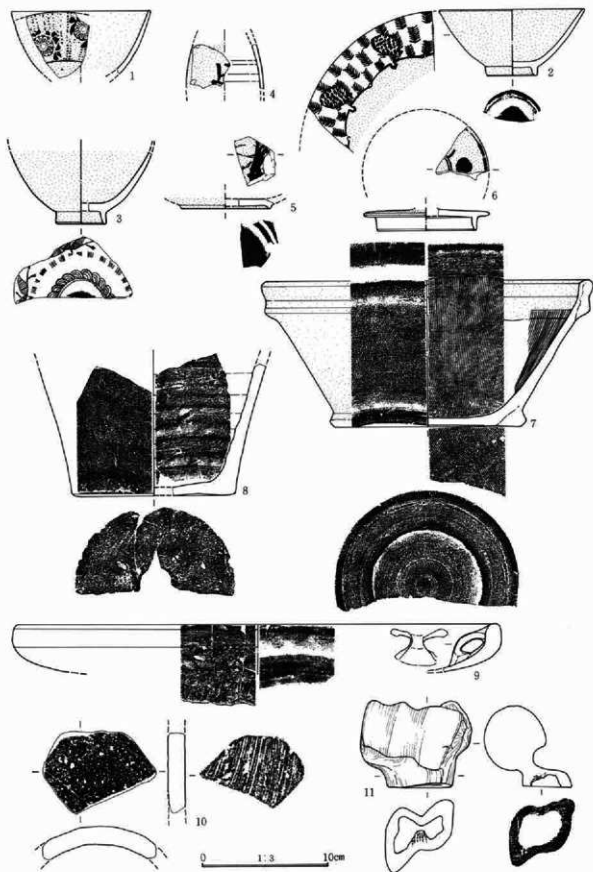
か判定できない結果であった。そのことは、出土遺物から15世紀頃の溝と推定された溝跡18の埋土下層と極めて近似した質感にあった。それなら、この掘立柱建物跡を15世紀にすればよいのではと読者は思われるかもしれない。しかし、上野地域における中世掘立柱建物跡の柱穴は、径50～60cmを超えることは少ないため、掘立柱建物跡1について中世であることに疑念が持たれるのである。したがって、古代である可能性と、中世である可能性を示しておきたい。以上、埋土に係わる説明であった。さて、規模は、方形2間で、柱間は2.1m+2.1(7尺)m=総長4.2m、方位N3°Eを測る。出土遺物は、細かな土師器片が少しある。

掘立柱建物跡2 (第112図 写真図版39)

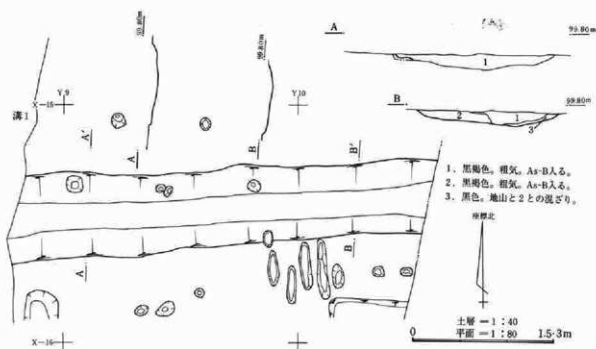


第113図 土壌25ほか遺構図

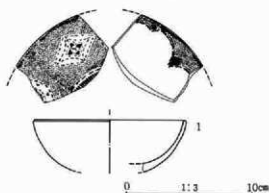
位置はX-11・12Y10・11にある。重複は、北方を、溝跡3が東・西走し、北側に延長部が存在しているとしたら、削土されたことになる。東側も中世以降の小溝が接して南北走している。調査は、平成5年度調査の当初、試掘トレンチをX-12ライン上に設けた際に発見されたのであるが掘立P1・6・7(整理時名称)については截ち切ってしまった。調査上の露呈面は、第112図の土層注記3の上面である。形状は6つの柱穴を発見し、東・西に1間と西側に廂、南・北に2間分である。廂側の方向と柱間、間隔から考え、棟走行は南北であろうと思われる。柱穴の形態は、掘立P4・9とが接してしまっているが、掘り過ぎであった。図は掘り過ぎのまま図示してある。柱穴の形態は、掘り過ぎの掘立P4・9を除くと、南北の柱穴列単位で揃う傾向を示している。埋土は、全体に締まり、土層の質感もよく似ていた。つまり、中世の質感があったもの、古代の住居跡埋土を締めたようでもあった。柱痕は、疑似であるが掘立P1の土層断面にみられた。根腐れ柱痕のように軟らかく、黒色味が強くはなかったが、土層の柱状は不自然であった。また抜取痕のようにも見えず、歯切れの悪い結果となった。建物規模と構造の検討は、記録図面の浄書図を基に行った。その結果、棟走行を南北とした場合、廂を伴い除の桁行数(偶数間)であるのは、北方が削平されている以上、可能性が少なく、奇数3間を取ることが合理であろうと解釈された。その際、桁側中央が、両脇よりも広い1間となり、3間分の中央であろうと考えることに整合性が生じる。妻側は、2間を想定し、同等柱間分をもって延長すると、桁側よりも梁側が長い、極めて特異な外観が考えられ、しかも内部には東柱に伴う床張りが想起させられる。そのため、現状のままであっても、想定上の廂付3間2間の場合であっても特異な形態の建物である。規模は実長の場合、南北、1.5+1.8m=3.3m、東西、0.6+2.7(2.55)m=3.3(3.15)m、方位N6°30'Eである。想定上の規模は、南北、1.5+1.8+1.5=4.8m、東西、0.6+2.7(2.55)+2.7(2.55)=6.0(5.7)m



第114圖 溝跡1遺物図



第115図 溝跡3 遺構図



第116図 溝跡3 遺物図

である。なお（ ）は掘り過ぎのために生じた不確定要素の最少値である。出土遺物は、土師器の小片がわずかにある。

柱穴列（土壇25ほか）（第113図 写真図版39）位置は、X-10・11 Y 10・11にある。重複遺構はない。状態は第113図のように柱穴らしき2つの小穴が近接しているため捉えた。しかし2穴は、規模、平面形状ともに異なっており、同時性は薄いと考えられる。共通性は埋土にあり、ともに前出掘立柱建物跡1・2と類似の質感にあった。規模・方位に関し、両柱穴の距離は4.8mあり、両柱穴を結ぶ方向

性は、N28°Eを測る。この方向性、前出掘立柱建物跡の方向性と異なる。柱痕について、土壇25の土壇断面中の注記番号3は、軟らかく、注意される。出土遺物はない。

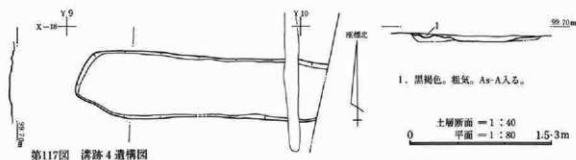
第4節 溝 跡

溝跡について、時期は、古代から現代溝まで存在する。それらの性格は、流水の痕跡があり、溝跡とするに、ふさわしい状態のものから、近・現代の畑、さく跡と考えるような例まで、様々であった。ここでは、調査中に力点を置いたり、関心を持って調査した溝跡を掲げ、その記述から漏れた溝について、調査区単位で説明を加えたい。

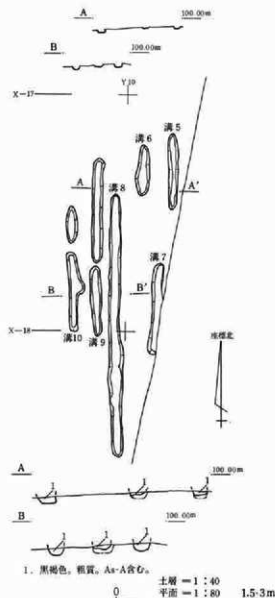
溝跡1・2

（第61・62・114図 写真図版34・35）

溝跡1は、現くるま川の最下面を指して呼称したが、結局は、現代の溝の面まで続き、面的な分離は困難であろうと思えた。調査範囲は第61図のとおり全体で7本のトレンチを設定して、現くるま川と溝跡1との関係を調査した。その結果、明治印刷染付が出土し、考古学的には、その頃の閑さくに思えるが、江戸時代後期頃の陶・磁器片も含み、大正以降

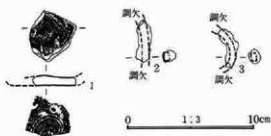


第117図 溝跡4遺構図



第119図 溝跡5～10遺構図

の陶・磁器片も、明治印判磁器片をしのぐ量で出土している。溝跡1の埋土中で注目されるのは、ビニール製品の多さであり、ビニールを含む層と、含まない層とは歴然としていた。溝跡1の範囲は、X-05



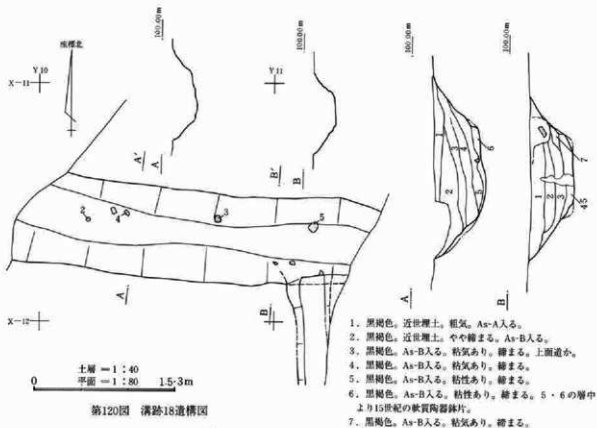
第118図 溝跡4遺物図

Y13付近の滝川より、分流させ、南流し、X-38・39 Y 9に至って、東方に曲がる。規模は、第129図のとおり、土層注記14の下端面で捉えると、幅5.8mを測る。ビニールの入らない土層注記14の上面で、幅3.6mを測る。遺物類は114図に示した。多くは近・現代の遺物であるが、その中に同図11のとおり、加工獣骨が含まれ、滝川上流域に、骨角細工者か、その材料を提供する業者がいたことが示唆される。

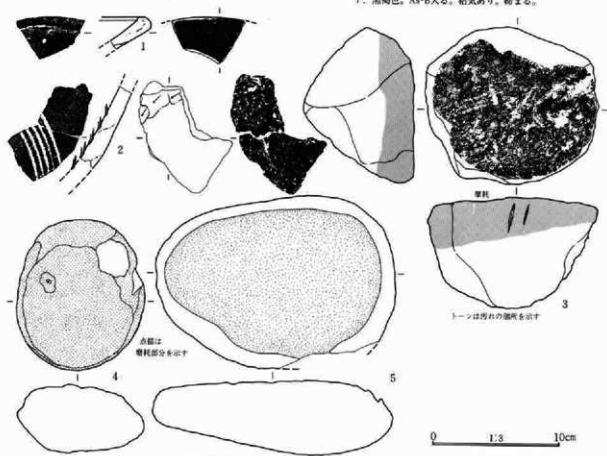
溝跡2は、第61図に示したように、くるま川の遡る時期の河道および堆積物の個所を指す。調査X-12トレンチ以南からX-22・23 Y 7・8拡張区まで達し、現くるま川もしくは溝跡1に重なる。時期は明治印判染付磁器や、江戸時代陶・磁器片を含むが、銅版絵付の時期に達するか、重機によるトレンチ掘削であったため、明瞭にすることはできなかった。規模は、上幅3.5m以上の大きさがあったと考えられるが溝跡1と重なり合うため、溝一単位の横断面は得られず、規模は \pm しなければならない。

旧河道は、遡る時期の滝川の河道および堆積物を指すが、この中には現河道と、堆積物が存在している。埋土中に近世磁器が表層を除いて出土しないことから、おおむね江戸時代前半頃以前と考えられた。その範囲は第61図に示したようにトーンによる既念

第9章 発掘された遺構と遺物



第120図 溝跡18遺構図

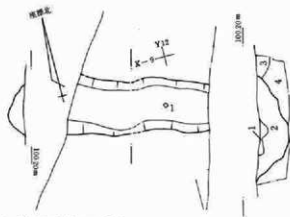


第121図 溝跡18遺物図

図を参照されたい。規模については、溝一単位で把握できなかったため明確でない。また廻る時期の河道と言っても同一時期に成立した訳ではない。そのため現河道域は相当長期にわたり維持されているとみられた。そのことは、他方でクマ川の維持に係わる関係も付加された背景であったとも考えられよう。

溝跡3 (第115・116図)

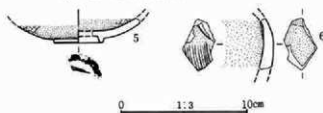
位置はX-15Y 8-10にある。第115図に、その状態を示した。平面的に重複して記入してあるのは後世の遺構である。規模は、最大幅で1.84m、深さは約30cmであった。埋土は、土層断面Bにおいて掘り直しが認められ、浅間山A軽石粒の存在は不明であった。出土遺物は、最上層で、第116図1が出土しているが、埋土の質感は、明治以降には見えないため、おそらくは覆う土壌中からの遺物であろう。



1. 黒褐色。粗気。As-A入る。
2. 黒褐色。締まる。As-B入る。
3. 黒褐色。粘気あり。
4. 黒褐色。粘気あり。軽石粒含み、わずか焼土粒入る。

土層 - 1 : 40
平面 - 1 : 80 1.5-3m

第122図 溝跡21遺構図



第123図 溝跡21遺物図

溝跡4 (第117・118図)

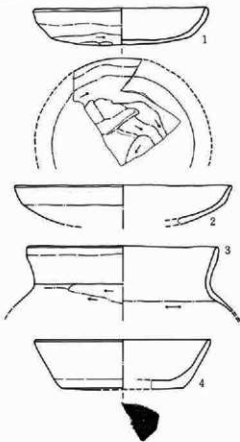
位置は、X-18Y 9・10にある。第117図にその形状を示した。細線の南北溝は後世溝である。埋土は、流水の形跡はなく、浅間山A軽石粒を含むことが確認できた。規模は、幅1.2m、深さ6cmであった。出土遺物は、中世土師質土器坏片、鉄器片などがある。方向は東西に対し南側に3-4°傾く。

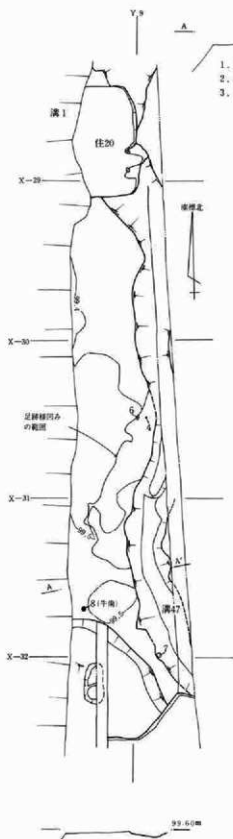
溝跡5-10 (第119図)

溝跡5-10は旧時の畑さく跡とみられる並走する小溝群で、埋土は、粗気が強く、極めて新しい時期の所産と考えられ、浅間山A軽石粒が含まれているのを認めている。方向はおおむねN 2°Wである。

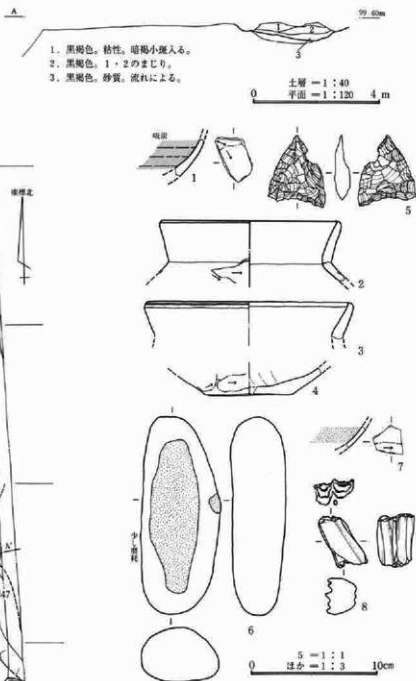
溝跡18 (第120・121図 写真図版39)

位置は、X-11Y 9-11に位置する。重複は住居跡7を切り、南北走するY11ライン沿いの小溝より先行する。形状は第120図に示したとおりである。





第124図 溝跡47遺構図



第125図 溝跡47と関連の遺物図

規模は、幅1.9m、深さ60cm、方向は、東西に対し、南に約4°傾く。埋土に、浅間山B軽石粒を含むのを認めているほか、埋土の質感としては締まり、古代の埋土を思わせる状態があった。その締まり方は踏まれているらしく、道として使用された可能性がある。出土遺物は、第121図に示したとおりである。

遺物種としては、同図1・2が中世軟質陶器鉢、3が石材、4・5が磨石である。同図1・2の鉢は、口縁部形状、卸目の形状から15世紀代の製品であり、溝底近くからの出土である。同図3は、表面が摩耗しているとともに、外面上半が、汚れ、もしくは吸炭しているように見えるため、礎石かもしれない。同図4・5の摩耗は、顕著でない。

溝跡21 (第122・123図)

位置はX-9 Y11・12にある。重複は、住居跡4と重なり、溝跡21が後出している。状況は第122図に示した。規模は、幅1.28m、深さ40cmである。方位は、東・西より16°30'南へ傾く。埋土の質感は、浅間山B軽石粒を含むが、締まりは中世というよりも古代に近い感じにあった。遺物は、第123図に示した。溝跡21は、住居跡4と重複したためか、土師器・須恵器の出土が目立った。同図5・6は近世陶・磁器であり、埋土中からの出土である。溝の機能時期は近世で、浅間山A軽石降下の前代であろう。

溝跡47 (第124・125図 写真図版40)

位置はX-25-32 Y 8・9にある。重複は住居跡20が、溝跡47を切る。さらに溝跡37-46が後出して重複する。状況は第124図に示した。規模は幅1.16m、深さ約20cmである。埋土の状況は、砂とシルト質粘性土が互層をなし流水の形跡があった。さらに西接のX-30・31に足跡状の凹みが認められ、それに連続した形で溝跡47が存在していた。つまり低地帯中に溝跡47が存在していたことになる。また足跡状の凹みが存在する西側は、わずか高まりを感じ、畦跡が倒平化を受けたとも思えた。出土遺物は第125図に示したが、その中で同図7は、溝埋土の最上面からの出土であり、上方からおよんだ可能性がある。同図8は、溝中ではないが隣接の高まりから発見された。水利折順の故道であろう。土器類は、細片のため明瞭でないが、7・8世紀のやや肉厚の頃の製品に見え、溝跡47が北方で住居跡20に切られることから、10世紀末よりも遡る遺構であることは確かである。

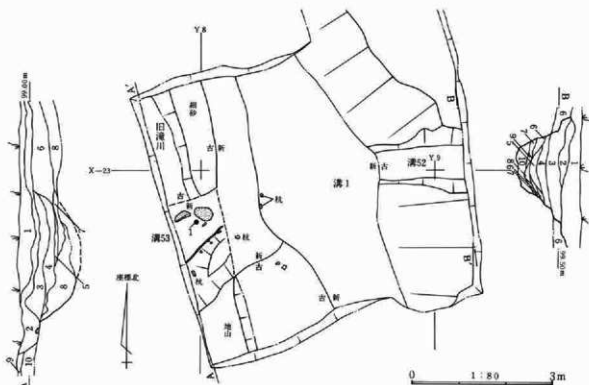
ある。

溝跡52・53 (第126・127図 写真図版40)

位置はX-22・23 Y 7・8にあり、同拡張区のみでの調査であった。同拡張区は、溝跡1により分断されていたため重複関係も分かりづらい。新・古の関係は第126図に示したとおりである。溝跡52は延長上にある東接の畑地帯中に、わずかな落差を認め、溝の存在が予測され、さらに溝跡18が中世土地区画や館跡に関連すれば、対応の溝が存在するものと考えていたことから拡張におよび、発見されるに至った。溝跡52・53の両溝は溝跡1に切られる以前、連続していたか否かは、不明であったが、両溝とも、19世紀頃の陶・磁器片が時期を示唆するため、溝跡1間さくの前代に連続した同一の溝であったとしても不思議ではない。また溝跡52が、溝跡1から引水した場合は、引水のための土留めの枕などが設けられておらず、溝跡1と溝跡52とは有機的な関係にないといと推測された。溝跡1と溝跡53の関係は、やや不明瞭であった。それは護岸枕や同材が、溝跡1際、溝跡53中にも見られ、溝跡53が、溝跡1から引き込んだ可能性を有していた。溝跡52・53の横断面の所見は、各々掘り直しがあり、明らかに流水の痕跡が認められた。その規模は、溝跡52について、幅2.16m、深さ1.1m、方向性はほぼ東西である。溝跡53は、幅2.7m、深さ1.2mである。

溝跡56 (第128-130図 写真図版41)

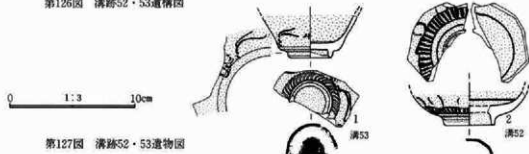
位置は、X-33-38 Y 8・9に含まれる個所のみを調査した。さらに延長部は、第61図中の概念図のように考えられ、第128図の拡張区における地山の残存は、中洲帯のなかでも最北であり、そこまで残存しているものと考えられた。重複は、直接、重なり合う中では最も古い。上方に溝跡1・2、滝川田河道が存在する。X-1以南で、最古の溝は、前出溝跡47であるが、重複の接点はないものの、溝跡56と数m接近状況と、その個所の地勢からすれば、溝跡47を切って溝跡56が設けられた可能性が高い。遺



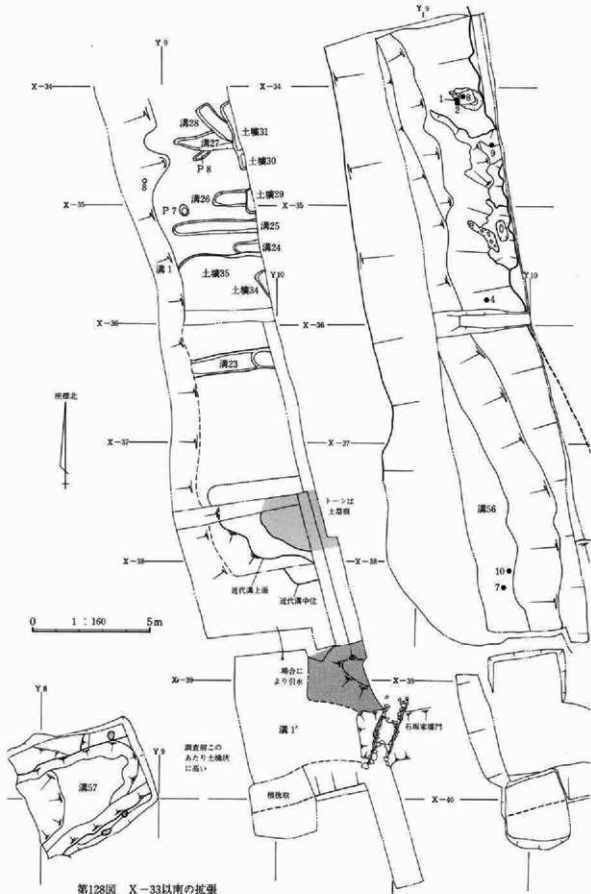
1. 暗灰褐色。地表土。砂が多く混入する黒土。
2. 灰白色。粒子の細かい砂層。水分がいないせいか白くさらさらしている。締まりほとんどなし。
3. 暗灰色。地山と思われるブロックがみられ、砂層ではあるが粘性をおびる。締まりほとんどなし。
4. 暗灰色。注3より粘性が強くなる。砂質の土層で酸化度が多くみられる。締まりあまりなし。
5. 暗灰褐色。注3・4より粗粒な感があるが、粘性ややあり。締まりあまりなし。褐色斑が多く、全体が褐色。
6. 暗灰色。注3-5よりもやや粗粒な砂層。φ1-3mm程の白色粒子(軽石)が、少し含まれる。粘性あまりなし。締まりあまりなし。
7. 青灰色。砂層。やや粗粒な砂層。粘性、締まりともあまりない。土層より127図の伊万里系磁器出土。褐色斑が多く、ロームブロックも少しみられる。
8. 灰褐色。砂に多量のローム(地山土)が混入する。酸化した褐色斑も多いため、全体に褐色が強い。粘性ややあり。締まりあまりなし。下層より127図の相馬地土。
9. 暗灰褐色。褐色土に多く砂(軽石)が含まれる。φ1mm程の白色粒(軽石)が少し含まれる。粘性あまりなし。締まり少しあり。
10. 暗褐色。φ5mm以下の白またはクリーム色の軽石粒が混入。やや砂気があり。粘性ややあり。締まりややあり。

1. 現地表。
2. 暗褐色。φ2-3cmの赤色軽石?を多量に含む。ベースは注3に同じ。
3. 暗褐色。φ1-2mm以下の白色粒子を多く含む。黄褐色の酸化斑が多くみられる。締まりややあり。粘性あまりなし。
4. 暗褐色。φ1-3mm程の軽石を多く含む。地山と思われる褐色(褐色)ブロックが少しみられる。締まりややあり。粘性ややあり。
5. 暗灰褐色。砂気混じる褐色土層。地山と思われる褐色斑、灰色の粘質土のブロックが混入。粘性も締まりもあまりない。
6. 暗黄褐色。地山(ローム)の黄褐色土が混入し、黄色味が強い。地山の上にもみられる。粘性ややあり。締まりあまりなし。
7. 黄褐色。地山の土に、砂粒が混入したような土層。ロームがほとんどで、粘性あり。
8. 青灰色。粒子が、極めて細かく、粘性を帯びる感がある砂層。酸化した赤褐色斑がみられる。締まりあまりなし。
9. 暗黄褐色。砂に、多量のロームが混入。黄色味が強い砂層。注8より粒子が粗い。粘性少しあり。締まりあまりなし。
10. 青灰色。注8・9より粗粒の砂層で、酸化もしくはロームの褐色斑が少しみられる。粘性あまりなし。締まりあまりなし。

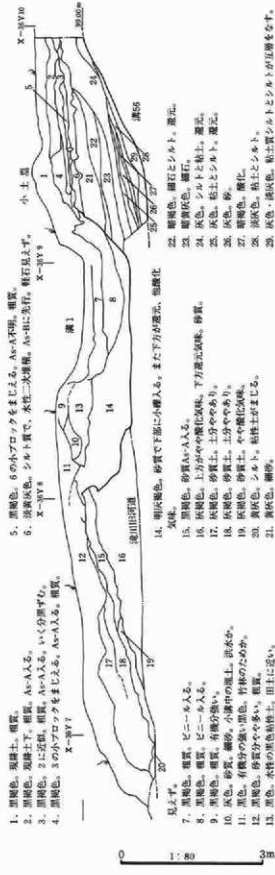
第126図 溝跡52・53遺構図



第127図 溝跡52・53遺物図

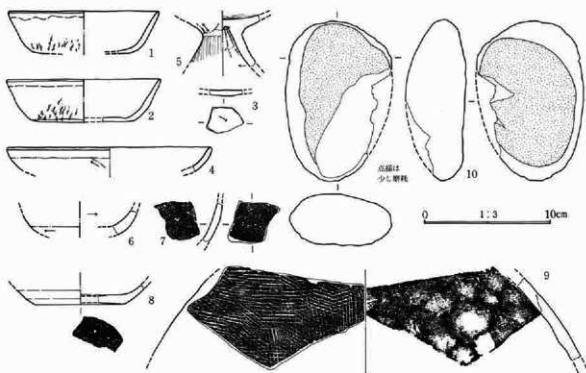


第128図 X-33以南の拡張

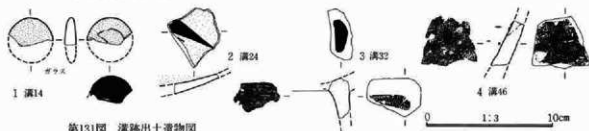


第129図 X-36トレンチ遺構図

物からみても、その可能性が高い。溝跡56の調査は、地山の洪積水性堆積物層の存在を確認することの必要性を考えたことと、X-30以南の調査区中の堆積土壌が以北と異なり疑問を感じたことにより、拡張区を設けた。埋没土の大半を重機で排土したが、底面際は人力である。遺構の状態は、全体観は第61図に、調査区全区は第128図に、土層断面は第129図に示した。埋土は第129図を見るように、砂、シルトなどが互層をなし堆積していた。最下層は洪積ローム層の水性堆積層を基盤としていた。最下層は砂層であった。溝の底面状態は、調査範囲中では、まだ西に向かい浅い勾配の気味があり、最下面には達していないようであった。調査は湧水のため、この状態をもって断念した。しかし、最深部は+αされても、そう深そうではなく、現状図をもって最深部と考えてもよいと現場所見を感じた。規模・方向性は、調査した最大から思料して、7.05m以上、深さはおよそ3.5m、方向性は、N14°Wを測る。遺物は第130図に示したように、埋没土では同図1・2など9世紀後半の土師器があり、立上り基面では同図4の8世紀頃の土師器が認められ、底面では同図7の須恵器片、同図8の角閃石安山岩礫が認められた。以上、出土遺物および溝跡47の存在によって、溝跡56は8世紀代に機能し、9世紀後半に粗没したと考えられた。問題点とすれば、この溝が自然であったのか、人工なのかと言う点である。前年度調査では、その頃に機能した大溝として箱田古市前I遺跡1号溝が発見されており、周辺遺跡では推定上野国府の庁城外縁の溝を除くと数例に限られる例しか知らないが、直線的な方向性は、その頃の土地制度に基づく大溝と推定したい。さらに補正の点を加えたい。方向性のことである。調査中に滝川の左岸（水原は植物の生育少ない）を日々、見ていた訳であるが、見えるのは地山層であり、溝跡56の断面はおよんでいなかった。そのためX-28築堤跡調査区に見える地山層以北の、溝跡56の方向性は、現滝川の方向性に近いN10°W内・外と考えられ、X-28のあたりを境に、北に近い方向性であったと推定しておきたい。



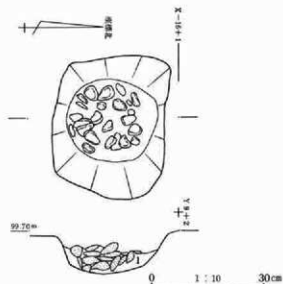
第130図 溝跡56遺物図



第131図 溝跡出土遺物図

溝跡57 (第128図 写真図版40)

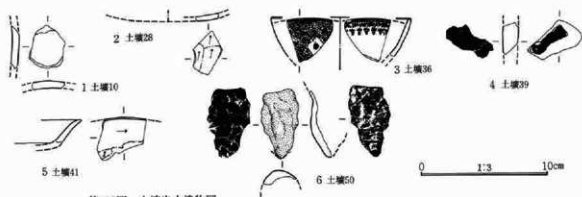
位置はX-39・40Y7・8にある。拡張区のみ
の調査であった。調査を行う動機は、凹地がその場所
にあり、東接地が少し小高くなり、さらにX-39Y
9.5のあたりで再び凹地となり、石坂家堀門に続く
状況があった。それは第61図の、調査前の状況と、
第128図の調査後の状況をもって示した。調査結果
は、溝跡57は、東壁断面で約0.35mの深さ、西側で
0.6~0.8mの深さをもち、西側で3.7m幅を測る。
堀土には流れの形跡はなく、屋敷などの区画溝のよ
うに思えた。出土遺物は、まったくなく、磁器片が
得られないことから、18世紀前半以前のように思え
た。石坂家が水車動力に利用した溝跡1'は、必要
時期に溝跡1より引水している。そのため溝跡57の
延長は、溝跡1'に切られている可能性が高い。



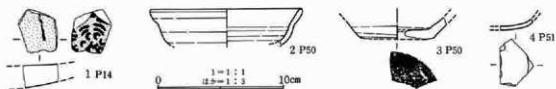
1. 毎10cm土層す1m以下の白色粒(軽石)焼土粒(?)を少し含む。
下面に、酸化鉄(?)のブロックがみられる(水性堆積)。

第132図 土壌41遺構図

第9章 発掘された遺構と遺物



第133図 土壌出土遺物図



第134図 小穴出土遺物図

そのほかの溝跡 (第62・131図)

近・現代と考えられる溝跡が多く存在していた。通常、それが見えなくなる状態をもって調査上面とすることが一般的らしい。しかし、それらの遺構は、地域にとって、地域の人々の直接的な先人達の残した痕跡であり、無視はしなかった。しかし、その細部に触れること、図版を作成することは困難であるので除外した。ここでは第62図を用いて概要説明を加えたい。埋土の質感から近・現代と思える溝は北側より溝跡20・22・12-15・24・19・28であった。この中で、ビニールほか現代遺物を伴う例はなかった。おおむね、ビニールの使用に先立ち機能停止したと考えられた。続いて埋土の質感および陶・磁器の出土により、近代・近世と思える溝跡は、溝跡16・17・5-10・45-51・42・43・29-40・25・26であった。近世とされた溝跡は、41・27であった。出土遺物について、第131図を作成した。

第5節 穴 跡

穴跡のことを、現場名称では土壌として扱った。土壌は、近時土坑を用いる場合も多く見受けられ、一部の研究者の間では、和・漢名混用の我国の名称の歴史や、現在の我々が日常生活を送るうえの慣用

名称との関連を考慮せず、該当の古語があれば、すぐ用いる傾向がある。そのためⅡ遺跡稿では穴跡のことを総称して穴跡と呼びたい。ただ現場で付された遺構名称は、整理や今後の扱いの便との関連からそのまま生かしたい。以下に概要を触れたい。

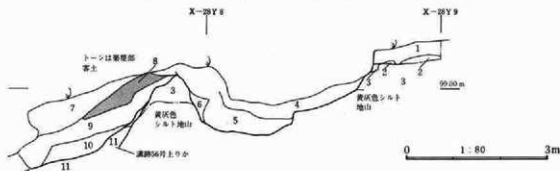
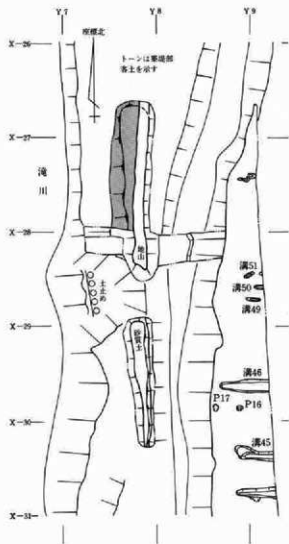
穴跡のうち単独で、遺構図を掲示したのは、第132図に示した土壌41のみである。土壌41はX-16 Y 9にある。重複は、近・現代の畑さき跡と考えられる溝跡と重なるが、重複確認不明瞭のまま発見された。小穴中に小円礫を伴う状況からすれば、小溝調査時に円礫の出土は少なかったので、土壌41に先行要素がある。埋土の質感は、古様でなく、粗質の新様であった。そのことは近世頃の可能性がある。規模は、長径38cmを測る。出土遺物は円礫のほかになく、円礫に文字の記入はなかった。

小穴の全体状況は、第62図に示した。時期について、調査時の所見は、近・現代と思えた穴跡は北より、土壌11・12・18-24・53・1・2・33があり、土壌14には、ビニールが入っていた。近世・近代に思える穴跡に土壌26・1・37・28があり、近世に思える穴跡に、土壌10・6・7・8・4・5・3・36・37・28・35があり、中世に思える土壌8がある。

第6節 築堤跡・土塁跡など

築堤跡

近代以降の遺構であるが、X-28トレンチ断面に、つらみクルマ川堤を補強する施設として築土が認められた。平面上の総長は、6.6mである。同時に下方に、



第135図 築堤跡構図

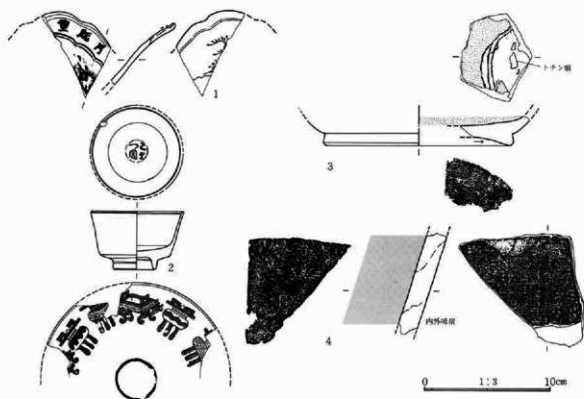
地山を作り出して残った築堤部基部が発見されており、その総長は、18.4mを測る。土層断面注記8で認められた築土層と、地山作り出し部との間には注記9の層が入るが、注記7の左下方、注記9左上がやや締りがあり、かつての小道と思わせるほか注記9に築土のような状況はなく、注記8の築土と地山作り出しとの間には、時期上のへだたりが感じられた。築土中から出土遺物はなかった。

土塁跡1・2

土塁については、第139図に示した、土塁跡1・2がある。土塁跡1の土層断面は第129図のように屋敷囲いと言うよりも、クルマ川の底ざらいの土壌を盛り上げた感じで、締りは少なく、つらみ土盛りと称した方がふさわしい状況であった。近代以降である。

土塁跡2は、現石坂家の北辺囲いの土塁の末端がおよんでおり、調査地内では、ビニール文化時代とも言えるべき、昭和40年代以降のビニールが土盛り中に入り、石坂家土辺土塁の補強・改修部を調査した可能性が高い。

1. 黒褐色。粗質。As-A・Bを含む。
2. 黒褐色。注3と注1に近似的土が張り合合う。
3. 暗褐色。粘質。地山。
4. 黒色。ビニール入る。軟らか。
5. 暗黒褐色。砂質。下方硬いはいる。
6. 暗黒褐色。砂質。
7. 黒褐色。有機質。粗質。砂は少なくAs-Aはいる。
8. 灰褐色。地山注3と下方の黄灰色粘性土ブロックはいる。As-Aはいる。締まり弱い。
9. 黒褐色。粗質。As-Aはいる。
10. 暗褐色。砂質。
11. 暗褐色。粘質。水性。二次堆積粘性土と砂質土との混じり。



第136図 土器遺物図

第7節 旧東村農協の堰門跡

現在、前橋市箱田町380には、JA東支所倉庫が存在する。この場所は、昭和29年4月1日前橋市に合併するまでは、群馬郡東村農業協同組合とその施設が存在した場所である。現在でも、大谷石造倉庫2棟、加工所などがJA東支所の一部として旧時の状態をとどめている。同農協の組合化は、昭和7年12月に信用・販売・購買・利用の四種兼営組合が役場内に設置されていたことにはじまるが、昭和22年に事業伸長に伴い現在地の施設建立に至っている。昭和15年には、加工所と併設した形で、滝川を利用した、水力利用のタービン水車が設けられ、精米、精麦、精粉機が稼働し、組合員の利用外に、販売用の米麦加工、政府米・小麦粉などの加工を行っていた。

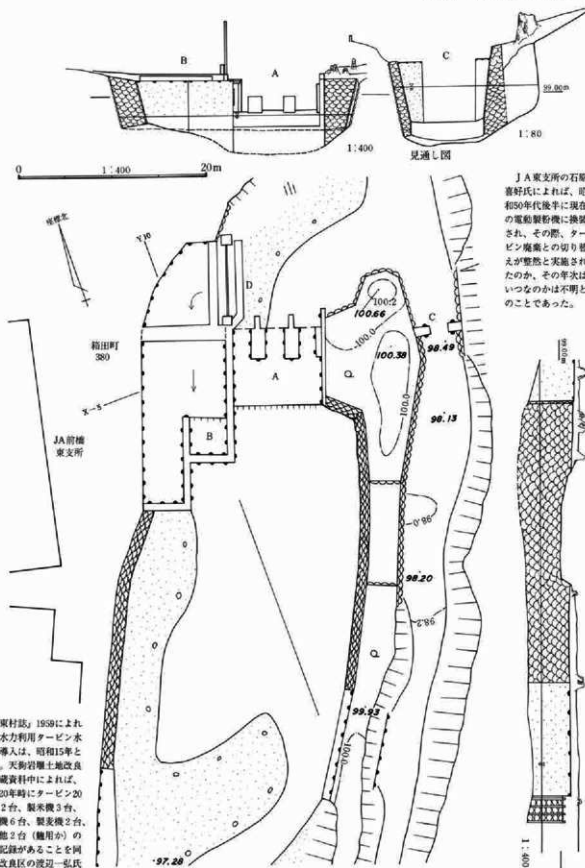
第137図は、その水力タービン水車跡施設である。現在は、水力タービンは機能しておらず、昭和50年代後半に停止、電気動力製粉機に交換された。ター

ビンは、現在、その軸のみが、倉庫の一角に残されていた。第137図のうち、水車が設置されていたのは、Bの位置であり、Aは滝川の堰門である。Cは、下流域に設けられた石坂家水車および屋敷回り・水田への水路の堰門で、以南を俗称クルマ川と言う。クルマとは、水車のクルマという意味である。

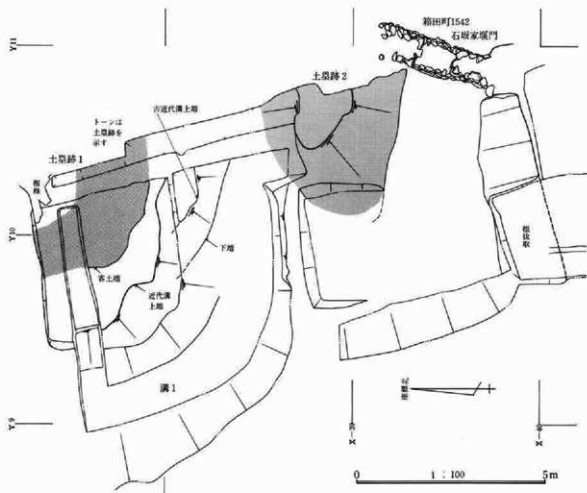
図中のA・B・Cは、コンクリート製で、水力動力を必要とする時はA・Cの堰門を閉じ、Dから給水し、Bに水流を回して機能した。Cの堰は拡大図を第137図の右上に掲げたが、堰門Aに影響しての存在である。

排水側の施設は、川原石積まで、径約30cm大を小口斜め、交互噛み合うように組上げてあり、部分的にコンクリートで間詰めがなされていた。全体の縦断・横断面図で明らかのように、A・Bの南側には、径約12m、深さ約1mの深部が、周囲石組で設けられ、当初の施設らしい。

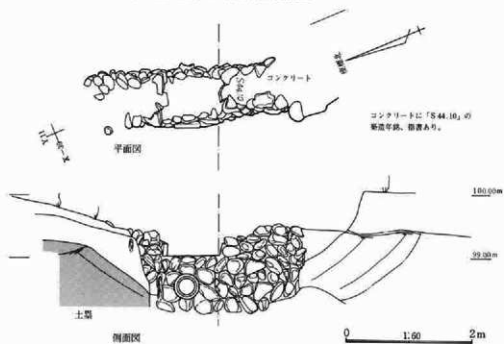
水力タービンは、旧農協の町村で多用され、それらの一例として、ここに記録した。



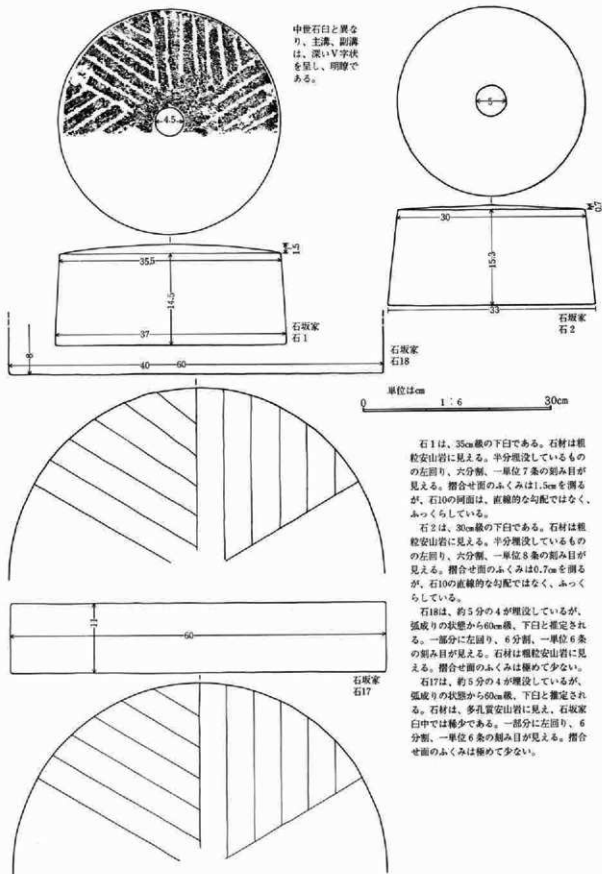
第137図 旧東村農協製粉用水力タービン用構造物跡



第138図 溝跡1と石坂家塼門遺構図



第139図 石坂家塼門現状図



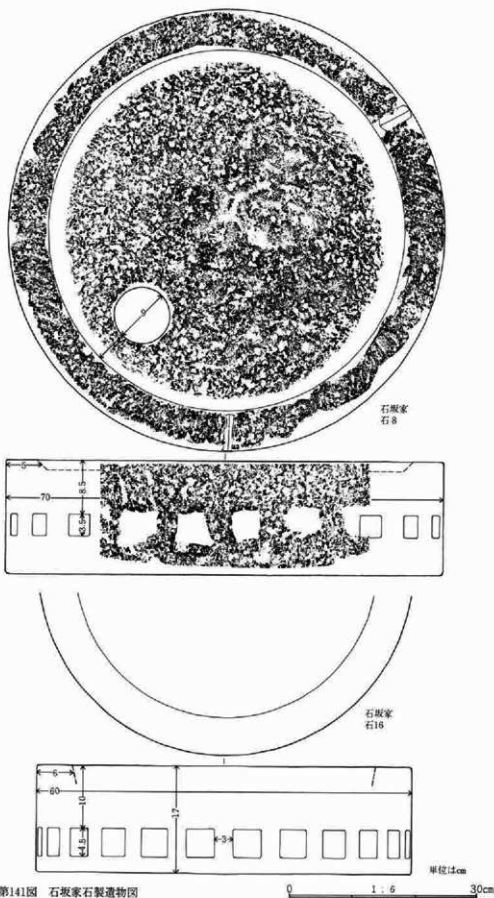
石1は、35cm級の下臼である。石材は根粒安山岩に見える。半分埋没しているものの左回り、六分割、一単位7条の刻み目が見える。摺合せ面のふくみは1.5cmを測るが、石10の両面は、直線的な勾配ではなく、ふっくらしている。

石2は、30cm級の下臼である。石材は根粒安山岩に見える。半分埋没しているものの左回り、六分割、一単位8条の刻み目が見える。摺合せ面のふくみは0.7cmを測るが、石10の直線的な勾配ではなく、ふっくらしている。

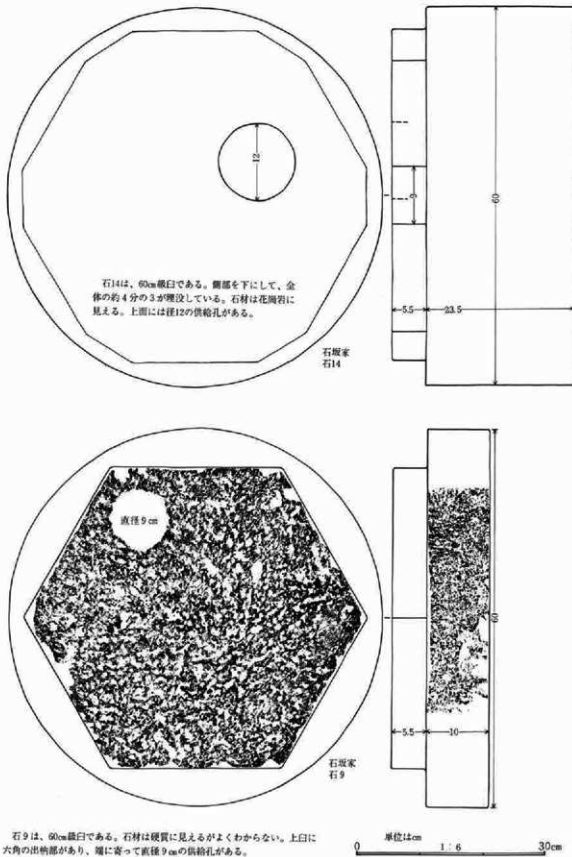
石18は、約5分の4が埋没しているが、弧成りの状態から60cm級、下臼と推定される。一部分に左回り、6分割、一単位6条の刻み目が見える。石材は根粒安山岩に見える。摺合せ面のふくみは極めて少ない。

石17は、約5分の4が埋没しているが、弧成りの状態から60cm級、下臼と推定される。石材は、多孔質安山岩に見える。石坂家白中では稀少である。一部分に左回り、6分割、一単位6条の刻み目が見える。摺合せ面のふくみは極めて少ない。

第140図 石坂家石製造物図



第141図 石坂家石製遺物図



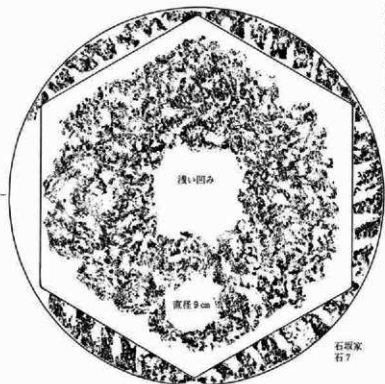
石9は、60cm径白である。石材は硬質に見えるがよくわからない。上白に六角の出物部があり、端に寄って直径9cmの供給孔がある。

第142図 石坂家石製造物図

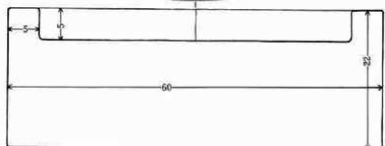
第8節 石坂家堰門と製粉関連について

箱田町1543、石坂トミさんのお宅である。かつて、水車のある家として周囲から「車んち」と呼ばれた。第139図には、主屋が表現されていないが、石坂家堰門の位置から、南東約30mに滝川改修工事に伴い新築された主屋がある。その北側には、『利根西の民俗』（前橋市教育委員会）1991所収の明治38年竣工の石坂栄男氏の民家建築があり、第139図は、同家の屋敷廻りの溝1・土塁などが調査と関連する。なお、同家で廻りうる墓石銘は、嘉永銘と言うことであるので、溝1や土塁などの当初は、嘉永前後の築造に可能性が持たれる。石坂家石門は、石坂トミ

さん方の水車用水路と関連しての堰門であるが、石垣積、コンクリート製堰は、水車廃絶後の処置として設けられたらしい。石坂トミさん宅の庭には、同家がかつて使用された石臼と関連石材18個以上が庭石として存在する。それらの概念図が第140～146図である。当地域では、水車臼は、村持の場合と、民営とがあり、トミさん宅は、後者であった。トミさんは、大正11年生まれで、昭和62年に69才で没した石坂了三さんに嫁いだ。了三さんは、水車に動力を用いた機械挽の製粉機と米つき（搗）を始め、トミさんは、その製米について「ごはんは、のめっこく、



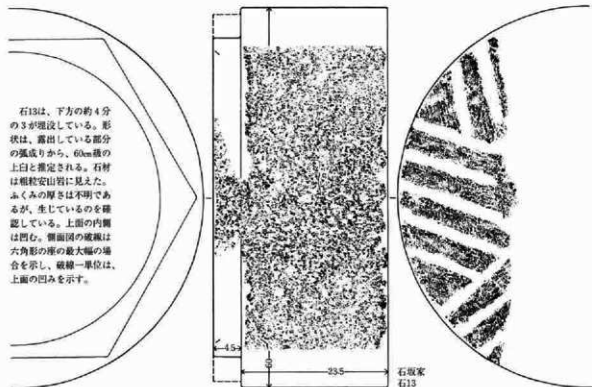
石7は、60cm級の臼である。再用らしく、上面に目跡が残され、かつては上臼であったらしい。平面の拓影図中、中央の余白状の円形部分は約2cmの浅い凹みであり、その下方は径9cmの供給孔で貫通している。石材は粗粒安山岩に見えた。側面に、小穴が1箇所あり、タゴとの関連か。



単位はcm

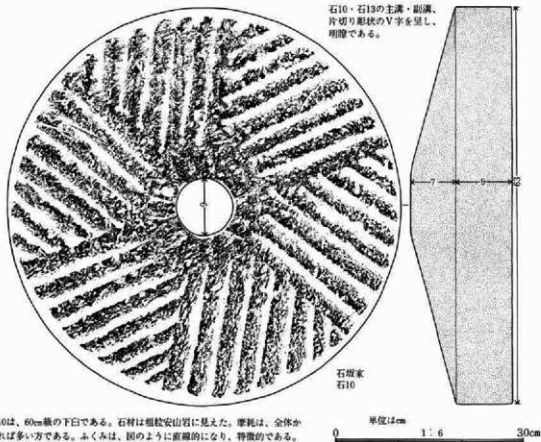
第143図 石坂家石製遺物図

0 1 : 6 30cm



石13は、下方の約4分の3が埋没している。形状は、露出している部分の弧成りから、60cm径の上臼と推定される。石材は粗粒安山岩に見えた。ふくみの厚さは不明であるが、生じているのを確認している。上面の内側は凹む。断面図の破線は六角形の棒の最大幅の場合を示し、縦線一単位は、上面の凹みを示す。

石坂家
石13



石10・石13の主溝・影溝、片切り形状のV字を呈し、明瞭である。

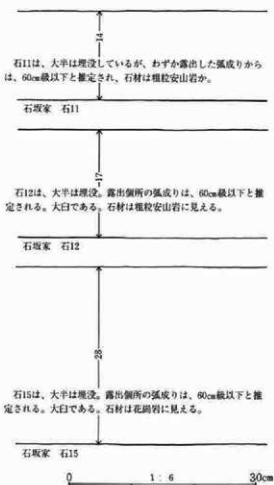
石坂家
石10

石10は、60cm径の下臼である。石材は粗粒安山岩に見えた。摩耗は、全体からすれば多い方である。ふくみは、図のように直線的になり、特徴的である。

単位はcm
0 1:6 30cm

第144図 石坂家石製遺物図

第9章 発掘された遺構と遺物



第145図 石坂家石製遺物図

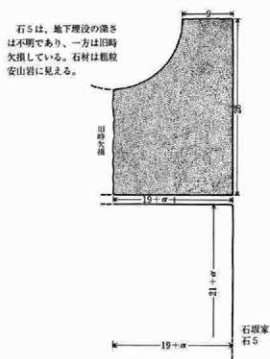
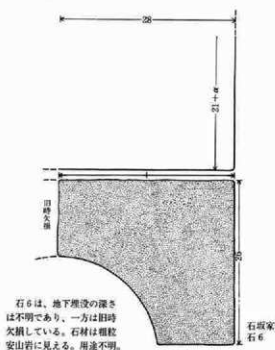
おいしかった」と言っている。大正11年生まれのとみさんが水車で水力作業を見かけたのは、1回だけだと言い、戦前の段階に既に、動力を用いていたらしい。丁三さんの父は、馬吉さんと言ひ、昭和43年、87才で没した。石臼類の大半は、馬吉さん以前の臼で、その父の文吉さんに係ると、栄男さんの祖母りゅうさんから聞いていたとのことである。りゅうさんは、明治3年2月9日生まれで文吉さんの妹である。栄男さんの両親は、りゅうさんの子のなおさんを母に、父馬藏さんで、母りゅうさん、父治平さんは伴に石坂家に養子として入り、治平さんは慶応3年7月10日生まれで、その父は、秋造さん、母はカクさんといひ、天保14年生まれという。このことからすれば、石坂栄男家の嘉永年紀の墓石は、秋造さんの父母かもしれない。以上聞取り調査を要約すれば、石坂とみ家の石臼類は、馬吉さん以前が

主で、父の文吉さんの時代には水車は存在しており、確實なところでは、明治20～40年頃には存在していたことになろう。また、最大限に遡った時期は、嘉永までは、困難のようであるが、はっきりしない。

ここで何故、近世・近代臼資料を収集したのかという点について説明しておきたい。三輪茂雄『臼』1978による臼招来・製作の説明はあるものの、群馬県内の出土例で遡る例は、高崎市に所在する『下佐野遺跡I地区・寺前地区』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団）1989の下佐野遺跡I地区A区1号館跡内郭堀土出土の穀臼片が古く、他の出土遺物からすれば、14世紀末から15世紀初頭頃が考えられる。中世遺物の場合、遺跡出土遺物の取り上げについて、調査担当自身整理報告書の段階で順当に整理担当が直接、遺物を見て、その遺構から確かに出土したのかを確認しているかに深く、係わり、14世紀末以前では、韓国、済州島沖の沈船から14世紀の茶臼例が知られ、さらに遡ることは確かである。中世遺構出土臼は、県内の場合、茶臼型と穀臼とに分けられ、穀臼は、直径30cmを越える例が多く、それが中世の特色のように思えること、また、60cmを越える大形臼は、少なくとも見られず、九州地方における中世末期に水車を動力とするようなことも、群馬県地域では考え難く、60cm級は近世に至っての出現と思えるのである。石坂家にて取材の理由は、石臼の近世末～近代における実例として位置づけられる資料の必要性からで、特に、その頃の紹介例や一括性を伴う資料報告例は、誠に少なく、今回の取材は貴重であった。

第140～146図は、石坂とみ家の石臼類である。かつては、50個以上も数えたというが、今日では、近隣の庭石に使用されたりで、表面的に見えるのは、臼13、他の石材4個である。かつては、²³掲白も存在したらしいが、見えない。しかし、今日、これだけの石臼揃えが見られる点は貴重である。

水車臼は、60cm前後の直径があり、上臼には、回転軸を受ける、柄が造り出されるか、凹められている。補注中で60cm級とは水車臼を指している。石材



第146図 石坂家石製造物図

は石13・14が花崗岩らしく見えるほか粗粒安山岩に見える。目の刻み直しや、上・下白を後に再加工し、逆に用いた例など変化がある。60cm級の水車白の上・下白の別は、第140～146図中で、石17・石18は下白、石16・14・9・7・13は上白、石10は下白



と考えられ、石16には、供給孔と推定歯車の備用の穴、石14にも供給孔と輪受の柄の造り出し、石9にも供給孔と輪受けの柄の造り出し、石7に旧目跡・輪受の穴・供給孔、石13に輪受けの凹みなどがある。回転方向は、石18・17が下白だとすれば左回

転、石7の旧日が下白時だったとすれば、左回転、石13は左回転、石10のみが右回転である。石10のみが何故右回転であるのかと言う点は、動力を用いた時期もあったので注意すべきであろう。主溝と副溝の関係は、石7・13・10ともに、片辺の浅いV字状を呈しており、各々6分割か、6分割と考えられる。溝の刻み方は、主溝と副溝を連続させる石13の形と、主溝と副溝とを連結させない石10の形とがある。溝の刻み方は、專業工の細工らしく、丁寧で、各々副溝の目は揃っている。成形の際の荒削りは、主として突きノミ状の工具で、研りよりも、なしに近い所作と考えられ、研磨状態は、摩耗面を除くと顕著でなかった。

穀臼は、下臼が2個以上あり、他の2個は、上・下が不明である。第140図石1・2が、穀臼で、両例ともに粗粒安山岩製に見えた。直径は、37cmと33cmであり、30cmよりも大きい。主・副溝の関係は、整然としているが、石1・2とも回転痕痕が加わるため、やや不明となる。回転方向は、ともに左回転である。ふくみの状態は、そう顕著ではない。

石坂家には、水車に関連していると思える石材中に、何に使用したのか種別不明瞭な石材がある。第146図にまとめたが、石3・4には、水磨き以上の光沢のある摩耗面があり、軸受けによる摩耗光沢に思えた。光沢面を除くと荒いナラシの側面が見られる。

石5・6は、欠損物であるが、欠損部は古い。用途不明である。

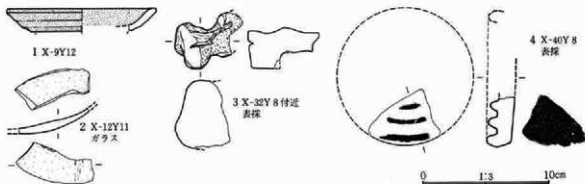
以上、埋没している白も多く未記入部分は、そのためである。水車位置は、X-40付近にあったといい、現在では、改修された滝川岸付近に相当する。

第9節 遺物類の補足

遺物類の補足は、20m毎に、東西方向に設けた試掘トレンチ出土遺物と、希少遺物種について補足を加えたい。

試掘調査においては、周辺に古代遺跡も多くあり、奈良・平安時代頃から、近世・近代におよぶ、時期幅のある状態を認めた。遺物図としては、第63・64図に示したように、2・3が平安時代遺物、1が掛け分けによる碗で、18世紀頃の製品である。近世陶・磁器類は、その頃から少し増え、19世紀以降の製品が多く、周辺での土地利用の状況が、およそ知れる。第64図はJ A東支所倉庫が存在する場所に設けたトレンチからの遺物であり、旧東農協の存在と関連してか甕の出土と棧瓦の出土があった。

第147図は、遺物の補足である。注目される個体は、4の中世銀瓦片と見られる破片で、文様は、三巴文分。消耗顕著である。周辺上流域での中世瓦の存在は、知らない。3は、切削痕のある骨材で、近代以降の骨加工業の存在を示唆している。2は、出土のガラスの中で古様に見える1点を掲げた。



第147図 補足遺物図

第10節 遺物観察

遺物の観察は、観察表の作成時ばかりでなく、分類仕分け作業の段階から既にはじまっており、実測図の描写と観察内容とは一致している。実測図は土器型を13で、定期的な輪径は輪小値の数字、または輪径を図の傍に示した。実測図は手実測である。実測図は全個体について補助員と整理担当とが、共同作成し、続いてインクトレス（浄画）の工程を踏んだ。

実測図の表現法は、実線中軸は土器の四分測実測を行ない得る直接実測の個体に、1点鎖線は、土器残存量不足から回転実測の個体に用いた。割口破線の延長は、通常の場合、想定であるので2単位で記入するのを定形とした。外形線はか形を決める線は、主体を実線で、補助線を細線で表現してある。器壁断面中に粘土線作痕と粘土走行を捉えた。その多くの場合、点線と線輪とを用いて表現しているが、線輪表現が多いのは作痕の接合痕に近く、点線表現が多いとは単なる粘土走行に近い。距離や割合を示す線は1点鎖線を用いた。その中の矢印は、実線部物の割り捨ける場合と、壊込む場合・抜け落ちる場合を捉え、大多数例例の移動方向を示した。

拓影については二つの意味あいから駆付した。一つは文様・技法痕・整形状態・ハゼなどを捉える時、二つ目は質感である。

観察表は復原的に作成してある。項目中の図・写真番号は一致する。出土位置は本来であれば一箇中に記入すべきであるが、長大で記入困難な場合に、図解に示した。器種名は、古語名称、近代以降の名称とを混用してある。量目欄は、古語であれば、度目と表現しなければならないが、實用に習い量目とした。胎土・焼成・色調の順で、胎土は含まれる実測部物の量を、なし・微・含の順で使い、焼成は、焼物種類各々の中を、軟・並・硬・細と表現した。土器の製作地推定を備考欄に行なったが、1979年から始めた胎土分析試料と各器種群資料との観察結果に基づく。なお色調は1990年度版「新版標準土色誌」（30日本色研究所色部監修）を用いた。

図番号 写真番号	器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第63図 写真図版47	陶器 甕形	X-8Y10トレンチ 中作	底部片	微。焼。灰黄2.5Y7/2。	器部外面に上方鎖線、筋輪。内面と外面に下方鎖線。	瀬戸・美濃、18世紀。
同図 写47	灰釉陶 鉢	X-16Y2-10トレンチ	高台端部径(9.2)	なし。焼。灰5Y6/1。	器部の内・外面に刷毛掛に見える灰釉あり。高台部付。	畿内。10世紀。
同図 写47	土師質 脚付碗	X-36Y10トレンチ	底部片	微。軟。橙YR6/6。酸化気味。	脚部付付。底内面輪轆目あり。同外面に付付の筋輪に伴なう工具痕あり。	畿内か。10・11世紀。
同図 写47	焼締陶 中形鉢	X-36Y10トレンチ	底部片	含。焼。胎土赤黄5YR5/3。酸化気味。	石灰らしき灰釉物を多く含む。	常滑。13-16世紀。
同図 写47	陶器 皿	X-37Y16+X-36Y10はか	口径(11.2)	微。焼。胎土灰青2.5Y7/2	内・外面の上方灰釉。器部外面下方筋輪。器胎部輪轆目回転差あり。	地方産。近畿か。
同図 写47	石製 砥石	X-37Y10トレンチ	長7.4+*	細部片面に未使用面あり。片小口。片割部。表・裏面を削っている。石材中に虎斑状の織あり、下方は凹状欠損。		流紋岩。中近畿。
第65図 写真図版47	鉄製品 大形鏡	X-1トレンチ	全長18.5	筋輪は不定方向にあり、詳細を思わせる。錆化は少なく、全体の遺存はよい。		近・現代
同図 写47	陶器 土瓦	同	端部片	粗。赤。胎土N3/1。表面鎖線。還元気味。	表面に銀光沢あり。平面図右端に釘穴あり。トーンは焼を示す。	近・現代
第67図 写真図版43	土師器 壺	住1床下	底径(6.0)	微。赤。胎土赤黄7.5YR5/4。酸化気味。	割口に底部との接合が見え。器部外面に黄褐色が残される。	吉井。
同図 写43	須恵器 坏小碗	同、床下	口径(13.0)	微。軟。灰白N8/。還元気味。	器部の内・外面に輪轆目あり。下方に器内が厚くなる傾角あり。	
同図 写43	土師器 坏	住1・2埋土	口径(11.0)	微。硬。胎土赤黄7.5YR5/4。酸化気味。	口縁部の内・外面に横溝あり。外面中に型膏痕あり。	
同図 写43	土師器 皿	同+住1埋土+住2埋土	口径(14.2)	微。赤。橙5YR6/6。酸化気味。	口縁部の内・外面に横溝あり。外面中に型膏痕。以下彫削目あり。	
同図 写43	須恵器 壺	住1・2埋土	最大径(15.6)	微。軟。灰7.5Y6/1。還元気味。	尖帯一条。腹線帯一条あり。台付短頸部の産であろう。	秋岡。
同図 写43	須恵器 坏	住2埋土	口縁部片	含。軟。明黄7.5YR。	割口に粗作痕あり。器内や厚く、口縁部内面に凹みあり。	片岩粒入。畿内以南。
同図 写43	須恵器 坏・碗	同	口縁部片	微。軟。灰黄2.5Y。少し擦かかる。	内面に輪轆目あり。器内均質的。少し擦かかる。	秋岡・桑岡。
第68図 写真図版43	土師器 坏	住22ピット2埋土	口径(12.2)	微。軟。橙5YR6/6。酸化気味。	全体に磨耗し、成形、整形技法は不明瞭である。	
同図 写43	土師器 坏	住22埋土	口径(15.0)	微。軟。橙5YR6/6。酸化気味。	口縁部の内・外面に横溝あり。器部外面に下方灰釉。	畿内か。
同図 写43	土師器 坏	同	口径(15.8)	微。硬。橙5YR6/6。酸化気味。	口縁部の内・外面に横溝あり。器部外面に下方灰釉。	
同図 写43	土師器 坏	同	底部片	微。赤。明黄2.5Y6/6。酸化気味。	底部片で、外面に彫削目あり。器内はころあい。	
第71図 写真図版43	土師器 坏	X-8トレンチ	底部片	微。軟。橙5YR6/6。酸化気味。	坏の底部片で、外面に彫削目あり。器内はころあい。	畿内か。
同図 写43	土師器 壺	住3カマド埋土	底径(5.0)	微。硬。胎土赤黄5YR4/7。酸化気味。	器部外面に黄褐色あり。全体に質熟。色変あり。	

第9章 発掘された遺構と遺物

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第7図3 写真図版43	土師器 小形甕	住3カマド裡+ 住23埋	口径(12.2)	多。赤。にぶい赤褐2.5YR 5/4。酸化気味。	口縁部の内・外面に轆轤あり。体部外 面黒色あり。
同図 写43	土師器 土師釜	住23No.6	口縁部片	多。赤。にぶい橙7.5YR6/4。 酸化気味。	口縁部の内・外面に轆轤あり。器内は 酸化気味。
同図 写43	土師器 土師釜	住23No.6	口縁部片	黄。赤。橙。5YR6/6。酸化 気味。	口縁部の内・外面に轆轤。外面に轆轤作 痕あり。外面下方彫削目あり。
同図 写43	石 磨石	住23、S1	長12.4、幅6.3、 厚4.2	扁平面の表・裏に使用の摩耗が少しあり。手前小口に敲打痕が見ら れる。	ひん岩。
第7図4 写真図版43	土師器 皿小碗	住4堀土	底径(10.2)	含。赤。にぶい橙5YR7/4。 酸化気味。	底面に寛削目あり。器内は極めて厚く、 埃も少ない。
同図 写43	須恵器 坏	同	底径(8.0)	黄。軟。灰5Y6/1。還元気 味。	底面は手持痕削後の魚形筋か。体部外 面に轆轤目あり。轆轤右回転。
同図 写43	土師器 同	同	口径(23.8)	含。黄。橙。2.5YR6/6。酸 化気味。	口縁部の内・外面に轆轤あり。体部外 面、やや厚しくは吸炭あり。
第7図1 写真図版43	土師器 坏	住5床下埋土	口径(11.6)	黄。赤。にぶい橙2.5YR7/4。 酸化気味。	口縁部の内・外面に轆轤あり。体部外 面下方に黒削目あり。
同図 写43	須恵器 土師釜	住5カマド裡土	最大径(12.4)	黄。軟。にぶい橙7.5YR7/3。 中性焙気味。	体部外面に轆轤目あり。内面に黒研削 と内黒処理あり。
同図 写43	須恵器 蓋	住5床下埋土	口径(15.4)	黄。軟。灰白N7/0。還元 気味。	口縁部端の内・外面に轆轤目あり。器 内やや厚い。
同図 写43	灰釉陶 皿	住5カマド裡土	口径(11.0)	なし。緑。灰白5Y7/1。中 性焙気味。	内面に灰釉の輪筋あり。口径は小さく 小形の皿か。
同図 写43	須恵器 羽釜	住5カマドNo. 1	体部片	含。赤。にぶい橙5YR7/4。 酸化気味。	内・外面に轆轤目あり。割れ口に轆轤作 痕あり。
第7図8 写真図版43	須恵器 羽釜	住6カマドNo. 9	口径(23.5)	含。赤。にぶい赤褐5YR5/4。 酸化気味。	内面におおまかな轆轤目あり。割れ 付。轆轤右回転。
同図 写43	須恵器 羽釜	住6カマドNo. 6+No.11	口径(21.8)	含。赤。にぶい橙7.5YR7/3。 酸化気味。	全体に砂付。割口に轆轤痕あり。外 面口縁部下に轆轤痕あり。
同図 写43	須恵器 羽釜小	住6カマドNo.4 +No.1+埋	最大径(22.3)	含。赤。にぶい橙7.5YR7/3。 酸化気味。	体部の内・外面に轆轤あり。全体に 粗雑な整形の感あり。
同図 写43	須恵器 羽釜小	住6カマド No.2+No.10	底径(10.0)	含。赤。にぶい橙7.5YR7/3。 酸化気味。	内面に轆轤目あり。外面に黒削目あり。 器内やや厚い。胎土手法は2と同一。
第7図9 写真図版43	須恵器 羽釜	住19No.5	底径(4.5)	黄。軟。灰N5/0。還元気味。 焼かかぬ。	底面赤切。轆轤右回転の轆轤目あり。 内・外焼かかぬ。
同図 写43	須恵器 羽釜小	住19No.1+No.2	体部片	含。赤。にぶい黄橙10YR 7/4。酸化気味。	器内やや厚く。内・外面粗雑な焼が行 なされる。羽釜でなく釜かもしれない。
第8図1 写真図版43	須恵器 坏	住9床No.1	口径15.2 器高5.4	多。赤。にぶい橙7.5YR7/4。 酸化気味。	内・外面に轆轤右回転の轆轤目あり。 高台は貼付。
同図 写43	須恵器 羽釜	住9カマドNo. 2+埋土	口縁部片	黄。軟。灰黄褐10YR6/2。 中性焙気味。	内面に轆轤目あり。割口に轆轤痕あり。 器部は貼付。
同図 写43	須恵器 羽釜	住9貯穴P1	体部片	含。赤。にぶい黄褐10YR 7/3。中性焙気味。	内面に轆轤目あり。外面に轆轤作痕と撫 痕あり。割口に轆轤痕あり。
同図 写43	須恵器 羽釜	X-16・17表土 +住9埋土	口径(23.0)	含。赤。にぶい橙7.5YR7/3。 酸化気味。	外面に底方向で彫削目あり。器部の貼 付は特徴的。
同図 写43	石 磨石	住9貯穴底	長46.0、幅22.0、 厚9.0	平面図の右側は旧時欠損。表面側に汚れあり。表・裏面は少し磨耗 する。磨かれた主体は非金属。軟質のもの。	粗粒安山岩。
第8図1 写真図版44	土師器 埴輪	住10階方埋土	口径(10.5)	黄。赤。にぶい橙7.5YR7/4。 酸化気味。	体部の内・外面に轆轤右回転の轆轤目 あり。
同図 写44	土師器 埴輪	同	口径(10.0)	黄。軟。浅黄褐7.5YR8/3。 酸化気味。	体部の内・外面に轆轤目あり。
同図 写44	須恵器 羽釜小	同	体部片	多。赤。橙。7.5YR6/6。酸 化気味。	割れ口に轆轤作痕あり。内面に轆轤目あり 。外面は粗雑な感あり。
第8図9 写真図版44	須恵器 羽釜小	住11埋	体部片	黄。軟。橙。5YR6/6。酸化 気味。	内面に轆轤あり。外面は粗雑な感あり。
第9図2 写真図版44	土師器 同	住12貯P1	口縁部片	含。黄。褐。黒灰7.5YR4/1。 還元気味。	内・外面に轆轤あり。口縁部の内・外面 横溝。右面中位型番。以下焼削。
同図 写44	土師器 坏	住12・13埋土は か	口径(12.0)	黄。緑。灰5Y6/10。還元 気味。	底面右回転彫削痕。回転彫削。体部外 面下方彫削痕あり。
同図 写44	須恵器 坏	住12堀方+同側 方P6	口径(10.4)	黄。軟。灰白2.5Y7/1。中 性焙気味。	底面回転彫削。体部外面轆轤右回転彫 削。体部外面轆轤目あり。

国 番 号 写 真 番 号	種 類 器 形	出 土 位 置	量 目 (cm) 残 存 状 態	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調 と 簡 要	備 考	
第02回 写真図版44	灰釉陶 碗	住12カマドP6	口縁部片	なし。焼粉。灰白7.5YR6/1。 還元気味。	内・外面上に刷毛掛に見える施釉あり。 口縁部内面に浅い沈線あり。	被熱色変。
同図 写44	土師器 壺	住12カマド+同 カマドP1	口径 (22.0)	含。硨。にぶい橙5YR7/4。 酸化気味。	口縁部の内・外面に横線あり。器内や ややく。口縁部内面側まで返える。	
同図 6 写44	土師器 壺	住12指方P7+ 指方P3+P2	口径 (19.0)	含。硨。にぶい橙5YR7/4。 酸化気味。	口縁部の内・外面に横線。外面に紐作 痕あり。体部外面に焼割目あり。	
同図 7 写44	土師器 壺	住12指方P1+ カマドP1-P3	最大径20.2	含。硨。にぶい赤褐2.5YR 5/4。酸化気味。	口縁部の内・外面に横線あり。体部外 面に焼割目あり。	
同図 8 写44	土師器 壺	住12カマドP2 +カマドP4	口径 (25.8)	含。硨。にぶい橙5YR6/4。 酸化気味。	口縁部の内・外面に横線あり。体部 内・外面に焼割目あり。	
第03回 写真図版44	土師器 小形壺	住13カマド指方	口径 (5.6)	微。硨。にぶい橙5YR7/4。 酸化気味。	体部外面焼割目あり。胎土は全体的に シルトの気あり。	底不明。
同図 2 写44	土師器 杯	住13指方埋土	口径 (13.5)	微。硨。暗褐7.5YR3/3。 酸化気味。内外産	口縁部の内・外面横線あり。体部外面 中に彫溝。以下焼割。	底不明。
同図 3 写44	土師器 杯	住13埋土+指方 埋土	口径 (22.3)	含。硨。明赤褐5YR5/8。 酸化気味。	口縁部の内・外面に横線あり。全体に 磨耗している。	埼玉木野か。
同図 4 写44	土師器 壺	住13+カマド指 方	底径 (4.4)	多。硨。にぶい橙7.5YR6/4。 酸化気味。	体部外面焼割。最上部の割れ口に接合 痕あり。器内は全体的に滑い。	底不明。
第04回 写真図版44	土師器 壺か	住12・18埋土	体部片	含。硨。橙5YR6/8。酸化 気味。	外面焼割目あり。器内は全体的に滑い。	
第06回 写真図版44	須恵器 杯	住14床P6+床 下	底径 (4.2)	微。硨。にぶい橙5YR7/4。 酸化気味。	全体に磨耗する。底面の凸凹し。不明 彫。胎土は軽い。	
同図 2 写44	須恵器 杯	住14トレ	口径9.4。底径4.2。 器高2.8	含。硨。にぶい黄橙10YR 7/3。酸化気味。	底面に横線右回転の赤切痕あり。体部 外面に横線目あり。胎土は軽い。	
同図 3 写44	須恵器 杯	住14指方埋土	口径9.1。底径4.8。 器高3.2	含。硨。にぶい橙5YR6/4。 酸化気味。	底面に赤切痕あり。全体に磨耗あり。 胎土は軽い。	
同図 4 写44	須恵器 杯・壺	住14指方埋土	口径 (10.6)	含。硨。明褐7.5YR7/2 酸化気味。	体部の内・外面に横線目あり。胎土は 全体的に軽い。	
同図 5 写44	灰釉陶 皿	住14カマドトレ ンチ	口径 (16.2)	少。硨。にぶい橙7.5YR7/3。 酸化気味。	体部外面に磨線目あり。胎土は全体的 に軽い。	
同図 6 写44	灰釉陶 碗	住14床P4	口径15.7。底径7.8。 器高7.1	なし。刷。灰5YR6/1。還元 気味。	内・外面に刷毛掛に見える釉塊あり。 体部外面上磨線目。以下黄面。	搬入。
同図 7 写44	土師器 壺	住14床下+住16 指方埋土	口径 (25.0)	微。硨。明赤褐2.5YR5/8。 酸化気味。	口縁部の内・外面に横線あり。体部外 面下方黄面あり。胎土は重い。	
同図 8 写44	土師器 壺	住14床P3	口径 (26.4)	微。硨。にぶい橙2.5YR6/4。 酸化気味。	口縁部の内・外面に横線あり。胎土は 軽い。滑作り。	
同図 9 写44	土師器 壺	住14床埋P1+ カマド埋	底径 (6.0)	多。硨。橙2.5YR6/8。酸 化気味。	体部の外面焼割目あり。器内は滑作り。 胎土は軽い。	住16-1-8と 同一個体か。
同図 10 写44	小石 円蓋	住14床P5	径3.6。幅3.8。 厚1.2	にぶい赤褐色7.5YR4/3を呈す円蓋。全体に人為的に磨られる光沢 があり、さらに小欠損の割れは旧時のため遺物として扱った。		住16-1-8と 同一個体か。
同図 11 写44	石 石材	住14床S1	長13.7。幅13.2。 厚10.2	石の上面に旧時の汚れと吸炭があり、竜などの石材か。トーンは吸 炭部を示す。		経山安山岩。
第101回 写真図版45	土師器 杯	住16指方埋	口径 (8.8)	含。硨。明褐7.5YR7/2。 酸化気味。	口縁部の内・外面横線あり。体部外面 下半焼割。	
同図 2 写45	土師器 杯	住16指方埋	口径 (12.0)	含。硨。橙2.5YR6/6。酸 化気味。	口縁部の内・外面横線あり。体部外面 下半焼割。	
同図 3 写45	土師器 杯	住16床P2+カ マドP4+同埋	口径13.0。器高4.2	微。硨。明赤褐5YR5/6。 酸化気味。	口縁部の内・外面横線あり。体部外面 下半焼割。中に型溝痕あり。	
同図 4 写45	土師器 杯	住16指方埋	口径 (12.0)。器高 (3.7)	微。硨。灰褐7.5YR5/2。 酸化気味。	口縁部の内・外面横線あり。体部外面 下半焼割。中に型溝痕あり。	
同図 5 写45	土師器 杯	住16床下P1	口径11.8。器高3.4	微。硨。にぶい赤褐5YR5/3。 酸化気味。	口縁部の内・外面横線あり。体部外面 下半焼割。中に型溝痕あり。	底割は中央 先。硨は後。
同図 6 写45	須恵器 小形壺	住16床P7	口径 (14.0)。器高 (1.7)	含。硨。橙7.5YR6/6。酸 化気味。	口縁部の内・外面に横線あり。体部外 面上半に型溝痕。下半に焼割。	
同図 7 写45	土師器 壺	住16床P5	口径 (14.0)	含。硨。橙7.5YR6/8。酸 化気味。	口縁部の内・外面に横線あり。体部外 面下半に焼割あり。	
同図 8 写45	土師器 壺	住16カマドP3 +P4+焼埋	口径 (23.2)	含。硨。橙7.5YR6/8。酸 化気味。	口縁部の内・外面に横線。体部外面 焼割あり。	
同図 9 写45	土師器 壺	住16指方埋+住 16トレンチ	口径 (28.0)	含。硨。にぶい橙7.5YR6/4。 酸化気味。	口縁部の内・外面横線。紐作痕あり。 外面に焼割。内面に整形痕あり。	

第9章 発掘された遺構と遺物

図 番 号 写真番号	種 類	出土位置	量 目(cm) 残 存 状 態	胎 土・焼 成・色 調 と 挿 要	備 考	
第101図 写真版45	磨石小 写真版45	住16RSL	長13.5、幅6.5、 厚5.0	備前・小口に川原石磨の面が残存し、表・裏にはっきり区別できるほどではないが、先沢がわずかに異なる。磨石として使用可。	愛宕安山岩。	
同図 1 写真版45	土師器 小形壺	住25カマド埋土	体部片	含。硬。2.5YR5/8。酸化 気味。	外面に施灰、熱ハゼ剥離あり。小片であるが、破片のえみから小形壺か。	
同図 2 写45	須恵器 蓋形小 写45	住25カマド埋土	体部片	多。軟。暗赤7.5R3/6。 酸化気味。	割れ口に紐作痕あり、内面に施灰あり。 外面に施灰、熱ハゼ剥離あり。小片であるが、破片のえみから小形壺か。	
同図 3 写45	粘土塊	住25カマド埋土	最大径4.8	微。やや重い。にぶい黄橙。 酸化気味。	細かいスズ状の繊維混入。せんべい状に扁平。土師器より重い。	
第105図 1 写真版45	中世土 師灰皿	X-20Y9表土	底径(4.0)	微。灰。浅黄帯7.5YR8/4。 酸化気味。	底面にわずかに赤切あり。内面に轆轤目あり。	15世紀頃。
同図 2 写45	須恵器 埴	カマドNo.3+X-20Y7表土	口径(15.6)	含。軟。にぶい黄橙10YR 7/3。酸化気味。	外面に轆轤右回転の轆轤目あり。全体消滅する。	
同図 3 写45	須恵器 杯・埴	住17カマド埋土	最大径(14.8)	微。軟。灰黄帯10YR6/2。 酸化気味。	焼成は土師質に近い。外面に轆轤右回転の轆轤目あり。被熱色変している。	
同図 4 写45	土師器 壺	住17カマドNo.1	体部片	微。軟。赤帯2.5YR3/6。 酸化気味。	外面に施灰目あり。内面は横整形。器内は薄く妻と考えられる。	
同図 5 写45	須恵器 蓋・壺	住17カマドNo.2+同層方土	底径(14.0)	多。軟。にぶい橙5YR6/4。 酸化気味。	内面に轆轤右回転の轆轤目あり。割口は消滅している。	
同図 6 写45	須恵器 蓋・壺	カマドNo.1+同層方土	体部片、断面径(22.0)	含。硬。橙5YR6/6。酸化 気味。	体部外面下方に施灰、内面に工具による挿あり。	
第108図 1 写真版45	須恵器 杯	住20層方埋土	底径(4.4)	微。軟。灰黄帯25Y7/2。底 面酸化気味。	底面に轆轤右回転の赤切あり。体部外面に轆轤目あり。	
同図 2 写45	須恵器 杯・埴	住20層方埋土	口径(14.0)	含。軟。にぶい黄橙10YR 7/3。酸化気味。	体部外面に右回転の轆轤目あり。器内は比較的薄い。	
同図 3 写45	須恵器 埴	住20層No.2	最大径(9.4)	微。軟。にぶい帯7.5Y6/3。 酸化気味。	体部外面に右回転の轆轤目あり。内面に工具による轆轤目あり。	
同図 4 写45	須恵器 埴	住20カマドNo.2+同No.3	口径(15.8)、 器高(6.3)	含。軟。にぶい橙5YR7/4。 酸化気味。	体部外面に右回転の轆轤目あり。高台は貼付。	
同図 5 写45	須恵器 羽釜	住20埋土 トレンチ	割線部片	微。軟。にぶい橙5YR6/3。 酸化気味。	跡は貼付。口縁部の内・外面に横整形あり。割口やや歪れ。	
同図 6 写45	須恵器 羽釜	住20埋土	口径(18.2)	多。軟。にぶい帯7.5YR6/3。 酸化気味。	割れ口に紐作痕あり。内・外面に右回転の轆轤目あり。跡は貼付。	
同図 7 写45	須恵器 壺	住20層方埋土	口径(26.1)	微。軟。赤帯10R6/6。	割れ口に紐作痕あり。口縁部の内・外面に轆轤目あり。	
同図 8 写45	磨石	住20層方埋土	長さ12.0	欠損は旧時である。表面に擦痕が認められるが、金属研磨などによる磨耗が明瞭でない。	須賀安山岩。	
同図 9 写45	焼用材	住20層左軸材	幅(10.8×9.3)	調査時に、左軸材を取り上げたもの。竈内壁側が被熱する。質は極めて軟らか。	未因結核灰岩。	
第110図 1 写真版45	須恵器 杯・埴	住21カマドNo.3	体部片	微。硬。にぶい橙5YR7/4。 酸化気味。	体部の内・外面に右回転の轆轤目あり。質は土師質。	
同図 2 写45	須恵器 杯	住21カマドNo.2	口径(10.5)	微。硬。にぶい橙5YR7/4。 酸化気味。	底面に右回転の赤切あり。体部の内・外面に轆轤目あり。	
同図 3 写45	須恵器 壺・蓋	住21カマドNo.1	体部片	含。硬。灰黄帯10YR8/2。 酸化気味。	体部の内面に轆轤目あり。割口に紐作痕あり。外面に塗灰付。	
第114図 1 写真版46	磁器 碗	X-37Y9 溝1埋土	口径(11.1)	なし。緑。白・空色(染付)。	外面にゴム判状の印あり。呉須は明るい空色。内・外に透明釉。	
同図 2 写46	磁器 碗	X-37Y9 溝1埋土	口径(11.6)	なし。緑。白・空色(染付)。	外面にゴム判状の印あり。呉須は明るい空色。内・外に透明釉。	
同図 3 写46	磁器 碗	X-37Y9 溝1埋土	底径(4.1)	なし。緑。白・空色(染付)。	外面にゴム判状の印あり。呉須は明るい空色。内・外に透明釉。	
同図 4 写46	磁器 徳利	X-32トレンチ 溝1	最大径(6.1)	なし。緑。白・濃紺(染付)。	内面露筋。器表面に透明釉。ペロ處による染付を修正。	
同図 5 写46	磁器 皿	X-12 溝1・2埋	底径(7.2)	なし。緑。白・濃紺(染付)。	内面にペロ藍による染付あり。内・外面に白磁釉。	
同図 6 写46	陶器 蓋	X-37Y9 溝1	最大径(10.0)	なし。緑。浅黄2.5Y2/3。 と給付あり。	土灰の裏で、天井部外面に、茶、緑色と給付あり。	
同図 7 写46	陶器 挫鉢	X-20-24 溝1埋土	口径(26.4) 器高11.5	なし。緑。にぶい赤帯5YR 5/4。酸化色。	外面に底面型と内面中位以下を除き鉄釉を施施。	
同図 8 写46	軟質陶 植木鉢	X-34Y9 No.2、1溝	底径(13.0)	微。軟。黄母粒・針状物質。硬。 にぶい橙5YR6/4。	内面に轆轤目あり。外面に型様の腐あり。底面に小孔あり。酸化色。	

図番号 写真番号	種 類	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第114図9 写真図版46	軟質陶 器	X-36トレン チ。溝1厘土	口径(38.8)	含。赤。橙5YR7/6。酸化 気味。	内耳貼付。耳部少し摩耗。内面回転 シャープ。底面型磨削。
同図10 写46	男瓦	X-32トレン チ。溝1厘土	器内1.4	含。緑。暗青灰5PB4/L。 還元気味。	内面に糸切痕あり。外面にハゼ。割れ 口消滅。二分割作。布目痕。
同図11 写46	軟骨 加工材	X-8 Y12。溝 1厘土	最大幅8.5	小口は鋸挽による。旧時刀傷 1箇所。挽方は部分のこね挽の個 所が見られるが、直線的に切断され 上手。木業材・主材か不明。	
第116図1 写真図版46	磁器 碗	X-39 Y10ト レンチ3溝	口径(12.1)	なし。緑。白・濃赤(染付)。	内・外面に整紙印刷。ペロ藍による 染付あり。
第118図1 写真図版46	中世土 師製土	溝4厘土	底径(5.2)	微。焼。灰5YR7/4。還元 酸化気味。	底面に横轍左回転の糸切あり。内面 にも横轍目あり。
同図2 写46	鉄製 不詳	溝4厘土	長3.2+*	両端々欠損。欠損は調査時。 横断面は隅丸長方形を呈する。全体に 錆ふくれ顕著である。	3と同一個 体。
同図3 写46	鉄製 不詳	溝4厘土	長3.2+*	両端々欠損。欠損は調査時。 横断面は隅丸長方形を呈する。全体に 錆ふくれ顕著である。	2と同一個 体。
第121図1 写真図版46	軟陶 鉢	溝18厘土	口縁部片	微。焼。灰10Y6/1。還元 酸化気味。	割れ口に紐作痕あり。内面摩耗。口縁 端部も磨耗。
同図2 写46	軟陶 鉢	溝18No.1	体部片	微。軟。灰10Y6/1。還元 酸化気味。	割れ口に紐作痕あり。内面5条の筋目 あり。内面磨耗。
同図3 写46	礎石小 敷石	溝18No.5	最長13.4	平面両端面はやや磨耗あり。側部 に刀傷あり。図中のトーンは旧時 の汚れを示す。そのため旧時は礎石 かベープ用材の可能性あり。	粗粒安山岩
同図4 写46	礎石	溝18No.3	最長11.7	図中の未点窟は旧時の割落。そのほか の点窟は磨耗を示す。側部まで磨 耗しているが、主体は表・裏面に ある。	粗粒安山岩
同図5 写46	礎石	溝18No.4	最長19.0	図中の点窟は磨耗を示す。側部は 否未使用。石材が硬質のためか、 磨耗は浅い。	粗粒安山岩
第123図1 写真図版46	土師器 杯	溝21厘土P1	口径(14.0)	含。赤。灰5YR7/4。還元 酸化気味。	口縁部の内・外面横轍。外面底は 鈍削。その中央に横轍の儀状巴あり。
同図2 写46	土師器 杯	溝21厘土	口径(17.2)	含。片岩粒。軟。灰5YR6/6。還元 酸化気味。	口縁部の内・外面に横轍あり。以下 外面磨削。全体に消滅。
同図3 写46	土師器 短蓋	溝21厘土	口径(15.2)	含。赤。灰5YR6/3。還元 酸化気味。	口縁部の内・外面に横轍あり。体部 外面磨削。外面の横轍位置浅い。
同図4 写46	須恵器 杯	溝21厘土	口径(14.0)、 器高(3.9)	微。軟。灰白5Y7/1。還元 酸化気味。	底面の切離し不明。外面下方横轍 目あり。
同図5 写46	磁器 形磁か	溝21厘土	体部片	なし。緑。白・淡青緑(青 磁釉)。	内・外面に浮白濁した淡い青磁 釉か。内面に刺文あり。
同図6 写46	陶器 杯	溝21厘土	底径(3.8)	なし。緑。淡灰青・灰釉調 の透明釉。	釉は透明感強い。縦貫入り。物境 は鉄足状に酸化。高台は削出し。
第125図1 写真図版46	須恵器 杯・埴	X-31 Y9。 溝47厘土	体部片	微。焼。明赤褐2.5YR5/6。 還元酸化気味。	内面に横轍目と内面吸灰あり。外面 に洗削目あり。
同図2 写47	土師器 壺	X-31 Y9 溝47厘土	口径(14.4)	微。片岩粒。硬。明赤褐 2.5YR5/6。還元酸化気味。	口縁部の内・外面に横轍あり。体部 外面磨削。割口に粘土接合面あり。
同図3 写47	土師器 壺	X-31 Y9 溝47厘土	口径(16.6)	微。片岩粒。軟。灰5YR6/4。 還元酸化気味。	口縁部の内・外面に横轍あり。口縁部 やや内傾し。端部部に浅い沈みあり。
同図4 写47	土師器 壺	X-30 Y9 No.2 溝47厘土	底径(7.0)	微。焼。灰5YR6/4。還元 酸化気味。	体部外面に彫削。内面に軟状工具の 痕あり。
同図5 写47	石製 鏡	溝47厘土	断面位置長5.0	縦断面は左・右不均等。内厚である。 左平厚右上の小欠らしの凹 みは旧時である。内厚さは、 加工技量の低さか。	黒曜石。
同図6 写47	礎石	X-30 Y9 溝47厘No.1	最大長15.4	表・裏面のみ、わずかに磨耗する。 側部の磨耗は、ごく一部である。 主体は非鉄金属か。	
同図7 写47	磁器 碗	X-31 Y8 溝47厘土	体部片	なし。緑。白・灰白5Y8/1 (白磁釉)。	内面と外面上方に白磁釉。露胎に 横轍左回転の彫削目あり。胎土が伊 万里か。
同図8 写47	軟骨	X-31 Y8 No.1 溝47厘溝地	最大長4.0	出土状態は上面までA+Bを 含む土壌がおよぶため、古代遺物 として不確実。遺存状況極めて 良い。	
第127図1 写真図版47	陶器 小杯	溝53厘土	底径(3.2)	なし。緑。暗赤・暗サリ ーブ(粗黒青磁釉)	外面に縦紋。体部外面の露胎部を 除き施される。
同図2 写47	磁器 小碗	溝52厘土	底径(3.8)	なし。緑。白・空(染付)。	内・外面に施文あり。内縁は ペロ藍より薄。
第130図1 写真図版47	土師器 杯	溝56No.2 立上面近接	口径(12.0)	含・角閃石安山岩粒。微。 灰5YR7.5YR6/4。	口縁部の内・外面に横轍あり。体部 外面磨削痕あり。
同図2 写47	土師器 杯	溝56No.3 立上面近接	口径(12.2)	微・赤。微。灰5YR7/4。	口縁部の内・外面に横轍あり。体部 外面磨削痕あり。底面磨削。

第9章 発掘された遺構と遺物

国番号 写真番号	種 器形	出土位置	量目(㎝) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考	
第130国 写真版47	3 土師器 環	溝56No.10	底部片	陶。軟。ぶい+増7.5YR6/4。 酸化気味。	環の底部と考えられる小片で、底面は 差別。	藤岡か。
同国 4 写47	4 土師器 盤	溝56No.6 底面	口径(16.2)	陶。軟。橙5YR7/6。酸化 気味。	口縁部の内・外面に横線あり、体部外 面下方直線あり。	
同国 5 写47	5 土師器 高環	溝56	最大径(8.0)	陶。硬。ぶい+橙2.5Y6/3。 酸化気味。	器内を除き研磨。全体に磨耗気味である。 二次的な焼熱あり。	
同国 6 写47	6 須恵器 小坏か	溝56環土	体部片	含。硬。浅黄橙10YR8/3。 わずかに酸化気味。	外面に横線左回転の差割目あり。貫は 土師質である。	
同国 7 写47	7 須恵器 不明	溝56No.10 底面	体部片	含。軟。灰白2.5YR/2。還元 気味。	須恵器の器種不明である。全体に磨耗 気味である。	
同国 8 写47	8 須恵器 環	溝56No.1 立上直近接	底径(7.0)	陶。赤。灰白。還元気味。	外面に横線目あり。内面底にも横線目 あり。底面の切磨し不明。	兼附。
同国 9 写47	9 須恵器 環	溝56No.4 立上直近接	最大径(34.2)	陶。軟。灰白N7/。還元気 味。	外面に平直。内面に素文の当目あり。 全体に磨耗少ない。	
同国 10 写47	10 磨石か 磨石	溝56 底面	長 12.6、幅 8.4、 厚 4.7	角閃石安山岩である。溝底面 に残された自然石中に認められた。表・ 裏に側部とは別の磨耗痕がある。人為か自然か不明。	二ツ出磨石。	
第131国 写真版47	1 ガラス 石ケリ	溝14環土	直径(3.6)	全体に気泡多く、古いガラスを思わせるが、色は透明無彩である。 裏面に彫底の痕跡あり。		
同国 2 写47	2 陶器 皿	溝28環土	体部片	陶。締。暗褐、白土と濃紺 (輪)。	外面下半は露胎。上半は透明釉。内面 は白土塗、ベロ藍で染付。	唐津系。
同国 3 写47	3 軟陶 火鉢か	溝32環土	脚部片	含。軟。橙5YR6/6。	内面と脚部外面にハゼ多い。在地製、 軟質陶器の脚部に見えるが器種不詳。	中世か近世 か不明。
同国 4 写47	4 焼締陶 小形壺	溝48環土	体部片	含。締。ぶい+増7.5YR7/4。 酸化気味。	割口と裏面に紐状痕あり。石灰質少な く。常滑焼には見えない。	非常滑焼で 東海輸入か。
第133国 写真版47	1 土師器 要	土堀10環土	体部片	含。軟。ぶい+増7.5YR 7/3。	器内の厚さからして、差割と考えられ る。内・外面は消純し、差別不明。	
同国 2 写47	2 土師器 環	土堀28環土	底部片	含。赤。橙7.5YR6/6。	器内の厚さと丸みから環と考えられ る。底面に差割目あり。	
同国 3 写47	3 磁器 碗	土堀36環土	口径(11.2)	なし。締。白・濃紺(輪)。	内・外にベロ藍、型紙印刷による染付 あり。	
同国 4 写47	4 軟質陶 不明	土堀39環土	体部片	陶。軟。灰NS/。還元気味。	内・外面に横線あり。大器の体部片である が、凹風の曲率浅く、器種不明。	
同国 5 写47	5 土師器 環	土堀41環土	口縁部片	陶。軟。橙7.5YR6/6。酸 化気味。	口縁部の内・外面に横線あり。体部外 面下半に差割目あり。	藤岡。
同国 6 写47	6 石	土堀50環土	最長(5.5)	石材鑑定のため島静雄によれば、農業用石灰や、コンクリートからの 石灰の炭化によるもので、磨石石様化は起りうるという。	磨石石様石 片。	
第134国 写真版47	1 磁器 碗	ビット14	体部片	なし。締。白・濃紺(輪)。	型紙印刷による。外面染付。染付の色 調はベロ藍。	
同国 2 写47	2 須恵器 環	ビット50	口径(12.1)	陶。締。紫灰5P6/1。還元 気味。	器内は薄く、器形状は器内、あまり 見かけない。	埼玉。
同国 3 写47	3 須恵器 環	ビット50	底径(6.0)	陶。軟。灰白10Y8/1。中 性焰気味。	内・外に横線目あり。底面の切はなし 不明。	兼附。
同国 4 写47	4 土師器 環	ビット51環土	底部片	陶。軟。橙5YR6/6。酸化 気味。	全体は風化気味で底面の差割、内面の 横線などは見えない。	藤岡か。
第136国 写真版47	1 磁器 皿	X-37Y9 土器	口縁部片	なし。締。白・淡青空(輪)。	内・外に染付施文。須領は精美。内面 に片底重と認め、口縁は横線をなす。	
同国 2 写47	2 磁器 小坏	X-37Y9	口径7.4、器高4.6	なし。締。白・濃紺(輪)。	鋼藍、ベロ藍による染付。内面に「こ まつ團」とある。	
同国 3 写47	3 陶器 土器	X-37Y9	底径(15.0)	含。締。灰白7.5Y8/2。	内面に灰輪。露胎部との間にトチン痕 あり。底面は磨殺底となる。	
同国 4 写47	4 軟質陶 不明	X-37Y9 土器	体部片	含。黄母粒。赤。灰5Y4/1。 還元気味。	内・外面に横線あり。回転左。器表面に 雲母粒が見られる。器種は大器。	
第147国 写真版47	1 陶器 皿	X-9Y12	口径12.0	陶。赤。灰白10Y8/1。中 性焰気味。	内・外に土野胎。体部外面に横線回転 による差割目あり。	美濃。
同国 2 写47	2 ガラス 皿か	X-12Y11紺	最大長6.2	気泡少なく、現代に近いガラスに見える。 両端部で、平面因左側に刃傷あり。骨加工時の木葉か、使用の本 体葉かは不明。	透明感は無彩色。透明 であるが、磨殺面光沢は現代より鈍い。	
同国 3 写47	3 軟骨 表様	X-32Y8付直 表様	最大長5.5	陶・シルト質。軟。灰白 2.5Y8/1。中性気味。	文様は三巴文に見え、古代に比べ磨殺 は小さい。	中世瓦。

第10章 箱田市前遺跡出土の牛歯・牛骨について

1 はじめに

群馬県の遺跡から出土する牛歯・牛骨は県内の遺跡から出土する馬歯・馬骨に比較して少なく、牛歯・牛骨の出土している主な遺跡は有馬条里遺跡（注1）、日高遺跡（注2）、下東西遺跡（注3）、田端遺跡（注4）、三ツ寺Ⅱ遺跡（注5）、上野国分僧寺・尼寺中間地域（注6）に過ぎない。和牛は牛歯・牛骨の出土点数も少なく、また既往の研究成果の蓄積も少ないので、上野国の和牛の具体像をとらえることはなかなか難しく、今後更に例数を蓄積することの必要性を痛感している。またこれらの遺跡から出土している牛歯・牛骨には中世以後のものは皆無であるが、箱田市前遺跡から古代の牛歯とともに、近世・近代とは言え中世以後に属する牛骨が出土している。幸い依頼により箱田市前遺跡出土の牛歯・牛骨を調査することが出来たので、少数例ではあるが上野国の和牛の具体像を明らかにするための一助となるようにと考え、以下その検討を行った。

（1）依頼内容

- ① 獣の種類、② 性、③ 年令、④ 大きさを明らかにすること。

（2）調査方法

① 出土獣歯・獣骨を有する獣の種類を検討を行う。② 出土獣歯・獣骨を有する獣の性の検討を行う。馬については大歯の有無と寛骨について、牛については寛骨について夫々性的特徴を調べて性別を検討する。③ 出土獣歯・獣骨を有する獣の年令を検討する。なお馬については西中川駿（注7）の頬歯の長さ、幅及び高さによる年令推定公式により検討する。④ 出土獣歯・獣骨を有する獣の大きさを検討する。出土獣歯については既往の古代及び中世の出土獣歯の計測値、及び現代の小格馬（注2）及び黒毛和種の歯の計測値（注3）と出土獣歯の計測値と夫々対比して検討する。獣骨中馬骨については林田重幸（注8）の骨の最大長による体高の推定公式及び西中川駿（注7）の馬における各骨の幅及び径による骨の最大長推定公式を用い、また牛骨について西中川駿（注7）の牛の各骨の最大長や幅及び径による体高の推定公式を用いて大きさを検討する。

2 使用した基準

- （1）牛歯・牛骨の部位、記号、各部の名称及び測定部位

注9、10、11参照

- （2）牛の大きさの表現

具体的な推定体高のわかるものは数値で示し、具体的な数値のわからないものは既往の出土した在来の和牛種及び現代の黒毛和種の大きさと比較し、「在来和牛より大きい」、「黒毛和種よりやや小さい」と言った表現を用いた。

- （3）牛の年令の表現方法

第10章 箱田古市前遺跡出土の牛歯・牛骨について

豊田裕（注12）は主要家畜の性成熟と繁殖供用期間について、牛の繁殖供用開始は14～18ヶ月、繁殖供用限界は14～15年である、としている。直良信夫は「古代遺跡発掘の家畜遺体」（注13）の中で、「生後おそらくは10年を経過していた老牛と思われる」という表現を用いている。市井正次（注14）は永久歯萌出完了時5才をもって馬の幼令と社令の区分としている。従ってここでは永久歯萌出完了時4才を基準とし、4才以下を幼令とし、豊田裕の繁殖供用限界を用い14～15才以上を老令とした。また牛は切歯による Baron の年令鑑定法（注15）が用いられている。ただ牛の切歯の出土例は少なく、頬歯については長歯タイプに短歯タイプとあり個体によって異なり、摩耗度による具体的な年令判定が出来ないので年令区分のみを記載した。

（4）単 位

牛歯・牛骨の計測値は特別に記載しない限りmmを表し、比率は%を表わす。

（5）番 号

図中の通番は本文、写真及び附表中の通番に一致する。また明らかに番号の記載されている歯・骨より分離したと思われる小歯片・小骨片は除外した。

3 結 果

（1）牛歯・牛骨の出土状況

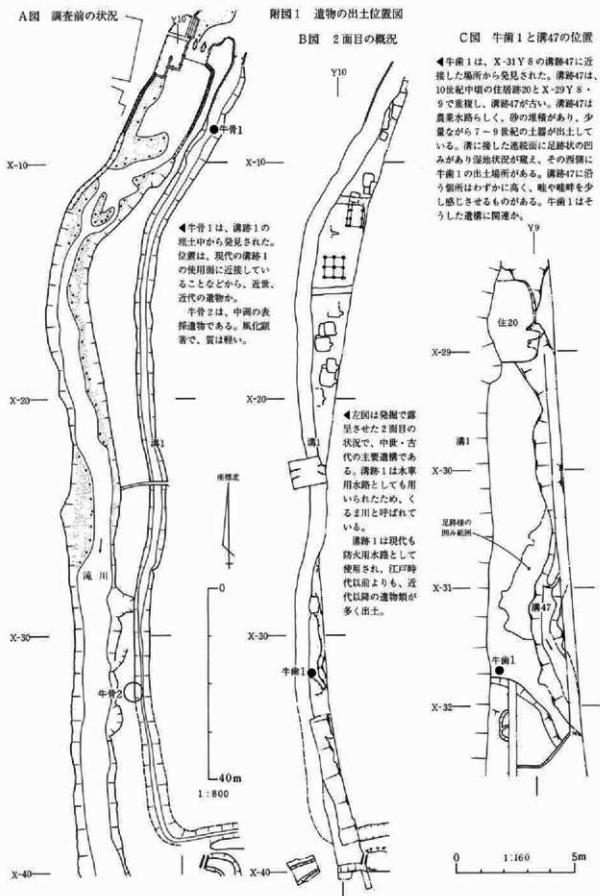
発掘調査の遺物番号として牛歯1、牛骨1～2の名称が附されており、本稿はその番号を引き続いて使用した。この遺跡の奈良時代～平安時代（8世紀～9世紀）に属するというX-31Y 8の溝47に近接した湿地から半ば粘土層に埋もれた牛の上顎後臼歯（牛歯1）が1個出土している。溝47に沿う箇所はわずかに高く、畦や畦畔を感じさせるものがあり、牛歯はそうした遺構に関連をしているのではなからうかということである。また滝川に平行して南北に走っている溝1の埋土の中から近世・近代に属するという牛の前肢骨（牛骨1）が1個出土し、さらに中洲から同じく近世・近代に属するという牛の後肢骨（牛骨2）が1個表面採取されている。調査担当の所見によるこれらの遺存体の出土状況は附表1、附図1、2、3、附写真のとおりである。

（2）出土牛歯・牛骨を有する牛の個体数

出土牛歯と牛骨は夫々の属する時代が異なっている。2個の牛骨は属する時代、大きさ、年令等似通ってはいるが出土場所、出土状態、風化の度合いも異なるので別個体とした。

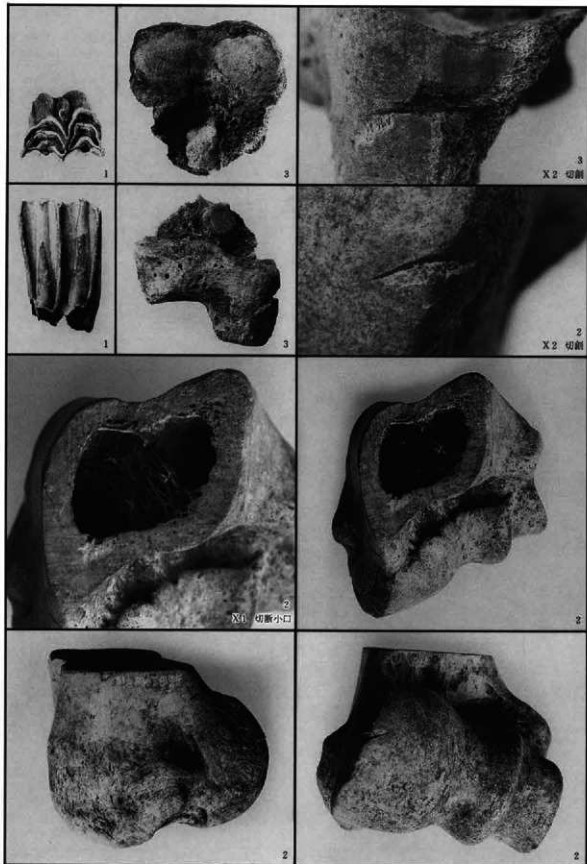
（3）出土牛歯・牛骨の遺存状態とその形態

No. 1（牛歯1）牛左上第2後臼歯は歯根部を欠いているが柱状で大きく、遺存状態は極めて良好で、良く原相を保っている。No. 2（牛骨1）牛左上腕骨遠位関節部はやや大きくて力強い。遺存状態は極めて良好で、良く原相を保っている。ただ鈎突窩上縁で骨体部が鋸縁の刃物で横断されている。またこの牛骨にはこの他滑車の内側骨後の中央部よりやや上に、下から斜上にかけて長さ1cm、深さ4mmの刃物の傷跡が認められる。No. 3（牛骨2）牛左中心足根骨+第4足根骨は風化により遺存状態が悪く、表面は粗ざうで関節面の後側を失っており、また踵骨関節部が著しく小さく垂直となっている。なおこの骨は前面外側隅に長さ1.7cm、深さ3mmの斜上から水平に刃物で切られた傷跡を有している。No. 1～No. 3の牛の遺存体の遺存状態並びに形態は附表

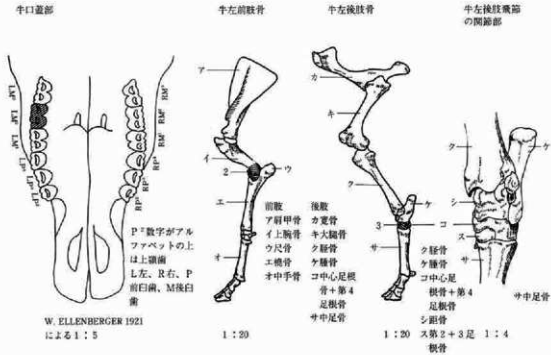


第10章 稲田古市前遺跡出土の牛歯・牛骨について

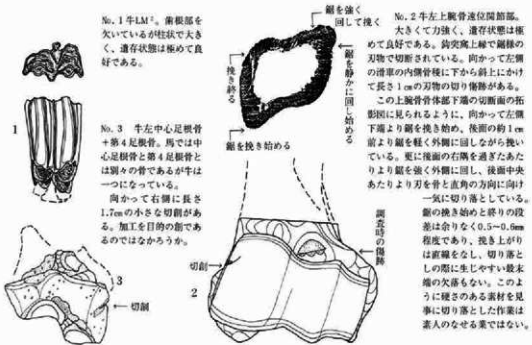
附写真 獣歯骨の状態 明赤をのぞき 1:1.5



附圖2 牛口蓋部及び四肢骨における出土牛歯・牛骨の部位



附圖3 出土牛歯・牛骨の実測図及び上腕骨骨体部断面の拓影図



第10章 箱田古市前遺跡出土の牛歯・牛骨について

附表 1 箱田古市前遺跡出土の牛歯・牛骨出土状態一覧

番号	出土地	時代	出土状態
1 (牛歯1)	X-31 Y 8 区の 湿地から出土	奈良時代～平安 時代(8世紀～ 9世紀)	湿地の粘土層の中に半ば埋れた牛の左上第2後臼歯が出土しており、すぐ傍を農業用水と思われる溝47が走っている。溝47に沿う箇所は僅かに高く畦や畦畔を感じさせるものがあると言う
2 (牛骨1)	溝1より出土	近世・近代	溝1に平行して南北に走っている溝1の裡土の中から牛の左上腕骨遠位関節部が出土したと言う
3 (牛骨2)	溝川の田中洲よ り出土	近世・近代	田中洲から牛の左中心足根骨+第4足根骨が1個表面採取されたと言う

附表 2 箱田古市前遺跡出土の牛歯・牛骨の形態

No.	出土牛歯 の部位	個体の同 一性	特 徴			欠損状態その他
			大きさや全体の形	咬合状態	エナメル質の特徴	
1	牛LM ²		柱状で大きい	咬合の厚みは軽い。咬合面は舌側に傾き咬痕は山形をなしている。	歯冠の前・後葉の土柱の発達は良好で、歯柱の形は深く力強い。舌面における前後葉の柱状突出は鮮明である。前・後葉境にある鎌状結節はやや太くて長い。	前根部分が欠けている。
No.	出土牛骨 の部位	個体の同 一性	特 徴			欠損状態その他
2	牛左上腕骨 遠位関節部		遠位関節部の鉤突窩の上縁で骨体部が鋸歯の刃物で切断されている。関節部は遠存状態極めて良好で、良く原相をとどめている。灰白色で緻密骨は僅小であるが光沢を持ち、全体としてやや大きい。関節部の緻密骨にはやや大きい多くの脈管小管が開孔している。滑車の上縁には横に長い鉤突窩が見られ、腹面の肘頭窩は大きくて深い。滑車の螺旋を始め各種線は角ばって鮮明である。			骨体部が失っている。滑車内側骨稜の中央部よりやや上と、鉤突窩の中央よりやや外側とに小さな傷割がある。
3	牛左中心足 根骨+第4 足根骨		淡灰褐色を呈し、風化のため緻密骨表面は粗ざうで欠損部には細かい海綿骨が現れている。距骨関節面はやや広いが、踵骨関節面は著しく小さい。足根骨の前面には大きい脈管小管が開孔している。			距骨関節面の内外の後側及び踵骨関節面の後側を失っている。前面外側隅に小さな傷割がある。

2のとおりである。

(4) 出土牛歯・牛骨を有する牛の性別

寛骨が出土していないので性別は不明である。

(5) 出土牛歯・牛骨を有する牛の年齢

飼育する飼料が異なるので現代和牛の歯の摩耗度をもって古代の和牛の年齢を類推することは妥当でないと考えられるが、一応現代和牛の歯の摩耗度をもって出土した牛歯を有する牛の年齢を類推すると、No. 1 (牛歯1) 牛LM²は、歯冠の高さはやや短い感じがしているが咬耗の度は軽い。しかし咬耗の度合いが軽いと云っても、2才、4才、5才の現代牛のM¹、M²のいずれよりも咬耗の度合いがやや進んでいるので壮牛牛と考えられる。No. 2 (牛骨1) 牛左上腕骨遠位関節部は骨端線の化骨が総て完了しているので3才以上であるが、遠残状態極めて良好なので壮牛牛と考えられる。No. 3 (牛骨2) 牛左中心足根骨+第4足根骨は風化のため

附表 3 箱田古市前遺跡出土の牛歯・牛骨を有する牛の性、年齢、大きさ

No.	個体の同一性	性	年 令		大 き さ		摘 要
			年 令	区 分	推定体高	体 高 区 分	
1		不明	不 明	牡 令	不 明	古代の牛とはほぼ同じ大きさと考えられる。	歯冠はやや短い。2、4、5才の現代牛より脱乳進んでいる。
2		不明	不 明	牡 令	126.4cm	見島牛の雌又は黒毛和種の雌と同じ。	骨端縁すべて化石しているので3才以上であるが、遺残状態極めて良好なので牡令であろう。
3		不明	不 明	不 明	124.2cm	黒毛和種の雌と同じ。	風化が著しく年令区分不明。

附表 4 箱田古市前遺跡出土の牛歯・牛骨の計測値

No.	牛歯の部位	歯冠長	歯冠幅	幅 率	TH(mm)	Buccal TH	エナメル厚 (頬側-舌側)	重 量	摘 要
1	LM ²	30.1	18.4	61.1	41.2	欠損	1.0-1.4	30.9g	歯根縁を欠く
No.	牛 骨 の 部 位		遠位端幅 (Bd)	滑車幅 (BT)	遠位端径 (Dd)	現在の高さ	重 量	摘 要	
2	左上腕骨遠位関節部		90.0	80.5	81.9	42.1	182.0	遠位関節部より上を失	
3	左中心足根骨+第4足根骨	幅 (GB)	前後径	前後径	現在の高さ	24.2	後壁上半の両側壁を失		
			54.2	52.4	37.3				

遺残状態悪く判断し難く、年齢は不明である。箱田古市前遺跡より出土した牛歯・牛骨を有する牛の年齢を時代別に分類すると附表3のとおりである。

(6) 出土牛歯・牛骨を有する牛の大きさ

出土牛歯・牛骨の計測値は附表4のとおりである。No.1(牛歯1)牛LM²の計測値を既往の同時代の出土牛歯の計測値(注4)と比較すると歯冠長はほぼ同じであるが歯冠幅、幅率は共に大きい。この牛は古代の和牛とはほぼ同じ大きさの牛であると考えられる。No.2(牛骨1)牛左上腕骨遠位関節部は西中川駿の牛の各骨の最大長、或いは幅及び径による体高推定公式(注7)によると推定体高は126.4cmで、現代和牛の雌程度の大きさの牛であったのであろう。No.3(牛骨2)左中心足根骨+第4足根骨は西中川駿の体高推定公式によれば推定体高は124.2cmで現代和牛の雌の中では小さい牛程度の牛であったのであろう。

4 考 察

骨の加工工房について

附図3に示したNo.2(牛骨1)牛左上腕骨の切断面の拓影図に見られるとおり、この上腕骨骨体部の下端は背面(前面)内側骨稜より滑車と平行に鋸を挽き始めているが、初めは極めて慎重に鋸を挽いているため切断面は平滑で鋸の刃の跡は目立っていない。腹面(後面)約1cm前より鋸を軽く外側に回しながら挽いている。更に腹面中央あたりから鋸を強く外側に回し刃の角度を骨の表面とほぼ直角の方向に向けて残余の内側部を一

氣に切断している。このように鋸を回し挽きをしているにも拘らず、鋸の挽き始めと終りの骨の断面の差は殆んどなく、強いて言えば0.5-0.6mm程度の段差が認められるのみである。上腕骨骨体遠位部のような凸凹に富んだ骨としては切断面の仕上がりは誠に見事であって素人のなせる業ではなく、また前述のようにNo. 2、3の牛骨に残る鋭利な刃物による傷跡の存在も併せて考えると、この牛骨は骨の加工物を作る目的で切断されたものと考えられ、この地に於ける骨の加工職人と骨の加工工房との存在が考えられる。また加工目的で牛骨を選んだのは馬に比較すると牛の緻密骨の方が緻密であり、色も白くて光沢があり、飾り物を作っても美しく見えるためであろう。上腕骨を選んだ理由は四肢骨の中では比較的平らで大きな骨がとれるためと考えられる。なお骨材を用いた飾り物は筆者の実見する限りにおいては煙草入、根付、小刀の柄等があり、このほかにも多様な形で生活の中で使用されていたと考えられ、ここに1例の加工に用いられた素材動物の種類と骨の加工が行われた現状の一端とが明らかになった意義は深いものがある。

謝辞 牛骨の測定値と牛の体高との関係について資料と種々御教導とを賜った鹿児島大学家畜解剖学教室西中川駿先生に深甚な感謝の意を表します。先生の兼定された牛の体高推定公式により上野国の古代の牛の具体像は更に明らかになるものと信じております。

注

- 金子浩昌 「第3節有馬桑里遺跡出土の馬歯・牛歯」『有馬桑里遺跡』（群馬県渋川市教育委員会社会教育課）1983
- 大江正直 「日高遺跡出土の馬歯・馬骨について」『日高遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1982
- 大江正直 「下東西遺跡出土の獣歯・獣骨について」『下東西遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1987
- 大江正直 「田端遺跡出土の獣歯・獣骨について」『田端遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1988
- 大江正直 「三ツ寺遺跡出土の獣歯・獣骨について」『三ツ寺遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1991
- 大江正直 「上野国分舞寺・尾寺中間地域出土の動物遺存体」『上野国分舞寺・尾寺中間地域4』（群馬県埋蔵文化財調査事業団）1990
- 西中川駿 「V. 遺跡出土骨同定のための基礎的研究」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』（鹿児島大学農学部獣医科）1991
- 林田重幸 「第3章第2節日本古代馬の分類」『日本在来馬の系統に関する研究』（日本中央競馬会）1978
- 牛歯の部位、記号、並びに各部の名称
- 加藤嘉太郎 「第2章歯の構造と咀嚼との関係」『家畜解剖と生活』、直良信夫『古代遺跡発掘の家畜遺体』（日本中央競馬会弘済会）1973による
- 牛骨の各部の名称
- 加藤嘉太郎 『家畜比較解剖図説（上巻）改訂増訂 1981、川田信平、船橋正之 『図説家畜解剖学（上巻）新改訂 1974による。』
- 牛歯・牛骨の測定部位
「A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES」HARVARD UNIVERSITY 1976により、西中川駿兼定「馬歯の測定部位」及び直良信夫『古代遺跡発掘の家畜遺体』1973を参考とした。
- 豊田研（並河澄外10名共著）『V. 4、性成熟と性周期』『新畜産学』1985
- 直良信夫 『古代遺跡発掘の家畜遺体』（日本中央競馬会弘済会）1973
- 市井正次 「第24章年令兼定」『馬骨検定』1943
- R. BARONNE ANATOMIE COMPAREE DES MAMMIFERES DOMESTIQUES. TOME3. SPLANCHNOLOGIE (FETUS ET SES ANNEXES) FASCICULE 1. APPAREIL DIGESTIF, APPAREIL RESPIRATOIRE. LABORATOIRE D'ANATOMIE ÉCOLE NATIONALE VÉTÉRINAIRE LYON. PP. 155-179 1976

第11章 箱田古市前Ⅱ遺跡のまとめ

箱田古市前Ⅱ遺跡の成果について、まとめと若干の考察を行いたい。

1. 箱田古市前Ⅰ遺跡で発見されたHr-FA層の堆積およびAs-Cの軽石粒をまじえた黒色土の南限はX-10ライン以北で認められたが、その2層を残す狭少な個所には、平安時代の住居跡の重複が多く、具体的な水田遺構の発見には至らなかった。しかし、水田跡南限の示唆は、Ⅱ遺跡に存在した2層により得られたと考えていると同時に以南の微地形の低台地が始まっていたとも考えられた。
2. 住居跡群の単位は、箱田古市前Ⅰ遺跡で発見されたX19ライン以北の一帯とは、別低台地に占地されており、別単位である。奈良時代住居跡は、両遺跡にも存在しているが、この地域の集落構成のあり方について大規模面積の発掘例が周辺で行われている訳ではないので急には、明らかにし難い。当遺跡の集落が、上野国府との関連で計画性に基づく場所であったのか否か今後の課題となるところである。
3. 滝川用水路跡とされたのは、箱田古市前Ⅰ遺跡の6号溝であった。6号溝跡は、現滝川の直前までを指しているため、Ⅱ遺跡の溝跡1・2と関連しあうことになる。Ⅱ遺跡の溝跡1は、溝跡2よりも新しく、溝跡2が古い。溝跡2は、ビニール文化以前であり、陶・磁器が基底面側で少ない出土であったので、明治時代初期以前から18世紀頃の滝川用水跡と想像された。溝跡1は、ビニール文化時代を中層ぐらまで含んでおり、近時まで使用され、その延長上には現滝川用水が存在している。いいかえれば、溝跡2号岸の延長上に溝跡1号があり、その延長に現滝川用水の東岸が存在する。

箱田古市前Ⅰ遺跡の2・7号溝跡は、滝川用水か天狗岩用水を利用した大型水路と解釈されている。両溝とも近世陶・磁器の出土が少ないことから18世紀以前に主体機能があったと考えられる

が、Ⅱ遺跡で、その延長は溝跡2に含まれてしまうか現滝川の幅員中に存在したかして、具体的な状況は明らかでなかった。前出の天狗岩用水は、慶長6年(1601)上野国府の地に築かれた葦海城に秋元長朝が入り、長朝は、慶長7年に植野城(現総社城)を築城し、併せて用水開さくを行い、用水は苦渋・難工事のすえ慶長9年に完成した。その用水を植野堰と呼称するが一般通称天狗岩用水が今日名称である。滝川と合せた起結は、榛東村漆原付近の利根川から取水されたといひ、末端は高崎市京ヶ島地区で井野川に至ったと推定されている。現在、天狗岩用水と称されている範囲は、取水口の浪川市半田付近から、前橋市石倉町で八幡川と合流するまでを天狗岩用水と呼び、南接の取水口から以南を滝川(用水)と称している。この両用水の末端からさらに慶長15年(1610)に実施された現佐波郡玉村町の開田のため関東郡代伊奈備前守忠次が秋元長朝、北城の江原澤左衛門重久らの協力を得て玉村・烏川に合流するまでの代官堀(備前堀)を開さくし、慶長15年に完成している。以上、大事業の沿革を触れた。前出のⅠ遺跡2・7号溝について滝川用水か天狗岩用水を利用したとの推定は、天狗岩用水が石倉町近辺まで部分施行され、滝川(用水)を次施工したという過程があった場合を考慮したための結果であり、用水の本流か、本流の末端からさらに延長した用水であるのかは不明であった。両溝は、近世陶・磁器が多用された18世紀以降の開さくであれば、出土してもよいはずであるが、微弱であったと聞く。また堆積土壌は、砂質であり、寛保2年(1742)など大洪水による結果か、序々に堆積したかも不明という。そのため、両溝の開さく、埋没・廃棄、やがては新規流路の開さくなどを想定すると、微妙であり、江戸時代前期を明言するまでには至らなかった。その延長は、Ⅱ遺跡の溝跡2か、それにより削られた可能性もあると想像し

ている。なお、II遺跡の場合、現滝川の西岸の多くに地山層を見ることができているので、古い用水路が以西に存在した可能性は薄い。

- 箱田市前II遺跡の溝跡18は、15世紀頃の溝跡で、深さは、表土層から約80cm以上ありながら流れの形跡は認められなかった。そのため、15世紀頃に周囲に流水を生じる条件は薄いと考えられた。さらに、埋没土上層に、道として利用された硬化面があり、16・17世紀までの間に、東西方向に道が存在していた。17世紀であれば滝川用水と直交することになるが迂回形跡はなく、その前代に大規模な河川があったとは考え難い。
- 箱田市前II遺跡の溝跡47は、7・8世紀頃の溝跡と推定され、砂・粘性土・シルトなどの互層により埋没していた。このため火山噴出物層を拠所として埋土が除去され、発見されたI遺跡の水田遺構および疑似遺構と発見原因が異なる。I遺跡で古代水路1号溝跡、II遺跡では溝56があり、奈良・平安時代の大形溝跡である。それ以前の水田関連では、明瞭な形での溝跡は薄く、この溝跡47は、奈良時代に先だつ頃の溝の状況を示すものであり、存在は重要である。溝跡47の周辺は、わずかであったが、低地帯中の凹凸痕を認め、湿潤な場所と時期があり、溝の小規模な点と流水があったことは、上流域か下流域に水田が営まれた可能性を想像しうる。しかし、蛇行気味の平面は、計画的な水路とするには弱い気がするものの、方向性は北を指向しており、計画性を全面否定することはできないであろう。いずれにせよ、古墳時代後期頃の水田水路としての機能と時期を想定しておきたい。
- 箱田市前II遺跡調査対象地の、くるま川、群馬郡旧東村農協の製粉用タービンの起電施設、既石坂家水車関連なども、遺跡の埋めもどし作業中に調査することができた。また石坂家の石臼類についても記録することもでき、近代製粉を考慮うえでの資料、特に道具資料の紹介例の少ない現状において、比較資料として中・近世資料の参考

例として報告に加えた。

石臼の大きさは、水車臼の場合、直径60cm以上を、手動の穀臼は35cm級を測ることができた。搗臼は、旧時には存在していたという。石材は、極名山を中心にしたところの粗粒安山岩と硬質の安山岩が用いられている点は、中世とも共通している。花崗製が勢多郡東村産を利用したか否かは不明であるが、存在することは東毛地域の近世石臼類と通ずる点である。臼類は直径は、西毛地域の中世穀臼では直径30-32cmの個体が多く、材種は、粗粒安山製が多い。中世都市鎌倉においては、14世紀末から15世紀初頭頃の石臼多用の前代に鎌倉の盛行期があるため傾向を知るまでには至っていない。むしろ無理なのかもしれない。西国では、寛文13年(1673)の大洪水により遺跡の主体が埋没したという広島県福山市草戸千軒町遺跡では、挽臼と種称された穀臼は、花崗岩製が多く、大きさは35cmを越える波米形の最古形の例もある中で、30cm弱の直径が主体を占めている。そのため箱田石坂家の穀臼例は、中世の上野地域例より大きく、さらに草戸千軒町遺跡より、さらに大きいことが言えそうである。石材との関係のうえでは、直径は石素材と反比例の関係にあるのか、直径に地域差があるのか明瞭でないが、石坂家の石臼類は示唆に富み、その存在の意義は、大としようであろう。

くるま川の記録・報告は、水車に利用した滝川から分岐させた形のみ表現と扱いになってしまったが、九州地方に戦国時代末期にもたらされた水車技術が、どのように上野地域内に展開していったのかと想像を巡らす時に、周辺県および県内での資料は少なく、今後、例証を増加させての検討が要であろう。

- 箱田市前II遺跡1号溝の延長はII遺跡の溝56と推定され、理由は、両溝の当初の機能時は、ほぼ8世紀であること、規模が荘大で発掘された個所は、直線的に構築されている。両溝の機能目的は、用水路としての推定を、一方で土地区画で

あったと推測される。その推定・推測は、上野国府に近接地という立地から、どのように保わっていたのかを次に見たい。

上野国府の所在地は、吉田東伍『大日本地名辞書』「坂東・第六巻、国府址」1912は、「前略、長尾氏の遺城と為すもの、後略」と説明し、現在の元総社町蒼海城付近をあて、その後、松島榮治「古代上野の都を探る」発表要旨1972において具体的な位置を、1974年には金坂清則「上野国府とその付近の東山道、および群馬、佐位駅について」

『歴史地理学紀要16』に、庁城八町案が示された。しかし、金坂の説は、松島説のを約430m東に寄る形で示されたが、1981年に川原嘉久治「推定上野国府跡地覚え書き試み1」『鳥羽遺跡月報16』の綿密な遺物採集と聞き取り調査によって「長谷一斤屋か、八丁一方八町を示唆か、小倉一御倉かなどの俗称地名、遺物類は、瓦類の散布が松島の説の範囲を中心にしてあることなどから、八町域中の四至に接近して瓦葺建物が多く存在し、内部は瓦の散布が少ないという結果が示された。具体的な発掘による手がかりは、1982年「開泉種遺跡」(前橋市教育委員会)で、北辺大溝の一端と目される遺構が、元総社寺田遺跡では、「国厨」・「曹司」の墨書土器の発見、東辺は自然地形に影響されたいこと(目下、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団で整理中、既刊に『元総社寺田遺跡Ⅰ』(1933)が序々に明らかにされている。そうした成果を川原嘉久治が「上野国府の古瓦」『上州文化No.45』1991にまとめている。第148図の上野国府跡は、それを参考にした。同図は、8世紀前半前後から9世紀頃に機能していた律令制に関わるとみられる大規模遺構の土地区画や方向性を示すために編集・作成した図である。

図中の凡例・例言については、図中の各遺跡は前橋・高崎市・群馬町都市計画図1:2500に置き直し、公共座標を用いて測定しての数字を主に用いた。さらに地理院前橋1:25000に合成した。

図中の解説補足点は、まず上野国府城は、機能

の盛衰によって時代とともに変異している可能性があるが、川原の推定は初期に近い形が意識されているが「群馬県史通史編2・原始古代2」「律令体制の展開と上野国」1991で示めされた元総社明神遺跡での上幅7m、深さ1.2mで南北400m以上に延びる大溝(『元総社明神遺跡Ⅰ』『元総社明神遺跡Ⅱ』・『元総社明神遺跡Ⅲ・Ⅳ』(前橋市教育委員会)1983・1984・1986)は、溝形態が開放的で10世紀以降も機能していた可能性が感じられ、先に明らかにされた開泉種遺跡大溝の上幅約5m、深さ1.2m前後とは溝形態、時期差があると考えられるため除外して考えたい。開泉種遺跡大溝は、横断面が逆台形状を呈し、寺院や官衙遺跡の外縁溝と類似の形状にある。上野国分寺については、「史跡上野国分寺」(群馬県教育委員会)1988に南縁築垣跡の方向性は、座標北に置き直した場合N35°0'の走行という。上野国分寺跡は「上野国分寺・上野国二寺中間地域」((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)1993による。国府南面の古道については、古くから存在が知られ、道筋の一部は高崎市日高町付近で発掘され、平安時代末期の浅間山B軽石降下以前に存在していたものの+40.5km以南の図中細線破線以南では発見されなかった(『日高遺跡Ⅱ』・『日高遺跡Ⅳ』(高崎市教育委員会)1980・1982)。おそらくは、曲る個所に村主神社の旧社地が存在していたため、西方に迂回する現道が相当すると考えられるとともに、この遺跡が、8世紀前半頃まで遡りうるかは疑問を感ずるため、諸遺跡大溝間相互を基に距離比較の必要性を思うのである。

第148図を作成した結果、108~109mを単位とする坪方を意識して算出すると、箱田古市前Ⅰ遺跡Ⅰ号溝および同Ⅱ遺跡溝56と上野国府南面の道まで約12.5町、日高遺跡154号溝と同道まで約3.7町、新保遺跡D5号溝より同道まで3.05町、同前遺跡東側大溝より同道まで5.27町と算出できるが、割り切れが良くない。そのことは、一つには、算出規線を上野国府南面の道に求めることの



第148図 周辺遺跡大溝遺構と周辺要害遺跡

可否があるが、それよりも先ず、10世紀に先行の大溝の発見に努めなければならないであろう。本図の作成は、新保遺跡Ⅲの整理時点を入れ2回目の作業であったが、気になる点は大溝の方向性が、各遺跡で微妙に異なることであった。続いて、そのことを考えたい。今回の箱田古市前Ⅰ遺跡1号溝と同Ⅱ遺跡溝56とは、同一の溝と考えられるが、調査部分は直線的であっても双方を図上で結びと現在のJ A前橋東支所倉庫のあたりで若干の蛇行を呈することになる。そのことは、現代の滝川用水を見ても、避けることのできなそうな低台地では、縦断し、避けられそうな低台地際では、若干の蛇行状態を呈し、全体的には南北走している。その状態を思えば、榛名山裾部の勾配においては、ある程度、地形の則しての関さくが必要であったのではないだろうか。かつて日高遺跡の調査所見(前出1982)で、平安末期水田が、前代(154

号溝は、9世紀最末期に推定人為埋没され、その後の浅間山B軽石水田は、10世紀のある段階以降に新たに設けられた水田から出発しての継続と考えられた。)が直前代の水田を踏襲していることにより水路と水田面との関係が低落差の灌漑であり、新たに水田を開墾または大改良し、水路を必要とする場合の水田面と水路基面との関係は、高落差の灌漑で、相当な水量を必要とすることを触れておいた。そのことは同遺跡の弥生水田の当初が深い水路を築き、やがては浅い水路に変化したことや現代の群馬県の土地改良事業か、短期工事・改良水田に伴う漏水・土地勾配などから高落差の灌漑に施工されていることなどからも明らかである。仮に当初の条里制水田が施工された場合、上野国府周辺での勾配がある程度あり低台地が星々と存在する場所では、新規に直線的な大型水路として設けることは困難で、地形に沿い、全体的に直線的になる程度の施工となることが考えられ、導水量も大量の水を必要とし、水田面と溝との関係も高落差の灌漑であったであろうと想起される。なお日高遺跡跡154号溝の所見から、同溝は8世紀頃に初期の灌漑水路としての機能があり、9世紀末期に人為埋没され、北南に直線的に大型溝として施工された状況からは、大量の労働力と高い計画性を必要とするため、公が背景となった土地制度に係わる条里制の事業の一端であろうと推定した筆者の基本的な考え方に今回も変更はない。

現在の滝川用水の走行は、第148図で見るように遺跡地より南方約1kmまでやや直線的に続いており、その間は、おそらく、この古代の大溝の埋没跡地を利用して滝川用水の間さくが行われたのではないだろうか。一つの問題の提起にしておきたい。

写 真 图 版

写真図版 1



道跡全景（北から）



遺跡全景

写真図版 3



調査前 (北から)



調査前 (南から)



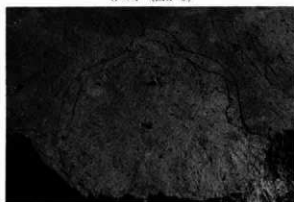
1号住居 (西から)



カマド (西から)



カマド掘り方 (西から)



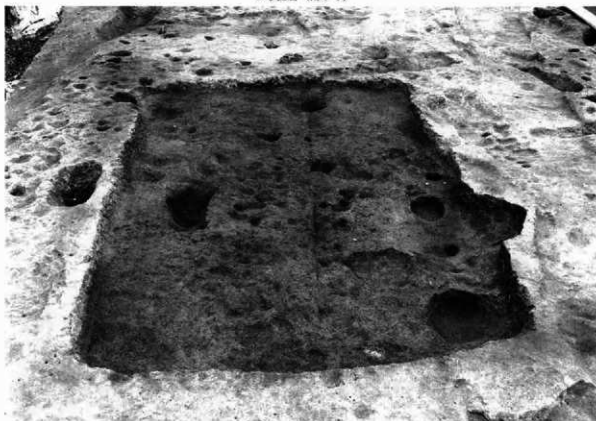
カマド検出状況 (西から)



貯蔵穴 (北から)



2号住居 (南から)



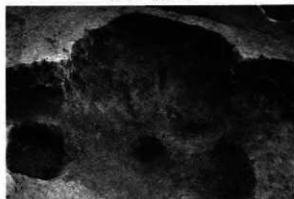
掘り方 (南から)



カマド (西から)



カマド掘り方 (西から)



カマド掘り方 (西から)



貯蔵穴 (西から)



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版7



3号住居 (南から)



掘り方 (南から)



カマド (西から)



カマド掘り方 (西から)



カマド掘り方 (西から)



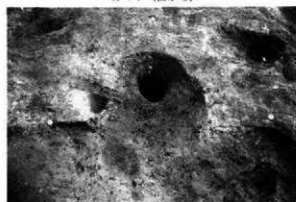
4号住居 (西から)



カマド (西から)



カマド (南から)



カマド (西から)



カマドセクション (西から)



5号住居 (南から)



5号住居 (南から)



張り出し部セクション



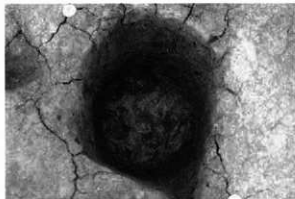
カマド (西から)



カマド (西から)



1号ピット (南から)



1号ピット (南から)



4号土坑 (西から)



4号土坑セクション (南から)



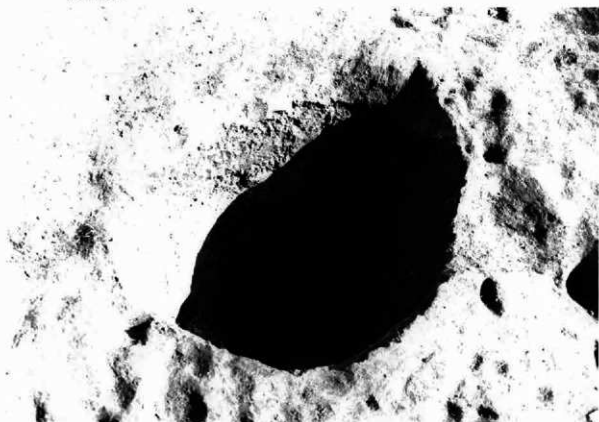
1号サク状遺構検出状況 (北から)



1号サク状遺構 (北から)



1号サク状遺構 (北から)



1号井戸 (西から)



1号井戸掘出土状況



2号井戸 (東から)



2号井戸 (西から)



1号道 (西から)



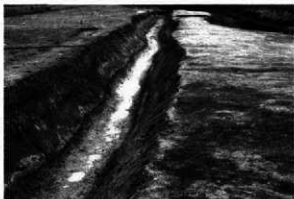
2号道 (西から)



1号溝 (南から)



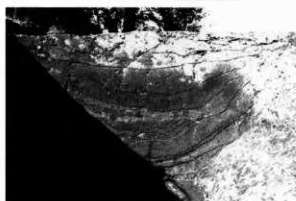
1号溝 (北から)



1号溝 (北から)



1号溝 (南から)



1号溝セクション



2号溝 (南から)



2号溝 (北から)



2号溝部分 (南から)



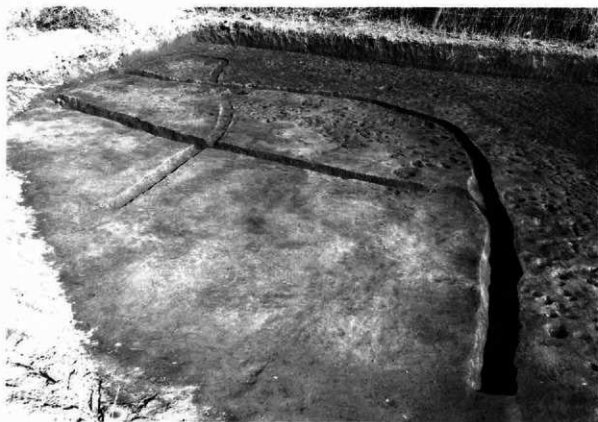
2号溝部分 (南から)



遺物出土状況



礫出土状況 (西から)



3・4・5号溝



3号溝 (西から)



4号溝 (南から)

写真図版17



4号溝セクション (東から)



4号溝確出土状況



5号溝 (西から)



6号溝 (旧河道?)



6号溝 (南から)



8号溝 (西から)



8号溝 (西から)



8号溝 (北から)



8号溝セクション (西から)



9号溝 (東から)



9号溝セクション (東から)

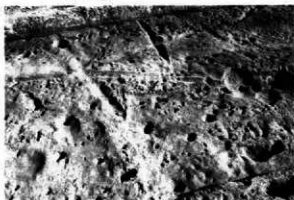


10号溝 (東から)



10号溝セクション (東から)

写真図版19



18号溝 (西から)



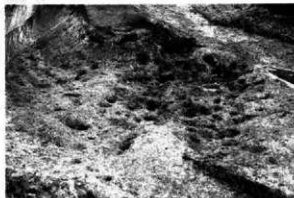
19号溝 (北から)



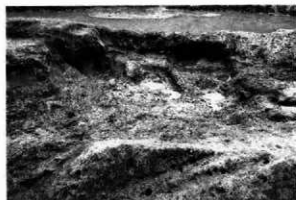
排水遺構 (南から)



排水遺構 (南から)



排水遺構 (南から)



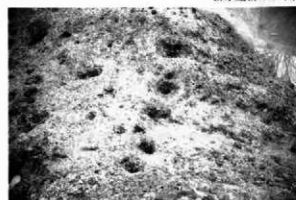
排水遺構 (西から)



排水遺構 (西から)



排水遺構ビット列検出状況 (北から)

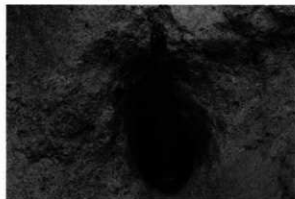


排水遺構ビット列

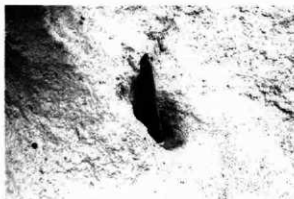


排水遺構ビット列

写真図版21



排水遺構杭検出状況 (南から)



排水遺構杭検出状況 (西から)



2号サク状遺構 (南から)



2号サク状遺構 (西から)



Ⅱ面水田跡



Ⅱ面水田踏検出状況



Ⅱ面水田踏検出状況



Ⅱ面水田踏部分



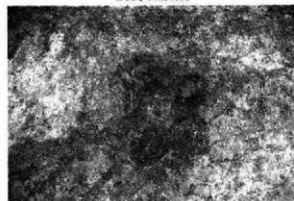
Ⅱ面水田踏部分



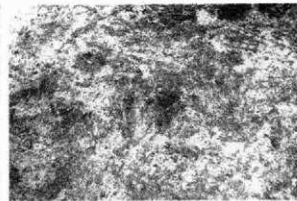
Ⅱ面水田踏部分



Ⅱ面水田踏部分



Ⅱ面水田踏足跡



Ⅱ面水田踏



■面水田跡 (北から)



■面水田跡 (南から)



■面水田跡 (北から)



■ 面水田跡 (南から)



20号溝 (西から)



20号溝 (東から)

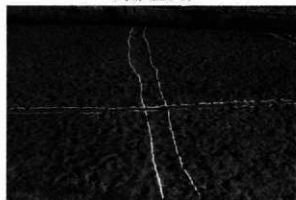
写真図版25



21・22・23号溝 (南から)



21号溝 (西から)



22号溝 (西から)



23号溝 (北から)



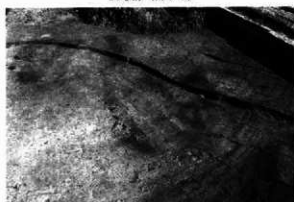
24号溝 (南から)



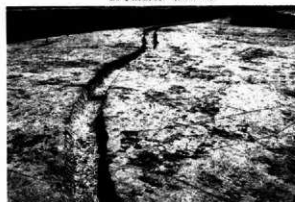
24号溝部分 (西から)



24号溝部分 (西から)



24号溝部分 (南から)



24号溝部分 (北から)



24号溝 (東から)



24号溝セクション



倒木跡 (西から)



自然流路



自然流路セクション



As-BP 下耕作面 (北から)

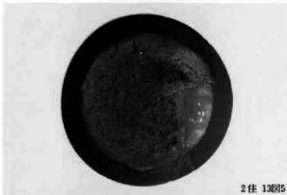


As-BP 下耕作面 (南から)

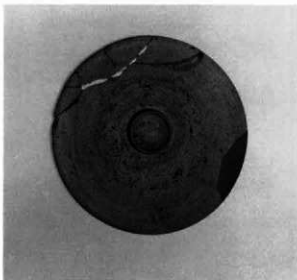


As-BP 下耕作面部分 (東から)





2住 13095



2住 13098



2住 142811



2住 142812

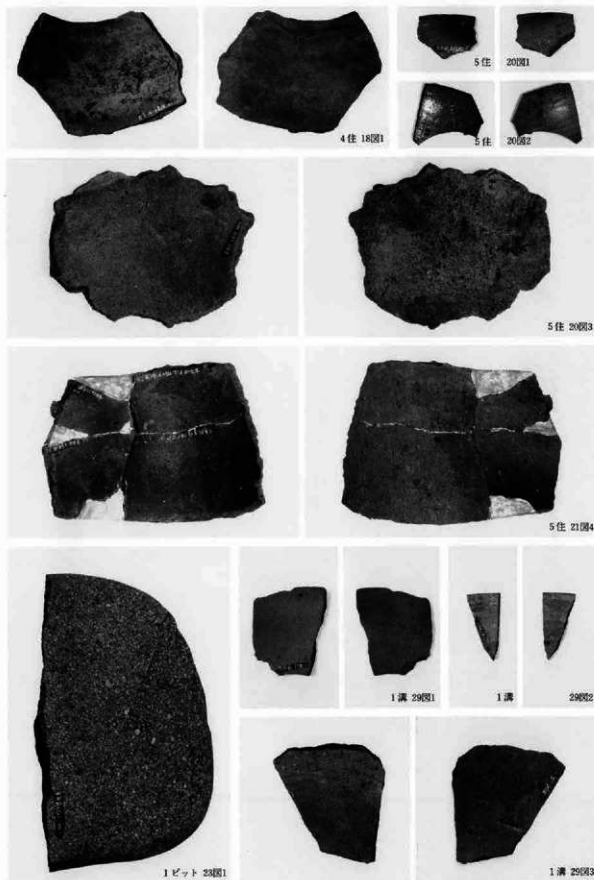


3住 17501

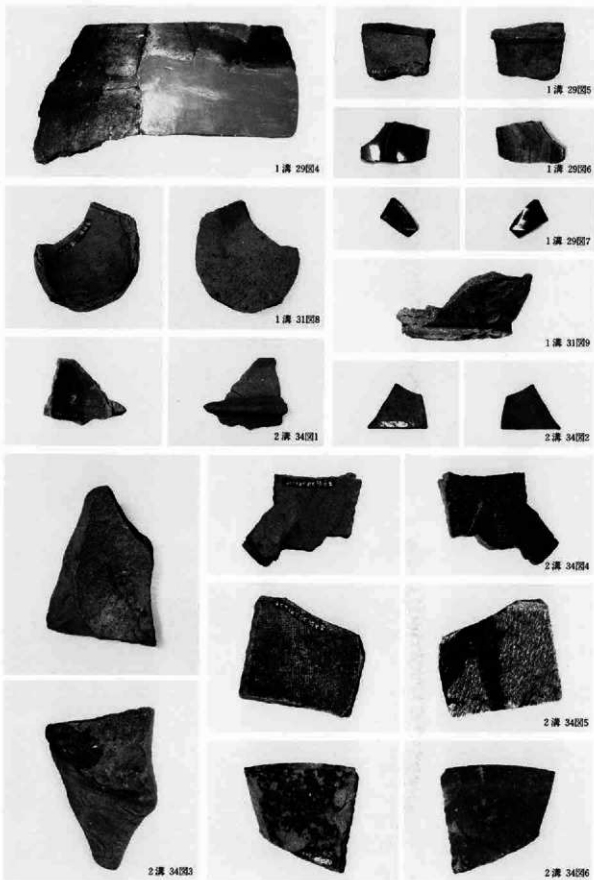


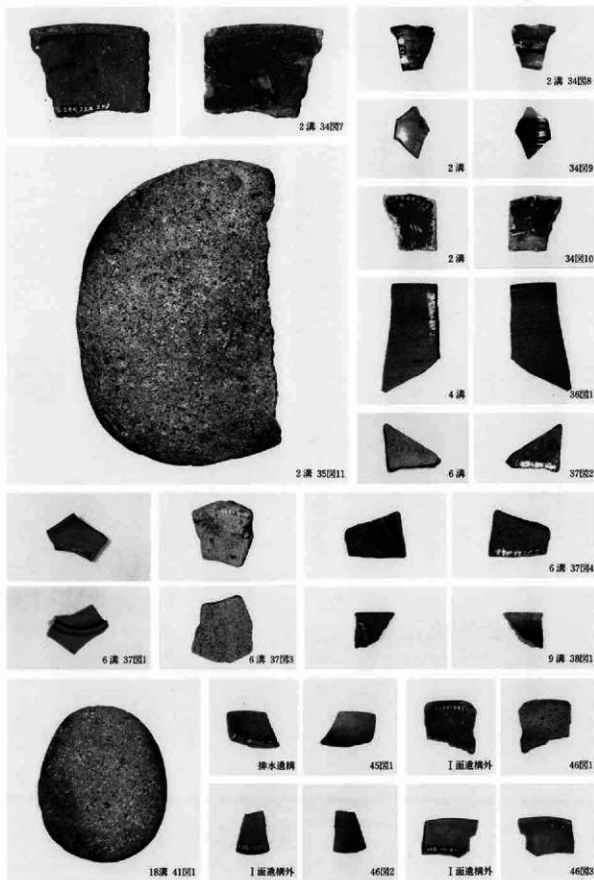
3住 17502

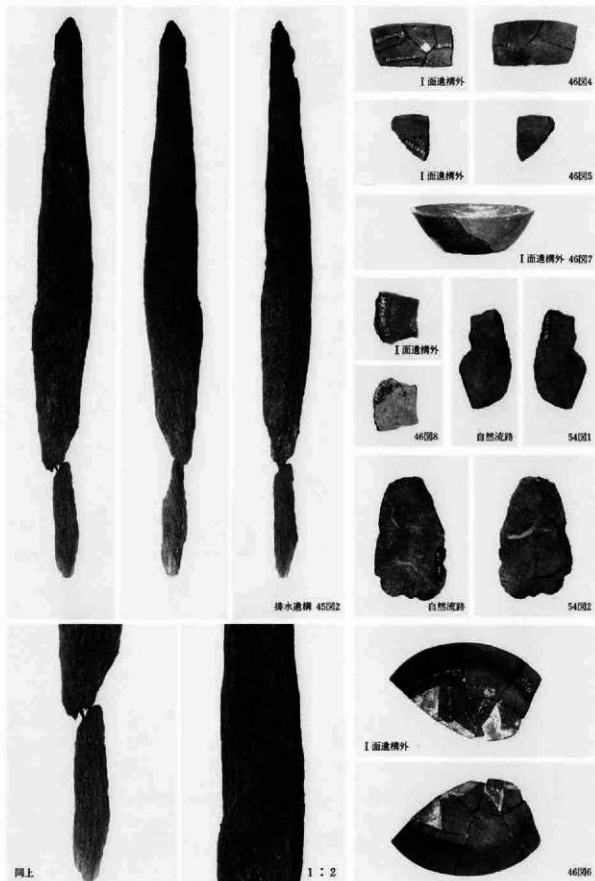
写真図版30



写真图版31









平成5年度調査トレンチ調査時遠景 北北東→



同年調査上面の調査遠景 北北東→



同上平面状況

下方が北側



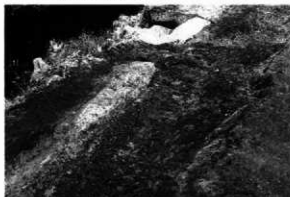
同上平面状況

下方が北側



X-24ライトレンヂ

南→



同上と築堤跡上面

南南東→



築堤跡上面

北→



X-25以南の調査状況

北北西→



住居跡1近景

北→



住居跡1・2・22掘方の状況

西→



住居跡3・23床面～掘方間の状況

西→



住居跡23掘方の状況

西→



住居跡3の調査状況

南→



住居跡4床面～掘方の状況

南→



住居跡5・6・19・24掘方の状況

西→



住居跡7掘方の状況

西→

写真図版37



住居跡8

西→



住居跡9 床面～掘方間の状況

西→



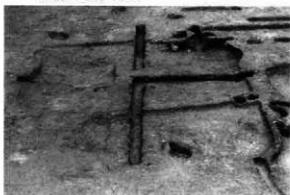
住居跡9 掘方の状況

西→



同左遺跡の調査状況

西→



住居跡10・11床面～掘方間の状況

西→



住居跡10・11掘方

西→



同左遺跡の調査状況

西→



住居跡12・13・18床面～掘方間の状況

西→



住居跡12竈跡調査状況

西→



住居跡14・15・16床面～掘方間の状況

西→



住居跡14・15・16掘方

西→



住居跡14竈跡調査状況

西→



住居跡17床面～掘方間の状況

西→



住居跡20床面～掘方間の状況

西→



住居跡20掘方

西→



住居跡21竈跡調査状況

西→



掘立柱建物跡 1

北→



同左柱穴、土壁16土層

南→



掘立柱建物跡 2

西→



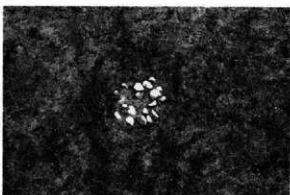
掘立柱建物跡 2

南→



柱穴、土壁25土層

南→



土壁41層の出土状態

東→



溝跡18と住居跡 7

西→



溝跡18土層、B断面

西→



X-40Y 8 拉張区、溝跡57

北→



溝跡52近景

西→



溝跡53近景

東→



溝跡47土層近景

南→



溝跡47近景

南→



X-40Y 8 拉張区

西→



同左東壁土層

西→



溝跡56調査状況

北北西→



溝跡56土層断面

南→



溝跡56東立上の状況

南南西→



くるま川からの分流状況

西→



石坂家堰門

西→



旧東村農協堰門施設

下方が南



同左正面

南→



同左くるま川堰門

南→



石坂家前庭

北西→



同家石白群

南東→



同家石白群

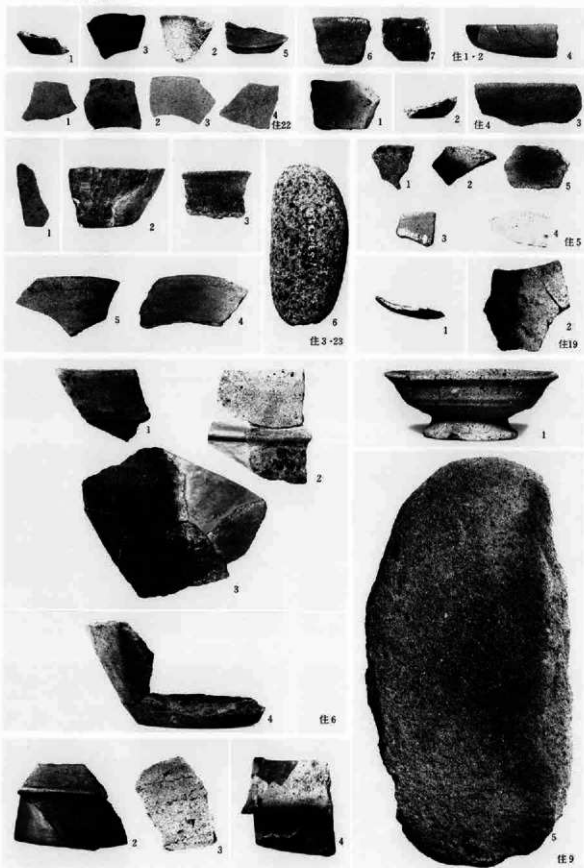
北西→



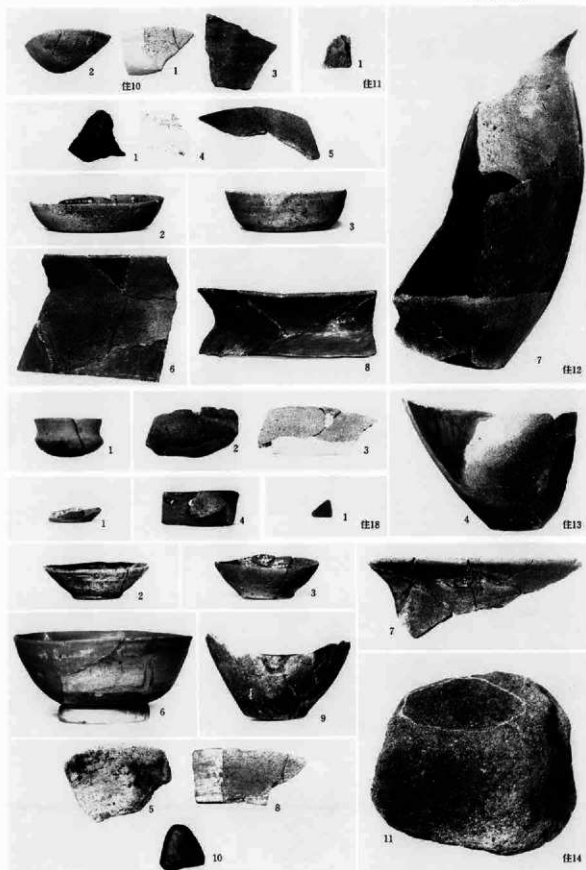
同家石白群

西→

写真図版43

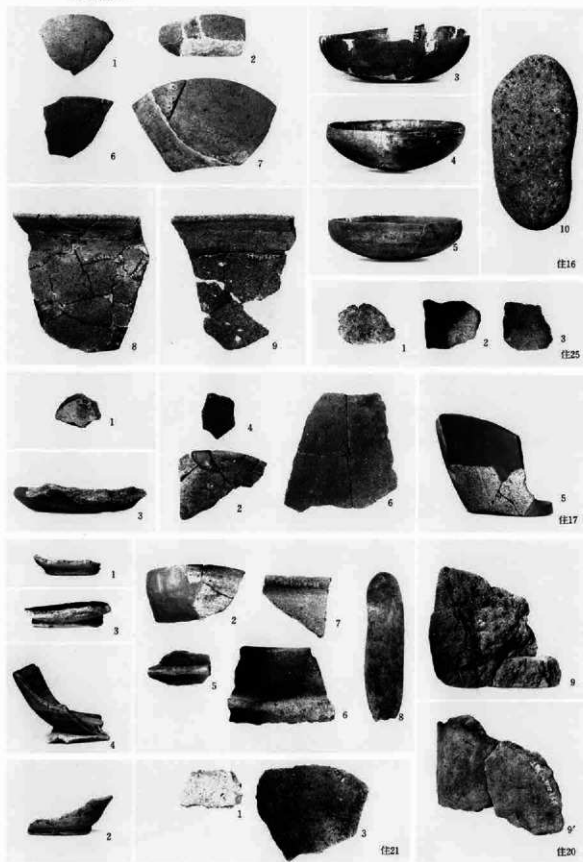


住居跡1・2・22、3・23、4、5・6・19、9遺物 およそ1:3



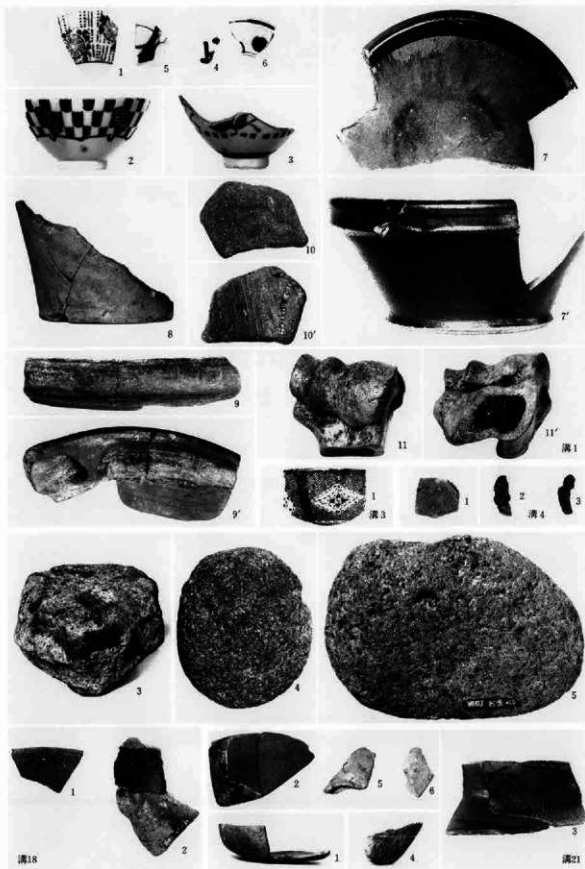
住居跡10・11、12・13・18、14遺物 およそ1:3

写真図版45



住居跡16・25、17、20、21遺物

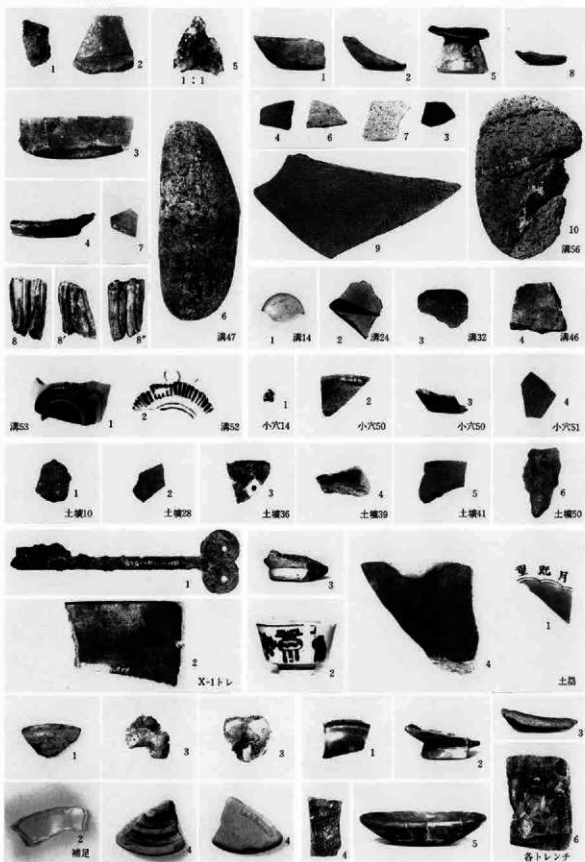
お上り1:3



清跡 1、3、4、18、21遺物

おとそ 1:3

写真図版47



溝跡、小穴、土壊、土壘、各トレンチ、補足遺物

およそ1:3

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告書第191集

箱田古市前Ⅰ・Ⅱ遺跡

一級河川澁川河川改修に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成7年3月22日 印刷

平成7年3月27日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

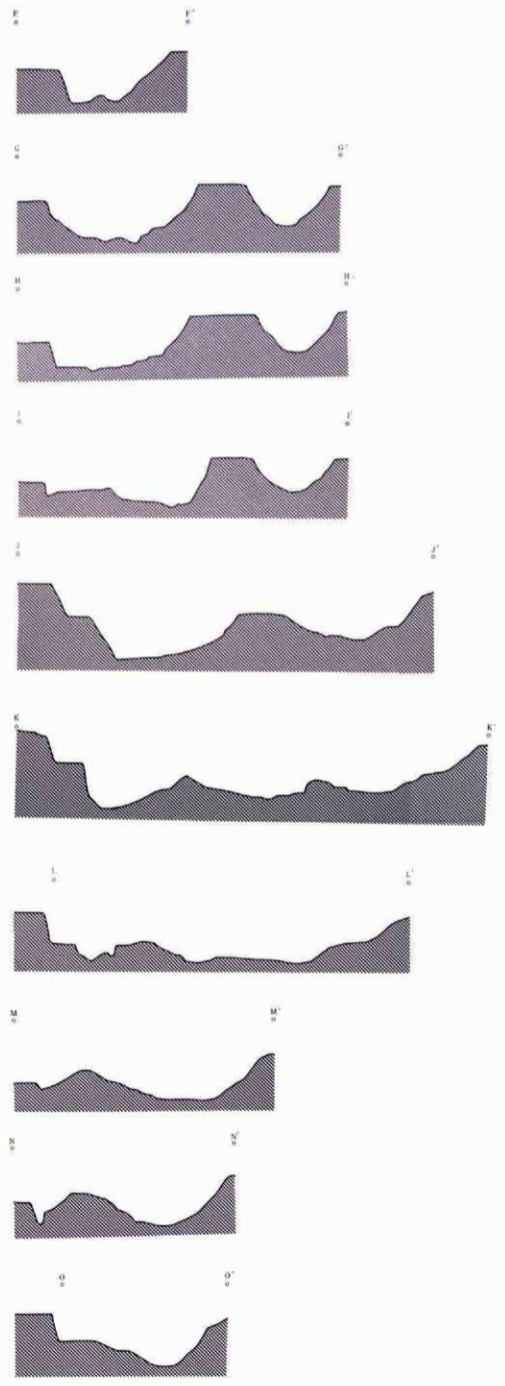
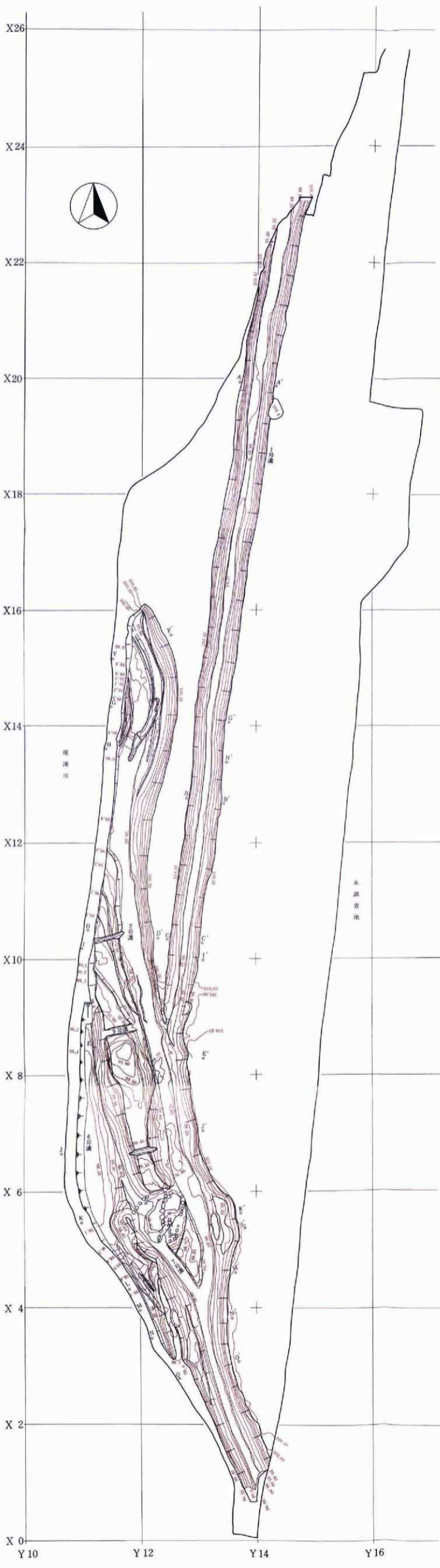
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／株式会社 前橋印刷所

内匠日向周地遠勝・下高瀬寺山遠勝・下高瀬前田遠勝 正誤表

頁	行	誤	正
例言	6	報告書作成担当者 の最後に以下を追加 木器実測 鈴木加津枝、高橋真樹子、五十嵐由美子、 小池 緑、伊東博子	
87頁		観察表No. 欄3段目の5を3にする	
87頁		観察表法量欄の1段目と3段目を入れ替える	
179頁	3行	I類1点、N類678点、	I群1点、N群678点、
190頁	6行	N類43点、	N群43点、
193頁	18行	N類45点、	N群45点、
196頁	6行	西壁面のP7とP8の	西壁面のP6とP7の
196頁	23行	N類195点、	N群195点、
204頁	19行	N類492点、	N群492点、
210頁	17行	N類57点、	N群57点、
215頁	4行	N類700点、	N群700点、
224頁	11行	N類270点、	N群270点、
814頁	35行	丘陵上に早期同様	早期同様
図版1	上段	遠勝遠景(東上空から)	遠勝遠景(西上空から)

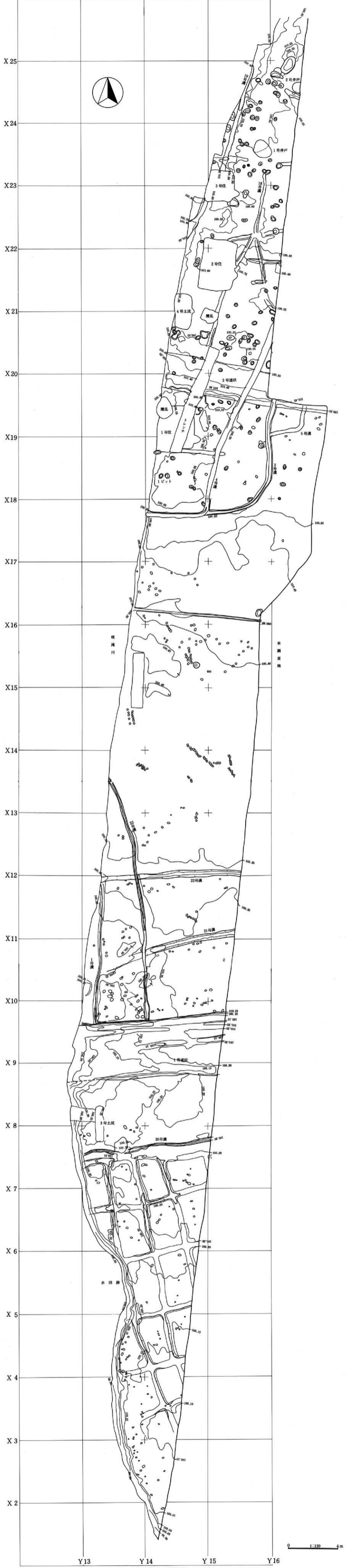


ポイントA-Cは第28号、E、Dは第33号にあり。

附図1 箱田古市前1遺跡・平面全区

0 1 : 200 10m

0 1 : 120 4m



附図2 箱田古市前I遺跡I・平面図